近代日本の台湾原住民認識
―作家たちが見た「野蛮人」―

簡　中昊

博士（学術）

総合研究大学院大学
文化科学研究科
国際日本研究専攻

平成２７年度
（２０１５）

凡例

＊符号例
「　」論文名、作品名、雑誌記事、強調箇所
『　』書名、新聞・雑誌名
（　）論者付記
ただし、引用文中の符号はそのまま使用した。

＊引用文は新字、新仮名を基本とし、固有名詞には適宜ふり仮名（ルビ）をつけた。

＊年号は基本的に引用文中にあるものなど、特別な場合を除いてすべて西暦で表記した。

＊「生蕃」「熟蕃」「蕃人」「蕃婦」「蕃地」「蕃社」などの台湾原住民に関する差別用語は、当時の慣用語としてそのまま使用した。

近代日本の台湾原住民認識――作家たちが見た「野蛮人」

目次

序章……1

一　本論文の課題……1
二　これまでの研究……3
三　研究の目的と方法……4
四　本論文の構成……8

第一章　近代日本における「土人」たち――台湾原住民への認識の原点……9

はじめに　「文明と野蛮」の系譜における近代日本……9

第一節　近代日本の「土人」概念……14
第二節　近代日本の「土人」統治……19

第二章　「旅人」たちの見た台湾原住民：日本統治初期から霧社事件まで…30

はじめに　「植民地旅行」の成立……30

第一節　「帝国の視線」――中島竹窩……34
第二節　二項対立に関する思考の提起――宇野浩二……56
第三節　「野蛮性」の再発見と「文明化」の可能性――中村古峡……72
第四節　「異郷」の風景――佐藤春夫……91

第三章　「文明」と「野蛮」の葛藤：霧社事件から戦後へ……101

はじめに　霧社事件とその影響…… 101

第一節　「弱者」への関心――大鹿卓……107
第二節　「克服」された「野蛮人」――中村地平……126
第三節　二項対立的図式の脱構築化――真杉静枝……146
第四節　「還元」された人間像――坂口襦子……164

終章……192

第一節　作家たちが見た「野蛮人」……192
第二節　今後の課題……203

参考文献……204
付録資料……217

初出一覧

序章

一、本論文の課題

本論文は日本統治期の台湾文学を中心に、植民地台湾の関連史料と作家個人の台湾経験（植民地での旅行・生活体験）を通して、日本人作家による台湾原住民表象を論じたものである。

台湾原住民とは、台湾島とその周辺島嶼に古くから定住していた複数の民族を一括して指す総称である。そこに含まれる各民族は、東南アジアから南太平洋、さらにマダガスカル島の一部まで広がる「オーストロネシア語圏」に属し、文化系統の上で、東南アジアの島嶼部やオセアニアの諸民族と密接な関係を持つものである。彼らの祖先がいつ、どのような経路で渡来したかという定説はない。17 世紀から、中国大陸の漢族は大挙して台湾に移住し、台湾西部・北部の平地に住む原住民は徐々に多数派の漢民族に融合・同化されていった。清国時代には、これら同化された人々は「熟蕃」「平埔族」と呼ばれていた。それに対して、台湾の中央部の山地、東部の平地および離島の蘭嶼に住んでいた原住民グループは、19 世紀の末まで独自の文化や社会・政治組織を保っており、彼らは「生蕃」と呼ばれ、日本統治期には「高砂族」と呼ばれるようになった[1]。前者と後者の分類基準は、政府の支配に服従するか、税を納めるかどうかという点、そして時代に相対する漢化の度合いの強さという流動的要素も含まれる。それらの要素によって「熟」と「生」を判断するというのは、清朝と日本統治期を通じて行政的な区分として使われていた[2]。注意が必要なのは、両者とも複数の民族に対する総称であるということだ。現在、前者は漢族化が進んでしまい、社会形態によって平埔族と漢族を区分することが困難である[3]。そのため、法的ないし台湾社会の一般認識においては、後者のみ「台湾原住民」としている[4]。そこで本論文においても後者のみを「台湾原住民」とみなし、主な議論対象とする。

もう少し詳しく言えば、日本統治の初期において台湾原住民は「蕃族」と呼ばれていた。しかし、1923 年の皇太子（のちの昭和天皇）の台湾訪問を機に「高砂族」と改称され、1935 年に公称となる。戦後、国民党政権は初めのうち「高山族」という名称を使用していたが、差別の意味が含まれるため、1947 年に「山

1　笠原政治「台湾原住民―その過去と現在」日本順益台湾原住民研究会編『台湾原住民研究への招待』風響社、1998 年、15～17 頁。

2　清水純「平埔族」、同上、120 頁。

3　同上、122 頁。

4　近年では、法的に平埔族をも台湾原住民と認定するべきという声もあるが、現時点ではまだ未実現である。

地同胞」と改称し、「山胞」とも略称することもあった。しかし、「蕃族」「高砂族」「高山族」などの名称は、1950、60 年代に入っても、一時期使われていた[5]。1956 年、台湾政府は「台湾省平地山胞認定標準」という法令を公表し、台湾原住民を居住・生活地域によって「山地山胞」と「平地山胞」と二分した[6]。1980 年代中期より、世界各地で起き始めた先住民族の復権運動を背景に、また台湾社会の民主化・自由化の動きとも合流し、都市に住む原住民の若い世代の知識人層を中心として、台湾原住民の権利回復運動は盛り上がり、1984 年、台湾原住民（族）権利促進会は発足した[7]。1994 年、原住民運動の成果として、「台湾原住民」という用語が従来の「山胞」に代わって、憲法や社会一般にも正式名称として認められた[8]。英語では、Taiwanese Aborigines と表記される。日本では、Aborigines を一般的に「先住民」と呼ぶが、「先」は台湾で「祖先」「亡者」の意味合いを含むので、本論文においては、「台湾原住民」という正式の称呼を尊重して使用している。なお、歴史事実を議論するため、「生蕃」「蕃婦」「蕃人」「蕃族」「蕃地」などの過去に使用されていた差別用語を、そのままに使う。

台湾原住民研究は、17 世紀の前半から現在に至るまでの長い歴史をその対象範囲としているが、笠原政治によって清国時代（～1895 年）、日本統治時代（1895～1945 年）、そして第二次世界大戦後（1945～現在）という三つの時期に分類されている[9]。その研究史の流れをふりかえると、要するに主流の文化人類学とそれ以外の「外部」研究者による研究という二つの枠があるが、現在の研究潮流は明らかにその枠を大きく越えていると笠原は指摘する[10]。しかし、台湾原住民研究が多岐に渡るようになった今もなお、日本統治期の台湾原住民表象に関する研究は比較的少ないと思われる。従来の研究で最も代表的なものは山路勝彦『台湾の植民地支配―＜無主の野蛮人＞という言説の展開―』（日本図書センター、2004 年）である。山路は台湾総督府の「理蕃」政策[11]と台北帝国大学の人類学研究を基に、台湾原住民に対する近代日本の植民地主義的言説の変遷を考察している。

その考察を踏まえれば、近代日本の台湾原住民への認識は「無主の野蛮人」か

---

[5] 原英子「台湾『原住民身分』の法的変遷概観―戦後編―」日本順益台湾原住民研究会編『台湾原住民研究概覧　日本からの視点』風響社、2005 年、298 頁。

[6] 同上、300 頁。

[7] 「台湾原住民―その過去と現在」前掲書『台湾原住民研究への招待』、20 頁。

[8] 「台湾『原住民身分』の法的変遷概観―戦後編―」前掲書『台湾原住民研究概覧　日本からの視点』、303 頁。

[9] 笠原政治「研究史の流れ――文化人類学を中心に」前掲書『台湾原住民研究への招待』、29～49 頁。

[10] 同上、48 頁。

[11] 日本統治下の台湾における「蕃地」＝（台湾山地）・「蕃人」（＝台湾原住民）に対する政策。

ら「高砂義勇軍」へ転換するというプロセスである。つまり、日本統治初期に「野蛮人」と見られていた台湾原住民が、戦争末期になると「帝国日本の兵士」として認可・動員されるようになったという過程である。この認識の転換は、次の三つを通して表現されたと考える。一つ目は「理蕃」政策や近代日本の人類学など、植民地主義の理論に関する言説。二つ目は新聞報道や雑誌記事、そして文学作品などの「テキスト」。三つ目は絵葉書や写真、または博覧会の展示といった視覚的な表象である。

本論文は、日本統治期の台湾文学（二つ目の「テキスト」における文学作品）を中心に、日本人作家の台湾原住民関連作品を考察し、近代日本の台湾原住民への認識の一部を解明しようとするものである。

二、これまでの研究

日本統治期における台湾原住民の文学表象に関連する研究は、三種類に分けられる。

第一は近代日本の植民地支配と霧社事件を背景に、その関連作品を考察する概論であり、尾崎秀樹「霧社事件と文学」(『旧植民地文学の研究』勁草書房、1971年)、河原功「日本文学に現われた霧社蜂起事件」（戴国煇編『台湾霧社蜂起事件―研究と資料―』世界思想社、1981 年）に代表される先駆的な論考である。

第二は植民地文学を中心に、帝国日本の「南方」と植民地台湾の表象を考察するなかで台湾原住民にまでその言及を伸ばしたものであり、川村湊『南洋・樺太の日本文学』（筑摩書房、1994 年）、荊子馨『成為日本人――殖民地台灣與認同政治』（麥田出版、2006 年）やフェイ・阮・クリーマン『大日本帝国のクレオール―植民地期台湾の日本語文学』（慶應義塾大学出版会、2007 年）、楊智景『日本領有期の台湾表象考察―近代日本における植民地表象』（御茶水女子大學人間文化研究科博士論文、2008 年）、邱雅芳『南方作為帝國慾望：日治時期日人作家的台灣書寫』（政治大學中國文學系博士論文、2009 年）、陳萱『明治日本における台湾像の形成―新聞メディアによる台湾事件の表象―』（台湾大学出版中心、2013 年）などがある。

第三は日本統治期の台湾文学を中心に、日本人作家を取りあげ、加えて彼らの台湾原住民関連作品も論じたものであり、その代表的な研究者として河原功があげられる。河原には彼の論考集『台湾新文学運動の展開―日本文学との接点―』（研文出版、1997 年）に収録される一連の論文のほかに、「日本人作家の台湾原住民認識」（山口守編『講座台湾文学』国書刊行会、2003 年）、「日本統治期の台湾文学と『内地』の作家たち」（中島利郎・河原功・下村作次郎編『台湾近現代文学史』研文出版、2014 年）などの論文がある。また、作家の個人研究を前提

に、台湾原住民関連作品を様々な視点で考察する関係論文が多数あるが、その詳細は後述することとする。

これらの研究は霧社事件や帝国日本の「南方」・植民地台湾の表象、さらには日本統治期の台湾文学や作家研究など、様々な角度から台湾原住民に論及しているが、台湾原住民の表象を「主題」に設定した通時的な研究はなかった。

三、研究の目的、方法と範囲

本論文は先行研究を参照しながら、植民地台湾の関連史料と作家個人の台湾経験を通して、日本人作家による個々の台湾原住民表象を検証し、その「全体像」を考察していく。

後述するように、「野蛮人」とされた台湾原住民は、近代日本の「土人」という概念に包摂されていた。しかし、近代日本が最初に「発見」した「土人」は台湾原住民ではない。「土人」という呼び方そのものは、アイヌ民族を「蝦夷」から「土人・旧土人」へ改称する時点で誕生したものである。台湾原住民が近代日本の管下に入る前、明治政府は既に北海道のアイヌ民族と沖縄の琉球人という二つの異民族を統治した経験があった。

そこでまずは、近代日本における「土人」概念の変遷と使用、そして「土人」統治の起点について検討する。次に、日本人作家による台湾原住民関連作品が生成する背景を考察する。近代日本における台湾原住民への認識には二つの大きな歴史的な転換点がある。一つは、1910 年代の「植民地旅行」の成立であり、もう一つは 1930 年の霧社事件という、日本統治下の台湾原住民による最大の武力反抗事件である。いずれも近代日本における台湾原住民認識を大きく変える契機をもたらした。

日本統治初期、植民地旅行の条件の不備や台湾山地の治安不穏などの理由で、山地に入れたのは学者もしくは軍人・警察や植民地官僚などの「公務関係者」のみである。民間人としての作家・文学者でも台湾へ旅行さらに山地に入れる条件と環境が成立したのは 1910 年代の半ばである。即ちそれはその間、台湾原住民に関連する作品を描くことが困難だったという事実を意味している。換言すれば、日本人作家による台湾原住民の文学表象は 20 年もの「空白期」が存在する。植民地旅行の成立は、この「空白期」に新たな転機をもたらした。

一方、1930 年の霧社事件は日本政府ないし台湾総督府という植民地支配の体系から世間一般の世論に至るまで大きな衝撃を与え、「文明」の近代日本と「野蛮」の台湾原住民という二項対立的な関係をめぐる激しい議論も引き起こした。そのため、台湾原住民に対する文学作品の描写および思考は事件前より一層深まった。また、30 年代の後半、日本は戦争体制に入ったことも忘れてはいけな

い。総力戦体制の下に、国家体制と国民生活はあらゆる面で戦争目的のために再編・統制されたのであり、それは文学も例外ではない。日本人作家による台湾原住民の文学表象は、こういった歴史的背景と合わせて考察しなければならない。特に、戦後に至り、植民地体験を持つ作家は如何に戦前から遺留された植民地問題――霧社事件に直面し、それを描写したのかという問題を重視したい。

本論文は作家に置かれた歴史背景や個人の台湾経験を念頭に置きながら、文学作品への分析を通して、作家たちによる「台湾原住民像」の異同・変遷を見出していく。こうした事柄を通して、近代日本の「土人」認識と日本統治期の台湾史を背景に、日本人作家による台湾原住民表象を明らかにし、近代日本の台湾原住民への認識の一部を提示できればと考える。

以下で、本論文の研究対象とする作品を選定する原則について説明する。

これまでに、台湾原住民に関する作品を取りまとめたものとして、次の 2 種の論文および研究資料がある。

・河原功「日本文学に現われた霧社蜂起事件」、戴国輝編『霧社蜂起事件　研究と資料』（社会思想社、1981 年）に所収、以下河原論文と略す。
・黄美娥編『台湾原住民族関係文学作品目録』上・下と『台湾原住民族関係文学作品選集』上・下（台湾・行政院原住民族委員会、2013 年 12 月）、以下黄目録・選集と略す。

河原論文は「文学に現われた事件像」を論究したもので、「原住民を取り扱った文学作品」について計 49 点の作品を列挙している。この論文は 80 年代初頭に作られたため、その調査範囲は日本統治期から戦後の 70 年代末までとなっている。河原功は 60 年代の末、特に日本統治期の「台湾文学」という概念および研究分野そのものが存在していない時点から「台湾文学研究」を始めた先行者で、非常に縝密な資料収集・整理作業を行っている。河原論文は歴史分野の研究者にも認められ、霧社事件史研究の「聖書」と呼ばれている『霧社蜂起事件　研究と資料』に収録されている。注意が必要なのは、河原論文が列挙するのがすべて小説だという点である。

黄目録・選集は台湾大学の台湾文学研究所所長・黄美娥が、台湾原住民族事務を司る官署・原住民族委員会の要請に応じて編纂したものである。その調査範囲は 1603 年から 1945 年まで（＝台湾のオランダ領時代から日本統治期終了まで）の、原住民に関する作品を一括する資料集となっている。本論文が用いるのは「日本統治期の日本語作品」が収録されている目録の「下」である[12]。目録の「下」

[12] ここでは、なぜ日本統治期に中国語の台湾原住民関連作品がないのか、当時の漢民族は原住

は、日本統治期の台湾原住民関連作品を、以下のように分類している。

古典文学――詩歌

現代文学――詩歌
散文
小説、故事、童話、神話
戯劇

河原論文と黄目録・選集を対照すると重なっているのは「小説」だとわかる。本論文は従前の研究と異なり、専ら「原住民」をテーマとする研究の第一歩として、研究対象を「小説」と設定する。そのため、本論文は河原論文と黄目録・選集を参照するが、黄目録・選集で参照するのは「現代文学」の「小説、故事、童話、神話」であり、「散文」は補助用のテキストと設定する。

黄目録・選集の「小説ほか」に列挙された作品は計 128 点である。すなわち、河原論文とは 79 点の差がある。なぜ、そんなに大きな差が出るのか。両方を対照してみると、それは、河原論文は「日本内地」に発表された作品を主にしているのに対し、黄目録・選集には地元の利が働いており、「日本内地」だけではなく「台湾本島」に発表された作品も含まれることによる[13]。

本論文は河原論文と黄目録・選集の中から研究対象となるテキストを選び、霧社事件を境目として、事件「前」と「後」の作品をそれぞれ本論文の第二章と第三章で論じる。そこで、そのテキストを選ぶ原則と霧社事件を境目とする原因を説明する。

両資料からテキストを選ぶ原則（＝「フィルター」）は、以下の 3 点となる。それは、第二章と第三章に共通する条件である。

① 「日本人作家」の「日本語作品」

民のことを書かなかったのかという問題が生まれるが、すでに本論文の射程外の問題であるため、今後の課題とする。

[13] 黄目録の「台湾本島に発表された作品」（前述 79 点の作品）は特定の数人の作者が特定の雑誌に発表したものである。たとえば、事件前は『台湾警察協会雑誌』（台湾本島のみ発行・警察関係者のみ閲覧）、事件後は『文芸臺灣』『台新旬刊』（台湾本島のみ発行）となる。そのため、「内地」の読者に影響を与えたとは到底思えない。そのため、「日本内地で発行されたもの」を研究対象とする本論文を近代日本の原住民認識（文学）の「主線」、「台湾本島で発行されたもの」を「支線」と設定し、後者を今後の研究課題とする。

②　　「日本内地」で発表したもの（近代日本の認識に影響を与えた可能性がより高いという視点による）
③　　原住民を主題としたもの（原住民を作中に少しだけ登場させたものなどは除外）

基本的には上記 3 点が原則となるが、後述するように、霧社事件以降、作品の数が増大するため、以下の 3 点（3 点中、2 点以上必要）の付加条件を設定する。それは本論文の第三章、つまり霧社事件後の作家・作品に付加する条件である。

④　　台湾滞在経験者
⑤　　原住民への関心をある一定時期（1 年以上）維持した者
⑥　　原住民関連作品を複数書き記した者

以上の原則により、第二章と第三章でそれぞれ 4 人の作家とその作品を選んで論じる。上記の原則を設定すると言っても、本論文においては、少し異例的状況もある。第二章第一節、作者の「中島竹窩（なかじまちくか）」は作家ではなく、当時の植民地警察官であり、彼が書く「生蕃探検記」は黄目録・選集の中で「小説」ではなく「散文」とされている。ではなぜ、中島を選んだのかというと、前述したとおり、1910 年代半ばまでは、いわゆる台湾原住民関連文学の「空白期」となっている。河原論文と黄目録・選集でも、この点は確認できる。中島とその作品を研究対象とするのは、この空白期を「補填」するためである。

つぎに、「霧社事件」を境目とする理由について説明することにしたい。もちろん、事件自体が日本植民史上の一大事であることは相違ない。そのほかに、前述の原則で河原論文と黄目録・選集を確認すると、事件を挟んで作品を書いた作家はいないが、重要な事象に気がつく。河原論文では計 49 点の作品があり、その中で、事件前の作品は 6 点であり、事件後の作品は 43 点である。黄目録・選集では計 128 点の作品があり、その中で、事件前の作品は 29 点であり、事件後の作品は 99 点である。即ち、日本統治期 50 年の間（霧社事件前の 35 年と事件後の 15 年）、河原論文も黄目録・選集も、事件前の長い 35 年の間よりも、事件後の短い 15 年の間の方がその作品数が多くなっている。そこには、決して偶然ではない理由があるのではないか。

また、論文では霧社事件「前」と「後」、つまり第二章と第三章で論じた作家の人数から見れば均等だが、事件後の作家は皆、複数の作品を書いているため、実際に第三章で議論対象とした作品の数は、第二章を遥かに超えている。この点も上記の状況に対応している。

四、本論文の構成

第一章においては、近代日本にける「土人」という概念の内容と「土人」統治の発端を概観する。まずは、「土人」という用語の出現・使用・変遷について考察し、「土人」概念の形成を見る。特に、明治政府の主催による内国勧業博覧会の「人類館事件」より、「土人」という概念が包摂する範囲を考察する。そこから、近代日本と「土人」の関係および台湾原住民の特殊性を考える。そして、アイヌ民族、琉球人、台湾原住民という近代日本による一連の「土人」統治を検討し、「理蕃」――つまり台湾原住民・山地に対する政策の連続性や特殊性にもたらした認識の異同を考察する。そこから、近代日本における台湾原住民への認識上の「起点」を一考する。

第二章では、植民地旅行の成立から霧社事件までの日本人作家による文学作品を中心に、近代日本による台湾山地統治の前期の原住民表象を考察する。まずは、1910 年代の植民地旅行の条件が成立する過程を考察し、前期の原住民関連作品の生成背景を論じる。前述したように、10 年代半ばまでの「空白期」を補填するため、統治初期の日本人警察官・中島竹窩を、宇野浩二(うのこうじ)、中村古峡(なかむらこきょう)、佐藤春夫(さとうはるお)の三人の作家と並列して検討する。この時期の作家たちはある程度の距離を保って原住民を観察し、ほぼ一種の「旅人」のような心情で記録を残した者と言える。本章は彼らの作品を通し、「旅人」の見た原住民像を検討する。

第三章は霧社事件から戦後までの台湾原住民の文学表象の変遷を論じる。まずは、1930 年の霧社事件とその影響を概要的にまとめ、それ以降の文学作品との接点を論じる。この時期の日本人作家は大半、植民地台湾に一時期の生活経験を有し、台湾原住民に深い関心を持つ者である。この章では、大鹿卓(おおしかたく)、中村地平(なかむらちへい)、真杉静枝(ますぎしずえ)、坂口樗子(さかくちれいこ)と彼らの作品を通し、作家たちにおける個人体験、霧社事件への認識などの要素が相互に影響したうえで現われた台湾原住民像を考察する。

以上のように、本論文は歴史的背景と作家個人の植民地経験を基に、文学作品の検証を通して、近代の日本人作家による台湾原住民の文学表象を考察していく。

第一章　近代日本における「土人」たち――台湾原住民への認識の原点

はじめに　「文明と野蛮」の系譜における近代日本

周知のように、エドワード・サイードの『オリエンタリズム』（1978 年）は、ポストコロニアルという学問の領域を開創した。近代文学研究者の小森陽一によれば、サイードの論旨は要するに、19 世紀のヨーロッパにおける歴史学・言語学・文献学などの知的な言説は、常に西洋と東洋を対比しながら、東洋という他者をめぐる精緻な言説の体系を創出し、ヨーロッパ人はそのことによって、東洋の文化の異質性を鏡として、西洋という自己像を構成してきた、ということである[14]。『オリエンタリズム』出版後、その論述が不足しているところに対する批評・批判が多く現われたが、「他者」の表象に関する研究にとってはなお、参考の一助となろう。さらに、現在では「日本型」のオリエンタリズムも歴史的に存在すると認められている。

小森によれば、明治維新後の日本においては、「植民地的無意識」と「植民地主義的意識」が同時に発動された。前者は、「文明開化」というスローガンを以て、欧米列強への模倣が自発的意志による行動であるように偽装し、その模倣に内在する「自己植民地化[15]」を忘却するとのことであり、後者は、自国周辺の「野蛮」とその土地の発見や支配を通して、自らの「文明性」を立証するということである。この論理のうえで、最初に「発見」された「野蛮」はアイヌ民族にほかならず、当時、明治政府はロシアとの関係を顧慮し[16]、アイヌ民族を「外国人」としない一方、「和人」とは徹底的に差別化する。こうして、アイヌ民族に対する「旧土人」という排除の称呼が創出されたが、「この同化と排除の二重性を創り出す言説戦略は、それ以後の日本型植民地主義を貫く」ことになったと小森は評している[17]。

この戦略によって創出された近代日本の植民地支配地域とその住民をめぐる言説は現在、「日本型のオリエンタリズム」と呼ばれる。社会学者の小熊英二は日本型のオリエンタリズムについて、「近代日本において、『欧米』という『日本』より上位の脅威が存在する状況のもとで、『日本』より下位の者たちを支配する

---

[14] 小森陽一『ポストコロニアル』岩波書店、2001 年、vi 頁。

[15] 小森によれば、1860 年代の日本のパワーエリートにとって、最も緊急な課題は「万国公法」の論理や当時の国際関係の規範を内面化し、日本をその枠組に適合するように作り替えたことであり、近代日本は「万国公法」の論理を内面化することで、国家と外交思想における自己植民地化を実現した。詳細は前掲書『ポストコロニアル』（11～13 頁）参照。

[16] 主には、ロシアとの領土争議、国境画定などの事情を指すのである。

[17] 前掲書『ポストコロニアル』、15 頁。

言説が形成され」、「極東地域で黄色人種に分類されながら、しかし近代文明をとりいれた植民帝国でもあるという『日本』は、『欧米』＝文明＝白人＝支配者、『アジア』＝野蛮＝有色人＝被支配者という世界観が支配的だった当時において、きわめて微妙かつ両義的な位置を占めることになった」という点がその特徴と指摘している[18]。

「日本型」のオリエンタリズムはその「原型」と同じく、「文明」と「野蛮」の二項対立的な思考の枠組で発展されてきたものである。もちろん、「文明」と「野蛮」の二項対立、そして「野蛮」をめぐる言説は「日本型」の発生以前、すでに「原型」に存在しているものである。人類学者の川田順造は、西洋における「野蛮人」言説の系譜を整理しているが、以下はその概略である。

川田の指摘によれば、「ヨーロッパ世界の独自性の一つ」は、「『人類』というものを空間の広がりと時間の深さの両方面で、実体として認識したこと」にあり、16 世紀から 18 世紀までの非ヨーロッパ世界への視野の拡大と 19 世紀の地球上・軍事上の探検によって、ヨーロッパ世界はその認識を深めた[19]。川田はフランスを「ヨーロッパ世界の一つの典型」として取り上げ、その変遷を説明し、以下の 4 時期に分類している[20]。

① 17 世紀末まで：非ヨーロッパ世界との接触が断片的であり、非ヨーロッパ世界というものは、「観念的にヨーロッパ世界と対比させられている」時代。
② 18 世紀：新世界のプランテーションを中心とする植民地経営と奴隷貿易を通して、非ヨーロッパ民族の「野蛮人」との現実な交渉が始まり、「野蛮人」をヨーロッパ人との対比でとのように位置づけるのかという「模索の時代」。
③ 19 世紀～20 世紀の前半：ヨーロッパ世界が非ヨーロッパ世界を力によって支配し、組織的に収奪し、ヨーロッパを頂点とする「文明」に対する「未開」の概念が形成された時代。
④ 第二次世界大戦後、植民地の独立と「未開」文化の復権の時代。

前三期を貫く、非ヨーロッパ世界・民族に対する認識の文脈はいわゆる「善き野蛮人」の系譜である。第一の時期において、コロンブスのアメリカ大陸の発見を皮切りに、15 世紀後半から 16 世紀にかけて、ヨーロッパ世界の非ヨー

---

[18] 小熊英二『＜日本人＞の境界　沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮　植民地支配から復帰運動まで』新曜社、2003 年、8 頁。

[19] 川田順造「『善き野蛮人』から『野生の思考』へ―”未開”社会とヨーロッパの意識―」二宮宏之編『民族の世界史　9　深層のヨーロッパ』山川出版社、1990 年、194 頁。

[20] 同上、195～196 頁。

ロッパ世界に対する認識は打開され、飛躍的に拡大される。1580 年、フランスの哲学者モンテーニュはその著作『エセー』第 1 巻 31 章の「食人種について」に、新発見の「野蛮人」の習俗や倫理観に理想を投影し、ヨーロッパの「文明人」を対比的に批判するという点で、「善き野蛮人」という思想の流れの先駆をなすものとなり、ここでの「野蛮人」は一種の異文化の価値観として、「フランス文化を批判的にみる拠り所」と川田は指摘している[21]。

第二の時期に入ると、非ヨーロッパ世界とくにアメリカ大陸は、白人植民者のプランテーション経営が中心とする形で、後の第三の時期と異なる形での植民地となり、アメリカ大陸の農業開発の労働力需要のため、アフリカの黒人が奴隷として大量にアメリカ大陸へ連れられ、ヨーロッパ・アフリカ・アメリカ大陸を結ぶ大西洋の「三角交易」が形成された[22]。川田によれば、旅行記や探検調査の記録、植民地行政官の記録などの刊行とともに、非ヨーロッパ世界の「野蛮人」に対するフランス人の認識は第一の時期より格別に増大し、特に 1766～1769 年のブーガンヴィルの世界周航がもたらした地球規模での世界認識を背景に、新世界の先住民に関する議論は「野蛮人」との関係をどのようにつけるのかという「思想的な問題」と、植民地経営や奴隷貿易の中に「野蛮人」を如何に対処すべきという「実践的な問題」という二種類に大別される[23]。

「善き野蛮人」という思想は、「思想的な問題」に属していると考えられる。非ヨーロッパ世界との関わりが深まっていくなかで、18 世紀のフランス思想家は、これらの地域の「野蛮人」を含む「人類」に関する思考を、さまざまな形で表明する[24]。その代表的な一人は、フランス思想家のルソーである。川田によれば、ルソーの思想は「情熱と他者への共感を出発点[25]」とし、その最大の特色は「『野蛮人』の『自然状態』を理念化し、それによって人間の『社会の状態』や文明化された堕落した状態を批判的に相対化している」という点である[26]。

第三の時期に入ると、アメリカ合衆国の独立と領土拡大とともに、中南米の植民地も相次いで独立する一方、「アジアやオセアニア諸地域のヨーロッパによる軍事支配と植民地化がさらに進められ」、「この時期の『野蛮人』はもはやヨーロッパ世界に根底的な衝撃を与える未知の生物」あるいは「謎めいた存在」ではな

---

21 同上、199～200 頁。

22 同上、201 頁。

23 同上。

24 同上、206 頁。

25 同上、209 頁。

26 同上、211 頁。

く、「支配・征服された者たちである」と川田は指摘している[27]。この時期の「野蛮人」についての著述家は以前の思想家と異なり、自身が「野蛮人」の地に旅していることが彼らの特徴であり、すなわち「野蛮人」の地はヨーロッパ人による支配が進めたとともに、未知に満ちた危険な世界ではなくなったため、「『野蛮人』とその土地に対する関心も基本的な安心のうえに成り立ったエキゾチズム、ロマンティズムなどむしろ審美的なものに中心が移ってゆく」と、川田は指摘し続けている[28]。この時期の「野蛮人」言説は異国憧憬や「野蛮人」礼讃のほかに、19 世紀後半より、考古学・先史人類学の前進とダーウィンの『種の起源』に発展させた生物進化論の影響を受け、「人類」の歴史・社会・文化を進化論で考えることがその特徴である[29]。つまり、当時のヨーロッパ社会は自らを「人類の到達した最高の発展段階」として、自らによって支配されたほかの社会が「それ以前の低い段階を表わしている」という思考である[30]。

近代日本は第三の時期の進化論が流行っている頃より、「野蛮人」言説の系譜に参入した。1875 年、福沢諭吉「文明論の概略」には、次の一節がある。

> 今世界の文明を論ずるに、欧羅巴諸国並に亜米利加合衆国を以て最上の文明国と為し、トルコ、支那、日本等、亜細亜の諸国を以て半開の国と称し、阿非利加および墺太利亜等を目して野蛮の国と云い、この名称を以て世界の通論となし、西洋諸国の人民独り自ら文明を誇るのみならず、彼の半開野蛮の人民も、自からこの名称の誣いざるに服し、自から半開野蛮の名に安んじて、敢て自国の有様を誇り西洋諸国の右に出ると思う者なし[31]。

福沢は当時の世界諸国・諸地域を「文明」「半開」「野蛮」に分類し、この分類を「世界の通論」と称し、それを「人類の当に経過すべき階級」とし、生産能力や文化の面から「証拠」を列挙した。福沢の分類法は彼独自の発明ではなく、19 世紀のヨーロッパ知識人の間における人類の歴史や文明への捉え方である。彼自身の明記しているように、『文明論之概略』はキゾーの『ヨーロッパ文明史』に大きな刺激をうけた。たとすれば、「半開」とされる日本は如何にして「文明」の国に転身できるのか。

27　同上、216 頁。

28　同上。

29　同上、218 頁。

30　同上、219 頁。

31　福沢諭吉『福沢諭吉著作集　第 4 巻　文明論之概略』慶応義塾大学出版会株式会社、2002 年、21～22 頁。

文明と半開と野蛮との境界分明なれども、元とこの名称は相対したるものにて、未だに文明を見ざるの間は半開を以て最上とするも妨げることなし。この文明も半開に対すればこそ文明なれども、半開と雖どもこれを野蛮に対すれば亦これを文明と云わざるを得ず。譬えば今支那の有様を以て西洋諸国に比すれば之を半開と云わざるを得ず。されどもこの国を以て南阿非利加の諸国に比するか、近くは我日本上国の人民を以て蝦夷人に比するときは、これを文明と云うべし[32]。

この小森の指摘のように、福沢の言う「半開」は「文明」と「野蛮」を対照的に成立させる「鏡」として、「対立的」ではなく「一種触媒的な機能を果たす中間項的他者」であり、この「理論的前提」で「具体的な現状を解釈すると」、「日本上国の人民」は「蝦夷人」と比較すれば、明らかに「文明」の側に属しているため、「文明」の名の下に、日本が「蝦夷地」を「北海道」として領有することも正当化された[33]。

『文明論之概略』は、近代日本の植民地支配の原理の礎石のような言説だと考えられる。事実、近代日本は自身を「文明」、その植民地支配地域とその住民を「野蛮」とするなかで、植民地支配を展開していったのである。後述するように、近代日本は植民地支配地域の住民を「土人」（＝野蛮人・未開人）としたのであり、「蝦夷人」（＝アイヌ民族）はこの「土人」概念の「起点」とも言える。

本論文の研究対象とする台湾原住民は、言うまでもなく「土人」概念に包摂されていたのであるが、近代日本にとっての最初の「土人」ではない。台湾を領有する前に、近代日本は「蝦夷地」と「琉球王国」を「北海道」と「沖縄県」に転換し、自国に編入するなかで、「蝦夷人」（＝アイヌ民族）と「琉球人」（＝後の沖縄人）を統治する経験も獲得した。そのため、本章は近代日本における「土人」概念の形成、包摂範囲とその変遷、「土人」統治を概要的に考察するうえで、その概念における台湾原住民への認識の原点と特徴を試論する。

32　同上、24 頁。

33　前掲書『ポストコロニアル』、17～18 頁。

第一節　近代日本の「土人」概念

台湾は近代日本の最初の植民地であるが、近代日本が最初に出会った「他者」は台湾原住民ではない。台湾における植民地支配を展開する以前、近代日本はすでに北海道のアイヌ民族と沖縄の琉球人を支配した経験がある[34]。北海道と沖縄は近代日本の植民地の原型と視され、「前近代植民地」あるいは「内国植民地」とも呼ばれ、そして近代日本による植民地的支配は、「内国植民地」を含む「本土」を中心に拡大していくという、同心円的構造である[35]。後述するように、近代日本は自国の植民地支配地域の先住民を「土人」とし、台湾原住民は「土人」の一つである。近代日本の台湾原住民認識を理解するため、まずはこの「土人」概念を考えなければならない。近代日本の「土人」概念の生成原理や包摂範囲に関して、文芸評論家の川村湊は以下のように解釈している。

> 日本の近代化の過程において（すなわち文明開化の道筋において）、「文明人」の対照物として、「野蛮」で「未開」とされた「土人」は、次々と析出されてきたのである[36]。

近代日本は自国周辺に、北海道のアイヌ民族、樺太の北方少数民族、台湾原住民ないし南洋群島（＝ミクロネシア）の住民を「土人」として次々と「発見」していたうちに、人食い、怠惰、不倫、迷信といった「野蛮な風習」が「土人」のステレオタイプイメージとして定着し、「さほど変わることなく継承されていっ

---

[34]　アイヌ民族と台湾原住民は北海道と台湾の「先住民」（＝Aborigines）であるが、沖縄の人々は日本政府に「先住民族」として認めていない。本論文は、「琉球民族」の成立や否という問題にふれるつもりがなく、ただ「琉球人」（＝近代の沖縄人）を近代日本の「他者」の一つとして論じる。

なお、国際連合教育科学文化機関（United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization、別称ユネスコ）は琉球・沖縄について特有の民族性、歴史、文化、伝統を認めている。詳細は『琉球新報』の 2014 年 8 月 30 日記事「沖縄の民意尊重を　国連人種差別撤廃委が日本に韓国」（http://ryukyushimpo.jp/news/storyid-230843-storytopic-3.html）参照（2015 年 5 月 26 日朝 9 時 40 分検索結果）。

[35]　詳細は大江志乃夫「まえがき」「東アジア新旧帝国の交替」大江志乃夫[ほか]『岩波講座　近代日本と植民地１　植民地帝国日本』（岩波書店、1992 年、v～vxi と 3～31 頁）参照。

[36]　川村湊「大衆オリエンタリズムとアジア認識」『岩波講座　近代日本と植民地 7　文化のなかの植民地』岩波書店、1993 年、113 頁。

た」と川村は指摘している[37]。一方、夏目漱石、今枝折夫、中西伊之助、田中英光などの文学者・ジャーナリストの著作を見れば、近代の日本人は中国や朝鮮、満洲や東南アジアの各地域の住民を「土人」として認識したことがわかり、それは近代の日本人が「ただ現時点での軍事的、経済的優位性」を「文化的あるいは民族的優位性だと思い込む」結果だと川村は評している[38]。

「土人」概念の形成と展開について、文化人類学者の中村淳は国語辞典（1886～1998 年出版、69 種）、国定教科書（1904～1940 年、全 4 期）と『人類学雑誌』（1886～1935 年、全 50 巻）を対象に詳しく論考した。明治初期の辞書かれ見れば、「土人」という漢語は「その土地に生まれる人」また「その土地・地方の人」という意味であり、それ以前に「未開人・野蛮人」の意味を表現する語彙として、古語は「＜えびす＞えみし」であり、そこには「北方異民族としてのアイヌ」の影が潜んでいると中村は指摘している[39]。1855 年の「蝦夷地」幕府直轄期以降、「土人」は徐々に「蝦夷」「蝦夷人」と入れ替わり、アイヌ民族を指す言葉として用いられるようになり、1878 年の北海道開拓使の達によって、アイヌに対して使用を限定する「旧土人」という用語も派生する[40]。

中村によれば、1930 年代に至ってこそ「原始的生活を営む未開人」という意味での「土人」が辞書に登場したが、明治末から大正初めにかけて、アイヌ民族と結びついた形で「野蛮人」を意味する「土人」イメージは、ほぼ形成されている[41]。「未開人」を意味する言葉として、「蕃人」は「土人」に先行して登場し、「外国人（多くは西洋人）」や「漢人・三韓人」を指す意味もあったが、実際の使用としては、「台湾の漢民族以外の民族」を指すことが最も多かった[42]。

全 4 期の国定教科書を見れば、「土人」という語彙の論及対象は、北海道のアイヌ民族から樺太、台湾、韓国の住民、さらに南洋群島の住民まで拡大していくが、教科書の改訂とともに、アイヌ民族と南洋群島の住民は「土人」に関する記述から除外される。それに対し、「土人」は常に帝国日本の周辺部に位置し、「教化」の進展とともに「土人」でなくなり、また周辺部に新たな「土人」が見出されるようになるため、国定教科書を貫く「土人」イメージは「その土地に生まれ

37　同上、113～114 頁。

38　同上、121～133 頁。

39　中村淳「＜土人論＞―『土人』イメージの形成と展開」篠原徹編『近代日本の他者像と自画像』柏書房株式会社、2001 年、86 頁。

40　同上、87 頁。

41　同上、99 頁。

42　同上、100 頁。ここで言った「台湾の漢民族以外の民族」は台湾原住民を指すと思われる。

住む人」ではなく、「未開・野蛮で教化されるべき対象」だと中村は指摘している[43]。

また、『人類学雑誌』の論文タイトルから見ると、南洋群島の住民を指す場合は「土人」を多用するが、台湾に関して「土人」を使用することが稀であり、「蕃人」「蕃族」「生蕃」「土蕃」といった用語は一般的であった[44]。

今まで述べてきたように、近代に入って、「土人」の語義は変化が生じ、その認識の論及対象・範囲は帝国日本の支配領域の拡張とともに、同心円的に拡大していったが、「文明教化」を受けた「土人」はその概念から除外されたこともある。公文書、新聞記事、文芸作品、絵葉書、写真など、近代日本の「土人」概念を表現する方法は多種多様であるが、最もインパクト的なのは博覧会であろう。近代の「万国博覧会」は、植民地帝国が自国の国力や植民地支配の実績を誇るための、最も盛大な「演出」と言える。もちろん、博覧会における「展示する／展示される」というメカニズムの中で隠されたのは、オリエンタリズムである。

1851 年の「大展覧会（The Great Exhibition)」すなわちロンドン博覧会を皮切りに、19 世紀後半の欧米では万国博覧会を開催するブームが起こり、その展示品は「物」のみならず、「生身」の人間も対象となり、植民地住民を主な対象として「展示」するのは、当時の異文化展示の技法の一つであった[45]。1889 年、パリ万博は植民地が産出する原料と製品より、「生身」の人間である植民地住民を主要な「展示品」として登場させ、このような「展示」による植民地表象はそれ以降の博覧会にも反復され、さらに規模を拡大していった[46]。近代日本の博覧会において初めて人間の「展示」が実行されたのは、1903 年の第五回内国勧業博覧会における「学術人類館」である[47]。

内国勧業博覧会とは、殖産興業政策の一環として 1877 年より実施された国家行事であり、その最終回に位置する第五回内国勧業博覧会は日清戦争の勝利を歴史的な背景に、国威発揚の「場」として位置がつけられたという点が以前の四回と異なる特徴があるため、台湾館を公式パビリオンとして設置した[48]。それに対して、会場正門の斜前に設けられた学術人類館は、神戸の米商人らの手による民間パビリオンであり、清国人を含む「異人種の展示」を計画したが、開館以前

43　同上、106～109 頁。国定教科書は第一期（1904～1909 年)、第二期（1910～1917 年)、第三期（1918～1932 年）と第四期（1933～1940 年）に分けられる。

44　同上、112 頁。

45　松田京子『帝国の思考　「日本」帝国と台湾原住民』有志舎、2014 年、155 頁。

46　同上、157 頁。

47　同上、158 頁。

48　同上、156 頁。

に清国政府の正式な抗議を受けたため、清国人の展示を取り消し、その展示は「朝鮮人」「アイヌ」「琉球人」「台湾生蕃」「台湾熟蕃」「台湾土人」「マレー人」「ジャヴァ人」「印度人」「トルコ人」「ザンヂバル島人」の 28 名によって構成され、館内の展示ブーズでの「種族」ごとに各地の住居を模して作った建物に、それぞれの住民を配置し、その生活の様相を観客に見せるという形である[49]。開館以降、『琉球新報』などを中心にする沖縄の世論は「琉球人」の展示に激しく抗議し、『大阪朝日新聞』などの本土の世論もそれに呼応して非難の報道を繰り返すため、「琉球人」展示が中止で騒動が収まり、「人類館事件」と呼ばれる[50]。

今まで述べてきたように、「土人」とは近代日本が自国支配下もしくは自国周辺の異民族に対する総合的称呼であり、支配領域と政治情勢の変化とともに、常に再編成されつつある認識でもある。博覧会と「人類館事件」は「土人」概念の存在とその内容を、最も具体的な形で表現するものと言えよう。論理的には、「文明教化」すなわち近代日本の植民地支配を通して、「土人」はその枠から脱出することが可能である。注意が必要なのは、「土人」とは相対的な概念という点であり、「未開の土人」に相対するのはやはり「文明の和人」ではないかと考えられる[51]。「土人」という概念は、アイヌ民族と「和人」もしくは琉球人と「和人」のような対比を前提に成立してきた。

しかし、植民地台湾はほかの植民地支配地域と異なり、「日本人（＝「内地人」）—台湾漢民族（＝「本島人」）—台湾原住民（＝「蕃人」）」という三重構造が存在している。前述の「土人」概念に従えば、台湾の漢民族と原住民は種類が異なる二つの「土人」であるが、日本統治期の台湾では両者を区別するため、漢民族を「土人」、原住民を「蕃人」と呼んだ。もちろん、「蕃人」は「土人」概念に包摂される対象でもある。

日本はさらに清国の分類概念を継承し、原住民の漢化（日本統治期には日本化）程度と政府に服従・不服従する点を判断基準に、原住民を「生蕃」と「熟蕃」に分ける。帝国日本の支配地域・住民の全体から見れば、当時では台湾原住民とくに「生蕃」が「文明序列」の最下位にあると認識される。たとえば、当時の民族学者渋沢敬三は「台湾蕃人」（＝台湾原住民）を「北海道旧土人」（＝アイヌ民族）と「南洋土人」（＝太平洋民族）と並列し、日本の版図内における「三大原始民

49　同上、158 頁。

50　同上、159 頁。

51　ここで言う「和人」は、北海道や沖縄を皮切りにする近代日本の植民地支配地域の住民の国籍問題にふれないことを前提に、「内地」に住む近代日本人の全体を指す意味として使われる。

族」とする[52]。

このような「土人」概念における台湾原住民の「野蛮性」は、近代日本に着目される点である。事実、第五回内国勧業博覧会に止まらず、1912 年の拓殖博覧会、1914 年の東京勧業博覧会、1935 年の始政 40 周年記念台湾博覧会にも、台湾原住民の「展示」があった[53]。そのなかでの拓殖博覧会は、一つの良い例である。日本近代史学者の松田京子によれば、拓殖博覧会では、台湾の漢民族と原住民、樺太と北海道のアイヌ民族を「展示」する「土人部落」のほかに、各植民地支配地域の観光館も設けられた。「土人部落」における台湾原住民の住居の近くに、人の頭に模した道標が作られ、この装飾は当時「最も『野蛮』な行為の一つと考えられていた『首狩り』の習俗を連想させるもの」であり、「台湾原住民の生活はその『首狩り』と強く結び付けられて表象されたもの」である[54]。一方、各植民地支配地域の観光館は活動写真の上映で、植民地支配地域の建設と産業開発の可能性を示そうとするが、その中の台湾観光館のみ、ほとんどすべての写真は台湾原住民に関わったものであり、「首狩り」の習俗や日本の討伐への武力反抗を表現し、原住民を「ある種の恐怖の対象として描きながら」、その「野蛮性」を強調しようとするものであった[55]。

要するに、近代日本の「土人」概念における二項対立は、植民地台湾で三重構造に転換されたため、「蕃人」の原住民は「土人」の漢民族とその「未開」イメージを遠景的に後退させ、「野蛮人」を演出する主役を果たしている。その点を理解したうえで、次の節に入ることにする。

52　前掲論文「大衆オリエンタリズムとアジア認識」、128 頁。

53　詳細は前掲書『帝国の思考』参照。ほかには、松田京子『帝国の視線　博覧会と異文化表象』（吉田宏文館、2003 年）や山路勝彦『近代日本の植民地博覧会』（風響社、2008 年）も参照できる。

54　前掲書『帝国の思考』、170～171 頁。

55　同上、172～173 頁。

第二節　近代日本の「土人」統治

前述のとおり、植民地台湾への支配を展開する前、近代日本はすでにアイヌ民族と琉球人という二つの「土人」を統治した経験があった。台湾原住民以前の「土人」統治を理解するため、ここではアイヌ民族と琉球人への統治政策における最初の段階を極めて簡単な形で要約し、台湾原住民と対照する[56]。

まずはアイヌ民族を見てみよう。地域史・女性史研究者の海保洋子によれば、近代以前の北海道とその先住民は「蝦夷地」「蝦夷・蝦夷人」と呼ばれ、松前藩の支配下の「異民族」「異域」とされるが、幕府は経済利益の独占やロシア帝国との対抗のため、「蝦夷地」を二回に直轄し、第一次（1799～1821 年）と第二次（1855～1868 年）の幕領期と呼ばれた[57]。第一次は蝦夷地を経済的に支配するのみ、その「異域」としての位置づけは変わらないのに対し、第二次は殖産興業的な経営方針の導入、アイヌ民族の人口・労働力を把握するための「人別帳」の作成、風俗・言語・氏名の「帰俗」（＝和風化）など、実質的に「領民化」を推進した[58]。

1869 年、明治政府は「蝦夷地」を「北海道」と改称し、道内に 11 国 86 郡を置き、道内事務を総括する開拓使を設置し、1875 年、日本は領土争議を解決するため、ロシア帝国と千島樺太交換条約を締結した[59]。1882 年、開拓使を廃止、

56　周知のように、「蝦夷地」「北海道」「沖縄」「琉球王国」「アイヌ民族」「琉球人」などのキーワードそのものの存在が示すように、近代から今日に至るまで、歴史学・民族学・人類学・地方史・地域研究などの様々な学問領域・研究分野から出発する、両地域とその住民に関する研究書・論文は数十年の蓄積を経て、非常に膨大かつ複雑な様相を呈している。例えば、対外的に、「北海道」と「沖縄」という二つの「地方」の成立は、いずれも周辺国家（主にはロシア帝国と清国）との交渉を重ねて得られ、その交渉は前近代の「華夷秩序」と近代の国際法的な論理の交替・再編成に深く関わるのに対して、対内的に、両地域の地方行政の成立も、他府県とかなり異なる性格を持つという、両地域の「両面性」に関する研究は非常に多かったというのが現状である。

本論文は台湾原住民の研究を目当てにすることを前提に、主に近代日本と両地域の「土人」の関係に着目し、見られる限りで主旨に最も関連する論文の要所のみを引用する形で紹介する。この点に関しては、予めに説明しておきたい。

57　海保洋子「『異域』の内国化と統合―蝦夷地から北海道へ―」桑原真人、我部政男編『蝦夷地と琉球』吉川弘文館、2001 年、122 頁。

58　同上、123 頁。

59　ロシア帝国との交渉で、日本は一定の領土権の有する樺太を放棄し、そのかわりに千島全島を日本領にする条約。条約の締結後、日本は樺太のアイヌ民族を千島に強制移住させよ

函館県・札幌県・根室県の 3 県を置き、1886 年、3 県を廃止、北海道庁を置いた[60]。行政制度の変革のほかに、最も重要なのは移民政策や土地政策の成立である。1871 年、明治政府は総額 1000 万円の「開拓十年計画」を決定し、当時の約 5000 万円の国家財政から言うと、かなり大きな比重を持つ計画である[61]。この計画を元に、明治政府は北海道各地の開拓事業を推進し、東北各地や九州の農漁民、困窮士族などの移住、「平時は農民、戦時は兵士」という屯田兵制度の設立、また囚人を酷使する「集治監」の設置など、様々な移民・労働力の導入策を実行した[62]。移民政策とともに、「地所規則」(1872 年)、「北海道地券発行条例」(1877 年)、「北海道土地払下規則」(1886 年) など一連の土地政策の制定によって、アイヌ民族の一民族としての共有地はすべて官有地に編入され、土地私有地が成立された。

行政制度と土地開発を背景に、明治政府はアイヌ民族への同化政策を展開した。海保によれば、政治・戸籍・法制度の導入が先行するうえで、明治政府は「風俗・習慣」「勧農」「教育・宗教」という三形態から、アイヌ民族に対して具体的な統合策を進めた。「風俗・習慣」について、家の焼き捨て、男子の耳環・女子の入墨など旧慣廃止のほかに、アイヌ民族固有の狩猟法としての毒矢や川漁のテス網の使用が禁止された[63]。それに続いて「勧農」は、アイヌ民族の固有の生産様式の禁止と土地私有制の成立がもたらした生活困窮の顕在化を契機とし、アイヌ民族を強制的に定住させ、居家や農具を下付し、農法を指導する政策である[64]。「教育・宗教」は、基本的に幕末以来の「帰俗」政策を継承したうえで近代教育を推進する政策である。明治政府は北海道開拓の人材を養成するための、東京に開拓使仮学校を設置したが、仮学校のアイヌ留学生は生活環境の急激な変化に慣れなく、早いうちに全員が帰郷したため、開拓使はアイヌ民族への性急な教育策を緩和した[65]。その後、アイヌ民族の子弟は官公立の教育所から輩出し、

うとした。詳細は前掲論文「『異域』の内国化と統合―蝦夷地から北海道へ―」参照。その移住行動は失敗したが、後の台湾原住民への移住政策の参考ともなったと考えられる。

60　北海道の地方行政制度の初期的特異性について、詳細は前掲論文「内国植民地としての北海道」や君尹彦「開拓使の設置について」(前掲書『蝦夷地と琉球』、82～97 頁) 参照。

61　田村貞雄「内国植民地としての北海道」『岩波講座　近代日本と植民地 1　植民地帝国日本』、93 頁。

62　同上、93～94 頁。

63　前掲論文「『異域』の内国化と統合―蝦夷地から北海道へ―」131～132 頁。

64　同上、133～134 頁。

65　同上、135～137 頁。

宮内省からも「旧土人教育基金」が下賜された[66]。

海保によれば、アイヌ民族への同化は風俗・勧農・教育という三つの面で強制され、物心両面より迫れてきて、特に移民の増加は、土地問題のみならず、教育・医療・衛生などのアイヌ民族の生活全般に直接・間接的影響を与え、その対策として成立されたのは 1899 年の「北海道旧土人保護法」である[67]。海保によれば、日清戦争の勝利、植民地台湾の領有、対露戦争準備体制強化という一連の流れのなかで、審議・成立された「保護法」は、アイヌ民族への「勧農」と「教育」の徹底を通して、「皇国臣民化」の完成を意図したものであり、後の海外植民地の先住民政策すなわち「特殊日本的植民地支配の原型的な性格を持つもの」である[68]。以上は、アイヌ民族への統治政策に関する概要の整理である。

次は琉球人を見てみよう。予めに説明しておきたいのは、琉球人には「土人」という称呼をあまり使っていない点である。国定教科書の国語読本では「本土・九州と異なる」「琉球人」を、「アイヌの土人」「台湾の土人」（＝台湾漢民族）および「未開の蕃人」（＝台湾原住民）と並列させたが、琉球人を「土人」としなかった[69]。明治政府の琉球所属問題に関連する公文書には、一般的に「琉球人・人民・島民」などの称呼を使用した[70]。しかしながら、前述したように、人類館事件から見れば、琉球人は「土人」概念に包摂されていると推定できる。そのため、本論文においては琉球人を「有実無名」の「土人」として考える。

沖縄県の前身は、1429 年から 1879 年まで存在していた「琉球王国」である。1609 年、琉球王国は薩摩藩の侵攻を受け、それ以降は薩摩藩の支配を受け、幕府は薩摩藩を通して、琉球国を支配した。一方、琉球王国は明国の藩属国であり、明清交替の後にも清国の冊封を受けた。琉球王国は近代まで「日清両属」の状態をそのままに維持し、1879 年の「琉球処分」を通して、「沖縄県」に転身した。いわゆる「琉球処分」は「琉球王国」を「沖縄県」に変えるため、王国を解体・再編成するという一連の政治的・法的プロセスであり、これがほぼ学界の通説である。近代日本政治史学者の我部政男によれば、このプロセスは 19 世紀後半の東アジアにおける「華夷秩序」から「万国公法」への過渡期を背景に、明治政府が琉球王国を中国を中心とする冊封・朝貢システムより分離させ、日本に統合化していくことであり、明治政府にとって、「沖縄地方」の統合化・一体化の完成

66　同上、138 頁。

67　同上、142～143 頁。

68　同上、145 頁。

69　前掲論文「＜土人論＞―『土人』イメージの形成と展開」の付録の資料二『尋常国語読本（甲種）巻六』「第二十三課　琉球・台湾」（金港堂、1900 年 12 月、114 頁）参照。

70　『琉球所属問題関係資料』の第六・七巻（琉球処分　上・中・下）参照。

は国内統一の完成のみならず、対外進出のモデルの獲得でもある[71]。本論文においては、「近代日本―土人」への思考を前提にするため、このプロセスにおける「明治政府―琉球王府」の政治的力関係を中心に述べる。

周知のように、明治政府は 1869 年の「版籍奉還」や 1871 年の「廃藩置県」を通して、地方権力の回収や地方制度の統一を実現したが、「琉球王国」＝「沖縄県」は他府県と異なる。近代日本政治史学者の我部政男によれば、「琉球処分の特質を国内的にみるならば」「琉球王国に対し版籍奉還と廃藩置県という政治的変革を同時に実施した」[72]という点である。

1872 年、明治政府は琉球王国の明治維新「慶賀使」が上京する際に、琉球王国を「琉球藩」に改め、琉球国王の尚泰を「琉球藩王」に冊封し、華族の称号を与えた。我部は「その決定によって琉球国王は明治国家に包摂されること」になったと指摘している[73]。また、明治政府は「琉球漂流民殺害事件」を利用し、清国に琉球の日本帰属を認めさせた。この事件は 1871 年、琉球王国の宮古島・八重山島の住民が台湾南部に漂着・上陸し、そのうちの 54 人が台湾原住民のパイワン族に殺害されたという経過である。明治政府は事件に関して清国政府と交渉し、パイワン族が自分の行政権の及ばない「化外の民」という返事を得て、後の軍事行動の口実とした。1874 年、明治政府は台湾に出兵し、パイワン族を「征討」した。その後、日清両国はイギリス公使の斡旋を通し、北京で議定書を締結し、その内容は日本の撤兵を条件に、清国は明治政府の台湾出兵の出費を負担し、更にその出兵を日本の自国民の保護行為として認めたというのであり、「清国政府は琉球の日本帰属を認めるような結果となった」と我部は評している[74]。翌年、明治政府は琉球処分を強行した。

1875 年、明治政府は内務大丞の松田道之を琉球処分官に任命し、松田は 7 月に琉球現地へ赴き、「清国との冊封・朝貢の停止、明治の年号使用、藩政の改革、琉球国王の上京、福州の琉球館の廃止、鎮台分営の設置、刑法研修生の派遣」な

---

[71] 我部政男「日本の近代化と沖縄」前掲書『岩波講座　近代日本と植民地１　植民地帝国日本』、102～103 頁。

[72] 我部政男「日本の近代化と沖縄」前掲書『岩波講座　近代日本と植民地１　植民地帝国日本』、105 頁。

[73] 同上。この冊封に関して、従来は「琉球藩設置」と認識されてきたが、近年ではこの表記が不適切だと主張する論者がいる。詳細は波平恒男「『琉球処分』再考――琉球藩王冊封と台湾出兵問題」（『政策科学・国際関係論集』第 11 号、琉球大学、2009 年）と「琉球処分の歴史過程・再考――『琉球藩処分』の本格化から『廃藩置県』へ」（『政策科学・国際関係論集』第 12 号、琉球大学、2010 年）参照。

[74] 同上、106 頁。

どの命令を伝達するに対し、琉球王国は現状維持的な両属体制における王国の保持を再三に嘆願した[75]。1879 年 3 月 27 日、幾度も来琉した松田は、警察官等 160 余と兵士 400 余と上陸し、軍事力の威圧をもとに琉球藩を廃止し、沖縄県を設置するという旨を布達し、31 日、琉球国の王府・首里城は王家の尚家から明け渡され、琉球処分は完成された[76]。それとともに、「琉球王国」は「沖縄県」、「琉球人」は「沖縄県民」となった。

アイヌ民族の場合と異なり、明治政府は直ちに琉球人に同化政策を行うのではなく、一時期的に旧慣調査・温存政策を採用した。沖縄近代史研究者の平良勝保の指摘によれば、藩王冊封から沖縄置県までの、大蔵省『琉球藩雑記』、外務省『琉球藩諸調書』や処分官の松田道之編『琉球処分』などの公務関係で作成された調査資料は、一種の旧慣調査と言えるのに対し、置県以降、県は旧琉球王府の高級官僚を沖縄県顧問として雇用し、顧問との問答によって作成された「原顧問応答書」や沖縄県編纂課「旧藩制度制度沿革及旧慣取調」などがある[77]。また、1879 年から 1897 年にかけて、中央官庁と沖縄県によって地方制度・租税制度に関する旧慣調査が数十回に行われた[78]。事実、旧慣調査は近代日本の植民地である台湾・朝鮮・南洋と支配地域の満洲・中国華北農村にも行われ、沖縄県における旧慣調査は、「近代日本の旧慣調査の先鞭をなすもの」と平良は指摘している[79]。

旧慣調査に関連する温存政策は置県直後から、県内の不平士族や対清関係などの要因を考えたうえで、土地制度、租税制度、地方制度などの旧慣諸制度を温存する政策の基調であり、時期的には 1879 年の廃藩置県から 1903 年の土地整理事業まである[80]。旧慣温存政策について、近代沖縄史研究の両大家・安良城盛昭と西里喜行は 1970 年代中期から 80 年代初頭まで、政治から経済面にわたる史料をめぐって細かく論争した[81]。そのなかで、明治政府の沖縄統治方針について、両氏は初期の県政に確固な政策方針がないという共同認識があり、その争点

75　同上、106～107 頁

76　同上、107 頁。

77　平良保勝『近代日本の最初の「植民地」沖縄と旧慣調査　1872－1908』藤原書店、2011 年、150～160 頁

78　同上、161～164 頁参照。

79　同上、323 頁。

80　琉球新報社編『沖縄コンパクト事典』琉球新報社、2003 年。

81　大里知子「沖縄近代史―『旧慣温存』『初期県政』研究についての一考察」『沖縄文化研究　29』法政大学、2003 年、287～288 頁。

は旧慣温存政策に定着するまでの明治政府の路線問題である[82]。

政策の路線問題はさておき、最終的に旧慣が温存されることになったのが確実である。西里は旧慣温存政策の内容を、①旧地頭層（＝有禄士族）の「家禄」保障②農村統治の末端である地方役人層の地位と特権の保障③農民支配・収奪の体系である土地制度・租税制度および地方統治のための「内法」の存続という三点に要約する[83]。その政策の目的は、廃藩置県を通して支配体制を確立しようとする同時に、旧支配層の既得権益の保護で彼らの反発を最小限にするため、伝統的な農村支配機構と地割制度の維持をしようとすることである[84]。その後、日清戦争の勝利とそれに付随してきた親清派の消滅と「沖縄県民」の感情や意識の変化によって、旧慣温存政策は休止符を打たれた。

以上は極めて簡単な形で、アイヌ民族と琉球人への「土人」政策の発端をふりかえる。最後に台湾原住民への統治策すなわち「理蕃[85]」政策を見ていく。

近代日本による植民地台湾への支配は、1895 年から展開していくが、台湾総督府は原住民への武力征伐すなわち「五箇年理蕃計画事業」を推進したため、台湾原住民への実質的な統治（＝「理蕃」政策の実行）は事業終了後の 1910 年代中期から始まった。そのため、まずは「理蕃」事業について紹介する。

歴史学者の大江志乃夫によれば、台湾全島を平定・植民地化するため、台湾の植民地支配期の前 20 年に、日本軍と台湾の住民は日清戦争と別に、もう一つの戦争をした。大江はこの戦争を「台湾植民地戦争」と呼び[86]、①台湾民主国の崩壊から台湾全島の軍事圧制まで（1896 年 3 月より、約 1 年間弱）、②日本の軍事占領下で台湾漢民族のゲリラ的抵抗（1902 年まで、約 7 年間）、③山地の台湾原住民への軍事的制圧（1915 年まで、約 13 年間）という三つの時期に分けている[87]。講和成立までの日清戦争の戦没者は 8395 人であるのに対し、台湾植民地戦争全三期の戦没者は 9592 人で、「日清戦争と同規模以上のもう一つの戦争が存在した事実が証明される」と大江は評している[88]。

台湾山地を平定する第三期の中核は、いわゆる「五箇年計画理蕃事業」である。

82　同上、292 頁。

83　西里喜行『沖縄近代史研究――旧慣温存期の諸問題』沖縄時事出版、1981 年、78 頁。

84　石田正治「沖縄における近代化の希求―太田朝敷の論説を中心に―」『法政研究 64-1』九州大学法政学会、1997 年、86 頁。

85　「蕃」を「理する」＝台湾原住民の事務を取り扱うこと

86　大江志乃夫「植民地戦争と総督府の成立」『岩波講座　近代日本と植民地 2　帝国統治の構造』岩波書店、1992 年、4 頁。

87　同上、6 頁。

88　同上、10 頁。

五代目の台湾総督佐久間左馬太は 1907 年と 1910 年に、それぞれ第一次と第二次「五箇年計画理蕃事業」を実行した。第一次はいわゆる「隘勇線」に地雷や高圧電流線を設け、「蕃地[89]」の横断道路の建設、土地調査事業の開始、「蕃地」の完全国有化・官有化などの作業を推進したのに対し、第二次は巨額な予算を投入し、大規模な「討伐」を行った[90]。植民地戦争の第三期は、「戦備を整える」第一次と「戦争を行う」第二次「理蕃」事業を通して、二段階を分けて推進された。

特に、第二次「理蕃」事業は「隘勇線」の推進を通して行われた。「隘勇線」とは、清朝時代の「隘」を継承して再編成され、1902 年に本格的な整備が始められたものである[91]。具体的には、「隘路」という防衛線を作り、要所に「隘寮」という歩哨を設置し、隘寮に警備員の漢民族「隘勇」とその指揮者の日本人警察官を部署し、さらに「隘路」の要所には高圧電流の鉄条網と地雷を設置し、台湾原住民を「線外」に隔離するという形であり、「隘勇線」の推進とは、武力を以て隘勇線を「台湾原住民の居住地を狭める形で移動させる」ということである[92]。1914 年、佐久間総督は「太魯閣蕃討伐」の終結で、「理蕃」事業の完了を天皇に上奏した[93]。「理蕃」事業の終了とともに、台湾における植民地政権・治安は安定化した。特筆に値するのは、台湾総督府は台湾史上初の全島を統治する者となったという点である。

「理蕃」事業の終結後、「理蕃」政策は実質的に推進された。後述する「理蕃」史上の最大の武力反抗事件、1930 年の霧社事件を境目に、「理蕃」政策は二段階に分かれ、1915 年から 1920 年代までは、「理蕃」警察の養成、山地の開発、原住民への集団移住・農民化政策、教育の普及などを中心に進めているのに対し、1930 年以降は霧社事件の影響を受けて大きく変化した。ここでは 1915 年から 20 年代までの「理蕃」政策を中心に紹介する。

台湾総督府による台湾山地・原住民への支配は、すべてが「理蕃」警察によって管轄された一元的体系という点を、まず認識しておかなければならない。日本近代史研究者の近藤正巳によれば、「理蕃」警察機構は中央の機構から見ると、

89　台湾原住民の居住した高山地域を指す蔑称。本論は当時の歴史的事象を尊重するため、そのままに使う。

90　松田京子『帝国の思考　日本「帝国」と台湾原住民』有志舎、2014 年、143 頁。1911 年 4 月、台湾総督府は討伐策戦の「武勲」に対して、日清戦争の基準と同等に論功行賞すると宣布した。松田はそれに対し、山地に居住する原住民は「戦争状態同等の軍事作戦の対象として取り扱われていった」と論じる。

91　同上、144 頁。

92　同上。

93　同上。

総督府警務局理蕃課に監察・整備・授産・教育・衛生・交易・蕃地開発の六掛、そして地方に警務局の直接指示を受けていた州理蕃課・係が置かれたという形で形成され、その末端としての駐在所は、1917 年に 800 余所が設けられ、ピークに達している[94]。その数の駐在所に対応できる理蕃警察官を養成するため、1898 年、台湾総督府は「警察官及司獄官練習所」を設け、日本人の軍隊経験者を選抜し、一週間ないし一箇月間の訓練を与えて山地に配属した[95]。総督府は警察官に「蕃語」（＝原住民の各族の言語）の研究を奨励し、「蕃語」辞書類のものを編纂・発行したが、「理蕃」警察官が練習所で受けた教科は軍事訓練や「土語」（＝福建系漢民族使用の台湾語）とある程度の「衛生」教育のみであるため、その任務は「あくまで軍事的制圧にあったことを如実に示している」と近藤は評している[96]

近藤によれば、「理蕃」政策は基本的にアイヌ民族への政策を継承し、アイヌ民族への「生活手段の収奪」と「生活様式の強制」という基調が台湾原住民に対しても受け続かれている[97]。日本は無主地国有化の原則を以てアイヌ民族の土地を収奪するのに対し、今度は台湾の「蕃地」をすべて無主地とする[98]。1900 年、台湾総督府は「蕃地ノ占有ニ関スル件」で、原住民以外の者は「蕃地」の占有と使用を禁止し、実質的に漢民族を「蕃地」から駆除し、1915 年より、総督府は林野整理事業を行い、「蕃地」を「要存置林野」「不要存置林野」「準要存置林野」に区分し、「準要存置林野」は「蕃人保留地」と通称され、「蕃人ノ生活上、保護ヲ要スル地域」と定義された[99]。1925 年より、「保留地」への原住民の「集団移住」政策は実施が始められ[100]、「移住地の選定など事前に周到な調査が行われ、保安費・保育費の名目で地方庁費へ予算要求される」と近藤は指摘している[101]。

土地整理や集団移住とセットするのは台湾原住民の「農民化」である。台湾総督府は領台直後、原住民の「農耕民化」方針を打ち出し、「蕃地」に水稲の栽培を推進し、「理蕃」警察官の間にも米作奨励で原住民を「従順な農民」に変えるという共通認識があり、早くから「米食う蕃人は反抗しない」という説が語り続

94　近藤正己「台湾総督府の「理蕃」体制と霧社事件」前掲書『岩波講座　近代日本と植民地 2　帝国統治の構造』、37～38 頁。

95　同上、40 頁。

96　同上、41～43 頁。

97　同上、43～44 頁。

98　同上、44 頁。

99　同上、44～45 頁。

100　同上、45 頁。

101　同上、47 頁。

かれた[102]。事実、当時の「理蕃」警察官は大半、九州・中国・東北の農村出身者であり、田地の開墾、水路の開鑿や水田造成技術などの指導は、すべて彼らによるものであった[103]。

一方、原住民教育も「勧農」を中心に推進された。総督府は各駐在所に修業年限四年の「蕃童教育所」を設け、巡査やその妻を教師とし、1908 年の「蕃童教育標準」や 1928 年の「教育所における教育標準」も、農業推進を目的としたものであり、1930 年より、総督府は各州庁に産業指導所、農業講習所を設置し、数「蕃社」ごとに指導農園を作り、農業技術の伝習を指導する[104]。教育所や指導所の目的は「堅実な農民」を育成するのみならず、将来の「蕃社」の「指導的中堅人物」の養成でもあると、近藤は指摘している[105]。以上は霧社事件までの「理蕃」政策の概要である。

本論文においては、三つの「土人」への統治政策の概要を見ることによって、近代日本の台湾原住民への認識の「原点」を考えてみたい。前述したとおり、近代日本の「土人」政策には一定程度の連続性が存在している。アイヌ民族への同化政策と琉球人への「旧慣」調査・温存政策は、近代日本の植民地支配地域に対する政策の「原型」である。台湾原住民への「理蕃」政策は、この「原型」を元に生まれたものと言える。

しかし、アイヌ民族や琉球人など、ほかの「土人」と比較すると、台湾原住民は「人殺し」「人食い」という野蛮的な印象が格別に強調された。それは近代日本による台湾山地・原住民統治の「起点」にも関わる問題だと考えられる。

「海外植民地」の台湾と「内国植民地」の北海道と沖縄の最大な相違点は、植民地を帝国に編入する過程に、近代の国際法的理論をめぐって周辺国家との交渉程度である。明治政府は北海道と沖縄を日本に「編入」するため、ロシア帝国と清国と繰り返しに外交交渉をした。その交渉過程においては、アイヌ民族と琉球人も「日本人」と主張する必要がある。そのため、アイヌ民族と琉球人への統治は「国民」への「世話」でもあり、外国の視線を配慮しなければならない。それにひきかえ、台湾原住民は琉球漂流民殺害事件の時点より、清朝に「化外の民」（＝行政権が及ばない人々）とされ、明治政府は下関条約で台湾を領有した後、清国への配慮が全くなかった。

一方、「土人」政策は時に「未開地」の資源獲取に関わる問題でもあるため、ここではアイヌ民族を例に、原住民と対照してみる。

102　同上、48 頁。

103　同上。

104　同上、48～49 頁。

105　同上、49 頁。

北海道は地形上に天険がなく、ほぼ広大な平原であるため、開発の根本問題は労働力である。「北海道開拓事業報告」によれば、1873 年の北海道アイヌ人口は 1 万 6 千余りでしかない[106]。そのため、明治政府は大量な移民を送った。しかし、移民の増大とともに、アイヌ民族の生存難の問題が形成し、「北海道旧土人保護法」は「保護的論理」を元に成立されたものである。それにひきかえ、台湾原住民の場合は異なる。

台湾は中央山脈を中心に、山地・丘陵地が全島面積の 3 分の 2 を占めている、山岳中心型の地形である。最初の「蕃社戸口」統計によれば、1920 年の台湾原住民の人口は 13 万余りである[107]。高山地域に居住し、険しい地形を借りて作戦できる台湾原住民は、総督府にとって山地・森林資源を開発された一大問題である。そのため、四代目台湾総督の児玉源太郎が最初に提出した「理蕃方針」は、「蕃人」を「誘導する」緩慢な手段ではなく、勢い「絶滅」する構想であったが、総督府参事官の持地六三郎は「絶滅」論を修正し、「威シテ而ル後撫スル」方針を提案し[108]、「蕃政問題ニ関スル意見書」で以下のように書いた。

> 蕃地問題ト云フ何トナレバ帝国主権ノ眼中蕃地アリ蕃人ナケレバナリ蕃地問題ハ宜シク経済的見地ヨリ解決スル要ス而シテ其経営ハ須ラク財政的方策ナラザルベカラズ蓋シ国家諸般ノ問題其帰スル所ハ皆経済的財政的問題ニアラザルハ莫キノミナラズ植民地経営ニ至リテハ特ニ経済的財政的見解ヨリ諸般問題ヲ解決スル[109]。

事実、五代目台湾総督の佐久間左馬太は、持地の方針をふまえて「五箇年計画理蕃事業」を推進した[110]。そこから、日本政府は異なる「土人」に特別な好悪をもっていたわけでなく、ただ「経済的財政的見解」を前提に「国家諸般ノ問題」ないし「植民地経営」を考えたことがわかる。アイヌ民族への「保護法」と対話原住民への「理蕃」事業は形が異なるが、「未開地」の資源の獲得を目的とする点は相同である。「理蕃」事業はそういう意味で、台湾山地の開発の「障礙」を

106　葭田光三「アイヌ人口史」『日本大学人文科学研究所研究紀要』(37)、日本大学人文科学研究所、1989 年、293 頁。また、1873 年の統計によると、アイヌ民族の人口数は 16272 人である。詳細は白山友正「幕末のアイヌへの人口政策と人口」(『社會經濟史學』36(6)、社会経済史学会、1971 年）参照。

107　台湾総督府警務局編『蕃社戸口　大正九年十二月現在』、1921 年、2 頁。

108　前掲論文「台湾総督府の「理蕃」体制と霧社事件」、36 頁。

109　台湾総督府警察本署『理蕃誌稿　第一巻』青史社、1989 年、180 頁。

110　前掲論文「台湾総督府の「理蕃」体制と霧社事件」、36 頁。

一掃するための戦争である。
「植民地戦争」のない北海道と沖縄と異なり、近代日本は「理蕃」事業という戦争手段を通して、台湾山地への支配権を獲得した。その戦争のうちに、台湾原住民との激しい戦闘が発生したため、「凶蕃」「人食い」「野蛮人」などの近世以来の台湾原住民に対する既成認識は一層に強められていった[111]。近代における日本人作家の台湾原住民への認識は、このような歴史背景を元に展開されていく

[111] 台湾原住民に関する近代以前の記述の大半は、「人殺し」「人食い」というマイナス的なイメージを反複に強めたものである。詳細は山路勝彦『台湾の植民地支配―“無主の野蛮人”という言説の展開』（日本図書センター、2004 年）の第 1 部「植民地主義的言説」参照。

第二章　「旅人」たちの見た台湾原住民：日本統治初期から霧社事件まで

はじめに　「植民地旅行」の成立

1915 年、「五箇年理蕃計画事業」の終結とともに、台湾山地・原住民に対する「理蕃」政策は実質的に展開されていった。日本人作家による台湾原住民関連作品も、1910 年代の半ばに現われた。その頃より、植民地支配の官僚・関係者のほかに、民間人としての作家・文学者は自由に台湾進出できるようになり、いわゆる「植民地旅行」が成立した。

植民地旅行の成立は、二つの要因に基づいたのである。一つは、植民地政権・治安の安定化であり、もう一つは、台日間および台湾島内における交通制度・機関の整備である。前者について、第一章ではすでに「植民地戦争」と「五箇年理蕃計画事業」を述べたため、ここでは後者を中心に紹介する。

日本統治期において、日台間の公共交通機関は主に海運であるため、ここでは日台間の海運発展史を簡単に述べる[112]。歴史学者の高橋泰隆によれば、日台間航路は最初に軍部御用船があたり、その後は「命令航路」の助成金が支給される定期航路から始まった。1896 年、日本政府は航海奨励法、特定航路助成措置、造船奨励法などの航海助成策を積極的に推進し、主要航路に補助金を交付した[113]。日台間の命令航路は同年、大阪商船会社の定期航路と伊万里運輸会社の台湾沿岸航路から始まった。その後、命令航路は日・中・台の相互航路が開かれ、1912 年まで 10 航路となった[114]。その中で、日台間航路としては神戸・基隆線と横浜・高雄線が開かれ、漸次に大型船化・高速化され、明治末は 6000 トン級船で四日間の運航であったが、大正から昭和にかけて 1 万トン級になり、二日間しか要しないようになった[115]。1913 年、貴族院議員の武井守正男爵は『台湾日日新報』で「旅行は便利」「談笑間に着船」と評した[116]。換言すれば、1910 年代の半ばま

112　曽山毅の指摘によれば、「1930 年代に入り、民間航空への取り組みが本格化にして」「内地・台湾航空輸送、島内航空輸送の毎日運航化が実現するまでになった」が、「旅客輸送の全体に占める割合はきわめて低く、航空が植民地台湾のツーリズムの発達に果たした役割は限定的であった」。詳細は曽山毅『植民地台湾と近代ツーリズム』（青弓社、2003 年、168 頁）参照。

113　高橋泰隆「植民地の鉄道と海運」『岩波講座　近代日本と植民地 3　植民地化と産業化』岩波書店、1993 年、269 頁。

114　同上。

115　同上、270 頁。

116　武井守正「台湾我観」『台湾日日新報』1913 年 1 月 7 日。

で、日台間航路は高速的な発展を遂げ、円熟期に入った。

一方、台湾島内の交通建設は鉄道を中心に展開していく。観光史研究者の曽山毅によれば、日本政府は鉄道を台湾統治の最優先事業として、既存線の全面的な改良と縦貫線の建設工事を行った[117]。台湾の鉄道は台湾各地の物産を日本に移出し、日本から工業製品を移入する輸送網の役割を果たし、「植民地鉄道の典型」と言われる。「こうした輸送網が旅客輸送機関として発達することによって」「台湾での近代ツーリズムを発達させた」と曽山は指摘している[118]。

旅客輸送の役割を果していたのは主に官設鉄道である。台湾領有の直後、日本は清朝の台湾巡撫の劉銘伝によって完成された基隆・新竹間路線を接収し、初代台湾総督樺山資紀はそれを延長し、台中・台南を経て高雄に至る鉄道建設を中央政府に建言し、参謀本部も同様の構想を陸軍省に提出した[119]。台湾全島の縦貫線の工事は基隆・新竹間の改良工事から始まり、南部の新線敷設工事も加え、1908年に基隆・高雄間の縦貫線全線が開通された[120]。縦貫線の完成以降、東西連絡、資源開発、森林開発などの目的を持つ鉄道は漸次に整備され、また、輸送力を増強するため、海岸線の建設と縦貫線の複線化工事も行われていた[121]。

曽山の指摘によれば、1897 年に台湾官設鉄道の営業キロは 97 キロ、輸送人員は 26 万 5 千人であったが、1909 年に営業キロは 436.4 キロ、旅客数は 301 万人に伸び、縦貫線開通後の営業キロと旅客数の推移をみると、1910 年代は官設鉄道が旅客輸送機関として成長する時期であった。1910～20 年代の間に、営業キロは 1.5 倍、旅客数は 4.1 倍に増大した官設鉄道は、「縦貫線による旅客輸送の堅調な伸びを中心として」「そこに新線建設による新たな旅客輸送が重なった」という形で成長したと、曽山は指摘している[122]。つまり、1910 年代の植民地台湾においては、官設鉄道の縦貫線の開通を中心に、島内の交通機関が十分に充実された。

また、曽山によれば、「五箇年理蕃計画事業」の終了後、台湾の高山地域には、いわゆる「ツーリズム空間」が形成されてきた。1923 年以降、高山地域の治安は安定化し、台湾総督府は武力制圧を背景に、1910 年代後半から山地道路の整備を始めた[123]。山地道路の建設完成と同時に、高山地域（＝原住民の居住地域）

---

117 曽山毅『植民地台湾と近代ツーリズム』青弓社、2004 年、57 頁。

118 同上。

119 同上、58 頁。

120 同上、61 頁。

121 同上、詳細は 61～67 頁参照。

122 同上、67 頁。

123 同上、241～242 頁。

が近代の「ツーリズム空間」に転化する可能性が生まれた[124]。曽山は日本統治初期の旅行案内書を例に挙げる。1901 年版『日本名勝地誌・台湾編』では「蕃界」に民間人の活動が困難だと認識され、「蕃界」の名勝が発見されにくく、その記載が欠如であり、また漢民族と原住民の居住地の境界地帯に関する記述には「蕃害」「蕃界」「蕃界への入口」などの表現が散見され、1908 年版『台湾鉄道名所案内』の記述表現にも原住民を一種の「脅威」とする認識が読み取れる[125]。

しかし、1916 年版『台湾鉄道旅行案内』には、花蓮港付近の記述とともに台湾東部の原住民紹介も紹介し、そこから「旅行の脅威から地域情報として原住民の生活を紹介する姿勢に変化し」、それ以降の『台湾鉄道旅行案内』における原住民に関する記述は詳しくなっていると曽山は指摘している[126]。また、1916 年以降の各版の『台湾鉄道旅行案内』における「観光・視察対象」地域別集計を考察することによって、曽山は中央山脈の数字を原住民居住地域と読み替えると、1921 年版の八ヵ所（全体比 2.5%）から 1938 年版の百六ヵ所（15.6%）まで大幅に増加したと指摘している[127]。

以上の述べたように、1910～20 年代は「五箇年理蕃計画事業」の完成を背景に、日台間と台湾島内の交通制度・機関が漸次に整備され、原住民の居住地域にツーリズム空間が成立してきた時期である。事実、1910 年代中期、台湾における植民地支配は一定の成果を達成し、植民地支配が評判になった時期である。植民政策学者の東郷実と建築家の春夫四郎による共著『台湾植民発達史』は、過去 20 年間の「平和の確立と秩序の整頓時代」と「産業の勃興と経済の発展時代」[128]を経て、その「偉蹟」を収めた 1916 年が「植民史上に新紀元を開く」[129]と大いに評価している。

今まで述べてきた背景を元に、日本人作家による台湾原住民関連作品は 1910 年代中期から現われてきた。換言すれば、1910 年代中期までは、日本人作家による台湾原住民関連創作の「空白期」と言える。この「空白期」を補填するため、本論文においては、日本統治初期の日本人警察官による作品をも考察対象とする。日本統治初期から霧社事件までの日本人作家はおおよそ、「植民地旅行」に出るという心情で渡台し、植民地台湾とその住民を観察した。要するに、彼らの作品は旅行記であり、彼らの目線は「旅人の視線」と言えよう。この視線におけ

124　同上、242 頁。

125　同上、244 頁。

126　同上、245 頁。

127　同上、246 頁。

128　檜山幸夫『台湾史研究叢書　第三巻　台湾植民発達史』クレス出版、2011 年、23 頁。

129　同上、30 頁。

る台湾原住民像を考察するため、本章では中島竹窩、宇野浩二、中村古峡、佐藤春夫の作品を中心に、日本統治初期から霧社事件までの日本人作家による台湾原住民表象を考察する。

第一節　「帝国の視線」――中島竹窩

一、はじめに

中島竹窩「生蕃探検記」は明治期創刊の雑誌『太陽』[130]の第 2 巻 21 号から 25 号（1896 年 10 月 20 日～12 月 20 日）に連載された散文である。文学というジャンルから言うと、日本統治期の台湾原住民に関する最も早い作品とも言える[131]。日本統治初期の台湾原住民に関する一次資料は学者の研究成果のほかに、そのほとんどが植民地支配の第一線に立つ警察官によるものであるが、それらの資料は研究書、法律・行政文書が多数を占めている。一般読者を対象とする、「生蕃探検記」のような雑誌記事は多くとは言えない。

そのため、本論文においては雑誌『太陽』の成立過程と「生蕃探検記」との関連およびその位置づけ、さらにそこから日本統治初期の原住民認識を抽出しつつ、「生蕃探検記」の性格を論じていきたい。

二、明治期の台湾原住民認識：総合雑誌『太陽』と「生蕃探検記」の関連

まず、植民地の警察官は職務上の理由で原住民と接触することができたが、彼らの記述はあくまでも当時の「台湾原住民認識」の一つの「側面」しか表現できない、ということを認識しておきたい。この「側面」を解明するため、雑誌『太陽』の生成背景およびそのプロセスを考察し、「生蕃探検記」との関連性を考えるのは、第一の問題である。そして、「生蕃探検記」は如何に当時の既成の原住民認識と結びつき、その文脈に入ったかというのは、第二の問題である。

第一の問題を考えるため、まずは雑誌『太陽』の性格を論じることによって、そこから『太陽』における「生蕃探検記」の位置づけを考察したい。雑誌『太陽』については、鈴木貞美、原秀成らによって既に詳しく論じられている。ここでは「生蕃探検記」に関連する要所を述べていくことにする。

社会学者の原秀成によれば、『太陽』は博文館の事業の始まりとなる『日本大家論集』を継承したものである[132]。『日本大家論集』は創刊広告で謳われている

130　博文館による 1895 年から 1928 年まで出版されていた雑誌。

131　『太陽』の第 2 巻第 4 号には「生蕃会見記」という記事が掲載されたが、ただ原住民の外見しか描かせないほど五頁くらいの短文で、議論の対象になるにはやや不十分である。また、日本統治期の台湾原住民関連作品については、黄美娥編『台湾原住民族関係文学作品目録　下』（台湾原住民族委員会、2013 年）参照。

132　原秀成「近代の法とメディア―博文館が手本にした十九世紀の欧米―」鈴木貞美編

ように、「万般の学術に関する本邦諸大家の名論卓説を蒐集し、其他、内外学術上に関したる有益の事項、および名家の詩文等を掲載せし、便利無比の良雑誌」を目指し、1887 年に創刊されたものである[133]。しかしながら、1886 年に締結されたベルヌ条約[134]の基準にあわせるべく、1893 年に公布された版権法条文は、雑誌記事の無断転載禁止と解釈できるようになったのに対し、『日本大家論集』は欧米諸国の「集録雑誌」に倣い、他誌からの転載を中心としたものであった。そのため、博文館は無断転載を断念し、新たに『太陽』の創刊を決定したのである[135]。

また、『太陽』の創刊は博文館の雑誌編集・出版方針の転換とも深く関わっている。それについて、近代文学研究者の鈴木貞美は以下のような意見を述べている。博文館は最初、1887 年に『日本大家論集』をもって創業し、1894 年の日清戦争の勃発まで計 15 誌を持つ。日清戦争の際、博文館は写真銅版口絵、戦局地図を付した戦況報告、戦没者の写真と記事を載せた『日清戦争実記』を月 3 回発行し、飛ぶように売れた。『警視庁統計書』の数字から推測すれば、一冊あたり十万部以上も売れ、それは日本で未曾有の事態である。これを機に、博文館は刊行中の 15 誌をすべて廃刊し、1896 年 1 月に『太陽』『文藝倶楽部』『少年世界』の 3 誌を創刊し、博文館の創立者・大橋佐平はそれによって雑誌の編集・販売戦略を「分野別拡散型から集中型へ」転換しようとすると言われる[136]。こうして生まれた『太陽』は、「百科全書」「百貨店方式」と呼ばれてきたという基本構成である。『太陽』には既刊雑誌の性格が窺えるが、過去に掲載がない誌面構成もあることからみれば、「単に自社の既刊雑誌を統合したというだけではなく、また『日本大家論集』の新原稿版でもなく、明らかに学術各分野を網羅しようとして、新たにしつらえたもの」である[137]。

このような経緯で刊行された斬新な総合雑誌『太陽』は、1895 年 1 月から 1928 年 2 月まで、全 34 巻 531 冊、総計約 17 万 5 千頁をもって、政治・軍事・経済・

『雑誌『太陽』と国民文化の形成』思文閣出版、2001 年、51 頁。

133　同上、54～55 頁。

134　文学的および美術的著作物の保護に関する条約。英称：The Berne Convention for the Protection of Literary and Artistic Works、通称ベルヌ条約。1886 年にスイスのベルンで作成された。

135　前掲論文「近代の法とメディア―博文館が手本にした十九世紀の欧米―」、66～67 頁。

136　鈴木貞美「明治期『太陽』の沿革、および位置」前掲書『雑誌『太陽』と国民文化の形成』、4～6 頁。

137　同上、15～16 頁。

社会のみならず自然科学全般・文学・風俗の分野にも及ぶ、「各種を集めて大成し（…）専門諸大家の力を集め（…）成るべく平易に成るべく趣味多からしめんと力むる[138]」総合雑誌であるため、たとえ広く浅くともより多くの知識、情報を掲載し普及させることを第一の編集方針に据えていた。

『太陽』の創刊号を見ると、目次は「論説」「史伝」「地理」「小説」「雑録」「文苑」「芸苑」「家庭」「政治」「法律」「文学」「科学」「美術」「商業」「農業」「工業」「社会」「海外思想」「輿論一斑」「社交案内」「新刊案内」「海外彙報」「海内彙報」「英文（欄）」となっている[139]。このような画期的な雑誌の中で、「生蕃探検記」はどのような位置を与えられていたのであろうか。

答えは「地理」である。「生蕃探検記」は「地理」という項目に位置付けられて刊行されていた。全文は（上）（中之上）（中之下）（下之上）（下之下）の五回の連載であり、最初の題名は「生蕃探検記」ではなく、「生蕃地探検記」である。おそらく人類学は明治期においてまだ重視されていないため、「生蕃探検記」は最初に地理学と結びつき、地誌の形式で現われたのであろう。中島自身あるいは博文館は「生蕃探検記」が地理欄に分類されることを意識したであろう。しかし、第1回目にあたる（上）の前半は台湾山地の地理・地形に関する描写があるが、後半は重心を台湾原住民の外見や漢民族との関係へ移し、第2回目の（中之上）からは「生蕃探検記」に改名し、終了までこの名を以て連載された。

「生蕃探検記」に先行する台湾地理関連記事は、「東部台湾の探検」（第2巻第2号）と「台湾の地理」（第2巻第5号）などがある。しかし、「地理」は常設欄ではない。時には地理記事が無く、また時には「歴史および地理」「史伝地理」という形が取られていた。つまり、地理記事欄の主題は原稿の性質に合わせて調整できるものである。

「生蕃探検記」以前の地理記事はおおよそ二種類に分けられる。一つは京都（「京都の新案内記」第1巻第1号、3号）、東京（「東京花暦」第1巻第2号、4号、6号）、富士山（「富士の麓」第1巻第7号、「野中至氏の富士山観測所」第2巻第1号）など日本を象徴する場所に関する記事である。もう一つは樺太（「樺太生蕃探検記」第1巻1号）、琉球（「琉球」第1巻第8号）、南洋（「南洋風土」第1巻第12号）さらに西比利亜（「西比利亜の土人」第1巻第9号）など帝国の領土競合地に関する記事である。要するに、『太陽』の地理記事は主に、帝国日本の「中心部」と「辺境部」を描くものである。すると、「生蕃探検記」は「辺境部」の記事として位置を付けられたのであろう。こうした『太陽』の地理記事から、当時のナショナリズムも読み取ることができる。つまり、帝国日本の「中

138　大橋新太郎「太陽の発刊」『太陽』創刊号博文館、1895年、1～2頁。

139　前掲論文「明治期『太陽』の沿革、および位置」、15頁。

心部」と拡張しつつある「辺境部」を描くことによって、国民の共同体意識・認識を創出しようとする狙いを含んでいた可能性がある。

視点を変えてみる。『太陽』の台湾関連記事において、「生蕃探検記」はどのような位置にあるのか。前述したように、『太陽』の成立は『日清戦争実記』にも関わり、当時、日清戦争は国民の一大関心事でもあった。原秀成は博文館が『太陽』の創刊で政府との距離を縮め、「『帝国』の『征清』（日清戦争）に便乗する形をとった」と評し[140]、「『太陽』という題号は、「日本」を象徴させたもの」であり、1895 年の新年号である創刊号の表紙絵は、太陽の光が日本と中国を照らし、「日の本」の国の「勝戦ノ元旦」を表現したものと指摘している[141]。つまり、『太陽』は日清戦争への関心で成立し得た。

『太陽』と『日清戦争実記』の発刊から見てみよう。『日清戦争実記』は 1896 年 1 月の第 50 編まで発行された[142]。「生蕃探検記」を連載している『太陽』第 2 巻は、『日清戦争実記』が完結した後、月 2 回（5 日、20 日）刊行というように形を変えた。このことから、博文館は『日清戦争実記』の完結後、『太陽』の発行に全総力を注ぎ込み、「勝戦ノ元旦」という意気高揚ブームを継続させようしたとも考えられる。『太陽』地理欄の台湾関連記事は、正に「戦利品」への議論であろう。

『太陽』創刊号から「生蕃探検記」が連載終了する第 2 巻 25 号まで（明治 28 年から 29 年までの第 1 巻、第 2 巻の全編）を見通すと、台湾の関連記事は少なくない。最初は『日清戦争実記』の延長線とも言え、主には「対清政策」、「征清の終結如何」（第 1 巻第 1 号）、「戦費の賠償」、「和戦談判の事例（普仏戦争および伯村会議）」（第 1 巻第 4 号）などの対清外交策および戦後の処理に関するものである。その中で、第 1 巻第 4 号の「我が新領地」は最初の台湾記事である。

1895 年の年中を以て一線を画くと、政治記事としての台湾初代民政局長・水野遵の「台湾赴任の辞」（第 1 巻第 7 号）の刊行とともに、台湾関連記事は多くなり、「台湾論」（第 2 巻第 9 号）、「台湾に一大植物園を設置せざるべからず」（第 2 巻第 8 号）、「文学上の台湾」（第 2 巻第 9 号）など、植民地支配の総論、提案や従来の「台湾像」に関するものが現われた。つまり、議論の焦点は日清戦争から台湾への観察・議論へと移行した。1896 年、『太陽』第 2 巻の発行とともに、台湾関連記事は一層深まり、「台湾殉難六教育家」（第 2 巻第 4 号）を皮切りに、「台湾史料叙」（第 2 巻第 7 号）、「台湾に於ける阿片問題」（第 2 巻第 8 号）、「台湾土人の子弟教育の実験」（第 2 巻第 20 号）など、統治現場の問題に関する

---

140 前掲論文「近代の法とメディア―博文館が手本にした十九世紀の欧米―」、67 頁。

141 同上、68 頁。

142 同上。

議論が始まる。つまり、日清戦争の終結と台湾接収とともに、「日清戦後の処理」から「台湾論」、そして「台湾統治の問題」という流れを経て、議論が深まっていく。台湾関連記事全体から見ると、「生蕃探検記」に象徴される台湾原住民は、鴉片問題、台湾の旧慣・風俗、今後の台湾教育と並列され、明治政府からすれば、最も関心の高い問題である。

では、第二の問題を考えてみよう。統治初期の日本は原住民に対し、どのような認識を持っていたのか。文化人類学者の山路勝彦によれば、1871 年の琉球漂流民殺害事件と 1874 年の台湾出兵[143]は近代日本人の台湾認識を変え、台湾への関心を高め、両事件を契機として、近代日本の人類学の関連知識が向上した[144]。例えば、1875 年の『朝野新聞』の海外新聞に「人種及其動作を研究する学」を「エスノロジー」とする名称が見られる。この名称から西欧の学問の輸入も試みられていたことがわかるが、当時、この類の報道は猟奇的なものとしかされなかった[145]。しかしながら、日清戦争前後に至り、しかしながら、日清戦争前後に至り、台湾出兵時とは大きく変化することになる。明治初期の多くの日本人にとって、台湾は生活体験と関係していない異国話であったが、日清戦争前後、明治政府は台湾統治の情報収集に尽力し、資源・人口・風俗習慣の調査などの学術研究が多く行われていたため、日清戦争そのものは台湾を近代日本人の日常生活と結びつける契機となった[146]。1896 年、地理学者の小川琢治は『台湾諸島誌』を出版し、この本は「地誌」の形式を取りながら、このほかに交通、産業、住民（民族）構成も記述し、「初の本格的な台湾研究書」とされる。その後、鳥居龍蔵、伊能嘉矩らはかなり専門的人類学調査を行っていたが、その調査も以上の「一連の流れからさほど隔たってはいなかった」と山路は深く指摘している[147]。

以上の台湾原住民への認識に関する歴史的文脈は、「生蕃探検記」の創作のプロセスにおける一つ重要な性質を提示する。即ち、「生蕃探検記」は警察官が持ち帰った「新知識」ではなく、近代日本の既成の「原住民認識」の影響を受け、

---

143 1871 年、琉球王国の首里王府に年貢を納めて帰途についた宮古・八重山の船 4 隻のうち、宮古船の 1 隻が台湾近海で遭難し、漂着した 69 人のうち 3 人が溺死、台湾山中をさまよった生存者のうち 54 名が台湾原住民によって殺害された事件。明治政府は清朝に厳重に抗議したが、原住民は「化外の民」（国家統治の及ばない者）であるという清朝からの返事を受け、1874 年（明治 7 年）に台湾出兵を行った。

144 山路勝彦『台湾の植民地支配―＜無主の野蛮人＞という言説の展開―』日本図書センター、2004 年、16 頁。

145 同上、17 頁。

146 同上、17～18 頁。

147 同上、18 頁。

更に既有の文脈に合わせつつ、読者大衆の認識と合致させた可能性が存在するのである。

三、「生蕃探検記」の諸相：行政文書、植民地主義的な言説と児童・少年文学

「生蕃探検記」はテキストとしての「生産プロセス」に、行政文書、植民地主義的な言説と明治期の児童・少年文学という、三つの性格が生まれてくる。以下はこの三つの性格を論じてみる。

（1）行政文書としての「生蕃探検記」

日本統治初期は治安や交通上の原因で、民間人の台湾旅行が難しい時代である。それに対し、植民地支配の権力を代表する日本人警察官が書いた「生蕃探検記」は、一種の「官製観点」を表現する。この観点を解明するため、まずは探検隊の編成目的を究明しなければならない。

> 明治二十八年二月十九日、朝、雲林を発す（…）是より先き時の雲林民政出張所長松岡長康、他に先だちて生蕃を巡視せんとする志ありしも、事に阻てられてにはかに果すこと能はざりしが、こゝに至りて稍々閑なるを得て初志を遂げんとし、護衛を守備隊に求めたり。守備隊亦地勢偵察の必要もあれば、便ち石川少尉武文に、軍曹三名上等兵以下兵十数名を付して之を遣る。松岡氏に従ふ者は、通譯官、醫士各一名、所員数名、警察署長及ひ巡査三名にして、土人諒（リャン）（何諒とかいひしが姓は忘れたり）を以て副通譯となせり。此外糧食、毛布、蕃人への土産物などを運搬せしむる為め、人夫二名、土人夫三十名を役し同勢總て六十餘名となれり。目的地即ちモリソン山、八通關の方向は、雲林より東南に當れど、蕃地に往かんには林圯埔を經るが順當なるを以て、便ち道を東北に取る[148]。

明治 28 年（1895 年）2 月は日清戦争が進行中であり、また「雲林民政出張所」という官署の名から見ると、明らかに明治 29 年（1896 年）の誤記である。1895 年 5 月 29 日、近衛師団は台湾上陸した。7 月 18 日、内閣総理大臣伊藤博文は「賊徒の掃蕩を為して全臺の治安を将来する」ため、台湾総督樺山資紀に「軍事組織ニ改ムルノ必要ヲを感ス」という電報を発し、総督との合意を得て、民政を停めて軍政を施行した。8 月 6 日、大本営より陸達第 70 号を以て台湾総督府条

148　中島竹窩「生蕃探検記」博文館『太陽』第 2 巻 22 号、1896 年、5410～5411 頁。

例を定め、第 1 条と第 4 条によって「臺灣全島鎮定ニ至ル迄臺灣総督ノ下ニ軍事官衙ヲ組織」し、「民政局長ハ民政ニに関シ適宜ニ課ヲ分チ又民政支部ヲ置キ総督ノの認可を得テ隷属スル人員ヲ配属シ各自担任ノ事務ヲ整理シ其責ニ任セシム」と定めた[149]。

雲林民政出張所とは 1895 年 10 月、府条例に伴う地方制度の改正によって台湾県から転じた台湾民政支部の下に属し、軍事占領地の拡大とともに設置された出張所である。注意が必要なのは、出張所が警察署と併置された点である。10 月 8 日、日令第 13 号「警察署設置及職員命免ノ件」の発令によって、総督の認可を得たうえで、民政局長は「各地樞要ノ場所」に警察署および分署を設置、民政支部に警察分署を統理するため警部長心得を置く権力が与えられた[150]。故に植民地行政は最初から警察と切ってもきれない関係である。11 月 15 日、雲林警察署の設置が認可された[151]。

では、探検隊は如何に編成されたのか。まずは台湾総督府から見れば、雲林地方の「匪擾」は特に激しかったということを認識しなければならない。『台湾総督府警察沿革誌（二)』(以後、『沿革誌（二)』と記述）第四章の「本島治匪始末」には、雲林の状況に独立した一節を割き、北部、中部および南部の「匪情」と並列した。更に『沿革誌（二)』では、「責任者追及の峻厳なりしこと又其の剿滅の容易ならざりこと等雲林の匪徒事件に若くものなし」「従つて雲林匪徒事件の梗概を知れば亦以て領臺当時の匪情の真相を究め得べき感あり」[152]と記されている。

最も興味深いのは、「生蕃探検記」の出張所所長の松岡長康と守備隊少尉の石川文武を、『沿革誌（二)』にも記されていることである。

> （明治二十八年）十月七日斗六占領成りしを以て其月十日所長松岡長康僚属を率ゐて斗六に入り舊縣治を以て出張所に充て地方行政事務を開始し第二師團木庭大尉は一個中隊を以て斗六街を守備したり。是れ実に軍政の下に草創せられたる行政なるが以て当時物情尚危疑に属せしを察すべし。此年歳末より翌二十九年一月の交に至りて雲林の賊魁簡義、他里霧の黄丑、簡大肚等更に各所に蠢動し凶徒を嘯集するあり、守備軍隊之を捜索すれども獲ず。一月一日十川中尉、石川少尉は部兵を以て大坪頂を偵察し夜半山頂に達せしが草屋あれども人影を見ず、因りて火を放ちて之を焚き将に山を下らんとせしに土賊俄かに起ちて囲み攻む。二将部下を督し暗中応戦二時間にして僅か囲

---

149 台湾総督府警務局『台湾総督府警察沿革誌（一)』南天書局、1995 年、15～16 頁。

150 同上、39 頁。

151 同上、42 頁。

152 台湾総督府警務局『台湾総督府警察沿革誌（二)』南天書局、1995 年、430 頁。

を破りて退却し兵一を亡ひ一を傷けたり[153]。

所長の松岡長康の名前が一致するほかに、中島は「生蕃探検記」の付記に「雲林とは舊の県名にして一市街の名にあらず、此地実は斗六街と称すれども、…守備隊を置き民政出張所等を設くる[154]」と記している。これによって「生蕃探検記」の松岡所長は実在人物だと確認できる。

一方、『沿革誌（二）』は石川少尉の名前を明記していないが、中島は「生蕃探検記」で、「大秤頂は、屢々新聞紙上にも見えたる如く、賊の拠りて匪を逞ふする処にして、此旅行前に於ても、本文に掲けし石川少尉が討伐の命を受けて其巣窟を焼夷せしも、賊四散深く林中に入りて悉く獲る所と為らず、此頃は猶処々に潜伏して害を為す無きを保し難き情況なりしを以て土人は甚く之れを恐れ居たり[155]」と記している。ここから石川文武少尉は『沿革誌（二）』の「石川少尉」と同一人物だと断定できる。

それでは、石川少尉は探検隊にどのような存在であるか。『沿革誌（一）』によると、陸軍省は軍政実施前後に台湾憲兵隊の組織を定め、第 1 区隊を彰化に、第 2 区隊を台北に、第 3 区隊を台南に配置した。彰化以南は未平定で第 1 区隊を南進軍に属し、一地を占領するたびに憲兵を配置し、一街庄一部落を平定すると行政官署を設置し、漸次に拡充し、憲兵の増員とともに鳳山に第 4 区隊を設置した。当時、台湾全島には 4 個区隊の下に 16 個分隊を配置し、総員 3 千 4 百名に及んだ[156]。見る限りの資料では、石川少尉がどの区隊に属するかは確認できないが、少尉は区隊の分隊長に相当する官職であり、一つの分隊は 50～80 余名の隊員を有することがわかる[157]。「生蕃探検記」の記述と合わせて考えれば、石川少尉、軍曹 3 名と兵士 10 数名を探検隊に付した当局は、探検隊の活動を十分に重視するのであろう。

探検隊員の中で、ここで興味を惹かれるのはやはり作者本人であろう。『台湾総督府文書』第 3 巻「雲林出張所処務細則」の「属務仮規則」によると、所内に「庶務会計ノ二掛ヲ置」き、庶務掛は「会計事務ヲ除キ所中一般ノ事務ヲ掌」し、会計掛は「会計用度給無等ノ事ヲ掌」すとあり、雇員の立花司馬と中島龍郷を庶

153　同上、431 頁。

154　前掲「生蕃探検記」『太陽』第 2 巻 22 号、5410 頁。

155　同上、5414 頁。

156　前掲書『台湾総督府警察沿革誌（一）』、53 頁。

157　田崎治久編著『日本之憲兵　正・続』三一書房、1971 年、144～147 頁。

務と会計の係長に任命した[158]。この中島龍郷（なかじまりゅうごう）は作者である可能性が高いと考えられる。

探検隊はどのような情勢で出発したのか。『沿革誌（一）』によれば、1896 年 2 月中旬は「守備隊行政庁員警察官相共に管内銃器弾薬の押収、戸口の調査を行ふにおよび、流言百出民心疑懼し、殊に山地一帯各堡に於ては屢々銃声抵抗の厄に逢ひしも各員百難を排して僅かに調査を了せし[159]」という万難な時期である。なぜこのような時期に「百難を排して」まで「生蕃地」を探検する必要があったのか。その理由として、「生蕃探検記」に明記されている「所長の初志」および「守備隊の地勢偵察の必要」のほかに、平地は既に圧制され、出張所の管轄状態に入ったことから、中島の記述のように「稍々閑なるを得て」、山地に手を出す余裕があったのである。

また、軍政においても、当時の地方官庁は総督府に行政事務報告を提出する義務がある。1895 年 8 月、樺山総督は内訓の第 2 号を発し、地方行政および部内の状況について前月分を翌月の 5 日限り報告すべし、但し重要な事件は随時報告すべきだと命令した。9 月 4 日、民政局長は報告の項目について、機密報内則という通達を各地方官に発した。内則の第 3 条には、「機密報ハ知事、支部長、支庁長、出張所長ニ於テ其部下吏員中信認スル人物ヲ特選シ其事務ヲ取扱ハシムルコトヲ得ヘシ」、第 5 条「月報ニ記載スヘキ事項」では、「生蕃人ノ出没暴行其他風俗人情ニ就キ施政上参考トナルヘキ事項及接遇ノ方法」と記された。さらに、樺山は清朝の「蕃地」地図の複製という指示を下した[160]。事実、1896 年 4 月 14 日に、雲林出張所は「所長管内巡視報告」を総督府に発した。報告の内容については後述させるが、「生蕃探検記」はこの報告を元に生まれたものだという点を、先に言っておきたい。

なお、探検隊の活動は当時の「理蕃」方針にも関わる。樺山は「本島ヲ拓殖セントセバ必ズ先ヅ生蕃ヲ馴服セシメザルベカラズ[161]」と指示し、更に「今ヤ実ニ其ノ時機ニ際会セリ若シ夫レ生蕃ヲシテ本邦人ヲ視ルコト猶支那人ノ如クナラシメンカ本島拓殖ノ業ハ大ナル障碍ヲ被ランコト[162]」と明言した。つまり、樺山は台湾の漢民族と原住民の民族的矛盾を確実に意識したうえで、前車の覆轍を

158　台湾国史館台湾文献館「台湾総督府公文類纂数位化檔案資料庫 (http://ds2.th.gov.tw/)キーワード：「雲林出張所處務細則」。

159　前掲書『台湾総督府警察沿革誌（二）』、431 頁。

160　臺灣総督府警察本署『理蕃誌稿　第一巻』青史社、1989 年、2 頁。

161　同上。

162　同上、29 頁。

踏まないように総督以下の植民地官吏の全体に注意した。原住民に関する情報の収集は極めて重要であるため、探検隊の活動はその一環だと考えられる。

要するに、探検隊の編成や活動は所長個人の志望、軍事上の必要によるもののみならず、総督府の行政や理蕃方針とも合致した。警察官の行政文書を元に、日記の形を取って書かれた「生蕃探検記」は、読者に一種の共時感と信憑性を与える。近代国家の権力や文明を象徴する植民地官僚の目を通して、読者は「蕃地」を「探検」できる。

（2）植民地主義的な言説としての「生蕃探検記」

『太陽』の地理記事としての「生蕃探検記」は、当時の植民地主義的なまなざしを表現するものでもある。近代文学研究者の日比嘉高は、『太陽』とその地理欄について、以下のような意見を述べている。『太陽』は『日清戦争実記』の成功を踏襲しており、その特徴は写真銅版の本格的な導入である。太陽の第 1 から 3 巻まで概観してみると、人物・風景・軍事関連の写真が多く、イタリアとシベリアを例に見れば、欧米地域の風景写真は「文明国」の風景として掲載される一方、欧米以外の地域を映す風景写真は「土人風俗」という形で、「研究対象」として提示される傾向がある。外国風景の写真は地理欄と連動するものが多く、その趣意の要点は「『坐して万里を遊ばしむ』の部分」にあり、読者たちは「坐して」読むままに、写真を通して旅行者の眼前の風景を見ることができる。このような地理欄の挿絵写真を通して固定化されたイメージは、「文明」の欧米諸国の「先進性」とアジア・中東・東欧の「風俗」であり、そこには「人類学的な縁取り」が介在していた。なぜなら、当時の人類学は西欧の植民地主義的なまなざしと不可分で、最新の「学知」で世界の「人民」の「開化の度」を測り、「文明序列」を作る作業を行い、写真そのものは「誕生と同時にこの序列化するまなざしの構築作業のなかへ巻き込まれた」からである[163]。

一方、創刊期『太陽』における「日本風景の挿画写真」は「机上旅行的なもの」「旅行案内的なもの」「報道的なもの」の三種類に分けられている。探検記タイプの記事は「机上旅行的なもの」の一種として、「地理学という学術的な形を借りながら」「領土拡張的な言説と相同的な構図を保持している」ものである。この類の記事は、本土で「行政システムの及ばない地域をその版図へと取り込もうとする」ものであるが、「この図式を海外へずらせば、そのまま植民地主義的なものに成易い」だと言われる。直接関連する写真が掲載されることがなくても、

[163] 日比嘉高「創刊期『太陽』の挿絵写真」筑波大学文化批評研究会編『植民地主義とアジアの表象』同研究会、1999 年、64～72 頁。

その代わりに挿絵に載る「生蕃探検記」は「その典型的なもの」である[164]。

日比の指摘したように、警察官の目を通して成された「生蕃探検記」には、植民地主義的な視線が含まれる。この点はテキストからも検証できる。

> 其我に対し土人即支那人に対する感情は猶他蕃の如く、彼には甚だ悪きも我には大に悦服の状あり、其我に然る所以のものは、蓋し彼が深仇たる支那人を征せるを快とすると、我威武の甚だ熾にしてしかも寛裕なるを慕ふと、屢々我大官人の前に飲食して、等しく日本人と称せらるを栄とし、甚だ之を悦べるとによるものならん。然れとも後來之を統治するの難きは、彼のアイノ（ママ）を御するが如きの比に非ざるべし。たゞ此見物記は、単に見物の実況を述ぶるに止まるを以て、其之に対する意見の如きは今敢て言はず[165]。

「生蕃探検記」は回想録の形を取り、時系列に従って探検の経緯を述べた見物記である。この見物記は探検経緯の概要、「蕃地」の分類や「蕃社」の名を略述し、台湾の漢民族と原住民の関係にも注目している。ここでは植民地官僚と作家の相違がよく見える。台湾山地と原住民を「見物」「見学」するうちに、植民地官僚の脳裏には、植民地支配の推進が最優先だという潜在意識がある。また、「蕃人」と「支那人」の関係、「アイノ」（アイヌの誤字）との対比には、近代日本の「文明序列の優越感」や「統治者の目線」が読み取れる。

（３）児童・少年文学としての「生蕃探検記」

「生蕃探検記」は連載完結後の翌年即ち 1897 年の 2 月に、『臺灣生蕃探検記』という題名で、博文館の「少年叢書」第 4 編として出版された。「生蕃探検記」は『太陽』の地理記事、警察官の行政文書であるほかに、明治期の児童・少年文学の一部ともなった。

明治初期の児童雑誌は、1888 年 11 月に創刊された『少年園』を先駆として相次いで現われ、その現象の背景に 1890 年の「教育勅語」の発布に象徴される「教育制度の確立・普及、資本主義的経営と購買層の出現という経済的基盤が成立した時代の状況」がある[166]。『臺灣生蕃探検記』を収めた少年叢書は全 10 編である。博文館の広告によると、天真爛漫、活発、敏捷、進取は「少年の

164　同上、75 頁。

165　中島竹窩「生蕃探検記」博文館『太陽』第 2 巻 21 号、1896 年、5410 頁。

166　金成妍『越境する文学―朝鮮児童文学の生成と日本児童文学者による口演童話活動』花書院、2010 年、4 頁。

特性」であり、未来の大臣、大富豪も「此中より生ず」、「此等大有為の少年」の「智識、勇氣、學問、徳性を涵養する為めに」、少年叢書は毎月 2 回に発行し、「人物傳、冒険談、作文書、理科譚、歴史話、紀行類、凡そ、少年の良友たるべき珍書は、収めて皆此中に在り[167]」とある。少年叢書の総題目を見れば、人物伝のほかに科学、軍事、探検に関わるものが多く、即ち近代の学問に関するテーマを多く取り入れたものであることがわかる[168]。

「生蕃探検記」をもとに出版された『臺灣生蕃探検記』はこの「少年叢書」における冒険談・紀行類の一冊である。明治初期には、翻訳物の隆盛とともに、外来の冒険・探検小説も続出した。特に 1896 年の森田思軒の名訳『十五少年』[169]は代表作とされ、冒険小説のブームを引き起こした。その翌年に出版された『臺灣生蕃探検記』は「国産冒険小説」とも言え、博文館がそのブームの機先を制したい作品であろう。

以上の述べてきたように、「生蕃探検記」は元来植民地官僚の行政文書を元に書かれたものであるが、雑誌『太陽』での連載、少年叢書としての出版という「生産プロセス」を経て、植民地主義的な言説や児童・少年文学という性格も具わるようになった。

四、「帝国の視線」における植民地住民

前述とおり、「生蕃探検記」は一種の官製観点を表現し、植民地主義的な視線が含まれる。こういう意味で、近代日本の「帝国の視線」を表現するとも言える。ならば、その視線に置かれた植民地住民は如何に表象されるのか。

中島は「生蕃探検記」に活動の範囲を、次のように明記している。

> 台湾の蕃地は之を大別して南北の二とし、或は東西南北の四とす。余が至りしは則ち南蕃の中にして、又は西蕃と称せらるゝ所の一部なり。西蕃とは埔里社の南方より、モリソン山脈を以て東蕃を畫り、南、八通關に至る地域内に棲む各蕃の総稱なり。（…）又此阿里山とは或る一大山、一峻嶺を指すに

167　依田學海『英武蒙求』博文館、1897 年、2 頁。

168　『英武蒙求』と『加藤清正』などの人物伝記のほかに、『科学雑談』、『臺灣生蕃「生蕃探検記」』、『洋学大家列伝』、『陸海軍人生活』、『少年遠征：萬有探検』などがある。

169　ジュール・ヴェルヌが 1888 年に発表した少年向けの冒険小説で、無人島に漂流した少年達が力を合わせて生活していく物語を描いている。最初は巖谷小波を主筆として 1895 年 1 月に創刊された『少年世界』の小説欄に連載された。完結後、読者の要求に応じて首尾一冊に纏めた。

はあらす、多くの山の總名にして、其中に知母勞、達邦、全仔、鹿株の四大社と二十三の小社とあり（…）余今知母勞に棲む[170]」。

探検隊が訪れたのはツオ族であり、現在の嘉義県阿里山郷（知母勞、達邦、全仔）および南投県信義郷（鹿株）という所である。この地域の特徴を言えば、人口が最も多く、しかも物質的に最も発達していた鹿株大社は、その後、総督府に移住させられるツオ族の旧敵であるブヌン族の侵攻によって衰亡の道を歩んだということである。

探検隊は「蕃地」に入る前、漢民族が居住した平地を経過した。

此村端に一の小祠あり、余等の過ぐるを見て、一人の翁手に香を捧げて出で、恭しく禮を為して祠を指し『日本鄭国姓爺々々々々々々』と呼ふ、其様一拜を求むるものゝ如し、因りて祠内に進めば衣冠儼然たる三體の偶像あり、丈各一尺八九寸許り、正面なるは成功にして左なるは芝龍右なるは成功の母なるべし、後ろには例の賛辭を書せる紅紙を貼し、前には香爐を供へあり[171]。

鄭功成鄭庄内林

探検隊は「日本国姓爺」と呼ぶ一人の翁と出会った。周知のように、「国姓爺」とは鄭成功であり、その母は日本人である。しかし、1890年代の台湾人と日本人の「国姓爺認識」は同じであることが想像に難い。東洋史学者の石原道博によれば、日本で鄭成功が関心をひいた時期は歴史的に見れば三度ある。一度目は1715年で近松門左衛門の傑作『国姓爺合戦』が上演された前後であり、その登場人物、地名などは架空のものもあり、もとより史実とも大きな隔たりがあるが、それをきっかけとして鄭成功に取材する作品が続出し、注目を受けた[172]。二度目は1894～1895年の日清戦争前後である。日本の台湾領有とともに、鄭成功へ関心は一層深まり、文学上はもとより、政治上・経済上の観点さらに学術的な研究も現われた[173]。石原は丸山正彦

170 前掲「生蕃探検記」『太陽』第2巻第22号、5409～5410頁。

171 前掲「生蕃探検記」『太陽』第2巻第21号、5412～5413頁。

172 石原道博『国姓爺』吉川弘文館、1959年、87～89頁。

173 同上、91頁。

『台湾開創鄭成功』（嵩山房、1895 年）を例に挙げた。丸山は序文で「将軍が終焉の地たる台湾は、其の生国大日本帝国の版図に帰し、匪徒鎮定の期漸く近づきね」「将軍の霊魂はいか嬉しみ天翔り国翔りつゝ、大君の高き御威稜を仰ぐらむ」と記し、石原はそれに対して「そのころから鄭成功個人の伝記的関心から一歩前進して、鄭氏の台湾経営も注目されるようになった」と指摘した[174]。一方、清朝は鄭成功への賞揚を漢民族統治の懐柔策とし、1700 年、清聖祖は鄭成功を故郷の福建省南安県に帰葬することを許可し、1784 年、清穆宗は台南に鄭成功廟を建て、「忠節」とおくりなし、後の開山神社であり、今日の延平郡王祠である[175]。

いわゆる「国姓爺認識」は日本で歴史的・文学的・芸術的文脈に存在しており、日本の台湾領有とともにきた政治上の需要に合わせて変えられたのに対し、台湾では清朝の政治上の理由で転換された。両方の政治目的は明らかに異なっている。日本における「生を神州（＝日本）にうけて、義を西土（＝中国）にあらわす」という鄭成功に対する親近感と、台湾における「忠節」の「延平郡王」というイメージは明らかに別論である。

もちろん中島の話は全くの虚言だとは思わないが、若干「手入れ」したものであろう。この「手入れ」にはおそらく政治的意図が含まれている。即ち、国姓爺・鄭成功の「日漢混血児」の身分を借りて、帝国日本と植民地台湾の「一体感」を作ろうとし、その潜在的意味は満洲民族の清朝を排除しようとするのではないかと考えられる。この「一体感」はもちろん、読者に用意しておいたものであろう。探検隊一行が「日本国姓爺」に焼香すると、翁は大いに喜び、「鄭氏の後」と自称し、自家に来て「一碗の茶」でも飲もうと、探検隊員を再三に誘った。この翁は、近代の日本人と台湾漢民族を親しくさせるために、造形された人物ではないかと考えられる。

> 此蕃人等を見るに、色黒くして骨格逞しく、髪は生ふるがまゝの散髪にして、長きは肩に垂るゝものあり。いづれも固き革のチヤンくコの如きものを着て、胸邊と腹部とに革またはズツク様のものにて作れる袋を、背ろは襷にして腹掛の如くに掛け、革又は竹、籐などにて造れる巾二寸餘の帯を以て腹を厳しく締め、褌は無くて一枚革の巾一尺ばかり、長さ膝に及ばざるを前に下げたり。憩む時にはところを選まず臀をつけば、屈めば土だらけのがブラくと後ろより見ゆ。…行厨を開いて昼餐し、残飯を藩人に與ふれば、彼喜びて之を食せり。さても蕃人の無邪気さよ、林圮埔より此處までの間は、彼甚だ親しまざる色ありしに、残飯を與へしよりは忽ち馴れて、其十四五の小兒の如き

---

174 同上、93～94 頁。

175 同上、98 頁。

は、所員が之に戯るれば、嬉々として追随せり[176]。

ふ迎を行一人蕃てに街々集

「此蕃人等」とは、「日本大人」の来遊を迎えるため、昨夜からこの地に來て一宿し、「嚮道たらしむ」者である。色黒い、散髪、無邪気、十四五の小児の如きなどは、「蕃人」に対する中島の第一印象である。事実、このような描写は日本統治期の記録によく現われる。

山路の指摘によれば、琉球漂流民殺害事件以来の、台湾原住民に対する近代日本人の恐怖感は台湾統治の展開とともに変化を生じ、大正から昭和にかけて、植民地官僚は実際に原住民と接触してみると、「純真無垢」で「可愛い奴」という異なる側面を見えてきて、「子ども」というレトリックでも使われるようになったことは、植民地官僚の「意識構造を端的に物語っている」[177]。彼らの記述からみると、この比喩は原住民の学童のみならず、若者一般さらに原住民全体にも適用されていたことがわかり、それは植民地体制を維持するために、「こうした虚構の世界を築くことが必要であった」と山路は評した[178]。

例えば、総督府の林業士・賀田直治は 1914 年に、タイヤル族について「其の無邪気なる態度に至っては到底縷々各種の報告に見る[179]」と記した。山路によれば、その頃は台湾統治が始まって以来 20 年も経ち、「理蕃」方針が「討伐」から「撫育」へ転換しようとする時期であるため、賀田の発言は「時代的優位性を背景とした植民地官吏の自信」を表現し、しかもこの種の発言はそれ以降、繰り返しに現われ、この類の認識も植民地官僚の最上層まで定着していった[180]。

中島の記述は正に「子ども」レトリックの先駆ではないかと考えられる。「異様な形姿を持つ無邪気な小児」は、植民地官僚の中でも最も早く原住民と接触した探検隊員の心情である。ただし、原住民が「子供」ならば、それと相対する植民地官僚は間違いなく「大人」であろう。ここに読み取れる「親子関係」は近代日本の台湾原住民に対する支配論理と言える。特に、1930 年の霧社事件の後、

---

176 前掲「生蕃探検記」『太陽』第 2 巻第 21 号、5416 頁。

177 前掲書『台湾の植民地支配―＜無主の野蛮人＞という言説の展開―』、94 頁。

178 同上。

179 賀田直治『台湾中央山脈横断記』東京拓殖新報社、1914 年、97 頁。

180 前掲書『台湾の植民地支配―＜無主の野蛮人＞という言説の展開―』、101 頁。

台湾総督府は「理蕃大綱」の発表で植民地体制の前進を求め、「事あるたびに親子の比喩で自他の関係を説き明かす」と山路は評した[181]。

五、「和人」との対照：非人間化された「生蕃」

探検隊一行は「蕃地」に入ったとともに、中島は「生蕃」の様相を記録し始めた。その記録の基調は要するに、他者の原住民を「和人」（＝近代日本人）の対照とし、「文明人の和人」を反省することや、「和人」を人間の「基準」とし、原住民を「非人間化」にすることを通して、「和人の優越性」を立証する意図である。以下はテキストの検証を通して説明する。

（一）「人食い」

まだ何か袋の底にあるやうなれば見んとせしに、蕃人は頗る之を忌む色あり、さりとて強くも止めざれば、余は解せざる為して掻き探ぐるに、…物は二個にて手觸りにては、…驚く勿れこれ二個の髑髏なり。…悉くサレて白骨のみとなれるが、頭蓋には皮猶ほブラくになりて附着、髪もところぐに残れり。後に「何故頭髪のみを残せしか、或は飾りにもか」と問ひしに、彼れは平然として「ナーニ飾りでも何でもなし、肉のあるところは食ひたるが、頭には肉がなきから」と、余等聞いて惘然たるもの久し。…去りながら首は決してこれのみならず…一行の至ると聞きて早くも何れへか仕舞隠し、たゞ此處のをのみ取り忘れたるや疑ひなし。そは社丁等が口うらにて察されたり[182]。

（二）「自然純良の風」

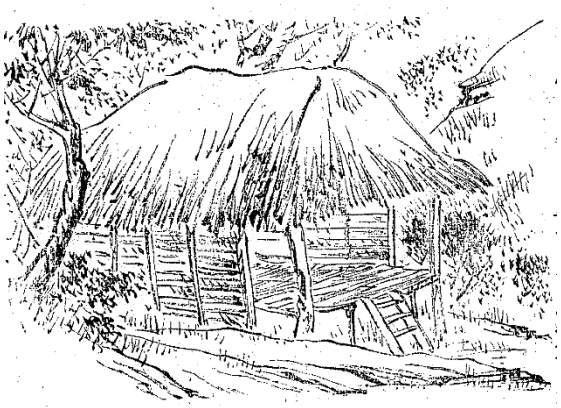
そこで結婚はいかにするかといふに、…私通は勿論厳禁にて、出来合夫婦などゝといふことは容さるべくもあらねば、必ず夫々習慣の手続を履まざるべからず、…婿の方より彼橋渡しの媒酌のやうな者と共に一家打揃つて嫁の方に出掛くれば、嫁の方にても叔伯父母などを呼び寄せありて、こゝに見合と婚禮とを兼たる如き宴会となる。…もし何方にても面白からず嫌だと思へば其席にて判然と断り、宴会はたゞ酒を飲み合ひしだけに流れて、嫌はれたりとて後に遺恨をとゞむる等のことなく、…此承知不承知に就ては親族は勿論親々といへども決して干渉を試むるを得す。どこまでも當人の心に一任して

181　同上、97 頁。

182　中島竹窩「生蕃探検記」博文館『太陽』第 2 巻第 24 号、1896 年、6212 頁。

…「…離縁をする場合に立至らば如何にするか、たゞ追ひ出してしまふまでにや」と問ひしに、彼は艴然として「世にも意外なることを聞かるゝ人かな、素より互ひに思ひ思はれて貰ひ貰はれたる間なれば、風波などの起るべき道理は無きにあらずや、されど萬々が一姦通にてもなしたらんには、両人ともに斬つて捨てんのみ、其外離縁などゝいふ悖天の所業あるべくもあらず、況して追出すなどゝは以の外不思議の沙汰なり、我社は先祖代々決してさること無し」との答に、余は蕃人と侮り、自然純良の風は却つてかゝるところに存するを思はず、無法の問を発せしを悔ひ今に至るも之を忘るゝこと能はず[183]。

探検隊は「蕃社」に入り、「蕃社」の集会場[184]に宿舎を設けた。隊員たちは集会場で吊り下げられた袋に、「二個の髑髏」を発見して驚いた。中島はその集会場は何のために設置されるのかと聞くと、男が一度に家を出たら、配偶者を得るまで家に帰ることは禁じられるため、集会場は「第一は獨身者の為」に設けられたものであるという答えを得る。そして、隊員たちは結婚の風俗を話すと、「生蕃」の「自然純良の風」に驚嘆する。


所會集の人蕃

この二節には、野蛮な「人食い」と自自然純良な「自由人」という正反対の「生蕃像」が読み取れるが、いずれも虚構されたものである。

前述のとおり、探検隊一行が訪れたのはツォ族である。ツォ族は確かに首狩りの慣習があったが、「人食い」の風俗はツォ族だけではなく、原住民全体でも実証する例は現時点でない。却って漢民族には、原住民の肉を食うと首狩りの対象にされないという「食蕃膏」の迷信があった[185]。また、ツォ族は「首狩り」という儀式の流れに袋が使われたことはない。一般的には、集会場で首を竹竿に挿して、「敵首祭」を行ってから「敵首籠」に置いた[186]。

183　同上、6212～6213 頁。

184 ツォ族の男子集会場。「庫巴（Kuba)」と呼ばれ、ツォ族の政治、宗教、経済と文化の中心地と言える。

185　例えば、片岡巖『台湾風俗誌』(眾文圖書公司、1990 年)にもこのような記載がある。

186　詳細は台湾省文献委員会『台湾省通志 45　巻八同胄志中』の「第六冊・曹族篇」（衆文図書、1980 年、37～39 頁）参照。

なお、「何者の首なりや」、「支那人の首は無きや」など中島の問い詰めに対し、「蕃人」は「人を殺すことは咄したくなし」と答えているが、首狩りは原住民の信仰体系や伝統慣習に重要な位置をつけているため、「人を殺すこと」と同論ではない。探検隊の訪問したころ、ツォ族はまだ近代文明の洗礼を受けておらず、探検隊一行の到来と聞いたために、首を隠すかどうかということも疑問になる。

他方、「純良自然の風」という描写も興味深い。ツォ族学者の浦忠成の指摘によると、ツォ族は一夫一婦制の民族であり、結婚は当事者だけではなく、双方家族にとっての一大事でもあるため、婚姻の主導権は氏族の長老と男女双方の両親にある[187]。換言すれば、「生蕃探検記」の言われるような「見合と婚礼を兼ねる宴会」「親戚は干渉せず」「当人の心に一任すること」などはないのであろう。

ツォ族の結婚式の流れは以下のようである。男方は仲人を頼んで女方に縁談し、肯諾を得ると黒い布を聘礼として送る。両方の家族は米酒、米糕を作り、男の両親と兄弟が酒を持って女の家に行き、新婦の両親と共に酒を飲んでから新婦を家に連れて行く。家に着くと、仲人は新郎新婦の間に座り、糯米の飯を手で持って二人に共食させ、二人を祝福し、同族の成員を招き、披露宴を開く[188]。ツォ族は婚姻関係を非常に尊重するため、どちらかが死亡した場合のほかに、必ず婚約を履行する。姦通の場合では男の方が長老に籐の杖で打たれ、女の方が自分の兄弟の手で同じ刑を処されるが、離縁しないことが多かった。ただし、離縁する（ツォ族語で jupa-motshi）場合は婚約・婚姻関係の解消とともに、女の方は実家に戻すことが一般的である[189]。つまり、「生蕃探検記」に言われるように「決してさること無し」ではない。

山路の指摘したように、近代日本の異族観は「野蛮性を過度に強調する混沌無知な存在」と「近代が失った清らかな性格を持つ純真無垢な人間」という、二つの見方の間に揺れ動いていた[190]。すると、「生蕃探検記」はこの異族観の両面性と合致し、その対比を最大限に強化した記述であろう。全くの「作り話」とは言えないが、恐らく「日本国姓爺」と同じように、中島は事実に「手入れ」をして物語った。

この「手入れ」の話に基づいて、中島は更に「世の學者紳士間に於て、黄白の為に妻子を賣り、或は一旦約して又忽ち之を破り、子女を強て無節無操人として世に立つを得ざるの域に沈淪せしむる者あり、人生蕃を以て禽獣に近しとなさ

---

187 巴蘇亞·博伊哲努『台湾鄒族的風土神話』台原出版社、1993 年、87 頁。

188 同上。

189 王嵩山『阿里山鄒族的社會與宗教生活』稲郷出版社、1995 年、38～39 頁。

190 前掲書『台湾の植民地支配―＜無主の野蛮人＞という言説の展開―』、83 頁。

ば、彼等は則ち禽獣にも劣るものなり[191]」と深く嘆いた。この感嘆は 17 世紀以降のヨーロッパにおける「善き野蛮人」「高貴な野蛮人」という思想的文脈と相通しているものである。つまり、「近代の文明国」の統治者は、近代文明の「悪影響」を受けていない「野蛮人」を対照として、自身を反省・批判する言説である。

（三）「人間の為し得べき業」

小僧は反て木よりも下に立ち、括りたる蔓の輪を額に當て又後さまに之を握り。ヤと聲かけて引くと〻もに木よりも先きに疾風の如く馳せ降れり。アヽこれ人間の為し得べき業か、余等呆れて口アングリ[192]。

（四）「此不自由なる境界」

米の飯は矢張不斷に食ひ居るものと思ふべけれども、…此地には米は實に陸稲の少許を産するに過ぎず、…されば米のみの飯を食ふは彼等に取りては非常の榮耀なりと知るべし、之を無智なり蒙昧なりとして悪しく言はゞそれまでなれども、同じ人類として此不自由なる境界に居るを思はゞ寧愍むべきものにあらずや[193]。

中島の記述には、もう一つの強烈な対比が見られる。原住民の少年は驚異的な身体能力を持つが、「生蕃」の一族は「無智蒙昧」で水稲の栽培すら知らない「不自由なる境界」にいる。ここでは米食を「自由か不自由」の判断基準とする。

191　前掲「生蕃探検記」『太陽』第 2 巻第 24 号、6214 頁。

192　同上、6218～6219 頁。

193　同上、6219～6220 頁。

実は米食は日本においても明治期の一大発展である。明治日本が成立する頃、米食は決して日常的なものではなかった。明治維新以降、1880 年代から 1920 年代にかけて米食文化は大きく前進した。1900 年の産業革命を皮切りにして、工業化が進むとともに人口の増大や生活水準の向上によって、米の消費が拡大し、米価を高値にして米作が長期的に拡大していったというのは第一の要因となり、1881 年前後、農商務省が設立され、「明治農法」という改良的農業技術の普及は第二の要因である[194]。とはいえ、米の生産力は消費に及ばなかったため、1890 年、日本国内は凶作で米価が暴騰した。日本国内の需要に合わせるため、90 年以降は朝鮮米、95 年以降は台湾米も輸入し、逆に植民地に依存するようになった[195]。中島は「生蕃」が「此不自由なる境界」にいると嘆いたが、明治日本においては、米食の生産力も文化も形成したばかりのではないか。

圖の事食蕃生

以上の述べてきたように、「人食い」「自然純良の風」「疾風の如く」「不自由なる境界」などの描写を通してなされたのは、一種の「非人間化」の台湾原住民像である。つまり、人を食うが崇高な道徳観を持つ、驚異な身体能力を有するが生産力が低い「人々」である。注意が必要なのは、「人間」を判断する基準は「和人」（＝近代日本人）を標準に想定したものという点である。

周知のように、近代日本の「他者」とは西洋（主には欧米）と植民地である。社会学者の小熊英二が指摘したように、「近代文明をとりいれた植民帝国でもある『日本』は、『欧米』＝文明＝白人＝支配者、『アジア』＝野蛮＝有色人＝被支配者という世界観が支配的だった当時において、きわめて微妙かつ両義的な位置を占める[196]」のである。原住民を「非人間化」にするのは、ただの「日本型のオリエンタリズム」だけではない。最も重要なのは、台湾原住民との対照・差異を通して、「両義的な位置を占める」近代日本の優越性を顕著化させ、「東洋の支配者」としての自信を樹立させる意図である。

六、おわりに

194　大豆生田稔『お米と食の近代史』吉川弘文館、2007 年、15～17 頁。

195　同上、27～30 頁。

196　小熊英二『〈日本人〉の境界：沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮植民地支配から復帰運動まで』新曜社、1998 年、8 頁。

前述したように、「生蕃探検記」は地方官庁の行政文書を元に書かれたものである。そのため、最後は行政文書と文学の間に存在している「虚実像」を考えてみたい。

> 「臺灣は日本の領土に帰し、爾等も日本の臣民となりたれは…」…彼等は欣然として…「同等日本々々々々」と連呼し、手を舞はし、足を躍らし、悦び禁じ得ざるものゝ如くなりき。…其支那人を一撃の下に打破せし日本大人が、自ら来たりて綏撫せらるゝのみならず、今より自分等も支那人より一層エラく強き日本人となりたりと聞きたることなれば、…不勝の喜び胸に溢れしも無理ならねことゝ思はれたり[197]。

「生蕃探検記」の結末に、「生蕃」は降伏して「日本人」となった。しかし、報告書を見ると、「生蕃探検記」の内容とは大きく趣が異なる。『台湾総督府文書』第15巻「雲林出張所長管内巡視報告」によれば、探検隊の活動期間は2月20日から3月1日までである。報告文は探検隊の編成のほか、主に水利開発、郷紳会見、撫民懇諭および地理・地形を記した千字余りのものである。報告書における最も興味深いのは、「一帯各庄未ダ日本人ヲ見ズ驚キ惧レテ避匿シ遠ク我一行ヲ覗ク」と記されるところである[198]。つまり、探検隊が植民地を覗いたと同時に、植民地の住民からも覗かれている。

原住民に関しては、主にツォ族の集会場の様子を描き、「生蕃」に対する描写は「性尤モ剽悍常ニ鳥獣ヲ捕獲スルヲ生業トス常食ハ薯蕷黄粟裨等ナリ」としかないのである[199]。「生蕃探検記」の「降伏」場面に関する描写を、報告書では「東社は順民楠社は剽悍東社ハ常ニ楠社ノ掠奪殺戮ヲ患フト即チ両社ノ蕃人ヲ集メテ大ニ懇諭スル」と記されている[200]。つまり、報告書から見ると、探検隊が「蕃人」を集める目的は後の植民地支配を推進するため、あらかじめに紛争を排除することにある。しかし、「生蕃探検記」においては、近代日本の「帝国の拡張」という想像に合わせて、「降伏の非人間」という原住民像を創出した。ここでは行政文書と文学の「距離」が見えると同時に、先頭に立って台湾原住民と付き合う日本人警察官は、帝国の新領土を宣伝するため、かなりの創作力を有する作家でもあったという事実を読み取れる。

197　中島竹窩「生蕃探検記」博文館『太陽』第2巻第25号、1896年、6214頁。

198　台湾国史館台湾文献館「台湾総督府公文類纂数位化檔案資料」(http://ds2.th.gov.tw/)キーワード：「雲林出張所長管巡視報告」。

199　同上。

200　同上。

「生蕃探検記」は台湾原住民に関する最も早い記述として、植民地官僚の行政文書を元に書かれ、『太陽』の地理記事欄に連載された「机上旅行もの」であり、さらに明治期の児童・少年文学の一部ともなった。中島は「生蕃探検記」に漢民族と原住民の表象を創出することによって、植民地台湾を帝国日本と連結させ、更に「非人間化」された原住民像を通して、近代日本の自信を確立しようとしたのである。

第二節　二項対立に関する思考の提起――宇野浩二

一、はじめに

社会学者の小熊英二は日本の植民地支配およびそれに関する二元論を脱構築化するために、近代日本と植民地の内部におけるそれぞれの多様性、そして第三項の「欧米」の存在への意識を提唱する[201]。小熊の指摘は正しいが、日本人作家による植民地台湾関連の作品では、基本的に「欧米」が抜きにされている。その代わりに、日本を「文明」側の唯一の代表として登場させた。一方、「文明」側の対面に立つのは、「野蛮」側を代弁させられる台湾原住民である。事実、台湾領有とそれに付随してきた台湾原住民への研究を通して、日本における近代的人類学・民族学が成立した。近代日本の言説において、台湾原住民＝「生蕃」（つまり「野蛮人」）という印象は繰り返し用いられ、近代日本人の通念として定着してきた。一方で原住民側を「野蛮」と位置づけ、日本側をその対極の「文明」と定位した。

台湾文学研究における先駆的研究者である河原功によれば、宇野浩二の「揺籃の唄の思ひ出」（1915 年、以下は「揺籃の唄」と略す）は日本人作家による台湾原住民に関連する最初の作品である[202]。即ち日本の植民地支配が展開されてから 20 年が過ぎて、ようやく現われたことになる[203]。とはいえ、宇野本人は台湾を

201　小熊英二『<日本人>の境界――沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮：植民地支配から復帰運動まで』新曜社、1998 年、8 頁。「『欧米』＝文明＝白人＝支配者、『アジア』＝野蛮＝有色人＝被支配者という世界観が支配的だった当時において」、近代日本は「きわめて微妙かつ両義的な位置を占めることになった」と指摘している。

202　河原功『台湾新文学運動の展開―日本文学との接点―』研文出版、1997 年、69 頁。河原功は「日本文学に現われた霧社蜂起事件」で、「揺籃の唄の思ひ出」を「私の知るところの高山族を扱った文学作品」の第一作とした。高山族とは台湾原住民を指す言葉である。1980 年代中頃の「台湾原住民正名運動」という社会運動を経て、法的には 1994 年に「台湾原住民」を正式の称呼とした。

203 その原因は、1910 年代は植民地政権により治安の安定を確立、日台間と台湾本島の交通制度や緒機関が成立した時期だと考えられる。1915 年の「五箇年理蕃計画事業」の終了とともに、植民地住民への鎮圧は一段落し、植民地の統治と治安は比較的に安定していった。大江志乃夫はこの日本軍による台湾全島の平定する過程を「植民地戦争」と呼び、日清戦争と別にもう一つの戦争とする観点で論じた。詳細は大江志乃夫「植民地戦争と総督府の成立」『岩波講座　近代日本と植民地２　帝国統治の構造』（岩波書店、1992 年）参照。

訪れたことはなかった。「揺籃の唄」を通して、宇野は近代日本における「文明」と「野蛮」の二項対立に対する思考の提起を試み、彼なりの答えを作ってみた。本稿では宇野文学における「揺籃の唄」の位置づけ、そして「揺籃の唄」における「文明」と「野蛮」の二項対立、とくに「野蛮」に対する宇野の思考を見せたのである。

二、宇野浩二と童話「揺籃の唄の思ひ出」について

宇野浩二（本名、格次郎）は 1891 年 7 月 26 日福岡市南湊町で、父六三郎（福岡県師範学校の教員）と母キョウの次男として生まれた。三歳の時、父は脳溢血で死去し、一家は父の従弟本多義知を頼って、神戸市湊町に移る。父方の親戚の入江寛司に預けられた父の遺産は、入江家が没落したため失われてしまった。1904 年天王寺中学（現天王寺高校）に入学した宇野は、回覧雑誌の試作、投書雑誌への投稿などの文学創作活動を始めた。1910 年、早稲田大学英文科予科に入学し、創作活動も続け、1913 年には白洋社書店から処女作『清二郎　夢見る』を刊行する。引き続き 1919 年 4 月には「蔵の中」を『文章世界』に、9 月「苦の世界」を『解放』に発表し、新進作家として文壇的地位を確立した。その後、一時的に精神に異常をきたしたが、1933 年に「枯木のある風景」を発表し、後期の創作活動を本格的に再開。1951 年には「思ひ川」で読売文学賞を受賞した。晩年は広津和郎（ひろつかずお）らと共に松川事件裁判判決の不当を訴え、「世にも不思議な物語」を書いた。1961 年 9 月 21 日、肺結核のため自宅で死去[204]。

明治・大正・昭和の三時代にわたって活躍した宇野に対する読者の印象は、多彩多様である。日常の規律から逸脱した自由自在な小説家、世に騒がれるような作品をいかにも楽々と書きこなすといった、豊かな才能の持ち主という印象が

一方、日本から植民地台湾への船運、そして台湾島内の鉄道路線の形成は、1910～20 年代である。日台間航路は 1896 年に大阪商船会社と伊万里運輸会社の台湾沿岸航路から始まったものであり、その後は大日本帝国の発展に対応し、南方航路および日本植民地相互の航路が開拓され、1912 年までに 10 航路となった。その中で、日台間航路の基隆・神戸線と高雄・横浜線がそれぞれ開かれた。一方、台湾鉄道の縦貫線全線（基隆・高雄間）が開通したのは 1908 年である。詳細は曽山毅『植民地台湾と近代ツーリズム』（青弓社、2004 年）参照。

[204] 田澤基久「宇野浩二年譜」宇野浩二『作家の自伝３０　宇野浩二』日本図書センター、1995 年、251～258 頁参照。

強いようだ[205]。

「揺籃の唄」は宇野の最初の童話創作として、『少女の友』（1915 年 7 月号）に発表されたのである。創作生涯が半世紀にも及ぶ宇野は、その作風も次々と変わっていったが、「揺籃の唄」は処女作『清二郎　夢見る』と出世作「苦の世界」のちょうど合間に書かれたものである。ここではこの両作品から宇野の初期作品の作風を抽出し、そこから「揺籃の唄」を位置づけてみよう。

森本穫の指摘によると、宇野が自費で出版した『清二郎　夢見る』（1913 年）は副題「貧しき前奏・小さな話集」の示すとおり、「二十数篇の散文詩風の小品」から成っている。その特色は大阪の風俗への愛着をこめた描写、感傷的かつ濃厚な耽美的傾向にあり、まさに「文学的出発以前の宇野の姿」を示してくれていると言えよう[206]。それに対して、「苦の世界」は「その一」（1919 年）が発表されてから二年の年月をかけて、「ことごとく作り話（その六）」（1921 年）によって完結した連作小説である[207]。その内容は、難儀な生活を送る「私」の周辺で、同じように難儀な生活を送っている人々が登場することで繰り広げられる物語である。最初つけられたタイトルは「難儀な生活」であったが、後に「苦の世界」に改題された。この改題について、宇野は当初「自分を中心とする『難儀の生活』を書いてきたつもりであった」が、「無意識のうちに」周囲の人間もこの苦界に浮沈してきていることに気づき、「自分だけの生活にとどまらず、無数の人間の生きているこの世界へと、一段高い次元に視線を向け」[208]、「宇野文学の原型」は「苦の世界」で如実に示されているように「この人生において何かを失った人々の物語」であると、森本は指摘した[209]。大阪の風俗を表現する『清二郎　夢見る』から庶民の苦しい生活を描く「苦の世界」への転換の理由について、森本は以下のように解釈した。宇野の生まれ付きの資質は、「多分に情緒的な、ロマンティスト」であったが、「生活上の困難」が宇野を「リアリストたらしめた」のである。その結果として、宇野は幼少期からこれまでの苦難を呼び覚まし、「苦の世界」に結実させた[210]。ならば、「揺籃の唄」は『清二郎　夢見る』と「苦の世界」の間に挟まれ、ちょうど宇野の作風の転換期に生まれた作品であると言え

205　渋川驍「作家と作品　宇野浩二」宇野浩二『日本文学全集　３０宇野浩二集』集英社、1973 年、413 頁。

206　森本穫『作家の肖像 ： 宇野浩二・川端康成・阿部知二』林道舎、2005 年、87～88 頁。

207　同上、89 頁。

208　同上、91～91 頁。

209　同上、93 頁。

210　同上、97～98 頁。

よう。

「揺籃の唄」の大筋を記せば、台湾山中の「生蕃」が日本の移民村を襲撃し、3 歳の娘・千代をさらう。15 年後に「生蕃」の襲撃が再び頻発し、「生蕃」隊長の少女が、さらわれた千代だという噂が広まる。そしてその千代と思われる少女は、本当の両親と紆余曲折を経て対面する機会を得るが、最初は頑なに自分は「生蕃」と言い張る。しかし、母親の子守唄を耳にし、幼時の記憶を取り戻すことになる。

従来の宇野研究において「揺籃の唄」に関する論考は少なく、以下の数本の論文で簡単に紹介されているのみである。近代文学研究者の中山際子は宇野童話を概観的に考察し、宇野が童話を書き始めたのは経済的理由によるだけでなく、大人にも子供にも厳しい現実からの逃げ場を作ってやるためでもあった。一方、宇野童話は昔話を採録する場合、原典に依拠することが多かったが、部分的に変化させたり、原典を選択する際には、「宇野なりの嗜好」を働かせていたようである。民俗学者の関敬吾の指摘に、「昔話の全体をつらぬく基調は二つの社会の対立・抗争・葛藤であり、その解決である。単に社会関係にかぎらず、感情の世界にも、道徳の分野にも、宗教の領域にも延長される」とあるが、中山はこの定義をふまえ、「宇野童話においても二つのものの対立は基本的な構造となっている」と指摘し、昔話によりながら現実性を導きいれた宇野童話には、「絶対的なものは存在しない」、「童話において逆に単純な二元的対立の骨格をパロディ化して、新しい世界をひらいたのである」とその骨子を論じた[211]。

一方、文芸批評家の野口存彌は「揺籃の唄」の内容に対し、「よく似たインディアン伝承があるのは事実であるが」、宇野自身が「予めその伝説を知っていたかどうか」という点はまだ確認されていないとした上で、幼少期の苦境・痛苦の露呈は、『清二郎　夢見る』や「兄弟」などの宇野の初期作品をつなぐ軸であり、「揺籃の唄」は「幼くして人生の悲しみを極限まで知ってしまった人でなければ書くことのできない作品である」と論じた[212]。

つぎに、台湾文学研究者のフェイ・阮・クリーマンは、「揺籃の唄」は「人さらい」物語の「典型」であり、「揺籃の唄」は「初期の米国におけるネイティブアメリカン部族にさらわれた子供たちの話」と酷似しているが、それらは「いずれも秩序と混沌、文明と未開との相克を象徴している」。そして通常は植民地の統治者を男性、被統治者を女性と譬え、そして男性の方（＝統治者）が優勢的位

---

[211] 中山際子「宇野浩二の童話―再話の方法―」『東京工業大学人文論叢（15）』東京工業大学、1989 年、193～198 頁。

[212] 野口存彌「編集サイドよりみた大正児童文学（9）　宇野浩二の童話」『日本古書通信（58）7』日本古書通信社、1993 年、24～26 頁。

置に立つと思われるが、「揺籃の唄」のようなストーリーでは、「野蛮な力が男性の役割を担って」女性をさらっていくという「ジェンダー関係の興味深い倒置」がよく見られると言う。つまり、「人さらい」の物語は、「帝国の植民地支配権力」が自ら構築・運営による「文明の域」の外の力と出会った時、「もはや絶対的なものでなくなる」という意味を帯びると阮は結論付ける[213]。

最後に、小川直美は、「揺籃の唄」において、「直接的な接触のより多かったはず」の漢民族が「遠景に退いてしまうところに、日本人が台湾に期待していたものが浮び上がってくる」と指摘した。小川によると、大鹿卓の「野蛮人」を例にして、読者が「野生」にあこがれるときに、首狩りを含む「野蛮」そのものを自らの「対岸」（＝植民地台湾）に置く「ロマンティックな」読み方をとる。この観点からみると、「揺籃の唄」は主人公の「千代子の中に『野生』を見て憧れつつ、母の子守唄という文字通り内的なものによって、文明の側に彼女を取り戻す物語として、極めて座りの良い構図を持っている」ことになる[214]。

以上の「揺籃の上」に関する先行研究を概観してみると、主に焦点は「野蛮」と「文明」の二項対立に集中しており、宇野の人生との関連性を論じたものは野口のみである。また、先行研究はいずれも作中における二項対立の存在を考察しているものの、「文明」と「野蛮」の内実に対して宇野がどのような思考を持っていたかまでは、論じられていない。一方、「揺籃の唄」と宇野の人生の関連性をも論じられるとはいえ、それが宇野の文学においてどのような位置を占めているかについては触られていない。ここでは以上の先行研究をふまえて、作中の「文明／野蛮」と「男性／女性」という二項対立の内実およびその相互的関係に対する宇野の思考、そして宇野文学における「揺籃の唄」の位置づけを、次に考察する。

三、「揺籃の唄の思ひ出」における二項対立とジェンダー意識

まず注意したいのは「揺籃の唄」において、台湾原住民のキャラクターは「一人も登場していない」という点である。台湾原住民に最も近い登場人物は「生蕃化」された少女の千代である。したがって、「揺籃の唄」は台湾原住民を本格的に描いたというより、むしろ「野蛮」と「文明」に対する宇野の思考を表現したものと言ってもよい。ただし、宇野は台湾原住民と「野蛮」を同格とする前提を

213　フェイ・阮・クリーマン『大日本帝国のクレオール　植民地期台湾の日本語文学』慶応義塾大学、2007 年、33～34 頁。

214　小川直美「人さらいの系譜--宇野浩二『揺籃の唄の思ひ出』」『大阪経大論集 62(3)』大阪経済大学、2011 年、181～182 頁。

設定している。「野蛮」と「文明」に内包される概念とその両者の関係に対する宇野自身の考え方は、作中人物の言動を通して表現された。

その言動を分析する前に、まずは作中人物の登場舞台を考察してみたい。「揺籃の唄」の舞台は、「台湾の蛮地に近い、或る山の麓に戸数が僅か二十軒にも足りない小さな村[215]」である。宇野がこの舞台を設定した背景に、当時の台湾東部における日本移民村の存在が考えられる。1890 年代から、日本の人口は急増し、その対策として明治政府は海外移民を鼓吹し、植民地台湾は当時人口移出の標的となった。『台湾植民発達史』（以下は『発達史』と略す）によれば、植民地台湾に対する近代日本の植民政策は、放任時代（1905 年）、私営移民時代（1906 年～08 年）と官営移民時代（1909 年以降）の三期に区別される。1906 年、台湾総督府は農業移民を促進するための優待条件を作り、当時の花蓮港庁の管下に私営移民事業を試行した。しかし、「営利を目的とする」私営事業と「純然たる小作移民」であったため、その結果は「何れも不良にして」失敗した。その後、総督府は「母国農民の移植」が「到底私人の経営に一任すべからざる」と考え、自ら台湾の東部に官営移民の実行を決意した。1909 年、総督府は殖産局に移民事務を管掌させ、移民の適地と事例などの経済的調査を実行し、翌年に移民事務委員会を創立した。1914 年末、同委員会が廃止され「移民実施の根本的方針」を確立するとともに、総督府は殖産局に移民課を設置し、花蓮港庁下の吉野村と台東庁下の旭村に移民指導所を開設した。1911 年、花蓮港庁下の豊田村で開始された移民事業は、1915 年 3 月末の統計によると、移民総数は延べ 554 戸、2824 人である[216]。『発達史』によると、死亡者数は延べ 220 人に達したが、衛生状態の改善とともに、疾患者と病死者の数は減少され、農村の衛生状態の改善は「日本民族の永住可能」を証明した[217]。この『発達史』から見るかぎり、移民の大患は主に劣悪な衛生環境であり、「蕃害」（＝台湾原住民の襲撃）については言及されていない。とはいえ、当時の台湾東部では原住民（泰雅族・太魯閣族・布農族）が狩猟のため下山することもあったから、平地の住民が馘首される恐れも確かにあった。また、原住民の襲撃が当時の日本で話の種にされることもあった。たとえば 1912 年に『喜劇　生蕃襲来』という本が出版されたことからも、その風潮の一端を見ることができる[218]。宇野はそういう時代的雰囲気の中で、「人さらい」の舞台として台湾の移民村を設定したのではないかと考えられる。

---

[215] 宇野浩二『宇野浩二全集　第九巻』中央公論社、1968 年、343 頁。

[216] 檜山幸夫『台湾史研究叢書　第三巻　台湾植民発達史』クレス出版、2011 年、174~175 頁。

[217] 同上、184 頁。

[218] 詳細は益田太郎冠者『喜劇　生蕃襲来』（趣味社、1912 年）参照。

大変だ、大変だ！大変な数の生蕃だ！直ぐ逃げなければ危ない！」で、父は瞬間に母を肩に掛けて、皆の人々と共に走った。「お千代を、お千代を！」と母は泣き声になって叫んで居るのも気にかけて居られない程、父も、皆の者も、夢中で駈け出したのである。（中略）子供を連れ出した人は稀であった。子供の愛に引かされた人は大抵逃げ遅れてしまった[219]。

「生蕃」の来襲に臨み、父は自分と妻の命を最優先に行動し、子供のお千代を捨てて逃げた。ここで注意したいのは父の判断は「理性」[220]的態度を表現しているという点である。

数多くの「生蕃」の襲撃に臨んで、「すぐに逃げないと危ない」という判断は、村全体の経験によって下されたものであろう。つまり「生蕃の来襲」は村の共同生活における「問い」、「すぐに逃げる」ことが、経験によって得られた「答え」である。「生蕃の来襲→村民の警報→父の判断」という過程に、「理に適っている」ことが確実に読み取れる。一方、千代がさらわれた後、村では「またもし襲って来ることがあっても」、「それを防ぐだけの備えも出来た」。「生蕃の襲来」への防

---

[219] 前掲書『宇野浩二全集　第九巻』、344 頁。

[220] 清水哲郎によれば、哲学用語としての「理性」は近代語で reason(英)、Vernunft(独)、raison（仏）にあたるが、それらの語は思想史的に由来するとされていたラテン語の ratio は、ギリシア語のロゴスに対応する語として使われていた（永井均・ほか編『事典　哲学の木』講談社、2002 年、981 頁)。近代日本における哲学用語としての「理性」と「感性」概念の議論は、1921 年に天野貞祐がカント（Kant,I)『純粋理性批判』を訳することから始まったと一般的に解される。

一方、1915 年まで 24 歳の宇野浩二の人生の経歴を見る限り、西洋哲学的な意味での理性を念頭に置いていたとはあまり考えられない。したがって、本論での「理性」・「感性」・「感情」の諸語は個々の事物のいずれにも同一の意味で適用される「普遍概念」として使われるものと考える。

ここでの理性とは最初に人間の本来に所有する性質や能力を指すのではなく、ものごとの「理」を指すのである。清水哲郎によれば、発生している事実を問題にし、答えの出し方を試みる過程において、問い手を納得させられるものはものごとの「理」（＝理由、論拠）である。さらにその「理」を提示することは「理に適っている」(reasonable）と評価される。理性は人間同士の問答における質疑・説（納）得・反論の過程で、人間のあり方を「理性がある」と呼ぶことである。清水はこの問答の文脈が「人間の共同の生に深く根差している」と指摘した。以上は永井均・ほか編『事典　哲学の木』講談社（2002 年、981 頁）を参照。

備は確実に村の「共同体」の存続と関わり、それが「理に適っている」という問答から生まれたと言えるだろう。「共同体の生活・経験」によって父とその判断が表現するのは村全体と共有している一種の理性であるという点に、ます注目したい。

> 「それともまた『生みの親より育ての親』という諺もある位だから、それに此方では何も知らない時分に三年の間育てられたのを、彼方では十年以上も育てられたのだとすれば、よし気が付いて早速名乗って出られまいじゃないか。」こう老年の男が云った[221]。

15 年後、村は再び襲来した「生蕃人」を撃退し、その際に隊長の少女を捕えた。千代の父も母も少女を自分の娘と認めたが、少女は断固に否認する。少女の言動に対して、村民中の「老年の男」が諺を借りて分析した。ここでの「老年の男」は「理性」を表現する人物でもある。そもそも「諺」というものは、人間の共同生活の経験を積み、その経験から得られた教訓・知識を言葉に凝縮させ、世代から世代へ伝えるものである。老年の男が諺を引用し、少女の反応の解釈を試みたことは、即ち過去の人間の共同生活から経験を借りて、目の前の「生蕃化の少女」という「問い」に「答え」を作ることだったのである。興味深いのは、作中にほかの村民の「声」も現われたが、発言者の性別が明記されているのは「老年の男」のみである。この「老年の男」の発言を借りて、村全体の形象を「男性化」して、さらに父と村全体を「理性」側に属させるという意図が宇野にはあったのではないかと考えられる。ここでは「父・村全体＝男性＝理性」という構図を重視すべきと考えられる。

> 父は流石に男らしく何も彼もあきらめた様な顔をして、しかし悄然と立って居る。その傍に母は流石に女の身の、矢張りあきらめ兼ねて、しかしもうその上いう言葉もなく、泣きながら立って居る[222]。

いくら説得しても納得できない少女に対して、「流石に男らしい」父があきらめた様子である。それにひきかえ、「女の身」の母は「矢張り」あきらめかねて泣き続ける。泣き声になって叫んでいる母、堪え兼ねて人目を恥じずに泣く母、少女の返答を聞いて声を上げて泣いた母――「揺籃の唄」における母は「泣く」という印象が如何にも強い。まるで泣く以外に何もできないかのような母は、宇

221　前掲書『宇野浩二全集　第九巻』、347 頁。

222　同上、347 頁。

野の筆によって「感情的」形象が強く、「理性的」父や村民と異なる存在とされている。ここでは、作中における「理性」と「感情」の区分は「性別」—「男」と「女」の区別—つまりジェンダーと結び付けられ、「男性的」と「女性的」態度として並立させられていることを強調しておきたい。

> 通弁が斯う言うと、この女はぶっきらぼうに頭を振りながら、生蕃語で答えた、斯う言うのである——「わたしは生蕃人だ、日本人じゃない。わたしには父母などはない。わたしは日本人が嫌いだ。わたしは生蕃人だ！」[223]。

言語の差異にもかかわらず、自分の生育・生養する人を父母とし、そう呼ぶことは人間の社会や生活に共通し、ほぼ世界中のどの国でも「父母」という概念の存在があるといってもよかろう。この概念は人間が「自身の出自を考える」という問答の過程から形成されてきたものと言えよう。換言すれば、「父母」という概念は「理に適っている」過程から生まれた結果でもある。「わたしには父母などはない」と言う少女は「父母」という概念を知らないのではなく、知ったうえで「わたしは例外である」と、その経験が自身に通用しないと主張したという点を、とくに注意しておきたい。少女の主張に対して、「どうも意地からそう云って居る様子だった。ひょっとするとあれは生蕃の方に義理立てをして、そのために此方で云って聞かす事はすっかり分りながら、あんな風をして居るのかもしれないよ[224]」と、一人の村民は推測する。

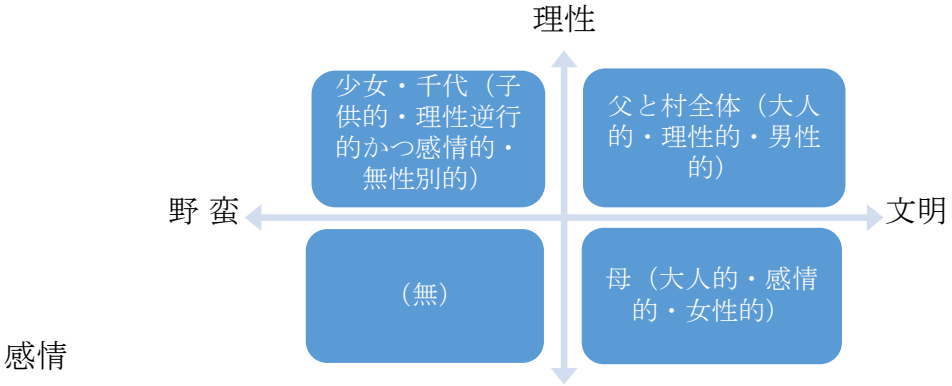
つまり少女は「父母」そのものを否定するのではなく、ほかの原因で「あんな風をしている」可能性がある。意地で「あんな風をしている」少女の態度は感情的とも言え、母と共通するところもある一面を見落とすべきではない。それは後段の少女の「文明回帰」の伏線となる。一方、少女の知った「父母」という概念は父の「命を保つ」判断と同じく、「理に適っている」過程から生まれた結果である。換言すれば、少女と父は二人とも論理の能力——即ち「理性」を有する者である。自分が生蕃人だと主張する少女は、恐らく父の「理性」によって捨て去られ、否定された自分を貫くため、父の「理性」に逆行することを選んだのではないかと考えられる。

ここに至って「文明側」と「野蛮側」の論理の焦点は「理性」に絞られ、父と村全体の「理性の追求」に対して、少女がそれを「拒否」する構図を示しているところである。つまり話の筋は「理性」に沿って展開されている。一方、「大人」の両親と村民と比べると、少女の態度は子供っぽく、「無性別的」と考えられる。

223　同上、346 頁。

224　同上、347 頁。

図示すると、以下のようである。



前述した阮の指摘によれば、統治者（＝男性）と被統治者（＝女性）という図式は植民地物語の常套句であり、「揺籃の唄」の興味深いところはその図式の倒置である。「揺籃の唄」における、このような「倒置」は強調して指摘しておきたい点であるが、ここでは少々異論を唱えたい。もちろん歴史的背景として植民地台湾の支配者は日本であり、この物語に登場した日本人と「生蕃人」は統治／被統治という関係ではないと考えられる。主動的「襲撃」／受身的「防備」という視点から見ると、むしろ「生蕃人」のほうが支配者に近いと言えよう。「倒置」というより、宇野は「生蕃襲来」という特定的歴史事実を「過大化」し、日本人と台湾原住民の政治的力関係を「逆転」させたいと構想したとはいえないだろうか。

特に注意したいのは「揺籃の唄」におけるジェンダー意識は「文明と野蛮の対立」ではなく、別のところにあるという点である。前述したように、「揺籃の唄」では本当の原住民の登場がなかった。「野蛮」側を代表しているのは生蕃化された子供っぽい千代であり、「文明」側を代表しているのは大人的両親と村民である。「揺籃の唄」におけるジェンダー意識は「野蛮」と「文明」の対立で現われるというより、実は「文明側」の父と村の共同体（＝男性的・理性的）と母（＝女性的・感情的）の態度で表現されたものだと考えられる。ここで注意したいのは、「文明側」における「理性的」父や村民と「感情的」母は「少女に対する説得」という点で同一的であり、そのジェンダー意識は「対立的」ではなく、「並立的」関係であることである。

ただし、ここには一つの興味深い問題が生じる。千代が「子供的・無性別的」な存在だとはいえ、なぜ、「野蛮」側の象徴として設定されたのは「少年」ではなく「少女」だったのか。この問題を解くため、近代日本における家族概念と親子関係を考えなければならない。宇野当時の年齢と創作時点を考えると、明治後期から大正初年を主な対象として考察することになる。

近代日本の家族観念は、家父長制を中心に展開してきた。『社会学事典』では、家父長制とは「家長権をもつ男子が家族員を統制・支配する家族形態」を意味し、また家父長制家族は「一般に長男が家産と家族員に対する統率権を世襲的に継承し」、「その統率権は絶対的な権威として現われ」、「家族員は人格的に恭順・服従する」と定義する[225]。家父長制の家族制度は江戸時代で封建社会体制の強化策として、支配層の武士家族のみ適用されていたが、近代以降は民法の成立とともに、一般庶民の家にも敷衍されることになった[226]。1898 年 7 月 16 日、幾度の争議を経て、明治民法は成立した。その家族制度の基準は、日本古来の「家長と家族統制」や「家の永続とその相続」および「それにもとづいた人間関係の差別序列」を理想として規範化したものである[227]。当時の「父」と「娘」の家庭内の力関係を理解するため、ここでは明治民法の定義による戸主権と親権を見てみよう。

戸主とは「戸籍ごとに置かれた長のこと」であり、家族扶養の義務（740 条）、婚姻・養子縁組の同意権（750 条）、家族居所の指定権（749 条）を持つ者である。戸主の継承は基本的に「男子本位・嫡出本位・長子本位の順位で一人だけが定められる」（970 条）[228]。一方、戸主権と明確に区別された親権は「20 歳未満の未成年者を監護教育する権利義務」であるが、「子ハ其家ニアル父ノ親権ニ服ス」（877 条）の示したように、明治民法では基本的に父を行使者として想定され、父がないもしくは親権を行えない場合だけ、母の親権を認めるのである（877 条以下）。このような「男主女従」の観念は明治民法の全般を支配するものである。事実、民法の総則には「妻の無能力」（14 条）が定められる[229]。また、家父長制を中心とする家族観念は法律の所定だけではなく、「教育勅語」（1890 年）や国定教科書など、明治政府の意識的な教育策によって推進・形成されてきたのでもある[230]。その目的は国家権力による官製イデオロギーを通して、個々の「家」を国家と結び付けようとするものであろう。

225　見田宗介ら編『社会学事典』弘文堂、1988 年、156 頁。

226　天沼香『日本史小百科―近代―〈家族〉』東京堂、1997 年、75 頁。

227　福尾猛市郎『日本家族制度史概説』吉川弘文館、1991 年、214 頁。その成立までの経緯については、前掲書『日本史小百科―近代―〈家族〉』（第三章「日本近代史のなかの家族」）と『日本家族制度史概説』（第七章「近代」）を参照。

228　同上、217 頁。

229　同上、219 頁。

230　詳細は岡田みゆき「明治期における小学校教科書および民法の父権思想 ： 日本の父親の権威についての研究の一環として」『日本家庭科教育学会誌 41(2)』（日本家庭科教育学会、1998 年）を参照。

歴史的背景を踏まえて宇野の作品に戻って考えると、「野蛮」側の「子供」を「少年」ではなく「少女」として設定した理由は、「子供」を父の戸主権と親権の二重支配の下、一家族の最も低い地位に置かせるためではないかと考えられる。親権の立場から見ると「少年」と「少女」は同一な地位にあるが、戸主権の立場から見ると、少年は男子本位とする家父長制的継承を通して、いつか新たな「戸主」――ひいては「文明」側の当主に転身する可能性があるのに対し、「少女」つまり「娘」（＝野蛮の象徴）は先天的に「父」（＝文明側の理性的存在）の「扶養・監護・教育」を受ける対象でしかいられない。「子供」の性別設定を通して、宇野は「野蛮」を「文明」による被支配者として対象化したのではないかと考えられる。また、親権の当然的行使者として「父」が「理性」を説くのに対し、「無能力者」の「母」が「泣く」イメージが強いという作中の形象創出は、当時の社会通念と合致していると言えよう。

もちろん、明治後期の「家長主義」と「個人主義」の葛藤そして大正期の都市化によって齎された「ムラ共同体」の解体によって、近代的自我の芽生えおよび「家」の弱体化という背景も生まれたため[231]、創作時点の家族観念はそれほど安定的とは言い難いが、それはあくまでも日本本土のことであった。「揺籃の唄」に描かれるような、海を隔てた植民地台湾にある一つの辺鄙的、前近代的移民村では、まだ強固的な「家」観念が維持されていたのであろう。

> 「あゝ、あれはわたしのお母さんの声だ。あれはわたしのお母さんの唄に違いない。あの唄をうたって居る人こそわたしのお母さんだ。（中略）あの唄を聞いて居ると、色々の事がぼんやりと思い出されて来る。（中略）あゝ、この家の中からあの唄が聞える、これはわたしの家だ、あゝ、あれはわたしのお母さんだ……こう言って十五年前に捕われて行って、生蕃になったお千代は泣いたのである[232]。

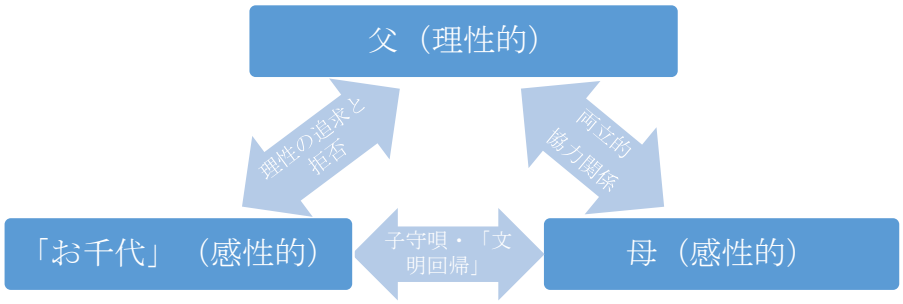
しかしながら、「野蛮側」の少女を説得するのは「無能力者」の母である。子守唄を通して、母と千代のそれぞれの感情は一気に爆発し、二人は「感性的」次元で繋がり、少女の「身分回復・日本回帰」をなしとげた。感性とは「感覚から感情まで幅広い概念から出発している」ため、その定義についてはさまざまな解釈ができる[233]。ここでは、「物や事に対する感受性、とりわけ、対象の内包する

231　詳細は前掲書『日本史小百科―近代―〈家族〉』第三章を参照。

232　前掲書『宇野浩二全集　第九巻』、350 頁。

233　三浦佳世『知覚と感性』北大路書房、2010 年、14～15 頁。

多義的で曖昧な情報に対する直感的な能力[234]」という心理学者三浦佳世による定義を用いたい。換言すれば、母は「子守唄」に「親の愛情」を歌い込み、少女は「子守唄」に内包されるその深い愛情や「幼時の記憶」という曖昧な情報を直感的に読み取り、二人は「感情的」態度から昇華して、「感性的」次元で同一化された。「子守唄」を以て、母はやっと娘を「文明側」に連れて帰ることができた。図示すると、以下のようである。



一方、そもそも当時、感情と感性とはそれほど大差はなかったと考えられる。もちろん今日のわれわれにとって、感情と感性は異なるものであるが、宇野の時代はそうではないかもしれない。三浦の指摘したように、「快・不快や好みのように、外的に与えられた刺激や情報に対する反応においては、感性と感情は重なる部分を持つことになる[235]」。一方、「感性」ということばは、西周が sensibility に対する訳語として、「江戸時代に『感情』の意味で用いられた同音の『感性』をあてたことに始まるとされ」、「多少とも情緒的側面を含んだ訳語として出発したことになる」[236]。即ち、宇野が「揺籃の唄」を書いた時、感情と感性に対する彼の認識はさほど明確に大別されていないと言える。感性的「子守唄」を通して、千代は少女の「生蕃隊長」から「お千代」の身分を回復した。

四、おわりに

最後に宇野文学における「揺籃の唄」の位置づけ、作中における二項対立、ジェンダー意識および「野蛮」の内実を如何に構築・定義すること、そして本作とそれ以降の原住民関連作品の関係性などの諸問題を総括しておこう。
まず位置づけについてであるが、前述のとおり、「揺籃の唄」は宇野が「自分だけの生活」から「無数の人間の生きている世界」へ転向する時期に書かれたもの

234　同上、15 頁。

235　同上、20 頁。

236　同上、12 頁。

である。もし野口の指摘に従い、「苦の世界」は宇野文学の原型、「人生において何かを失った人々」を物語るものだとしたら、「揺籃の唄」は「苦の世界」を書くための試作だったと言えよう。即ち自分の人生の苦難を「揺籃の唄」の父と母が千代を失った哀痛について書くことを通して、宇野は「何か失った人」への描写ができるようになったのではないかと考えられる。だとすれば、「子守唄」を通して宇野が言いたいのは、やはり「愛」の価値だろう。「理に適っている」ことが通じない時、人間の感情――愛こそが通じるものと強調するという点が、「揺籃の唄」が童話とみなされる一つの理由であろう。

つぎに、「揺籃の唄」における二項対立とジェンダー意識を整理してみよう。阮の観点とその指摘したように、「文明・野蛮」と「男性・女性」をマッチアップするのは従来の植民地研究における二項対立の主流的見解であるとも言えよう。たしかに「少女の身分」をめぐって、「揺籃の唄」における「文明側」と「野蛮側」は対立的関係と言えよう。しかし、「揺籃の唄」でジェンダー意識を表現するのは「文明と野蛮」の対立項ではなく、「文明側」の内部にある「理性と感情」と考えられる。ただし、ジェンダーに関わる二種類の態度は対立とは言えず、「両立」のみである。さらに、注意が必要なのは、本作における「文明と野蛮」の関係は従来の植民地理論と異なり、ジェンダーを通して表現されたのではなく、「親子関係」を通して成立できるという点である。もちろん、宇野は必ずしも「理性」・「感情」や「感性」などの諸概念を明確に意識したうえで創作を行ったわけではない。ただし、「野蛮」と「文明」の中身を把握し、その図式を描出しようとする宇野の努力は確実にあったと考えられる。

そして「野蛮」の内実についてであるが、「野蛮」の定義はやはり他者としての「文明」と表裏一体だろう。「揺籃の唄」における「文明側」と「野蛮側」は「少女の身分」という争点をめぐって、葛藤している。宇野が「文明側」の「理性＝男性」・「女性＝感情」という図式を設置した後、問題になったのは如何に「野蛮」を表現するかということだったのだろう。繰り返し述べたように、作中で台湾原住民の存在はなかった。そのかわりに、「生蕃化」された日本人少女の千代が「野蛮側」を代弁する。結末は感性的次元で両者が同一化されたが、「揺籃の唄」における「文明側」と「野蛮側」の論争は主に「理性」の追求とその拒否という文脈にそって展開していく。したがって、宇野による「野蛮」の内実は「揺籃の唄」における「理性」と緊密に関連しているものと考えられる。「わたしには父母などはない」という千代の一言から、彼女は「父母」という人間の出自を考える概念を知ったうえで、更に「生蕃人」が自分の父母でないという事実を、確実に知っていることがわかる。即ち「生蕃化」された少女の内在的論理は、かろうじて「父母」という人間の共同経験において「文明側」と合致するところが存在すると考えられる。換言すれば、宇野は千代を「理性逆行」的「生蕃」とし

て描くと同時に、「野蛮側」の内実を「理性」という概念自体から逸脱できないものとして定義したのである。台湾に行ったことがなかった宇野は「野蛮」の正体を把握できていなかったため、自分の定義による「文明理性」の延長線で、千代を「生蕃化」された「文明人」に造型する方法しかとることができなかった。したがって、「揺籃の唄」に登場するのは原住民ではなく「代替品」の千代でしかないと思われる。しかし、その延長線に立つ千代は「生蕃化」されても「文明人」であるから、母の子守唄を通して「日本／文明回帰」ということが成しえたのである。それは「文明」と「野蛮」の不動とも言える本質を暗示する。

「揺籃の唄」に見られるのは、「文明側・大人」の男性（＝父・村全体）を「理性」とし、女性（＝母）を「感情」とする上で、「野蛮側・子供」の「生蕃」（＝千代）を「理性逆行」と設定するという構図である。とするならば、「揺籃の唄」では台湾原住民が不在であるということはいうまでもなく、「野蛮」自体の存在さえも曖昧模糊である。なぜなら、その構図の出発点は「文明側」の「男性＝理性」という設計であり、その対面に「女性＝感情」は設定される。それにひきかえ、「理性逆行」として設定された「野蛮」側は「男性＝理性」という立論から延長されてきた、「文明側」の「理性的男性像」の一変形に過ぎなかったと考えられる。

とはいえ、「揺籃の唄」は日本人作家による台湾原住民に関連する最初の作品として、意義があると考えられる。なぜなら、宇野は作中で「野蛮」と「文明」の二項対立という命題を提出したからである。関と中山の指摘したとおり、昔話の基調は二つの社会の対立・抗争・葛藤およびその解決であり、昔話によりながらも現実性が強い宇野童話は二項対立をパロディ化して、新しい可能性を作り出したのである。成否にかかわらず、宇野は「揺籃の唄」で「野蛮と文明」という命題に対して、彼なりの思考を試みた。この点は当時としては一種の進歩とも言えよう。

最後に本作とそれ以降の原住民関連作品の関係性についてである。短い本作がなしえた大きな貢献は、日本人作家による台湾原住民を描く二項対立的図式を要約的に提示した点である。ジェンダー、(植民者と被植民者の)「親子関係」、「文明と野蛮の対立」など、宇野は本作で原住民に関する二項対立的図式を一括した。それ以降の日本人作家のほとんどは宇野の提示したこの図式から出発したとも言えよう。この点に、本作の大きな意義を認めることができる。最も具体的な例は、それ以降の原住民関連作品における「蕃婦像」（即ち原住民女性像）である。佐藤春夫が作品「霧社」（1925 年）に提示した通訳の「蕃婦像」を皮切り、大鹿卓、中村地平ないし戦後の坂口樗子もそれぞれの「蕃婦像」を創出し、上記の二項対立的図式をその像に使い、それによって近代日本と台湾原住民の自他関係に対する自分の思考を表現した。したがって、「蕃婦」は近代日本の二

項対立論をめぐる文学表現に重大な役割を果しているとも言えよう。ならば、本作に現われた少女・千代は一種の「擬似品」として、その「蕃婦像」の原点とも言えるのではないかと考えられる。

近代化とともにもたらされた「適者生存・優勝劣敗」という社会進化論を標準にして、近代日本（人）は自我と他者に対する認識とその比較を始めた。「野蛮と文明」の二項対立という命題はこの前提の下に設定されたが、宇野以降の台湾原住民を書くすべての日本人作家は多少ともこの命題を意識することになった。「揺籃の唄」はこの命題に挑戦する第一作ともいえ、それ以降の日本人作家が回避できない問題意識を作り上げたということだけは明らかと言えよう。

第三節　「野蛮性」の再発見と「文明化」の可能性――中村古峡

一、はじめに

1910 年代中期、植民地政権や治安の安定化および日台間と台湾島内の交通制度・機関の確立とともに、植民地台湾へ旅行する最低限の条件はようやく整えられていた。こうした背景のうえで、1913 年、中村古峡は台湾南部に旅行し、6 月に紀行文「鵞鑾鼻(ガランビ)まで」を『東京朝日新聞』に連載し、1916 年、小説「蕃地から」を『中央公論』8 月号に発表した。両作品とも台湾旅行での山地体験を元に書かれたものであるが、その先行研究は多いとは言えない。

日本の台湾文学研究の先駆者河原功によれば、「蕃地から」は「商業ベースの総合雑誌にみる」「台湾原住民を本格的に扱った最初の作品」である[237]。台湾文学研究者の邱雅芳は「近代の旅行記」という角度で両作品を考察し、中村古峡の知識人の視点を通して、1910 年代の日本における「台湾印象」を考察する[238]。本論文においては先行研究をふまえて、両作品における台湾原住民の表象を中心に考察する。また、両作品の創作上の連続性、そして中村古峡の文学おける両作品の位置づけも一考してみたい。

二、中村古峡の生涯と両作品の創作背景

前述とおり、「鵞鑾鼻まで」と「蕃地から」は三年の隔たりがある。この間には、中村に何の事が起きたのか。なぜ、三年も経て再び台湾関連作品を書くのか。

両作品の創作背景を解明するため、まずは中村の略歴を紹介する。

1881 年、中村古峡は大阪府大和国（現・奈良県生駒市）に生まれた、本名は蓊である。父の中村源三は公職を歴任したが、いわゆる政治貧乏で家産を失い、一家をあげて京都に移った。中村はそこで村杉楚人冠の知遇を得て、彼を頼って上京した。中村は上京以降、自身の病気と貧困に苦しみながら、母と弟妹に仕送りを続けていた。1903 年、中村は東京帝国大学に入学し、夏目漱石(なつめそうせき)の講義

---

[237] 河原功「日本人の見た台湾原住民――中村古峡と佐藤春夫」『翻弄された台湾文学―検閲と抵抗の系譜』研文出版、2009 年、126 頁。

[238] 邱雅芳「中村古峡在大正初期的殖民地行旅：＜到鵝鑾鼻＞、＜來自蕃地＞的南方風情與蕃地體驗」『台灣文學學報』第 15 期、政治大学台湾文学研究所、2009 年、165～198 頁。

を受けたりしたが、家計と次弟義信の療養費のため、一年間休学をするなど、苦学を強いられていた。その窮状を知った漱石は同情する。中村は大学卒業後、楚人冠の紹介で東京朝日新聞社に入社し、漱石の推薦で小説『回想』を『東京朝日新聞』に連載した。その後、中村は仕事をやめて自伝的長編「犠牲」の執筆に専念し、漱石に相談および校正も受けた。後に「犠牲」から改題された「殻」も『東京朝日新聞』に連載された。1913 年 1 月、中村は台湾へ旅行し、婚約者の小畑照世（おばたてるよ）と出会い、4 月に結婚。6 月、紀行文「鵞鑾鼻まで」が『東京朝日新聞』に連載された。7 月、中村は漱石に単著の『殻』の推薦文を依頼するが、その執拗な催促で漱石から断われてしまう。1916 年 8 月、中村は小説「蕃地から」を『中央公論』に発表したが、同月に自分が送ったほかの小説を酷評する漱石の手紙が来た。同年末、漱石が没した。1917 年 5 月、中村は日本精神医学会を設立、10 月に日本精神医学会の機関誌・月刊『変態心理』を創刊した。それ以降の中村は、文学者から異常心理学・精神医学者に一転する。主な著書は『殻』のほかに、『変態心理の研究』『近代犯罪科学全集４　変態心理と犯罪』などの異常心理、精神医学著書が多数である[239]。

「鵞鑾鼻まで」と「蕃地から」はいずれも中村が台湾旅行の体験を元に書いたものであるが、両作品の間には三年の隔たりがある。中村の略歴から見ると、「鵞鑾鼻まで」は新婚や文壇デビューなど、いわゆる人生の頂点に彼が発表した作品であるのに対し、「蕃地から」は彼が文壇から脱離する直前の作品である。

「蕃地から」の発表直後、中村は文学から脱し、精神医学の道を歩き始めているので、両作品の創作動機を理解するためには、中村のこの「転向」を考えなければならない。中村の「転向」については、近代文学研究者の曽根博義が漱石と門下生の書簡（以下は漱石書簡と略す）および朝日新聞社の社内資料となる清水三郎『東京朝日新聞編年史　巻 24』（1957 年）およびその別巻『夏目漱石と朝日新聞』（1968 年）を詳しく考察しているため、以下はその考察を簡単にまとめておく。

曽根の指摘によれば、中村の創作と「転向」は彼自身の経歴と深く関わっている。日本精神医学会の設立は精神医学や変態心理学に対する中村の関心が、次弟義信の発病・精神病院への入院・当院での死亡といった事実に基づく自伝的小説『殻』の執筆など一連の体験に根ざすものであると、当会の設立趣意書で明記されている[240]。一方、中村の創作生涯は漱石との交わりと深く関わっており、漱石

239　曽根博義「中村古峡　年譜」『変態心理』と中村古峡―大正文化への新視角』不二出版、2001 年、192～205 頁。

240　曽根博義「『殻』から『変態心理』へ」『文学 2(4)』岩波書店、2001 年、89～90 頁。

との師弟関係の結成は、森田草平（もりたそうへい）の先例に中村が倣ったと曽根は指摘している。東京帝大文学科の同期の森田草平は、自分の小説に対する漱石の丁寧な批評の手紙に感激し、その後も漱石と長い手紙のやりとりを続けることになり、二人の関係は親しいものとなった。更に、大学卒業後の森田は漱石にプライバシーを告白する長文の手紙を書き、好意的返信も得ている。曽根はこうした事実から中村が森田に倣ったと推測するのである。1906 年の暮れに中村は漱石を訪問し、それ以降、漱石と絶えず通信するようになった。1907 年 5 月 26 日付の中村古峡宛の漱石書簡には「将来君の一身上につき僕の出来事ならば何でも相談になるから遠慮なく持って来給へ」という非常に親切な言葉がある。翌年、中村の次弟義信が京都の精神病院で死去した際、中村はすぐに漱石に知らせ、漱石も直ちに慰問の手紙を返している[241]。

作家としての道も、中村は森田に倣おうとしたと曽根は推測している。それは、私小説『煤煙』で成功した森田を見て、自分の秘密も小説にして公表することで作家になろうと考えたのではないかということである。事実、1911 年の一年間、中村は自伝的長篇小説「犠牲」を書き、漱石に相談し、校正を受けている。漱石の建議で「犠牲」から「たつぼ殻」さらに「殻」と改題された中村の文壇デビュー作は、1912 年 7 月から『東京朝日新聞』に連載された[242]。

しかし、中村と漱石との縁が切れたのもこの出世作「殻」に起因する。1913 年 3 月、春陽堂の雑誌『新小説』に、単行本『殻』の最初の出版広告が載った。その紹介文では「夏目漱石序／杉村楚人冠序／中村古峡著／四月中旬発売」と書かれていたが、4 月に出版された『殻』では、杉村楚人冠の長い「序にかふる序」のほかに、漱石の序文ではなく、生田長江（いくたちょうこう）の短い「序」が載せられていた[243]。

このようなことが起きたのには二つの大きな原因があったことが、朝日新聞社の社内資料からわかっている。第一に漱石に無断で彼の序文があることをうたった広告であったこと。第二に漱石が嫌っていた生田長江に代わって序の執筆を頼んだこと。また、『殻』を上下二巻に分けて出版するという漱石の助言を、中村が受けなかったこともその一因であると曽根は推測している[244]。その後、自

241　曽根博義「異端の弟子--夏目漱石と中村古峡（上）」『語文 113』日本大学国文学会、2002 年、28~35 頁

242　前掲論文「異端の弟子--夏目漱石と中村古峡（上）」、36~37 頁。

243　曽根博義「異端の弟子--夏目漱石と中村古峡（下）」『語文 114』日本大学国文学会、2002 年、55 頁。

244　曽根博義「異端の弟子--夏目漱石と中村古峡（補遺）」『語文 116』日本大学国文学会、

分の小説に対する漱石の酷評およびその死を経ても中村はあきらめず、大阪と東京の朝日新聞社に原稿を持ち込んだが、両社ともに断われた。ここに至って中村は文学を断念し、変態心理と精神医学への道に進むことを決意したのである[245]。

時間的に見れば、「鶩鑾鼻まで」（1913 年 6 月）と「蕃地から」（1916 年 8 月）は、『殻』の出版（1913 年 4 月）、漱石との不和（1913 年 7 月）、日本精神医学会の創立（1917 年 5 月）という一連の出来事の間に介在しており、両作品は中村自身にとって相当な意義を有するものだと考えられる。「鶩鑾鼻まで」が中村の人生絶頂期の作品と言えるのに対して、「蕃地から」は漱石との不和、文筆生活の不調などを経て、再び台湾の旅行経験を用いて書いたものとなる。では実際に作品を分析し、両作品の連続性を考えてみたい。

三、「鶩鑾鼻まで」――「野蛮性」の再発見

前述とおり、「鶩鑾鼻まで」は 1913 年 6 月下旬から 7 月上旬まで『東京朝日新聞』に連載されたもので、以下にその目次と日付を並べる。

鶩鑾鼻まで（１）　生蕃袋と傘一本（6 月 19 日）
鶩鑾鼻まで（２）　夜中のトロ　　（6 月 20 日）
鶩鑾鼻まで（３）　未明の枋寮　　（6 月 22 日）
鶩鑾鼻まで（４）　初めて見た蕃人（6 月 23 日）
鶩鑾鼻まで（５）　見窄らしい蕃童学校（上）（6 月 24 日）
鶩鑾鼻まで（６）　見窄らしい蕃童学校（下）＜画＞（6 月 25 日）
鶩鑾鼻まで（７）　生蕃よりも水牛　（6 月 26 日）
鶩鑾鼻まで（８）　琉球藩民の墓　＜写＞（6 月 27 日）
鶩鑾鼻まで（９）　四重渓の暮色　四重渓温泉＜写＞（6 月 28 日）
鶩鑾鼻まで（１０）　石門の古戦跡　＜写＞（6 月 29 日）
鶩鑾鼻まで（１１）　毒蛇毒草　（6 月 30 日）
鶩鑾鼻まで（１２）恒春の城壁　恒春城壁＜写＞（7 月 1 日）
鶩鑾鼻まで（１３）懇丁の種畜場　（7 月 2 日）
鶩鑾鼻まで（１４）亀仔角蕃の今昔（上）　船帆石＜写＞（7 月 3 日）
鶩鑾鼻まで（１５）亀仔角蕃の今昔（下）　恒春蕃婦の風俗＜写＞（7 月 4 日）
鶩鑾鼻まで（１６）東洋一の大灯台　鶩鑾鼻灯台＜写＞（7 月 5 日）

2003 年、72 頁。

[245] 前掲論文「異端の弟子--夏目漱石と中村古峡(下)」、59~60 頁。

6 月 21 日を抜き、「鵞鑾鼻まで」は毎日『東京朝日新聞』朝刊 3 版に連載されている。ただ第六回（6 月 25 日）は原因不明だが、第 5 版に移されている[246]。中村の旅行日時は不明であるが、「鵞鑾鼻まで」に現われた台湾地名の順番から見ると、中村の旅行行程は以下のように推察できる。

阿緱（現・屏東県屏東市、以下同県）→東港（東港鎮）→枋寮（枋寮郷）→枋山（枋山郷）→圓山埔（獅子郷）・圓山埔蕃童学校（内獅國民小學）→楓港（枋山郷）→海口（海口村）→統埔（車城郷統埔村）→四重溪（車城郷の東北方にある）→石門（牡丹郷石門村）→恆春街・瑯橋（恆春鎮）→大板轆（恆春鎮南灣里）→墾丁（恆春鎮墾丁里）→龜仔角社（社頂）→鵞鑾鼻（恆春鎮鵝鑾鼻公園）。

簡単に言うと、中村の台湾旅行は今日の屏東県の西側海岸沿いに行われていたと思われる。しかし、その旅行の起点は日本にある。台湾旅行の「宿願」は、新橋から神戸へ下る車中で、「余」が初めて『台湾案内記』を読んだ時に生まれている（第一回）。書籍の題名と出版の時間から考えると、中村の言う『台湾案内記』は、入江英『台湾案内　完』（東陽堂、一八九七年）を指す可能性が高い。この『台湾案内』は日本統治の直後に、作者の入江が陸軍の嘱託を受け、台湾の沿岸部から高山までの調査作業を行って提出した報告書であり、その内容は地理、交通、産業、原住民等についての簡便な説明が主であるが、巻末に先住民の言語一覧を附している。発行所の東陽堂は後記に「台湾は生蕃と称する猛悪人種の棲息する」地であるから、「従来地図を製する者は蕃地」に「至りては実に之れか測量に苦めり」とも記している[247]。近代日本の最初の「台湾認識」において、台湾原住民の重要な位置づけがなされたとも言え、中村もこの本に好奇心を引き起されたのではないかと考えられる。

もう一つ作中で言及されている本は『南部台湾』である。それは『南部台湾　附録共進會案内』（南部物産共進會協賛會、1911 年）と推測できる。『南部台湾』は全三回（1911 年、1915 年、1934 年）発行されており[248]。、11 年版の内容を見

---

[246] 本稿で使われる朝日新聞記事は、すべて朝日新聞のオンライン記事データベース「聞蔵 II ビジュアル」から引用するものである。

[247] 栗原純・鐘淑敏『近代台湾都市案内集成　第 7 巻　台湾案内／台湾南支事情』ゆまに書房、2014 年。

[248] 『南部台湾』の前身は台南県知事・磯貝清蔵の意思によって 1896 年（明治 29）の夏に編纂された『台南県誌』である。それ以降は台湾地方制度の改正の影響を受けて、県誌の印刷は第四編に止まり、第五編以下は『南部台湾誌』と題する稿本、もしくは成稿にならら

ると、まず台湾全島の総説を述べ、そして地勢・人口・交通などについて、台南庁、嘉義庁、阿緱庁の管轄地域をそれぞれ紹介している。特に阿緱庁の章では、琉球藩民の墓、牡丹社石門、四重渓温泉、鵞鑾鼻灯台について多く紹介されている[249]。換言すれば、この章は 1871 年「琉球漂流民殺害事件[250]」中心に紹介するものであった。事実、「鵞鑾鼻まで」と 11 年版を対照すると、中村の見学したのはほぼ阿緱庁の章に掲載された観光地であり、「鵞鑾鼻まで」が付いた写真も 11 年版に掲載されたものと同じである。中村は 11 年版の『南部台湾』を読み、歴史事件の回顧を中心に、原住民部落および植民地建設の実績の見学を兼ねて、「蕃地」の旅を計画したと考えられる。また、11 年版には旅館、物産、雑貨などさまざまな広告があり、今日のガイドブックとも類似している。

「蕃地」に入るにあたって、中村は地方官庁の力を借りなければならなかった。作中では、「佐藤庁長から既に数本の紹介状」（第 1 回）を貰った「余」は、沿道の支庁が「一介の書生」の自分を厚遇することに「衷心の感謝を致す」（第 7 回）と述べられる。佐藤庁長とは、当時の阿緱庁長・佐藤健太郎を指すと考えられる。

ない資料に過ぎないものである。1934 年版『南部台湾』は 1930 年に台南で開催された「台湾文化三百年記念会」を機に、台南州共栄会で新修出版されることを決められて出版されたものである（以上は 1934 年版の序と叙言から引用する）。ならば中村が読んだ 1911 年版は恐らく「成稿にならない資料」のみである。1911 年と 34 年版の目次を参照すると、確かに 34 年版の内容は大幅に拡大された。特に台湾原住民の統治政策に関するものは「理蕃」という格別に一章として、第三編の「諸政」の下で「警察」、「司法」、「治獄」と並列していることから、原住民を重要視するという思考が見える。なお、編纂者は南部物産共進会協賛会（1911、1915 年版）から台湾州共栄会（1934 年版）になった。

本論で使われたものは以下のようである。

1911 年版：南部物産共進会協賛会『南部台湾　附録共進会案内』（所収は『中国方志叢書　台湾省南部台湾』成文出版社、1985 年）。

1915 年版：南部物産共進会協賛会『南台湾』（所収は『中国方志叢書　台湾省南台湾』成文出版社、1985 年）。

1934 年版：台南州共栄会『南部台湾誌』（所収は『近代台湾都市案内集成　第 12 巻　南部台湾誌』ゆまに書房、2014 年）。名称上の便利のため、本稿では三つの版本を統一に『南部台湾』と呼び、出版年の記入で区別する。

249　南部物産共進会協賛会『台湾省　南部台湾』成文出版社、1985 年、193~207 頁。

250　琉球の宮古島・八重山島の住民は 1871 年に台湾南部の八瑤湾に漂着・上陸し、そのうちの 54 人が原住民のパイワン族に殺害されたという事件である。この事件によって、明治政府は 1874 年に「台湾出兵」という軍事的行動を行った。詳細は第一章第二節参照。

[251]。中村の旅行路線は基本的に阿緱廳の管轄範囲内であるため、佐藤庁長から大いに利便を得られたのであろう[252]。

主人公の「余」は「生蕃袋と傘一本」（第 1 回）の軽装で台湾旅行を始める。「生蕃袋」とは、麻糸で細かく綺麗に編んだ丈夫なもので、四隅に太い紐をつけて、背に負える袋である。「生蕃袋」を背負った「余」の眼中で、台湾は実に険悪の地である。たとえば、第 7 回「生蕃より水牛」は最も面白い例であるが、この回では、台湾の水牛は子供より大人のほうが嫌い、「特に内地人に深い敵愾心を持っているらしく」、「領台以来同胞の此害に遭った人は決して少なくない」ため、「生蕃よりも却って水牛にご注意ください」と述べられる[253]。それはもちろん如何にも誇大な描写であるが、「余」の眼中の台湾は決して「南方の楽土」ではないことがわかる。そして、「不毛の地」の台湾の中で、「余」が最も恐れるのはやはり台湾原住民である。その旅行動機について「殆ど蕃地に取り込まれているのを考えると、又不安な何物かに、其の好奇心が多少萎まないでもなかった」（第 1 回）と「余」は自ら述べる。しかし、中村の見た台湾原住民像は、「蕃童」から始まったのである。

> …総じて骨格は土人の子供よりも遥かに優れて、その圓みを持った肩、其光を帯びた眼付、小さいながらにも既に何処やらに剽悍な気風の漲っているのが見える。同時に撫育の仕方一つに由っては、土人よりも遥かに忠直な、且怜悧な人間に作り上ることが出来るようにも思われた。（第 6 回）

「蕃地」に入った「余」が最初に見た「蕃人」は、「蕃童学校」の子供である。

---

[251]1909 年の台湾地方制度改正は、当時の台湾地方に二十庁を十二庁に合併し、その改正で蕃薯藔庁と恆春庁を阿緱庁に併入した。佐藤謙太郎の任命に関しては不明であるが、台湾総督府文書「阿緱廳長佐藤謙太郎加俸十分ノ五」（1909 年、11 月 1 日）から、中村の台湾旅行に至るまで、佐藤は阿緱廳長として数年間に勤めていたことが確認できる。なお、本稿で使用された台湾総督府文書は、台湾・中央研究院と国史文献館のオンラインデータベース「臺灣總督府公文類纂查詢系統」（http://sotokufu.sinica.edu.tw/query.php）から引用する。キーワード：阿緱廳長。

[252] 「内地」の作家が植民地官庁の力を借りて山地に取材するのに対して、官庁が作家の筆を借りて植民地建設の実績を対外的に宣伝しようとする、というのは 1910 年代以降の一種のパターンとも言える。後の佐藤春夫、中村地平もこのパターンに従う者である。

[253] 当時の新聞では台湾牛の記事もあるが、主には経済的観点から台湾牛を述べたものである。例えば、南暁生「台湾の牛」（『台湾日日新報』1910 年 1 月 25 日）はこの類の記事である。

その気質や性情などが、「余」には深く印象に残る。更に、如何に「撫育」を通して、原住民を「理想的な人間」に「作り上る」かを、「余」は考えている。「余」が言うのは、一種の「人間改造論」である。後述するように、両作品は「生蕃の進化」という可能性をめぐって原住民への思考を展開していく。ここで最も興味深いのは、「余」の観点は台湾「土人」――即ち台湾漢民族と比較して得たものであり、その比較から「余」は「蕃人」の方に親近感を感じる、という点である。

> 読んだのはたしか富士山の事を書いた文であったと記憶している。日本語の音調が中々旨い。今まで平地の公学校で聞いて来た土人の子供の発音に比べると非常に旨い、余は此時偶と台湾の蕃人の方が土人よりは、其人種並に言語系統の上に於て、遥に我日本人に近いのではないかと考えたが、其後蕃地に入るに及んで益此考えを確めるに至った。（第 6 回）

「蕃童」たちの朗読の声から「言語系統が近い」という推論も出せるほど、「余」は漢民族より一層の親近感を得ている。邱の指摘によると、漢民族より原住民の方が「遥に我日本人に近い」という中村の見方は、台湾総督府民政部蕃務本署の『蕃童教育意見書』とある程度に合致している。意見書によれば、漢民族と日本人は異なる民族で、それぞれの歴史を持つため、漢民族を急遽に同化するのが至難の業であるが、教育の実行とともに、原住民を「純粋なる日本人」にするほうが難しくない。中村は山地を旅行するにあたって、植民地官吏から大いなる助力を得たため、彼の認識も官吏の影響を受けて、そこに意見書と合致するところが生まれたのではないかと、邱は推論する[254]。中村の認識が当時の植民地官吏の影響を受けているという点など、基本的に邱論に賛成するが、しかし、少々異論を唱えたいところがある。

まず、中村の「蕃地」旅行と「鵞鑾鼻まで」の発表は 1913 年であるため、何らかの情報交換はあったかもしれないが、1914 年 10 月に公表された『蕃童教育意見書』は中村の参考にならないと思われる。また、『意見書』は「原住民児童への教育」という課題に対して、作者そして蕃務本署の官吏でもある丸井寺治郎が作った報告書であり、つまり中央官庁の官僚による「原住民の初等教育制度への建言」である。中村は地方官庁の助力を得ており、その影響を受けた可能性が高いが、中央官庁とは遠縁的ではないか。

一方、「余」が言った「遥に我日本人に近いの」は、「人種」より主に「言語系統」を指すのではないかと考えられる。事実、漢民族の言語よりパイワン語が遥

---

[254] 前掲論文「中村古峡在大正初期的殖民地行旅：＜到鵝鑾鼻＞、＜來自蕃地＞的南方風情與蕃地體驗」、177 頁。

かに「音楽的に余の耳に響いた」（第 6 回）と、「余」は後に賛美する。事実、1912 年『台湾生蕃種族写真帖　附・理蕃実況』は、パイワン族の児童教育現状を記しているが、その中の「上パイワン（枋山蕃）族」の章によると、当時の「蕃務」官吏が「蕃童」を集めて、熱心に「極初等」な教育を授けている。また、近隣のツアリセン族に対する大討伐の影響が要因となり、当地の原住民は「現時一層争闘馘首等の悪弊を矯め我が官命に服膺し、只管各自其業」に励んでいる。その結果、「蕃童」は「武芸を励むの外によく勉学を好み」、「稀に下山して公学校に通学するもあり」、漢民族の子供と比べても「遥に発音明晰なる」ものとなっていくとしている[255]。換言すれば、中村の認識は中央官庁の「教育理念」の影響を受けたというより、地方官庁の「統治実績」を見た結果だと考えられる。

中村の見た原住民は子供だけではない。「蕃童学校」の見学終了後、「余」は旅行の途中で「四五人の蕃人」と出会った。「余」の傍を通り越す時、彼らは「覚束なげな言葉」で「今日は」と言いながら、一人一人丁寧に頭を下げた。「余」の見た「蕃人」たちは「依然として」「琉球の漂民を驚かせた」格好であり、彼らの親兄弟の中には「琉球人の頭を刎ねた者」も台湾出兵で「討たれた者」もいるかもしれないが、彼らは「そんなこと」を「最早一切忘れた顔をして」、「今只管に帰路に急ぐ」（以上第 9 回）のであった。以上の内容から「植民化／文明化」の力は「野蛮性」を改造できると邱は指摘しているが 、一点だけを付加したい。それは、「一切忘れた顔」の大人は学校の「蕃童」と呼応し、帝国日本による「人間改造」の可能性を暗示するのではないかという点である

原住民への観察のほかに、中村は本作の後半で、前述の琉球漂流民殺害事件と台湾出兵の詳細を述べる。邱によれば、台湾出兵は近代日本初の海外戦争であり、近代の日中外交史上の一大事件でもあり、おそらく中村の目的は改めて歴史事件の経緯を客観的に紹介しようとするのであったと言う。そして日本の民間人もこの事件を通して台湾を認識し、「蕃人」の「馘首」に深い印象を受けたと評している[256]。

邱論をふまえて、ここではもう一度、中村の創作動機を考えたい。それは、やはり台湾原住民に対する中村の興味によると考えられる。なぜなら、事件に関する中村の叙述において最も興味深いのは、「余」は「明治七年の征台役が牡丹社蕃人の残虐に基いたとは誰も知っている所である」が、事件の経緯を「知る人殆ど無い」（第 8 回）と評してからである。換言すれば、1910 年代の日本における台湾認識に、事件の詳細はもはや忘れられてしまったが、台湾原住民の「残虐」

255　台湾総督府蕃務本署認可、成田写真製版所『台湾生蕃種族写真帖 ： 附・理蕃実況』大空社、2008 年、84 頁。

256　同上、178～179 頁。

のみが人々の記憶に深く根付いているということを、「余」は「証言」しているのである。琉球漂流民殺害事件と台湾出兵は、近代日本と台湾原住民の最初の「接点」でもあるため、中村は両事件を紹介することによって、その接触の「原点」に対する記憶を「喚起」しようとしたのではないか。

鵞鑾鼻灯台の遊覧に関する記述を以て、この紀行文は終わっている。鵞鑾鼻灯台とその周辺が台湾最南端の特徴的な場所だという認識は、日本統治初期にすでにあったようである。1901 年『日本名勝地誌・台湾編』や 1916 年『台湾名勝舊跡誌』にも、灯台の記述を載せている。しかし、鉄道部編纂の 1908 年『台湾鉄道名所案内』、1912 年『台湾鉄道案内』、1916 年『鉄道案内旅行』には鵞鑾鼻に関する記載がない。1921 年『鉄道案内旅行』に至るまで、灯台の所在地が簡略に記されるようになった[257]。それは 1908 年に開通された縦貫鉄道は高雄までであり、道路が整備されて小型自動車の運行が可能になった 1920 年代の後半以降、鵞鑾鼻が実際に観光地になったためである[258]。

しかし、1910 年代前半は、台湾の島内旅行がまだまだ不便な時代である。中村の眼中にある灯台は観光地というより、むしろ帝国統治の実績と言えよう。「余」の話によると、この灯台は清国政府が欧米技師を依頼し、巨額な工費をかけて建設したものである。台湾領有の際に、清朝の兵士の破壊で灯台の一部が壊われたが、日本政府が巨額な費用を出して修繕した。「余」は修繕された灯台を見上げると、「東洋一の大灯台」の「白色不動の我が灯光は、宛ら巨人の眼のように輝いて、愈厳かに帝国絶南の海角を照している」と述べている（第 16 回）。灯台へ描写はまるで植民地台湾に対して、中村が下した脚注のようでもある――「灯台」として帝国の南境を見守るのは、まさに植民地の「任務」である。

厳密的に言えば、本作の原住民表象は表面的描写にとどまり、深く描くことはできなかった。しかし、『東京朝日新聞』、『臺灣日日新報』などの当時の新聞紙上に載せる、「蕃情」に関する公式的報道と比較すると、この紀行文は猟奇的であり、一般人の目線により近いものではないか。一方、中村は作中で原住民の「改造」する可能性と「残虐の本性」という二つの着目点を作り、原住民に関する新しい思考を展開していった。この二点は、後の小説「蕃地から」にも現われた。

四、「蕃地から」――「文明化」の可能性

「蕃地から」は友人への書信という形で台湾南部の原住民村落を描く作品であり、一九一六年の『中央公論』臨時増刊号に発表された。作品は六章に分かれ、

---

257 曽山毅『植民地台湾と近代ツーリズム』青弓社、2004 年、210~211 頁。

258 同上、211 頁。

大筋は以下のようである。

一時的な好奇心で「僕」は、台湾南部の公学校長のＩの協力を通して山地に入り、高士佛（グスフ）社の公学校において旅行の経歴を友人のＫ宛に書く。それ以前にも、鵞鑾鼻の灯台においてＫに手紙を送っている「僕」は、灯台から公学校までの経歴を今回の手紙に書いたのである。「僕」はＩの通訳を通して、テボ・サドガイという「蕃人」と語り合う。テボはロンドンで開かれた日英博覧会に「出品」され、英国に半年間ほど滞在していた「生蕃」の一人であり、「僕」はテボから「蕃人」の視点から見た英国事情を聞き取る。その後、体に不調を感じた「僕」は草埔後というところで一夜を過ごし、翌日には回復し出発する。しかし、駐在所の人力が足りないという理由から、日本語が通じない「蕃人」の案内となってしまった。そのため、自分の首が案内役の「蕃人」に狙われるのではないかと危惧するなど、「恐ろしき一時間」を過ごすこととなったが、無事に内文（うちふみ）社の頭目の家に着く。「蕃地」に入ってから三日目、「僕」は０警部の案内を通して、内文社の頭目の家と宝物、更に「生蕃の首棚」を見学した。その後、「蕃地」より東京に帰ってから、半年も経たないうちに、「僕」は恒春地方の「蕃社」が銃器引揚で駐在所を襲撃し、警察官数名および家族を殺害した新聞記事を読んだ。蜂起した「蕃社」の大半は「僕」が当時遊んだところのもので、当時に案内してくれた警察官も遭難した。「僕」は「斯る危険の境地に」「尊敬すべきわが同胞」が「日々その職務に忠実に働いている」と思うのであった。

河原功によれば、英国文明を熱弁するテボ・サドガイは、近代文明に対する原住民の憧憬を表象し、日英博覧会の原住民の「出品」も総督府の計算通り、原住民を懐柔するうえで、大きくプラスに作用した。しかし、原住民社会は、総督府の思惑どおり支配できるほど単純なものではない。事件の原因でとなった銃器引揚は、第五代台湾総督・佐久間左馬太の「理蕃政策」における重要な一環である。1910 年から 15 年まで、佐久間は従来の懐柔策を武力鎮圧の「五箇年理蕃計画事業」に変えた。銃器引揚は原住民の主要な生活手段を剥奪し、彼らの狩猟生活中心の体系を崩したと同然である。それに対する原住民の不満と反抗は「暴動」という形で露呈したわけだが、中村の視点は「あくまでも支配者たる内地人の目で原住民を見ているだけ」、その過程について無考察、無理解であると、河原は続けて評している[259]。

邱は当期の『中央公論』の主旨を考察し、「蕃地から」の性格を論じた。『中央公論』は毎年 7 月中に臨時増刊の特別号を作るのが恒例であった。1916 年の特

[259] 前掲論文「日本人の見た台湾原住民――中村古峡と佐藤春夫」、126～130 頁。

別号は「世界大観号」であり、その主旨は小説あるいは脚本の刊行を通して、日本の読者に「世界を覗かせよう」というものであった。したがって、世界大観号はエキゾチズムを基準として九つの作品を採録し、その内容は、日本と密接的関係を持つ帝国および日本の新領土を背景に、異国情趣や珍奇趣味溢れるものとなっていた。「蕃地から」はその中の一つである。それらの作品は編集者の要請や特別号の主旨に応じて、作者が書いたものであると、邱は推測する[260]。

邱論をふまえて考えてみれば、前述のように、「蕃地から」は中村が不調な文筆生活を経て、三年ぶりに書いた台湾関連作品である。すると、中村は編集の要請を受け、世界大観号という絶好の舞台に、台湾経験を「再生」することによって、再起を求めた可能性が高い。後述するが、晩年の古峡も、この両作品に対して高い期待を持っていた。では実際に作品分析に入ってみたい。

> 余は此帰路に途を恒春半島の東海岸に出て、蚊蟀より再び山に入りて、高士佛、牡丹、草埔後、内文、草芒の各蕃社を訪ね、所謂恒春蕃地の殆ど全部踏破したのである。其を書くと余り良くないから、一先此処にて筆を擱く。(「鷲鑾鼻まで」第 16 回「東洋一の大灯台」)

これは「鷲鑾鼻まで」の後書きであり、そこから中村は帰り道に再び「蕃地」に入ったことがわかる。前述したように、中村の旅行動機は、彼の好奇心のほかに、婚約者である小畑照世とその家族の面会のためでもあった。「蕃地から」は、友人 K に対する書信形式で書かれたものであり、K は小畑照世の可能性が高い。「蕃地から」では、主人公の「僕」が「此の前」鷲鑾鼻の灯台から K に手紙を出したという話がある[261]。両作品の内容を対照すると、「蕃地から」で描かれているのは「鷲鑾鼻まで」の後の出来事だとわかる。そこから、題名に含まれる「まで」と「から」は時間軸が逆になっているだけで、実は両作品を連続的作品とした中村の創作上の意図が読み取れ、両作品が姉妹編的関係だと確認できる。では、「蕃地から」に現われる「蕃人像」はどうだったのか。

> テボ・サドガイは洋盃(コップ)を下において台湾を出た時からのことを話し始める。
>
> (中略)英国に居る間に台湾へ帰りたいとは思わなかったかと、I 君が尋ねると、少しも帰りたいとは思わなかった。却って妻子を台湾から呼寄せて何時までも向うに住んでいたかったと答えたそうだ。「滞英中、彼等は何に一

---

260 前掲論文「中村古峡在大正初期的殖民地行旅:<到鵝鑾鼻>、<來自蕃地>的南方風情與蕃地體驗」、183～184 頁。

261 中村古峡『変態心理の人々』大阪屋号書店、1926 年、218 頁。

番驚いたでせう」と僕が重ねてＩ君に問を出すと、Ｉ君は直ぐ又其れをテボ・サドガイに伝えて呉れた。其れに対して彼は身振りや手真似を加えながら半時間も熱心に雄弁を振った[262]。

作中では、「先年日英博覧会が開かれた時、此地方の蕃族から二四名の生蕃が出品（？）されて半年ほど彼地に滞留して居た」と述べられ、更に主人公の「僕」が公学校長 Ｉ の通訳を通して、その中の一人であるテボ・サドガイと語り合う場面が描かれている。

日英博覧会は、1910 年 5 月中旬から 10 月下旬までロンドン郊外で開催され、貿易相手国のイギリスとの同盟関係を更新することを背景に、両国の和親関係を牢固なるものとする目的も持っていた。日本はといえば、単に通商貿易の拡大のみならず、自国の風俗・文化・産業などもヨーロッパに伝えようとしていたが[263]。更に、自国の植民地の風俗を展示することによって、その支配権や国力の近代化を見せつけるという目的も持っていた。植民地風俗の展示は会場の 23 号館「東洋館 the Palace of the Orient」で行われ、台湾、満鉄（南満州鉄道会社）、韓国総監府、広東政府の出品によって構成されたものである。その中で台湾関連施設は、植民地展示の全体の 3 分の 2 程度も占めていた[264]。パイワン族はその中の「台湾村」という施設で「出品」されており、日常生活を公衆の前で演じていた。もちろん、「出品」された原住民は「展示品」の一部である。

「僕」には最も目立つのがテボ・サドガイの「長い耳」である。「長い耳」とは、特製の耳飾りで耳の形を長大のようにするという、パイワン族の慣習である。邱の指摘によれば、「長い耳」は一種の「身体の表現」であり、博覧会に現われた「原始のメタファー」でもある。一方、テボ・サドガイと日英博覧会についての描写は、台湾原住民の部落における原始的雰囲気と博覧会やイギリスの近代的都会生活を並列し、二重の異国情趣を表現している。古峡はテボという人物像を通して、「文明」と「未開」の対峙を表現し、世界大観号の主旨に沿わせたのである[265]。

ここでは邱論と少々異なる視点で考えたい。作中では、テボ・サドガイは「展

262　同上、227~228 頁

263　楠元町子「日英博覧会における日本の展示」『愛知淑徳大学論集．文学部・文学研究科篇（39)』愛知淑徳大学文学部、2014 年、19 頁。

264　山路勝彦「日英博覧会と『人間動物園』」『関西学院大学社会学部紀要（108)』関西学院大学社会学部紀要、2009 年、8 頁。

265　前掲論文「中村古峡在大正初期的殖民地行旅：＜到鵝鑾鼻＞、＜來自蕃地＞的南方風情與蕃地體驗」、190～191 頁。

示品」として描かれていない。綺麗で立派な街や家、畑が少ないのに沢山ある蜜柑や野菜物、腰細い英国婦人、地下鉄道、大きい身体を持つ巡査、探照灯、飛行機――テボ・サドガイは「文明」世界のすべてに驚き、その人物像から見えるのは一人の「蕃人」ではなく、新しい世界を認識し始め、無限な好奇心を持っている者である。テボ・サドガイの人物像を通して、中村は一つの課題を提起したと思われる。それは、「鵞鑾鼻まで」の「人間改造」論の続きとして、近代文明を前提に考えられた台湾原住民の「可能性」である。最も興味深い点は、テボが妻を呼んでイギリスに永住したいと話したところである。そこから、「蕃人」が「文明人」と共存する、更に近代文明を受容する可能性が読み取れるのではなかろうか[266]。

事実、1910 年の『台湾日日新報』によれば、「出品」されたパイワン族の中には早く帰りたがった者もいたが、イギリスの生活に憧れ、いつしか「サンキュー」とか「モーニング」とか喋り、「日本語より英語の方が覚えやすい」と自慢した者も現れたり、「跣足と裸体が恥ずかしい」と悟う者まで現れた。さらにロンドンの流行が好きで「靴を買って呉れと監督者に迫る」女も出た[267]。つまりテボ・サドガイという「文明」の世界に好奇心を持つ人間像は中村の創作ではなく、当時、実在した人物像なのである。

博覧会とは一九世紀以来、近代の先進国や植民地帝国の力を象徴した「お祭り」のようなものである。一八七七年の第一回内国勧業博覧会以降、日本政府は国内で数多くの博覧会を開き、植民地と統治地域の朝鮮・台湾そして満州でも博覧会を主催した。 博覧会で植民地の住民を「出演」させるのは、まるで帝国の力による「コレクション」を展示するようであり、英日博覧会に「展示」されたパイワン族も例外ではなく、近代日本の「コレクション」の一つとも言えよう。

しかし、「余」の目の前に現われたテボ・サドガイは博覧会の「展示品」という枠を脱して、近代の文明大国イギリスを確実に経験した者である。イギリスは近代随一の先進国とも言え、日本の近代化の見本の一つでもある。そうすれば、ある意味でテボ・サドガイは「余」より更に多くの「文明体験」を持つ者である。テボ・サドガイという人物像を通して、「蕃人」の「文明化」という課題を、中村も読者も恐らく考えずにいられなかったであろう。事実、1910 年代の台湾の

---

[266] 面白いなのは、この可能性は日本の「文明」教育によるものではなく、テボ・サドガイ自身の「熱意」による、という点である。もちろん、日本政府の「助力」も不可欠である。事実、総督府はパイワン族をロンドンに送るにあたって、彼らの不平不満が生じないように、細心の注意を払った。詳細は前掲論文「日英博覧会と『人間動物園』」（10 頁）参照。

[267] 田原生「日英博の生蕃館（上)」『台湾日日新報』1910 年 9 月 30 日。

新聞紙にもこの類の議論が残されている。

> 彼の南部牡丹社の如き獰猛無比と称せられたる時なきに非ず、しかも英国人の熱心なる化育の結果我が領有前に於てその頭目の如き全く旧習慣を棄て将さに新生活に入らんとする者ありと聞く、即ち其悪に強さ更に善に強さを証せざるに非ずや、若し夫れ其性情を根本的に研究して十分なる化育の途を講せば学術の種族智識の種族としては幾十百世代を要するとするも労働力役の種族として生産界に之を利用すること必ずしも難きに非ざるべし[268]。

『台湾日日新報』の論説「生蕃の前途」（1910 年 9 月 29 日）は「五箇年理蕃計画事業」およびその後に「十余万の生蕃」を如何に「化育」、「利用」するかに関して、以上のように結論を下した。即ち中村の渡台以前、日英博の開催と同時に、パイワン族の「進化」の可能性に関する議論はすでに始まっていたのである。牡丹社の「蕃人」はすでにイギリスの「化育」を受けており、その性情を「善導」すれば、労働力として利用することができ、更に遠い将来で「智識の種族」となる可能性も存在する。

しかし、おそらく中村は上記の論説のような、楽観的な考え方の持ち主ではなかった。なぜなら、中村の思考の根底にあるのは「野蛮」と「文明」の二項対立で、そこから一つの問題が出てくる。即ち、「野蛮」と「文明」の関係は表裏一体的であるため、「野蛮」と「文明」の一線を越える決め手は、イギリスの近代文明という「物質面」のみならず、「精神面」の問題も論じなければならない。

したがって、作中では「蕃人」の可能性のほかに、もう一つ提起されたポイントが浮かび上がってくるのであり、それは原住民の「残虐性」である。旅行の途中に、「僕」は案内役の「生蕃」と「恐ろしき一時間」を過ごした。案内役の「恐ろしく眼の鋭い一人の生蕃を見た時」に、「僕」は「一種の寒気」が全身に走ることを「意識せずにいられなかった」。その案内役の男は年頃が「四十五六とも見え」、「額が広い、頬の大きい、肩幅のがっしりとして」、「腰には勿論例の蕃刀を一本ぶら下げていた」が、「其の態度が如何にも鷹揚且つ落着」き、「何処かに人を威圧する一種の風貌を具えている」者である。「僕」は「生蕃」の馘首が必ず後方から襲うという話を聞いていたから、後からついてくる案内役の男に対し、一層無気味感を抱いてしまう。

この案内役の「蕃人」の形象と「僕」の恐怖心は、1910 年代の台湾原住民へ認識や想像を集約的に表象するものだと考えられる。邱の指摘によると、小説の文脈からみれば、パイワン族に対する中村の印象は前述の両事件を継承した先

---

[268] 論説「生蕃の前途」『台湾日日新報』1910 年 9 月 29 日。

入観である[269]。しかし、それのみならず、中村が読んだ『台湾案内』の中では、パイワン族を「矮灣」と記し、「牡丹社ヲ中心トシテ南大烏山以南ノ蕃民」は「南方第一ノ猛悪族ナリ」と評していた[270]。「僕」の恐怖心は当時の原住民認識にも由来し、根拠がないとは言えない。

「僕」は後に内文社の頭目の家を見学に行き、馘首された者の首を並べる棚、いわゆる「生蕃の首棚」も見た。首棚に並べられた頭蓋骨の痕跡を見て、「僕」は「蕃刀とは其れほど鋭利な物かと、今更又恐ろしくなって来た」と感じる。そして「僕」のこの恐怖心は、「東京へ帰ってから半年を経つか経たないうちに」、銃器引揚の件で恒春地方の「蕃社」が駐在所を襲撃し、警察官およびその家族を殺害した記事となって、現実のものと化して現れたのである。

「僕」の読んだ記事はどういうことであろうか。中村は1913年1月で台湾旅行に出たため、「僕」の話によると、その事件は同年の6月以降に発生したと推断できる。しかし、台湾文学研究者の呂美親によれば、中村が読んだのは、1914年10月23日『台湾日日新報』の記事「凶蕃暴動真相」であり、その事件は「浸水営事件」もしくは「南蕃騒擾事件」と呼ばれるものである[271]。当時の『臺灣日日新報』(以下は『新報』と略す)を参照すると、「南蕃騒擾事件」は同月9日に発生し、14日の夕刊(実際は15日に発刊)に、「枋寮支庁下惨事　凶蕃殺害多数警官」というタイトルの漢文記事で初めて掲載された。同記事では、「当社蕃人為本島蕃族中最進化者也。暴挙原因。目下尚属調査之中」と記されている[272]。同紙は15日や23日に、朝刊記事「南蕃地の惨劇」や「凶蕃暴動真相」で事件の経緯を詳しく紹介した。要するに、阿緱庁の下の枋寮支庁所管のリキリキ社は銃器押収に反抗、支庁を襲撃し、事態は更に拡大して枋山、潮州およびほかの支庁にも影響が及んだ[273]。それ以降、『新報』はほぼ毎日、事件の進捗を報道した。30日の朝刊記事「長官恒春出張　一日帰府予定」では、当時の内田嘉吉民政長官(後に第9代台湾総督に就任)は29日朝、直通列車で高雄まで着き、船に乗り換えて枋寮に上陸し、枋山や恒春を巡視したことも記されている[274]。つまり、当時の総督府はこの事件を相当に重視したのである。

269　前掲論文「中村古峡在大正初期的殖民地行旅：＜到鵝鑾鼻＞、＜來自蕃地＞的南方風情與蕃地體驗」、193頁。

270　前掲書『台湾案内／台湾南支事情』、66頁。

271　黄美娥編『臺灣原住民族関係文学作品集(1895―1945)』台湾行政院原住民族委員会、2013年、326頁。

272　『臺灣日日新報』1914年10月14日夕刊第三版。

273　『臺灣日日新報』1914年10月15日、23日朝刊第三版。

274　『臺灣日日新報』1914年10月30日朝刊第三版。

しかし、この事件は植民地支配の一大事と言えるが、『新報』のヘットニュースにもれなかった。それは、ちょうど当時、第一次世界大戦が始まったからであった。1914 年 10 月は、恰も日本が中国山東省の利権を獲得するため、ドイツに宣戦を布告し、イギリスと連合軍を組成し、青島の要塞戦を展開した時期である。そのため、10 月の『新報』のヘッドニュースは、ほとんど第一次世界大戦の欧州戦線もしくは青島の戦いに関するものであった。

一方、当時の台湾原住民に関する新聞記事は、近代日本による「蕃人」への「文明開化」作業の諸様相を示している。1914 年は第五代台湾総督佐久間左馬太による「五箇年計画理蕃事業」の末期であり、この事業がいわゆる「隘勇線」の縮小を通して、山地を含める台湾全島の統治の目的を達成するための軍事行動であり、事件を引き起こした「銃器押収」のその重要の一環である。しかし、武器の収奪はただの「理蕃」の発端のみである。1914 年 10 月の『新報』を見ると、当時の例の「蕃情」報道[275]や「南蕃騒擾事件」関連記事のほかに、「呉鳳建碑式」（26 日夕刊）や「観光蕃」（27 日朝刊）の記事もある。前者は清朝の漢人通事呉鳳の記念碑の建立事業、後者は桃園と新竹の台湾原住民の台北観光旅行に関する記事であり、いずれも総督府による「教化」の一環である[276]。つまり、総督府は様々な方法を通して、「蕃人」を「文明化」する作業が試みられている。この作業を通して、近代「文明」の物質的世界のみならず、「蕃人」の「残虐性」を「化育」できるかどうかこそ、「文明人」に転身するカギであろう。

五、おわりに

紀行文「鵞鑾鼻まで」は、まず 1910 年代の台湾山地統治の現場の様子を描き、原住民の「人間改造」の可能性に言及し、次に歴史事件を振り替え、近代日本と台湾原住民の接触の「原点」とそれに対する「記憶」を喚起しようとし、最後は灯台の遊覧を通して、帝国日本の植民地支配を肯定した。その後編としての「蕃

275　当月の『臺灣日日新報』を参照すると、ほぼ毎日にも「理蕃」事業の進捗を報道する記事がある。

276　簡単に言うと、以下のようである。前者の記事は呉鳳の「神格化」を通して教化の目的を達する、いわゆる「呉鳳神話」の建立の一環である。詳細は駒込武『植民地帝国日本の文化統合』（岩波書店、1996 年）の第三章「台湾・1910 年代―差別の重層的な構造」参照。後者は当時の原住民を台湾の都市部さらに日本本土に「見学」させ、近代文明の「力」を以て威服させる政策である。詳細は鄭政誠『認識他者的天空 ： 日治時期臺灣原住民的觀光行旅』（博揚文化事業、2005 年）や阿部純一郎『〈移動〉と〈比較〉の日本帝国史 ： 統治技術としての観光・博覧会・フィールドワーク』（新曜社、2014 年）参照。

地から」は、原住民の「文明化」という可能性を提示するが、その結末は再びその「野蛮性」を提起した。「馘首」への恐怖心は「僕」の杞憂ではなく、植民地に上演されている現実である。「蕃人」の「可能性」と「残虐」は、両作品を共通する主旨だと考えられる。われわれは、この両作品を如何に評価すべきなのか。

漱石は中村宛書簡（1916 年 8 月 24 日付）で、「仮寝の後」と「狂人の手記」という中村の原稿を厳しく批評したが、「先達て中央公論に出た蕃人の事を書いたものは面白う御座いました」と褒めた。言い換えれば、「蕃地から」はその漱石さえも好評した作品となる一方、1945 と 46 年の間に、長男と次男の死を経た中村は、再び創作欲を起す。曽根によれば、中村は「『東朝』に連載された台湾旅行記などをまとめていたので、希望通り文筆生活に入ったものと思っていた」が、事情で未実現した[277]。なぜ、「台湾旅行もの」は漱石の好評を得ることができ、また、中村自身も厚く期待しているのか。漱石の好評価は、ただの「鞭と飴」、つまり責めた後の慰め言葉でしかなかった可能性もあるが、両作品を 1910 年代においてみれば、それなりの価値がある。

中村が台湾旅行に出た頃は、恰も「五箇年計画理蕃事業[278]」の最中である。『理蕃概要』の「蕃地警備員ノ死傷」の統計によると、1912 年（大正元）に出た死者は 606 人、傷者は 513 人、合計 1119 人である。いずれも 1904 年（明治 37）以来、歴年の統計での最高の数字である。同表によると、1904 年～1912 年の八年間に出た死者は 1770 人、傷者は 1538 人、合計 3308 人である。数字から見ると、1912 年の死傷者は八年間の三分の一を占めている[279]。戦死した警察官と隘勇のため、総督府は 1912 年 12 月 3 日に、台北の本願寺で「蕃界殉難者追悼法会」も行った。また、中村の渡台当時、1913 年 1 月の『台湾日日新報』は「各庁下の近時の蕃情」という欄を設け、「隘勇線小史（上）（下）」（1 月 5 日と 6 日）という特別記事もあり、当時推進中の「理蕃」事業を報道した。換言すれば、台湾原住民の「残虐」はただの「過去形」ではなく、「現在進行形」でもある。

一方、当時は「理蕃」事業を紹介する「討蕃劇」が流行していた。『台湾日日新報』の記事「討蕃劇の内地興行」（1913 年 7 月 6 日）によって、「至難なる討

277　前掲論文「異端の弟子--夏目漱石と中村古峡（下）」、59 頁。

278　1907 年 1 月（第一次）と 1910 年 10 月（第二次）に、「隘勇線」の推進を中心として、台湾総督府によって行われていた大規模的な武力討伐である。詳細は第一章第二節参照。

279　台湾総督府民生部蕃務本署「理蕃概要　第八附表　蕃地警備員ノ死傷」『理蕃概要』（『明治後期産業発達史資料　第 592 巻、第 11 期：外国事情篇（VII）（含旧植民地資料））』から引用する。同書は龍渓書舎によって 2001 年に出版されたもの）。「蕃地警備員」とは、警視、警部、警部補、巡査、巡査補、隘勇、其他を含めるものである。

蕃事業」を「母国人」に紹介するため、台湾正劇団は観光を兼ねる「生蕃」家族一行の七名と、「討蕃状況」および「領台前後における生蕃の進化」などの「統治の成績」を「内地」に出演し、大好評、大人気を博した。同記事によって、「討蕃劇」は東京をはじめに、京都・大阪・神戸より九州に至るまで、8 月上旬から 12 月まで全国二十二箇所に開演する予定で、「恰も討蕃隊の大活躍」の時でもある。植民地に「上演」されている、「五箇年理蕃計画事業」という名をつけた現実的惨劇は、日本で娯楽劇として演じられるのが如何にも諷刺的であろう。逆に言えば、「討蕃」に対する日本国民の興味は、中村が「鷲鑾鼻まで」と「蕃地から」を創作する動機の一つでもあろう。

1910 年代の前半は、植民地台湾における「討蕃」事業はまだ進行中で、基礎的交通建設も完成したばかり時期である。そのため、当時に台湾へ旅行するのは、まだまだ難しかった。こんな時期に台湾の山地で取材・創作すること自体、まず一種の価値が有すると考えられる。もちろん、両作品における中村の視点はかなり偏狭的であるが、作中に現われた彼の思考は、当時の台湾原住民への認識を反映していたのではないか。また、両作品の内容は当時の新聞紙上の公式的報道と別にして、読者に新鮮的感覚を与えたが、作中の認識は新聞記事によって構築された範囲からも脱していない。むしろ、現地で旅行する民間人の視点で、新聞記事と相互的に補完した関係に近いとも言えよう。すると、中村のこの両作品は、1910 年代の台湾原住民への認識や思考を反映し、一種のルポルタージュとも言えよう。

第四節　「異郷」の風景――　佐藤春夫

一、はじめに

1920 年の夏、佐藤春夫は 6 月末から 10 月上旬にかけて、3 か月に渡る「植民地の旅」に出た。中国の福建省を含む異郷の植民地台湾への初旅を機に、佐藤は十数篇の小説、紀行文、随筆、詩などを書き下ろした。谷崎潤一郎（たにざきじゅんいちろう）の夫人・千代への恋を契機に決行されたこの厦門・台湾旅行によって生まれた植民地作品群はきわめて多元的であり、佐藤春夫の文学や思想の変貌を促すものであったと言えよう。近代文学研究者の姚巧梅も指摘しているように、佐藤における「憂鬱なる精神の成長過程の中に」「台湾体験を位置づけること」がなし得るのだ[280]。

異郷・異文化の体験を生かして書かれた植民地小説群は、主に漢民族をテーマとしてなされたものである。その中で、台湾原住民を描いたのが「魔鳥」（1923 年）と「霧社」（1925 年）である。苦しい恋愛に悩んでいた佐藤は、知識人としての冷静な目線を以て山地統治の問題を観察し、その旅の経験を自分なりの作品に化した。本論ではこの二作を以て改めて植民地の旅の意義を捉え直し、佐藤の植民地作品群における台湾原住民記述の意義を求めたい。

二、外部に立つ「旅人意識」

佐藤を異郷の旅へと導いた直接的な理由は、谷崎潤一郎の夫人・千代への恋である。近代文学研究者の十返肇によれば、佐藤は一九一七年に谷崎潤一郎と知己となり、翌十八年に谷崎の推薦で「李太白」を『中央公論』に発表して以来、谷崎の家を毎日往来していたといわれる。その時の谷崎は、妻の千代との婚姻生活が円満ではなかった。自身もまた同棲生活の不順に悩んでいた佐藤は、谷崎の夫婦生活を傍で詳しく見ていたこともあって千代に深く同情した。佐藤の理想的な妻は千代のような優しい女性であったため、その思いは同情から次第に恋情に移っていた。自分の妻と他人の妻という二人の女性の間で悩み揺らいだ佐藤は極度の神経衰弱となり、一九二〇年の二月に実家の和歌山に帰省し、同年六月の末から三か月に渡る「植民地の旅」に出た[281]。

---

[280]　姚巧梅「佐藤春夫文学における台湾の位置――植民地小説をめぐって」『解釈』47 巻、1・2 号、解釈学会、2001 年、54～55 頁。

[281]　十返肇「谷崎潤一郎・佐藤春夫夫人譲渡事件」『文藝』13(2)、河出書房、1956 年、139～140 頁。

近代文学研究者の邱若山によれば、全体的に見ると植民地作品群には恋を基調として、異国情趣、そして社会・政治・民族問題に対する関心という三つの筋が交錯しているという[282]。植民地作品群はそのすべてがいわゆる小田原事件以後の創作であり、それゆえ小説であれ紀行文であれ、そこには恋の基調が色濃く現れていると邱は指摘する[283]。恋という主題は佐藤の支那趣味や異国情趣と相俟って、「星」や「女誡扇奇譚」などの中国の古典趣味に富んだラブ・ストーリーを生み出した。

また、邱の言う「社会・政治・民族問題に対する関心」とは、具体的に言えば「植民地批判」と「文明批評」を展開した作品を指す。この類の代表作として挙げられるのは、漢民族と台湾原住民の問題をそれぞれに描いた「植民地の旅」と「魔鳥」および「霧社」である。これらの文明批評的作品では恋の心情よりも旅情が勝っている。つまり、旅人として異国を見聞しながら、知識人の目線で批判を行う作品となっているのだ。

植民地作品群における要素を俯瞰すると、およそ以上のようになる。確かに恋は当初の旅行の動機であったが、それはあくまで動機にすぎない。しかし、諸作品に底流しているのはむしろ「旅人意識」ではないだろうか。植民地作品群における要素はいずれもが「旅人」の立場を反映しているのである。この「旅人意識」こそ、佐藤自身の視点を外部に立たせた決め手でもあった。

「魔鳥」と「霧社」を含めた植民地作品群を考える時、たびたび論じられてきたのが日本人作家としての佐藤の「限界」である。私見では佐藤の限界を追及する際に、彼の外部に立つ立場を忘れてはいけないと考える。

三、植民地の旅における「蕃地」体験

邱若山「佐藤春夫台湾旅行行程考[284]」によれば、佐藤の旅程は六月末（神戸発）から十月十八日（神戸着）である。そのうち実際に台湾原住民に接することができた台湾山地旅行は

九月二二日　埔里社→霧社（泊）

282　邱若山「佐藤春夫の台湾旅行もの―作品群の世界をめぐって―」『日本学と台湾学』創刊号、静宜大学日本語文学系、2000 年、55 頁。

283　詳細は邱若山「佐藤春夫『旅びと』の世界―その抒情の原点と創作事情―」（『日本学と台湾学』創刊号、静宜大学日本語文学系、2000 年、21～36 頁）参照。

284　邱若山「佐藤春夫台湾旅行行程考」『日本学と台湾学』創刊号、静宜大学日本語文学系、2000 年、20 頁。

九月二三日　霧社→能高（泊）
九月二四日　能高→（能高越）→霧社（泊）
九月二五日　霧社（泊）

であり、翌二六日には霧社を降りている。従って、わずか四日の「蕃地」滞在では、原住民に対して深い理解を得ることができなくて当然であろう。もっとも、佐藤の原住民認識を形作ったのは現場から得た情報だけではなかった。周知のように、佐藤が霧社に入社できたのは、人類学者森丑之助[285]の紹介で下村宏民政長官と知り合い、総督府の賓客として扱われたことによる。作品「魔鳥」も森から贈られた『台湾蕃族誌』第一巻（1917 年）を参考にして書かれたものである。

河原功は「魔鳥」と「霧社」の連続性と創作上の限界について論じている。河原は二作の舞台は台湾中部の霧社に特定できると述べ、「魔鳥」における台湾総督府の「理蕃政策」が武力による討伐と強制的帰順に基づいていたことを指摘する。ここで河原は、抵抗の予想される原住民の成年男性を「おとな」と設定している。それに対して残るのは「こども」である。「こども」の概念について、河原ははっきり定義していないが、その論理から考えると「処分から逃げた原住民の成年男性、老人、婦女、子供」であろう。河原のみるところ、すでに「魔鳥」で「おとなたち」の処分を述べていた佐藤は、「霧社」では「こどもたち」に焦点を置き、「こどもたち」が文明化に冒され、閉塞した状態に置かれていることを描こうとしたのである。そして、原住民に対する統治政策を対「おとな」、対「こども」と相対化させて考えてみると、その実態が鮮明に見えてくると言う。しかし、佐藤に「上方から見下ろす傾向」があったことは否定できず、彼は台湾原住民へのよき理解者であっても、日本人作家としての限界があったと河原は結論を下した[286]。

以下で、この河原の論をふまえて「魔鳥」と「霧社」の関係性および佐藤の限界を新たな視点で捉え直していく。

四、「魔鳥」における文明批評と「魔鳥ハフネ」――不在の台湾原住民

「魔鳥」は最初に『中央公論』（1923 年 10 月号）の創作欄に発表された作品

---

[285] 森丑之助（1877 年－1926 年）、日本の人類学者。台湾総督府の嘱託として台湾先住民の研究にあたり、「台湾蕃通」、「台湾蕃界調査の第一人者」と謳われた。佐藤は台湾旅行に誘う友人・東熙市の紹介を通して森と知り合った。

[286] 河原功「日本人作家の台湾原住民認識――中村古峡と佐藤春夫」『翻弄された台湾文学―検閲と抵抗の系譜』研文出版、2009 年、125 頁～142 頁。

である。物語の構造から見れば、「魔鳥」は最初に「緒言」を置き、「一」から「七」で「野蛮人」における「魔鳥ハフネ」にまつわる「迷信」と、主人公によるこの「迷信」に対する考えが述べられる。「八」から「十五」までが「魔鳥使い」とされたサツサン一家にまつわる物語であり、「十六」で物語全体が閉じられる。緒言はまさしく「破題」そのものである。「一たい野蛮人にだって迷信はある。この点は文明人と些も相違はない」と、冒頭からすぐにこのストーリーの題意を切り出している[287]。さらに、「我々が道徳だと思ったり正義だと考えたりしていることでさえも、彼等野蛮人はひょっとすると迷信だと考えないとは限らない。ちょうど我々が野蛮人の道徳や人道を迷信だと思うのと同じことだ」と鋭く提示した。つまり最初から二項対立的図式を提示し、後の文明批評を予告させるのだ。

前半で語られる、「魔鳥使い」をめぐる迷信はおよそ以下のようなものである。目にした者を死へと導く「ハフネ」という魔鳥を自由に操る「魔鳥使い」を人々は恐れ、魔鳥使いを発見した場合、魔鳥使いその人を殺すのみならず、必ずその家族全員をも皆殺しにしなければならない。魔鳥使いと判断される基準を、「私」は「要するに、仲間の者が魔鳥使いに仕上げてしまうのだ。皆でそう認めてしまうのだ」と推測する。「その外には何の証拠もあるわけではない。あり得るわけもない」と。

そもそも、魔鳥使いではないかと疑い始める最初の動機からして、「私」のみるところでは「ほんの偶然」である。病気や他蕃との不和など原因が明らかなものとは異なり、仲間と共有し得ない個人的な憂鬱、「しかもそれは他人に打解けて説くことも出来ないようなもの」を心に持っている者は決して周りの人に理解されない。そのような人間が魔鳥使いとみなされるのである。

そのような魔鳥使いを殺すとは、「要するに、彼等は自分達の大多数と表情の違ったところの人間を滅亡させようとするのである」と「私」は評し、さらにこのような「無法な事」は「決して彼等所謂野蛮人だけに特有なものではなく、全くその通りのことが所謂文明人のなかにもそっくり行われている」と指摘する。

後半は、魔鳥使いとされた姉弟の物語である。サツサン一家はある時魔鳥使いとみなされてしまう。その理由としては、まず長女のピラが十八歳になっても刺青をしなかったことである。蕃人の社会では適齢期にある女が刺青をしないことは非常識なのである。加えて、サツサン一家は人と目を合わせようとせず、大人はもとより子供ですら笑ったことがない。

また、「ある文明国の軍隊」が蕃地に侵入し蕃社を焼き払った時、サツサンの蕃社にも三人から五人くらいの犠牲者が出た。蕃人は自分の種族に降りかかっ

---

[287] 以下、引用は臨川書店『定本佐藤春夫全集』による。

たこの災難は魔鳥使いの呪術によるものだと信じていた。そこで魔鳥使いとされたのが日頃から疑いの眼差しを向けられていたサツサン一家である。サツサンの小屋は火を放たれ、逃げ出してきたところを捉えられ殺されてしまう。この難を逃れて生き残ったのはピラと末弟のコーレのみであった。生き残ったピラとコーレは蕃社を逃れ、放浪の末に野外にて死んだ。

小説「魔鳥」について、従来の先行研究では主に『台湾蕃族志』と関東大震災における朝鮮人虐殺事件との関連を論じるものが多数であった。前者について、講談社版『佐藤春夫全集』の「校註」（牛山百合子）によれば、「魔鳥」は『台湾蕃族志』の第五篇「信仰及心的状態」を参照したと指摘されている。

後者についての研究は多いが、ここでは近代文学研究者の朱衛紅の論を借りて説明する。朱の指摘によると、作品の語り手である「私」は、魔鳥使いの話から、人類にある異端・異常なものを排除するという心理を見出すことで、文明社会を相対化している。一九二三年九月一日の関東大震災では六万人近くが死亡し、東京市の三分の二が焼失した。更に朝鮮人襲来の流言が乱れ飛んだ。その後、市民の手で六千人以上の朝鮮人が虐殺された。その混乱に乗じて、九月三日と十六日には社会主義者およびアナーキストたちが軍部の人間によって殺害された。これらの出来事に対し、朱は朝鮮人・社会主義者の虐殺は、「異端を排除するという群衆の心理に付け込んだ大衆操作の結果であった」と評する。佐藤は近代社会における隠れた権力と集団心理の関係を見抜いて、巧みに描いたのであると指摘した[288]。

「魔鳥」と朝鮮人虐殺事件の関連性は今ではほぼ通説であり、ここで反論するつもりはない。事実、「魔鳥」は佐藤の批判意識を植民地から母国にまで延長し、植民地における「少数民族」への関心を母国における「少数民族」に見事に連結させた作品である。植民地の旅から得た素材は植民地支配への批判に用いられただけでなく、近代日本文明への批評にまで拡大された。その意味で、第一節で述べたように、佐藤の作風および精神的変化に目を向けるならば、「魔鳥」あるいは植民地作品群は、佐藤文学の転換点としての意義を有することを証明する。

但し一点だけ注意したいのは、「魔鳥」における台湾原住民のイメージである。厳密に言えば、この作品に存在するのは台湾原住民の信仰だけであり、台湾原住民そのものは不在なのである。佐藤は台湾原住民の信仰を借りて、見事に総督府の「理蕃政策」と近代日本社会における大衆心理に潜む暴力性を批判したが、その批判の要件は台湾原住民自体ではなく、あくまで彼らの信仰である。佐藤のこの手法は、同様のことが宗主国近代日本と植民地台湾の間でのみならず、世の中

288　朱衛紅「佐藤春夫における文明批評の方法―『魔鳥』論―」『日本語と日本文学』(36)、筑波大学国語国文学会、2003 年、19～28 頁。

のどこでも起こりうることを表している。逆の見方をすれば、類似した信仰を持つ先住民がこの世界のどこかに存在している限り、「台湾原住民」の存在自体は不可欠なものではないということを意味する。それゆえ、「魔鳥」における台湾原住民のイメージが曖昧なものにされている。物語の前半で「文明人」と「野蛮人」のあいだに等しく迷信が存在する二項対立の理論と「魔鳥ハフネ」を紹介し、後半ではサツサン一家の物語を語ることで前半の理論を「実現」している。ピラとコーレは山地の現場で生き生きとした人間から化したものではなく、理論を「演出」するために造形されたキャラクターなのである。

春夫は短期間の滞在で得た実体験と僅かな資料をふんだんに駆使し、近代日本の文明と植民地支配を大いに批判することに成功したのである。それでも、「魔鳥」は少しながらオリエンタリズム的な雰囲気を匂わせているのもまた事実である。「魔鳥」における台湾原住民はすでに述べたように、信仰として「書かれる」対象でしかないからだ。したがって、台湾原住民の描写に対しては、佐藤は外部に立ち原住民の内面には深く触れずにいるのである。この姿勢は多少形を変えているとはいえ、作品「霧社」でも貫かれていたのである。

五、「霧社」における植民地批判と「蕃婦問題」――知識人佐藤の善意と「遺産」

「霧社」は 1925 年の『改造』3 月号に発表された。旅行中の 9 月 18 日、霧社の北にある「サラマオ蕃」が蜂起し、駐在所の 19 名の日本人警察官を殺害した。佐藤は「霧社」で当時の山地に漂う不穏な空気を描き、冷静な観察を通して、台湾原住民の教化と総督府の「理蕃政策」を遠回しに批判した。「霧社」発表から 5 年後の 1930 年 10 月に、日本統治期における最大の台湾原住民蜂起事件・霧社事件が発生したこともあり、山地統治問題を示唆した「霧社」は、その前兆に言及する作品ともされている。

全 13 章から成る「霧社」には、台湾に旅行した「予」が、「蕃界第一の都会」霧社や能高山を訪れる過程で山地統治の問題を発見した経緯が描かれている。「魔鳥」と比べると、「霧社」は植民地の現場により接近し、山地統治の問題をルポルタージュした作品となっている。ここではやはり「魔鳥」との連続性と佐藤の創作上の「限界」を考えたい。

佐藤の原住民観察の限界を考える時に、一般的には彼の「目線」と「善意」が注目される。ここでは再び河原の説を例として取り上げよう。「霧社」の「六」では、『台湾蕃族誌第一巻』に載せられている蕃族の写真を見て「バンジン、バンジン」と連呼する「オハナチャン」なる原住民の若い女中が登場する。彼女に対して、「予」はその動作と表情に親愛の情を感じるが、その情は「予が予の愛犬に対して抱くものに類似していた」と述べる。ここから河原は次のように指摘

する。佐藤は台湾原住民を未開民族と蔑視する「内地人」に向けて、原住民を「日本人」と同一視する意識が欠落していると批判したが、「オハナチャン」を同じ「日本人」とみなしていたとはいえない佐藤自身もまた、上方から見下ろす傾向があったことは否定できない。それゆえ結局、佐藤は台湾原住民の良き理解者ではあっても、日本人作家としての限界があったのだ[289]。要するに、台湾原住民への佐藤の善意的感情を肯定しながらも、彼の上からの目線こそ彼の限界であると河原は論じた。

角度を変えて、私は佐藤の善意こそが彼の限界ではないかと考える。「魔鳥」と比べると、「霧社」は一歩身を乗り出し、統治現場に至って山地の問題を探り、実在した原住民を作中で描いている。にもかかわらず、「霧社」における台湾原住民のイメージは相変わらず曖昧なままである。これは作中の原住民の個性や感情を表す箇所がそれほど見られないことから生じている。佐藤は確かに善意を以て、力を尽くして総督府の山地統治の破綻を「内地」の読者に伝えようとしたが、その書き方がかえって台湾原住民の姿を消してしまったのだ。原住民に対する善意的感情に付随するのは、原住民の身に現われるある種の統治問題である。「魔鳥」の原住民の不在に至るほどではないが、「霧社」で原住民そのものよりも重要なのは彼等の身体を通して表現された統治上の破綻であろう。例えば、重量やサイズに関係なく荷物一個を五銭で運搬する原住民は、安い労働賃金体系という経済システムが山地に浸透している問題を示している。梅毒患者の原住民は性的問題に直結する「文明病」問題を象徴する。原住民学童の勉強の様子は植民地教育の問題の本質を表す。「蕃人」の製品が乏しく、最も粗悪な「内地品」しか備えていない物品交易所は、原住民に対する総督府の無関心を意味する。藤井省三の指摘どおり、佐藤は冷静な観察を通して教化される原住民の不幸を示唆し、総督府の強圧的な政策を遠回しながら批判している[290]。佐藤の冷静さを支えているのは、知識人としての批判精神と彼なりの善意であろう。しかし、佐藤が冷静に観察すればするほど、山地統治の破綻が益々鮮明になりこそすれ、原住民自体のイメージはさらに曖昧模糊としたものに化していく。

したがって、「霧社」における原住民のキャラクターは皆名も無き者であり、ただ統治問題を表現する役割を果たす「バンジン」でしかない。「魔鳥」における「ハフネ」が象徴する原住民信仰から、「霧社」における「蕃人」を借りて表現された山地統治まで、原住民は原住民自身ではなく、特定の問題を突出させるための化身である。この意味で「霧社」における原住民のイメージは捨象され、皆「名も無きバンジン」となった。佐藤の善意と批判精神によって、「魔鳥」と

---

[289] 前掲論文「日本人作家の台湾原住民認識――中村古峡と佐藤春夫」、138～139 頁。

[290] 藤井省三「佐藤春夫『霧社』解説」佐藤春夫『霧社』ゆまに書房、2000 年、5 頁。

「霧社」における捨象・同一化された原住民のイメージこそ、佐藤の二作を貫く限界だと考える。

台湾原住民を描いた初期の日本人作家として、佐藤は原住民そのものを描くよりも、むしろ彼らの身を借りて文明批判と植民地批評を行うことを重視したが、「霧社」は後の日本人作家による植民地批判に一つの「遺産」を残した。それは「蕃婦問題」である。

「霧社」における「名も無きバンジン」の中で、印象が鮮明で読者を興味深く思わせるのは「蕃語通弁」の「蕃婦」と売春の少女たちであろう。「蕃婦」と少女という女性の身体を借りて、殖民者と被植民者の間に存在している権力的な支配関係を表現するのもこの手の一種であろう。ここで少しだけ佐藤の「蕃婦像」を見てみよう。

> その蕃丁たちの先頭に立って、ひとりの奇異な人物がいる。（中略）この人物が異常に背が高い……そうして胸を張って、そのために一種の威風さえ具えて、足や背丈やその姿勢や態度、男に似てはいるが……近づいたのを見れば怖ろしくはあるが骨格風貌もとより女で、しかも日本人――内地人の風俗ではあるが蕃婦である[291]。

佐藤が描いた「棄てられた蕃婦」は「奇異な人物」で、一種の「威風」さえ見え、近くで見ると恐れを抱かせるものである。売春の少女たちとは妙に共通するところがあると思わずにいられない。以下は「少女像」についての描写である。

> 「ナイ」女はそう言って、草を見ていた目を上げると、視線を予の面上に注いだ。その眸は月光に爛として照った。予は不意に一散に突破して丘を下りた。どうしてだか判らない。予は自ら解釈するに、恐怖と誘惑との複雑な交錯からではなかったろうか[292]。

形こそ違うが、「予」は「蕃婦」と「少女達」という原住民女性の身にある種の恐怖を感じる。両方の恐怖は一致していないかもしれないが、いずれも「予」の心を動かすに足るものである。この点で言えば、「蕃婦」と「少女達」は物語の中でもっとも生き生きとしたキャラクターであったと言えよう。

一方、佐藤は原住民女性の身体を通して、植民地問題の「連鎖的生産」を暗示する。作中では明言していないが、「少女達」は「蕃婦」の娘――即ち日本人警

291　佐藤春夫『定本　佐藤春夫全集』第 5 巻、臨川書店、1998 年、124 頁。

292　同上、136 頁。

察官の娘である可能性が高いことは明らかである。即ち、殖民者を象徴する日本人警察官の無責任さによって生まれた「棄てられた妻」と「娘」は、「蕃語通弁」と「売春婦」に化して、世代をまたぐ植民地問題の象徴となった。佐藤は婚姻関係と売春――つまり性的関係と女性の身体を通して、潜在している原住民統治の破綻と対立の火種を「霧社」という物語に収めたのである。

歴史的に見れば、佐藤の観察は現実のものとなる。鄧相揚によると、頭目の娘を警察官の妻にする「和蕃結婚」政策は破綻した例が多かった。「和蕃結婚」によって、日本人は「蕃社」の情報を手に入れ、日本人警察官の義父である頭目の部落社会での権勢を後ろ盾にして懐柔の効果を確実に揚げたが、同時に文化衝突も招いた。そのうえ、日本人警察官が妻を棄てたことが抗日事件の誘因ともなったのである[293]。

また、鄧の指摘によれば、日本人警察官の「妻捨て」が原住民の民族情感を傷つけ、「内地人」、とくに「内地人警察官」への反感として根付いていったのである[294]。この「妻捨て」が霧社事件の原因の一つであったことは、総督府も認めるところであった。一九三五年の大鹿卓の作品「野蛮人」では、「内地人」である主人公が日本人警察官となって討伐に積極的に参与し、さらには原住民女性を妻にしたことで、原住民男性の不満を招いたことが描かれている。実際、佐藤と大鹿は師弟関係であるため、大鹿が佐藤から「蕃婦」への関心を継承したとしても無理はない。「蕃婦」をキャラクターに創作した者は大鹿だけではない。中村地平、坂口樗子などもまた原住民女性を描いたのである。つまり、佐藤は比較的鮮明である原住民女性のイメージを通して統治問題を示す一方で、後の創作者にも「遺産」を残したのである。

六、おわりに

佐藤は日月潭での遊覧を、紀行文「日月潭に遊ぶ」（1921 年）と抒情小説「旅びと」（1924 年）に書き上げている。日月潭の宿泊処で出会った日本人女中を両作品に登場させたが、そのイメージは「宿の女中」から「女」に変えられている。この転換に対して、小田原事件後の佐藤は千代への恋を訴える手段もしくは感情の捌け口として、旅の回想に千代への思念によるイメージをオーバーラップさせているがゆえに、その感情的実質は「郷愁」というよりは「恋情」のほうに

293　鄧相揚著、魚住悦子訳『抗日霧社事件をめぐる人々 ： 翻弄された台湾原住民の戦前・戦後』日本機関紙出版センター、2001 年、72 頁。

294　同上。

近いのではないかと、邱は指摘した[295]。旅行の原点・動機である「恋情」は、旅行中の見聞・感知とともに拡大されて「郷愁」を内に含んだ「旅人意識」となった。簡単に言うと、恋を忘れるために外地に行きはしたが、慣れない風土で自らが外来者であることを意識したがゆえに、かえって「異郷」の風景に「故郷」への思念を投影させずにいられない――「旅びと」の場合で言えば、女中は「異郷」、千代は「故郷」であろう。大切なのは女中（＝異郷）ではなく、千代（＝故郷）なのである。

本題に戻ると、「魔鳥」と「霧社」における台湾原住民は、「旅びと」の女中と同じく「異郷」の一種であると考える。重要なのは原住民自体ではなく、原住民の身体を借りて表現された近代日本の文明・植民地支配の問題なのである。「旅人意識」における郷愁と恋情は細かく区分するのは難しいかもしれないが、台湾の風物は本来の姿ではなく、あくまでも「故郷」を思い出すための他者として存在するのは相違ないと考える。

恋の悩みから始まった台湾旅行は佐藤に重要な「異郷体験」をもたらし、佐藤の文学創作に重要な素材を提供し、後世の作家にも影響を与えた。この点から見ても、佐藤の「異郷経験」は重要であろう。

295　前掲論文「佐藤春夫『旅びと』の世界――その抒情の原点と創作事情――」。

第三章　「文明」と「野蛮」の葛藤：霧社事件から戦後へ

はじめに　霧社事件とその影響

1930 年、台湾山地の中心部にある霧社地方においては、台湾植民史上の最大の原住民武力反抗事件が爆発した。後に「霧社事件」と呼ばれる。この事件は台湾総督府から日本の中央政府までの植民地支配体系に大きな衝撃を与え、「理蕃」政策も輿論もそれによって大きく変わった。事件自体は近代日本の台湾原住民認識の一つの転換点を示すものとも言え、その波紋はもちろん文学にも及んでいった。以下は事件の経緯を簡単にまとめる[296]。

1930 年 10 月 27 日未明、マヘボ社のモーナ・ルダオは霧社地区[297]の六つの部落[298]を集め、霧社地区の各駐在所を襲撃し、電話線を切断した。その後、モーナ・ルダオの指揮による「老年組」は霧社分室から大量の銃器弾薬を奪取、バッサオ・モーナの指揮による「青年組」は日本人と「理蕃」行政施設に対象を限定し、分室管内連合運動会場の霧社公学校を襲撃した。その結果、134 人の死者（ほかに日本人と誤認された漢民族死者 2 人）と 26 人の傷者が出た。抗日側は対外道路を封鎖したが、運動会から脱走した郡視学菊川孝行は事件を上達した。警察側は地方から全島までの警察官を非常召集するほか、台湾軍に飛行機の偵察も依頼した。同日、台湾軍司令官は陸軍省へ霧社事件の第一報を発した。その後、抗日側は未参加の各社を説得し、防御工事を構築したのに対し、日本側は交戦しながら、軍隊の動員や警察と軍隊による協同作戦の計画作成を進めた。軍側は、台湾守備隊司令官鎌田彌彦に出動軍隊の一元指導を命じ、霧社に派遣した。30 日、警察側と軍側の合意によって共同行動の形式を取るが、実質の配置は軍が第一線となった。31 日、鎌田支隊・全警察部隊による総攻撃が開始され、軍司令部は同日、今回の事件を「霧社事件」と命名した[299]。それ以降、日本は台湾植民地

---

[296]　霧社事件に関する研究資料は非常に多かったが、ここでは戴國煇編著『台湾霧社蜂起事件 ： 研究と資料』（社会思想社、1981 年）、春山明哲編・解説『台湾霧社事件軍事関係資料』（不二出版、1992 年）、林えいだい編『写真記録　台湾植民地支配史　山地原住民と霧社事件・高砂義勇隊』（梓書院、1995 年）春山明哲『近代日本と台湾　霧社事件・植民地支配政策の研究』（藤原書店、2008 年）などの、代表的な研究書を参照する。

[297]　当時の台中州能高郡「蕃地」の一部。「蕃地」とは平地の一般行政地域と異なり、原住民の居住した高山の特別行政地域を指すのであり、霧社は現在の南投県仁愛郷にある。

[298]　六つの部落とは、セデック族・霧社群のマヘボ社、タロワン社、ボアルン社、スーク社、ホーゴー社、ロードフ社である。

[299]　以上は春山明哲「霧社蜂起事件日誌」（前掲書『台湾霧社蜂起事件 ： 研究と資料』、564

史上、原住民との最大の「戦争」を展開した。

この「戦争」に際し、台湾軍の出動人数は 1300 人を越え、動員範囲は台北、台中、台南、花蓮港に及んだ。警察官の動員数は約 1360 人、人夫は約 1380 人である[300]。敗走した原住民は深山の洞窟や密林に潜伏し、日本側は大砲や飛行機を出撃させ、大規模に爆撃を実施した[301]。日本側の攻撃によって、原住民は 644 人の死者を出したが、うち 296 人が自殺者もあった[302]。11 月下旬、日本側は鎮圧目的の達成を確認し、撤退を開始した。12 月 1 日、軍の代わりに、霧社警備隊が配置につき、その後、モーナ・ルダオ一族の死とともに、「戦争」は終結を告げた[303]。26 日、霧社警備隊や出動憲兵隊を含む全出動軍隊の撤退は完了した[304]。

事件終結後、当局は様々な「戦後処理」を行った。その中で最も有名なのは「第二霧社事件」（以下は二次事件と略す）である。霧社事件勃発後、日本側は軍警協同で霧社を奪還したが、抗日側はタロワンおよびマヘボ付近の山地に長期戦の防戦体制を作った。そのため、日本側は苦戦に陥り、タウツァ群、トロック群、万大群、白狗群を脅迫して参戦させた。1930 年 11 月 1 日、タウツァ群の総頭目タイモ・ワリスが戦死し、抗日側に馘首された。この件はタウツァ群全体の大きな屈辱となり、二次事件の誘因ともなった。また、事件における原住民の抗日側と協力側の殺し合いも、双方の不和を増幅させた。事件当時、当局は協力する諸部落に銃器と弾薬を貸与したため、事件終結後に、当局は各駐在所や霧社分室から人手を借りて銃器回収を行うための「特別勤務隊」を組織した。1931 年 4 月 24 日、厳重な警戒のなかで、能高郡守、台中州警務部長、能高群警察課長、霧社分室主任などの幹部は銃器回収のためタウツァ駐在所に到着したが、タウツァ群は前夜に結婚式の酒宴を行ったことで、さきにトロック群の回収に行った

～568 頁）を参照する。

300　春山明哲「昭和政治史における霧社事件」『近代日本と台湾　霧社事件・植民地支配政策の研究』藤原書店、2008 年、31 頁。春山氏は台湾軍司令部編「昭和五年台湾蕃地事件史」と台湾総督府警務局編「霧社事件誌」より算出。

301　その鎮圧過程において、毒ガス使用の説もあるが、現時点でまだ確証されていない。詳細は春山明哲「日本陸軍にとっての霧社事件」（前掲書『近代日本と台湾　霧社事件・植民地支配政策の研究』、95~102 頁）参照。

302　呉密察「霧社事件研究の課題」『日本台湾学会報　第 12 号』日本台湾学会、2010 年、21 頁。

303　タダオ・モーナ（モーナ・ルダオの息子）は 12 月 8 日に縊死、11 日、モーナ・ルダオ一族の遺体発見。モーナ・ルダオ本人の遺体は 1934 年に発見され、標本として台北帝国大学土俗人種学教室に保存されていた。1973 年、遺骨は霧社に返還・埋葬された。

304　前掲論文「霧社蜂起事件日誌」、575～577 頁。

[305]。しかし、それは単なる表面上の理由でしかない。同日、能高郡警察課長宝蔵寺虎一はタウツァ駐在所の巡査部長小島源治を介して、タウツア蕃に「保護蕃」（＝反抗側の投降・生存者）襲撃を教唆した[306]。その原因は、霧社事件で死亡した日本人と協力側の原住民の恨みを報復するためだと言われる[307]。

25 日未明、タウツア蕃はシーパワとロードフの両収容所を襲撃し、「保護蕃」（＝全員 514 人）の 210 人を殺害した。また、6 人は行方不明になった[308]。収容所付近の桜駐在所と三角峰駐在所に勤務する警察官は機関銃で応戦するふりをしただけだったので、タウツァ群からは僅か 1 人の死者、7 人の傷者しか出なかった。当局の幹部は急いでトロックからタウツァに戻り、「保護蕃」の首級登録、銃器回収を行い、記念写真も撮った。その夜、タウツァ群はさらに祝宴をあげた。二次事件後、当局はタウツァ群に五日間の労役を課し、戦闘用の長刀を没収したが、それは形式上の処分にすぎなかった[309]。5 月 6 日、「保護蕃」生存者の 298 人は病人と看護人を除き、残りの 278 人が川中島に移住させられた。16 日、原住民の反抗側と協力側の幹部は和解式を行った。10 月 15 日、川中島移住者のうちの 23 人は蜂起参加者と認定・逮捕され、同日に移住者の帰順式が挙行された。12 月 18 日、太田弘正総督は「理蕃政策大綱」を各州知事庁長に示達し[310]、ここに至ってようやく事件は一段落した。

霧社事件の引責で、台湾総督石塚英蔵や警務局長石井保が更迭された。「理蕃政策大綱」（以下は大綱と略す）とは、新任の太田政弘総督と井上英局長から打ち出された善後策である[311]。その内容は以下のとおりである[312]。

第一項　理蕃は蕃人を教化し、其の生活の安定を図り、一視同仁の聖徳に浴せしむるを以て目的とす。

---

[305] 鄧相揚著、 下村作次郎，魚住悦子共訳『抗日霧社事件の歴史―日本人の大量殺害はなぜ、おこったか』日本機関紙出版センター、2000 年、78～80 頁。

[306] 戦後に至って、小島源治は当時にタウツァ群に来た当局の幹部から密命を受けた経過を「自白」した。詳細は江川博通『昭和の大惨劇　霧社の血桜』（私家書、1970 年）参照。

[307] 前掲書『抗日霧社事件の歴史―日本人の大量殺害はなぜ、おこったか』、80 頁。

[308] 前掲論文「霧社蜂起事件日誌」、579～580 頁。

[309] 前掲書『抗日霧社事件の歴史―日本人の大量殺害はなぜ、おこったか』、81～82 頁。

[310] 前掲論文「霧社蜂起事件日誌」、580 頁。

[311] 近藤正己『総力戦と台湾　日本植民地崩壊の研究』刀水書房、1996 年、268 頁。

[312] 鈴木質太郎『台湾の蕃族研究』青史社、1977 年、495～505 頁。各項目は長文の説明が付いているが、ここでは項目のみ引用する。

第二項　理蕃は蕃人に対する正確な理解と、蕃人の実際生活を基礎とし、其の方策を樹立すべし。

第三項　蕃人に対しては、信を以て懇切に、之を導くべし。

第四項　蕃人の教化は、彼等の弊習を矯正し、善良なる習慣を養ひ、国民思想の涵養に意を致し、実科教養に重きを置き、且つ日常生活に即したる簡単なる知識を授くるを以て、主眼とすべし。

第五項　蕃人の経済生活の現状は、農耕を営むを主とすと雖も、概ね、輪耕作にして、其の方法、極めて幼稚なり。将来、一層集約的定地耕作を奨励し、或は集団移住を行ひ、彼等の生活状態の改善を計ると共に、経済的自主独立を営ましむるに努むべし。又、蕃人に関する土地問題は、最も慎重なる考慮を払ひ、其の生活条件を圧迫するが如きことなきを期すべし。

第六項　理蕃関係者、殊に現地に於ける警察官には、沈重重厚なる精神的人物を用ひ、努めて之を優遇し、漫りに其の任地を変更せしむるが如きことなく、人物中心主義を以て、理蕃の効果を永遠に確保するに努むべし。

第七項　蕃地に於ける道路を修築して、交通の便利を図り、撫育教化の普及徹底を期するに努むべし。

第八項　医療教育の方法を講じ、蕃人生活の苦患を軽減すると共に、依て以て理蕃の実を挙ぐるの一助たらしむべし。

大綱は第一項で「日本への同化」を最終目的とする原則を確認し、ほかの七項目は「教化」方法の説明とそれを担当する現地の警察官に対する心得と大別できる[313]。しかし、大綱には従来の政策と異なる新しい方針が含まれていない。事件後、日本人警察官らは共通の疑問を抱えていた。即ち、銃器押収、教育、授産などの「理蕃」政策は、いずれも「蕃人」の所望ではなく、文明と隔絶していても平和な生活を送られる原住民を、「文明世界」に無理やり引きずり込む理由はあるのかという声があった。大綱はこういう「理蕃」の根本への質疑に対する回答であり、要するに事件後の「理蕃」は台湾原住民を征服する事業ではなく、「蕃人」を天皇の「一視同仁の聖徳」に浴びせる事業として昇華された、という方向へ解釈していく。そこで、大綱は二つの意味を持つと指摘される。一つは、「理蕃」体制の再建を目指したということであり、もう一つは、事件そのものが日本への同化政策を積極的に実施・展開する契機となり、原住民の民族の固有性の破

[313] 前掲書『総力戦と台湾　日本植民地崩壊の研究』、264～265 頁。

壊と日本文化の強要をもたらしたということである[314]。

霧社事件は台湾原住民に対する近代日本の認識の一つの転換点とも言える。2人の漢人の誤殺を除き、死者はすべて日本人である。このことは事件が日本に対する原住民の「戦争」であるという本質を明示した。「愚蒙無知」で「教化されるべき」「野蛮人」と見られた原住民は事前に詳細な計画を立て、山地統治の模範・「蕃界の都会」とも言われる霧社で蜂起した。それは近代日本の植民地支配に対する大きな諷刺にほかにならない。事実、霧社事件は当時の政界、新聞界ないし国内世論まで、大きな波紋を投じ、原因の究明と責任の追及は当時の議論の焦点ともなった[315]。

霧社事件に関する疑問は、主に①蜂起の原因や背景、②蜂起や鎮圧の実態、③結果や事件の影響に関するものと大別できる。①と③は戴国輝編著『台湾霧社蜂起事件 ： 研究と資料』（社会思想社、1981 年）と山辺健太郎編『現代史資料 22 台湾（二）』（みすず書房、2004 年）、②は春山明哲編・解説『台湾霧社事件軍事関係資料』（不二出版、1992 年）に収録された資料によって検証できる。特に、①に関して、『研究と資料』に収録された「霧社事件誌」（台湾総督府警務局編）は警察・行政による包括的かつ体系的な内部資料である[316]。

「霧社事件誌」は第一編「霧社蕃騒擾事件」と第二編「保護蕃襲撃事件」からなり、その内容はそれぞれ霧社事件と二次事件に対応する。第一編の第二章「霧社蕃蜂起」には、第二節「事件の原因」で計十一款の原因を列挙し、山地における人間関係、警察風紀、労働問題、行政欠陥などの項目のなかで、特に第六款「警察官の蕃婦妻帯問題」が注目されるべきである。総督府は山地統治の推進のため、「理蕃」警察官と原住民部落の頭目・勢力者の娘との「政略結婚」を奨励したが、警察官による「妻捨て」は原住民の不満を引き起し、「蕃婦問題」と呼ばれた。つまり、第六款は当局がこの件を霧社事件の一因とすることを意味している。

しかし、第十二款「結語」では、霧社事件は労働問題に直接的に起因し、「不良蕃丁」や「有力者」が全社の不平に乗じて策動し、更に原住民は「文明人」のように投書、願嘆などの自力救済の方法を知らないので、蜂起に訴えるのもやむを得ないのではないかと述べられている。「結語」で言及されなかった「蕃婦問題」は、恐らく官の視点で要因とされていないのだろう。しかし、後述するよう

314　同上、268～270 頁。

315　詳細は春山明哲「昭和政治史における霧社事件」（前掲書『近代日本と台湾　霧社事件・植民地支配政策の研究』の所収）、松永正義「日本国内ジャーナリズムにおける霧社蜂起事件」（前掲書『台湾霧社蜂起事件 ： 研究と資料』の所収）参照。

316　春山明哲「解説―日本陸軍にとっての霧社事件―」前掲書『台湾霧社事件軍事関係資料』、3～4 頁。

に、霧社事件を扱う作家たちは常に「蕃婦問題」を意識しながら創作を行うことになる。

霧社事件から戦後にかけて、日本人作家が描く原住民関連作品は直接的・間接的に事件の影を潜めるものだと言える。事件前と比較すると、事件後の作家たちは距離を置きながら「観察」する姿勢が取れなくなり、事件そのものが、作家たちに「野蛮」の本質、そして「文明国」の近代日本と「野蛮人」の台湾原住民との関係を直面・思考させる契機となった。事件以降の作品に関して、注意が必要なのは以下の二点に要約できる。一つは、作品生成の歴史背景である。事件から戦後にかけて、時代的変化は非常に激しく、当局による情報管制や検閲、戦時下文学に対する制約などの原因により、作家たちの原住民描写は多かれ少なかれ制限を受けた。そのため、戦後の自由な空気の中で、正面から霧社事件の「全体図」を描こうとする作家がようやく現われた。もう一つは、作家個人の「台湾経験」である。事件後に原住民を描く作家たちは、台湾滞在経験のある者が多数であり、彼らの生活体験がその原住民描写とも深く関係している。

本章では上記の背景をふまえて、大鹿卓、中村地平、真杉静枝、坂口樗子の作品を中心に、霧社事件から戦後にかけて、作家たちが描いた台湾原住民表象を考察する。

第一節　「弱者」への関心――大鹿卓

一、はじめに

1930 年の霧社事件は、近代日本の植民史上のメルクマールとなった大事件である。事件は中央政府と台湾総督府を皮切りに植民地支配体制に衝撃をもたらしたのみならず、民間有識者や世論まで激しい議論を引き起こすことになる。近代日本にとって、もはや「台湾原住民」という存在を無思考的に「野蛮人」として解釈することが難しく、原住民と「理蕃」政策の問題に直面せざるを得なかった。霧社事件は世間の注目を浴びたが、事件に関する作品が直ちに現われたわけではない。それには二つの原因がある。一つは、事件後の台湾山地に関する取材が極めて困難であったためであり、もう一つは検閲の圧力で事件の作品化が容易ではなかったためである

こうした情勢を背景に、大鹿卓[317]は 1931 年から 37 年まで、六つの原住民関連作品[318]を書いた。大鹿は小学校の時、家業の都合で一時期的に台湾移住したが、それ以降の人生は台湾と無縁である。彼の創作素材は、主に義兄弟の河野密から得た資料によると思われる。後述するように、河野は当時の左翼政党・全国大衆党党員として、事件の真相調査のため、霧社現地に派遣された。大鹿の作品の中で、もっとも有名なのは「野蛮人」で、彼の出世作とも言える。しかし、大鹿自身は創作集『野蛮人』（白鳳書院、1949 年）の後記で、以下のように述べている。

> 蛮地を扱った数篇はいずれもわたしくの初期のもので、中に就き「野蛮人」は当時わたくしには私なりの意図があって、この一作をもつて世に問わんとしたいわゆる野心作であつた。「中央公論」に出た当時世評も概して好評ではあつたが、取材の表面的な条件から単なるバアバリズムと見做されたのを、今もつて遺憾としている[319]。（下線筆者）

---

[317] 大鹿卓（1898~1959）、金子光晴の弟。最初は詩人として文壇に登場したが、1930 年後には小説家に転身し、台湾原住民の小説六篇を発表した。後に足尾銅山鉱毒事件とその事件のため奮闘する国会議員・田中正造の事績に関心を与え、『渡良瀬川』と『谷中村事件』などを書いた。

[318] 六つの作品とは「タツタカ動物園」（1931 年）、「蕃婦」（1933 年）、「野蛮人」（1934 年）、「欲望」（1935 年）、「奥地の人々」（1937 年）、「森林の中」（初出不明、1949 年の白鳳書院版の『野蛮人』に所収）である。

[319] 大鹿卓『野蛮人』白鳳書院、1949 年、303 頁。

大鹿の「私なりの意図」とは果して何だろうか。別稿において既に作品「野蛮人」を中心にその内容を考察し、「野蛮」という言葉に込められた意味を指摘することによって、大鹿の創作の主眼が近代日本によって痛苦られた植民地台湾の「文明／野蛮」という優劣順位を覆すことだと指摘したが[320]、本論では大鹿~~の~~作品の全体を考察することによって、改めて彼の意図を考えてみたい。

この問題を究明するためには、二つのことを考えなければならない。一つは、河野密との関係である。前述するように、大鹿の創作素材は河野から得たものと言えるので、河野そして全国大衆党の思想的立場との関連性を考える必要がある。もう一つは、大鹿の他の作品を参照することである。河野から得たかなり限られた素材を元にした彼の作品群は一つのシリーズとなっており、そのシリーズの全体から考察する必要がある。本論では大鹿の作品「野蛮人」を中心に、彼のほかの作品を参照しながら、その意図および作中における台湾原住民の表象を考察する。

二、大鹿卓の思想的背景――河野密の霧社事件調査と全国大衆党

大鹿卓の台湾原住民関連作品に関する先行研究は少ない。今までの主な論者は台湾文学研究の先駆者の河原功であり、彼の指摘は以下の二点となる。

まず、大鹿の創作を「あらゆる角度からみて」、「河野密の示唆を受けたとしか思えない」。だから、「逆に数篇の作品はいずれも一定の類型化された枠の中でしか書くことができなかった[321]」というものである。そして、河野密が霧社事件の原因を「理蕃政策」そのものにあると直接的に告発したのに対し、大鹿卓はそれを引き続き、霧社事件以前の原住民蜂起問題を作品に描くことによって、事件を告発したというところに、二人の「思想的な繋がり」が見える[322]というものである。つまり、大鹿の思想的背景を理解するためには、河野密という人を認識しなければならないことになる。

霧社事件は植民地台湾の統治機構の根本的あり方を揺らがせたのみならず、宗主国日本の中央政界にまで影響が波及した、昭和政治史上の一大事件と言えよう。この霧社事件と植民地支配に関する中央政府と台湾総督府の政治的対応・処理過程について、霧社事件史の研究者の春山明哲は詳しく論じた[323]。ここでは

320　詳細は拙論「大鹿卓の『野蛮人』―植民地時代における二元対立論への挑戦―」『日本研究　第 47 集』（国際日本文化研究センター、2013 年、109～126 頁）参照。

321　同上、64 頁。

322　前掲論文「大鹿卓『野蛮人』の告発」、66 頁。

323　詳細は春山明哲「昭和政治史における霧社事件」（『近代日本と台湾　霧社事件・植民地

春山論における河野密と全国大衆党に関連する箇所を取り上げてまとめる。

当時の政界と無産政党の様相を概括してみる。霧社事件当時の帝国議会における各政党勢力分野を見ると、衆議院では浜口幸雄内閣の与党・立憲民政党（466議席）が絶対多数を占めており、立憲政友会（174議席）と大きく二分していた。無産政党は労農党、全国大衆党、社会民衆党の三つに分岐し、僅か5席だった。なお、非合法の日本共産党は同年2月の第3次検挙までにほぼ壊滅的な打撃を受けたため[324]、春山の指摘したように、「合法・非合法を問わず、労働者・農民をみずからの闘争主体と規定していた左翼政治勢力は、現実的な政治権力を争うには未だ余りに微力であった[325]」。

全国大衆党は、同年7月に日本大衆党三派の合同によって形成された「中間派」とも言え、複雑な性格を持っていた。11月2日、全国大衆党は東京と大阪で「労農議会」を同時に開催した。可決された議案に「霧社事件」は含まれていなかったが、「大会宣言」の際に代議員から霧社事件の問題が提出され、当局の弾圧政策に抗議しようとしたため中止され、検束の混乱が起こり、結局は解散命令を下されるという突発事態が起きた。この事態から霧社事件に対する当局の敏感さが知れると同時に、「大衆党内の指導部と下部党員の霧社蜂起とその鎮圧に対する認識のギャップが窺い知れよう」と春山は指摘している[326]。その後、12月1日から3日まで、大衆党は第二回全国大会を開催した。2日の本部報告についての質問の中に、代議員から台湾霧社事件に関して本部からの声明がないが理由は何かという質疑が提出された。3日、大会では「台湾問題に関する件」が提出され、第59回帝国会議において霧社事件を徹底的に洗い出し、調査材料を収集するため、浅原健三（中央執行委員）と河野密（機関紙部長）を台湾に派遣するという決議がなされた。後に、党務のため河上健太郎が浅原と代わった[327]。河上と河野は1931年1月3日に神戸から出発し、6日の午後1時半に基隆到着、台湾民衆党の陳其昌などの十数名の出迎えを受けた。台湾新民報によると、「歓迎調査霧社事件」という旗を立てる人もいたが、文字が悪かったため直ちに検束された。7日、二人は石井保警務局長を訪問、「蕃地」に進入する許可を得た。8日午後2時、埔里に着き、能高郡役所に許可証の下附願を出した。9日、早朝から埔里より眉渓を経由、午前11時霧社に着いた。二人は「蕃地」の出入許可証は国境を通過する時の旅券に類似すると感じ、厳重な警戒を受けながらも霧社

支配政策の研究』藤原書店、2008年）参照。

[324] 同上、32~33頁。

[325] 同上、35頁。

[326] 同上、35~36頁。

[327] 同上、58頁。

事件の現場各所を視察した。10 日、二人は無理に頼んで程近いパーラン社を視察し、埔里に帰って日月潭工事の一部を見学した。12 日、二人は台湾民衆党の党員と共に嘉南大圳を視察した。13 日、台北着。台湾民衆党の主催した夜の演説会で、両氏の演説は中止され、演説会は解散させられた。14 日、帰航。18 日、神戸到着。当日に党の神戸支部で「霧社事件真相暴露演説会」を開いた[328]。

その調査報告は、河野密「霧社事件の真相を発く」(『中央公論』、1931 年 3 月号、以下は河野報告と略す) と河上丈太郎・河野密「霧社事件の真相を語る」(『改造』、1931 年 3 月号、以下は河上報告と略す) として発表された。また、浅原健三は第 59 回帝国議会の衆議院本会議に両報告を資料として使った。河野と全国大衆党の立場を理解するため、ここでは河野・河上両報告と浅原の衆議院発言をまとめる。

まず両報告の共通点は、事件の原因を論じるところにある[329]。河野報告では「私達の踏査」によって知り得た原因として、「木材の強制運搬、労賃の未支払、農業期の強制労働による生活難、蕃人に対する警察官の無理解・不公正 (例 : 霧社分室主任の佐塚愛祐)、土地収奪による生活領域の縮小に対する不平[330]」などを列挙した。河野報告では、霧社事件の「真相」に近つづば近づくほど、探れば探るほど、「益々迷宮に入る」と述べられ、焦燥が彼らの疲れた身体を駆けめぐると記された[331]。河上報告では、総督府の一貫した見解としては「蕃人の中に潜む凶暴性」が霧社事件の原因であり、事件がその凶暴性によって突発したものと記された。それに対して、河上は「単なる『潜在的凶暴性の激発』と言う以外に何等かの重大な理由がなくてはなるまい。この理由の探求こそが『霧社事件』の中

328　以上は河上丈太郎・河野密「霧社事件の真相を語る」(『改造』改造社、1931 年 3 月号、121~128 頁) と春山明哲「霧社蜂起事件日記」(前掲書『近代日本と台湾　霧社事件・植民地支配政策の研究』、578 頁) を参照して作成したものである。

329　河野報告では台湾総督府発表『霧社事件の顛末』に提出された原因に対して、個人的動機を木材運搬の機に「蕃族」全体に拡大して妥当であるかと質疑する。河上報告では、台湾総督府が台湾憲兵隊の調査報告の暴露した真相を巧みに工夫して、事件の原因を「蕃人の特殊性」に帰因したと批評する。浅原健三は両報告を以て、59 回の帝国議会衆議院の本会議で総理大臣に質問した。詳細は「第 59 回帝国議会衆議院議事速記録第 5 号」1931 年 1 月 25 日、77 頁参照。なお、本論で使用された帝国議会の記録はすべて「帝国議会会議録　検索システム」
(http://teikokugikaii.ndl.go.jp/cgibin/TEIKOKU/swt_logout.cgi?SESSION=848) から引用したのである。

330　河野密「霧社事件の真相を発く」『中央公論』1931 年 3 月号、348 頁。

331　同上、344 頁。

心問題ではあるまいか。外面的な現象は副次的の要因に過ぎない」と鋭く指摘し、「我々の観るところを以てすれば、『霧社事件』は、『民族解放の問題』であり、『労働問題』であり、『植民地の統治全般に関する問題』である」と自ら解答した[332]。その中での民族問題について、総督府の「教化政策」による教育奨励・知識普及は必ず「蕃人」に「民族的自覚」をもたらし、総督府がその「蕃人内における思想の推移」を無視し、「蕃人」を十年一日のように見て、何か破綻を生むことは当然であると河上報告は指摘した[333]。最も注意したいところは、事件の原因に関して、両報告ともに触れた「蕃人の凶暴性」という課題である。

次に衆議院における浅原健三の発言を見てみよう。1931 年 1 月 24 日、第 59 回帝国議会衆議院の本会議は行われた。本会議での質疑は主に三つに整理できる。一つ目は、台湾統治の方向と体制に属するものである。二つ目は、台湾における植民地政策、特に「理蕃」政策に関するものである。三つ目は、霧社事件そのものに関するものである[334]。浅原は両報告の内容を以て、これらの三つにおいても、総理大臣、陸軍大臣、拓務大臣に多くの質疑を提出した。その質疑の内容は大体両報告と相同であるが、その中で特に興味深いのは「諸君、松田拓務大臣――生活難のある所には必ず解放運動が起る、諸君は此解放運動を阻止せられんとするならば、生活難を緩和すべきが当然である（中略）私は最後に総理大臣に一言御尋する、世界平和の為に、人類愛護の為に、今回の霧社事件に飜然として日本植民地の解放を即時なさる御考はないか[335]」という、彼の結論である。

時代的背景を考えれば、河野と全国大衆党は当時、前衛的観点を持っていたとも言えよう。両報告と浅原の発言は、植民地の統治問題の一つとする霧社事件の本質を述べ、その解決策は「日本植民地の解放」であると指摘している。事件の原因に関しては、両報告にも「凶暴性」が言及された。「凶暴性」以外の原因を探すという行為を論理的に考えれば、まずは「『凶暴性』を一つの原因として認めて、そしてほかの原因を探す」ということである。それに続いてくるのは、「凶暴性」の正体とは何かという問題であろう。

要するに、河野・河上両報告が提示するのは「凶暴性」と「それ以外の原因」への思考である。大鹿がどのような形で河野の示唆を受けたのかは実証できないが、大鹿の創作に関して、彼の創作の意図と手法を検証する時は、その思想的背景を考えなければならない。大鹿の原住民関連作品には霧社事件が直接的に描かれてはいないが、執筆の動機が事件の影響を受けていることはほぼ間違い

---

332 前掲資料「霧社事件の真相を語る」、123～124 頁。

333 同上、130~131 頁。

334 前掲論文「昭和政治史における霧社事件」、67～68 頁。

335 「第 59 回帝国議会衆議院議事速記録第 5 号」内閣印刷局、1931 年 1 月 25 日、78 頁。

ない[336]。後述するように、大鹿の作品には一つの常用される図式があり、即ち原住民女性と日本人警察官という二項対立である。大鹿は常に両者の恋愛トラブルを通して、原住民の「野蛮性」と植民地支配の破綻を表現する。河野・河上両報告における「凶暴性」と「それ以外の原因」という事件への思考は、どのような形で大鹿の作品に反映されるのか。作品の分析に入って検証してみよう。

三、「野蛮性」の表象：馘首という「バーバリズム」

ここではまず大鹿の作品「タツタカ動物園」と「野蛮人」を例に、作中の原住民の「野蛮性」表象を考察する。「タツタカ動物園」(『作品』第 20 号、1931 年)は横光利一(よこみつりいち)の紹介を通して発表された作品である。詩人として文芸活動を行ってきた大鹿だったが、この年に詩作の筆を折って小説家に一転した。本作は小説家としての第一作目であり、その大筋は以下のようである。

タツタカ警戒所の警備員は山中の退屈な生活の中で、山猫を含む十数種目の動物を養い、それを「タツタカ動物園」と呼んでいた。楽しみのない彼らは山猫を弄ったり、奇抜なことを考えたりして時間を潰していた。そんなある日、警戒所が原住民の襲撃を受ける。戦況を不利と見た主人公深井は山猫を逃すが、山猫の逃げる姿を見て急に妬ましい気持ちが湧き上がる。

作中に「蕃丁や蕃婦までが動物園の一種目[337]」と描かれているが、「タツタカ動物園」は、いわゆる「隘勇線」とそこに閉じ籠っていた原住民を象徴するものと考えられる[338]。河原功の指摘したように、本作は「山猫に象徴される『蕃地』の孤独なバーバリズムを描いた作品[339]」である。ここでは山猫の形象および山猫と主人公深井の付き合いを見てみよう。

336　前掲論文「大鹿卓『野蛮人』の告発」、63 頁。

337　大鹿卓「タツタカ動物園」『野蛮人』ゆまに書房、2000 年、233 頁。

338　隘勇線とは清朝の原住民防備策から継承してきたものであり、「隘路」と「隘寮」によって構成されたものである。「隘路」は高圧電流が流れる鉄条網や地雷を設置され、山地に開いた道路であり、その要衝に設置された哨舎は「隘寮」である。「隘寮」には指揮者の日本人警察官と「隘勇」と呼ばれる漢民族の警備員を配置した。線内を原住民の居住地とした制度。「五箇年理蕃計画事業」は基本的に「隘勇線」の推進（即ち原住民の居住地を縮小すること）を通して達成した。

339　河原功「大鹿卓『野蛮人』の告発」『台湾新文学運動の展開――日本文学との接点―』研文出版、1997 年、53 頁。

山猫は投げ与えた餌を喰いはしなかった。その意志を尊重すべき種類のものである。彼女――そうだ、牝だった――はそんなものは見向きもしないで、鋭い四肢の爪を針金に引掛けて体を金網の途中に支えながら揺さぶりつづけた。歯を剥いて噛みつくために、網目から濡れた黒い鼻を押し出した。そして苛立しいそうに叫びつづけた。そうした狂乱ははじまると何時間も続いた。与えられた僅かな自由が彼女を無際限な自由まで馳り立てるものらしかった[340]。

「タツタカ動物園」の山猫に表現される「バーバリズム」は、自由を求める一種の狂暴である。その狂暴さは警備員たちと接点がある。常に所長に怒鳴りつけられた彼らにとって、山猫を監禁した「この檻は一種の慰安」であり、山猫の狂暴さに接していると、「自分の胸から鬱憤が消えて体が軽くなってくるのを感じた」[341]。退屈な山中生活を過した警備員たちも、一種の囚人ではないか。自由を求める気持という点で、彼らは山猫と同類であろう。警備員のなかで、主人公の深井だけ山猫と特別な付き合いを続けている。

四肢を空へ向けて縮め、背中を地面に擦りつけて身悶えしながら、時々ギューウ、ギューウと悩ましいげに鳴いている彼女の、細い眼と、赤味を帯びて腫物かと思われるほどに膨んだ（中略）彼は卓子から一枚の紙を持ってくると、檻のなかへ這入ってついて彼女の寝転っている傍へ蹲んだ。彼の樹皮色の指は紙を細く裂いて縒りだした。（中略）それに彼はこの頃では彼女の挙動にことくごとく深い関心を持つようになっていた。……満足させてやりたいという憐憫があっただけだ。（中略）鳴き騒いでいる彼女は、……身を投げ出してしまった。……墜入ってしまった証拠だ。（中略）その様を見ていると彼もまた一種の麻酔に墜ちていった。彼は亢奮のなかで顔を思い出せない彼女の愛情を反芻していた[342]。

警備員の山中生活というものは、男性の仲間の間で生み出される粗野的、男性的雰囲気が漂う世界である。警備員たちは時間を潰すため、生殖器の排泄力で勝負する遊びを行う。淋病を罹る深井はこんな遊びで勝つのは無理で、時々仲間に嘲笑われている。「淋病」の患者という人物的造型は、その文字面から「さびしい病気を罹る人」という意味を暗示させているのではなかろうか。

340　前掲書『野蛮人』ゆまに書房、235 頁。

341　同上、236 頁。

342　同上、238~239 頁。

発情期の山猫を見た深井は、山猫を性的に満足させることを通して、自分も満足し、山猫と一種の擬似的性関係を持つ。ほかの警備員は深井を真似して山猫の体を弄ぶが、深井は彼らを「猥褻な模倣犯」と見て、自分は違うと思う。しかし、それは深井の自己満足にすぎない。なぜなら、深井が山猫に「関心を持つようになっていた」理由は、「憐憫があっただけ」だからである。彼の山猫を「満足させてやりたい」という気持ちは、まさに淋病を罹る自分への憐みではないかと思われる。「一種の麻酔に墜ちていた」深井が「反芻していた」のは「顔を思い出せない彼女の愛情」のみである。「彼女の愛情」とはおそらく性的欠陥のある深井が山地に入るまでの女性遍歴を指すのだろう。換言すれば、ほかの警備員より山猫と親しい関係を持つのは、深井が山猫の身から自分と類似する孤独さ（＝身体的監禁、性的不満足）を感じるからである。ただし、深井は到底、山猫に象徴される精神的内面（即ち河原の言う「孤独なバーバリズム」）に立ち入ることはできない。なぜなら、もし「動物園」と「山猫」に象徴されるのが「隘勇線」とその線に閉じ籠っていた原住民だとしたら、警備員が辞職する可能性があるのに対し、原住民は線内から脱出することはできない。植民地体制における「支配」と「被支配」側の差は歴然である。

第一作の「タツタカ動物園」は、大鹿の試作と考えられる。それに対し、「野蛮人」（『中央公論』2 月号、1935 年）は大鹿の出世作と言える。「野蛮人」で『中央公論』懸賞小説に入選した大鹿は、それ以降小説を多数発表し、創作意欲の高まりを見せた。大鹿は作品「野蛮人」において、ヤウイナーゲという一人の原住民女性の目に「山猫のように深い情熱がすんでいた[343]」と描いた。恐らく大鹿の中では、「山猫」を原住民女性の化身として想像していたのではなかろう。「野蛮人」の大筋は以下のようである。

主人公の田澤は炭鉱経営者の息子であるが、父の炭鉱の争議に参加し、父の不興を蒙る。争議に参加した組合関係者にも冷たく扱われ、自暴自棄となるなかで、父の命を受け台湾の山地に流れることになった。白狗駐在所に着任した田澤はサラマオ蕃の討伐に参与し、原住民の一人の馘首を経験し、自分の野蛮性に気がつく。討伐を終えて原住民女性の野蛮性に魅了された彼は、タイモリカルを妻にする。日本人の妻になりきろうと努力するタイモリカルに対し、田澤はありのままでいることを要求する。自身も野蛮人になろうと決意し、妻の実家で蕃人の衣服を着、鍋墨をすりこみ、刀を腰に差す。そして多くの原住民にとりこまれた田澤は、ついに「野蛮人」となる。

作品「野蛮人」において「野蛮性」を象徴するものは、「タツタカ動物園」の「山猫」から「蕃婦」へと移り変わっており、原住民女性の身を通して表現

[343] 大鹿卓「野蛮人」、前掲書『野蛮人』白鳳書院、44 頁。

される「野蛮性」は多重的な意味を含むようになり、まずは一種の「美」として現われる。

> 「顔あらいなさい」彼女はそういいながら水に手を突込んだ。底に沈んだ枝を取ろうとしたのだが、水のなかへ折れ込んだ手は太い枝が落ちたように見えた。「よし、よし」田澤は荒っぽい声で制したが、すぐそんなことは軽蔑すべき心ない潔癖さだと自ら恥じた。彼は顔を水へ突込んで水のなかで目をあけた。すると底に沈んでいる青葉が彼女の目の凝視ように見えた。彼女の目の艶々しさだけは、彼の脳裡にそれほどの美しさを印象づけていた[344]。

「蕃地」に入った主人公田澤は、上司井野の紹介で「蕃婦」姉妹のタイモリカルとタイモナモと知り合う。田澤は彼女たちの動作や表情に「内地」の少女たちとの共通を見出すが、その「動物的な艶の漂う肌」、「黒い艶々した目」から、彼女たちが野性的で素朴な「蕃社の娘」ということは一目瞭然であった。一方、井野の「蕃婦」妻の額の濃い白粉の下に、刺青が「拭えない憂愁のように」潜んでいる。翌日、タイモリカルは田澤に洗面の用意をした。田澤は直感的にタイモリカルのことを「不潔」と考えたが、すぐにこの考えを抑える。このような微妙な心理の変化は、彼の「野蛮人」への路を開いていく過程を描いている。「手と枝」および「目と葉」という二つの比喩も、タイモリカルを自然と繋げて、読者に野生的かつ美しい印象を与えている。タイモリカルの身から、田澤は原始的な「野蛮の美」という一面に接近しているのである。

つまり、物語の進展とともに田澤は、「蕃婦」の「不潔」を「野蛮」の一部として肯定し、受け入れるようになる。

> 何という凄じい蕃婦だろう。あれほどむきだしの野性に息づいている蕃婦を見たことがない。あれこそ本物だ。（中略）あの体臭のなかにはヒマラヤ笹の臭いがした。トド松の枝々が擦れあう臭いがした。獣皮や獣の糞の乾いた臭いがした[345]。

前述した「山猫のような深い熱情」が潜んでいたヤウイナーゲのことを、田澤は「あれこそ本物だ」と心動かされる。その心の動きに連なる理由が、「蕃婦」の「臭い」であることは誠に興味深い。周知のように、個人や公衆の衛生

---

[344] 前掲書『野蛮人』、9 頁。

[345] 同上、44 頁。

の進歩は、近代文明を測る一大尺度である。「不潔」と視される体臭を「蕃婦」の魅力として看做すのは、まさに真正面から台湾原住民の本来の姿を肯定し、近代日本の誇る「文明の尺度」を逆転させようとする視点ではないか。

「蕃婦」によって表現される「野蛮」は原住民の外見のみならず、その社会を支える内面的精神性でもある。田澤は後にほかの「蕃社」への「討伐隊」に参加し、自分の手で「馘首」を経験した。「討伐隊」に対する大鹿の描写から、原住民撲滅政策を推進する日本人こそ野蛮人の名にふさわしいという彼の告発が読み取れる[346]。一方、馘首の過程に、田澤は自分の中にも「蕃人」と同じ「野蛮性」が潜んでいることを発見する[347]。つまり、大鹿は「文明人」の中に潜んでいる「野蛮性」を論じたのである。しかし、死んだ人の首を切るという行為は「文明人」の尺度からみると無意味である。田澤はその行為を起こした自分自身の動機が理解できない。「凶暴な行為」、「重大な汚点」、「凶行」など、田澤は心の中で何度も「自問自答に窮して頭をふった」。この時、田澤に解答を提供するのはもう一人の「蕃婦」、「蕃婦」姉妹の妹・タイモナモである。

> 一昨夜洞穴の裡で胸にふき出した悔恨の痛みも未だ消えていなかつた。で、この未だ十五にしかならないタイモナモの態度を前にして、彼はつくづく自分の精神のひ弱さを思い知らされた。（中略）その野蛮性は、例えば大自然の無慈悲に虐げられながら、又その鹹い慈悲に息づきながら胸を擴げている大樹の、その不逞な精神に通じる厳粛な脈動だ。樹液は脈々と流れつづき、こうして小さい枝の先からも迸り出るのだ。それにくらべて、自分は何んといっても移植されたばかりの貧弱な若木にすぎない[348]。

タイモナモを通して、田澤は原住民社会の価値観をはじめて知らされる。切られた首を前に、タイモナモは「極めて平然」で、のみならず「お前の親や兄弟の首もここへ呼びよせろ、お前といっしょに棲はしてやるから」と言っている。タイモナモの言葉は、鈴木質『蕃人風俗誌』（理蕃の友発行所、1932 年）に記録されたタイヤル族の首祭りの祭辞と一致している[349]。中村勝によれば、タイヤルの

---

[346] 前掲論文「大鹿卓『野蛮人』の告発」、65 頁。

[347] 田澤の討伐参加・馘首経験は彼が「野蛮人」に転身する過程の重要な一部分であり、一種の通過儀礼とも考えられる。詳細は拙論「大鹿卓の『野蛮人』―植民地時代における二元対立論への挑戦―」（『日本研究』第 47 集、2013 年）を参照。

[348]大鹿卓「野蛮人」、前掲書『野蛮人』白鳳書院、29~30 頁

[349] 「汝は此処に来りて安住せよ。汝に酒を供へて迎ふ。汝は汝等の父母妻子兄弟姉妹に告

首祀りでは、馘首した首級の口に酒槽の類をふくませ、栗飯または蕃薯等をそなえていわゆる招魂の式（ツマツペオツトフ）を挙げる。招魂歌を唱和すると、その馘首された者の親族もまた他日此処に来るものと信じられている[350]。

文化人類学者の中村勝は台湾北部のタイヤル族のカラ社を例に、首狩りを以下のように説明している。首狩りの要因は、私闘、復讐、強奪、返報、憤激、武勇などの主観的、特殊的な個人の欲望によるものであり、蓄積された首級は共同体の共有物として、「欲望―行為―物化」というプロセスを経て社会化される。年三回の「首祀り」は、共同生活の再生産の儀式であり、共働の目的性を保証するものである[351]。その上で、馘首は「かれらの道徳的意志であり、また生きようとする意志 the will to live にほかなら」ず[352]、精神的紐帯のために道具化されて、彼らの対外的共同意識はまた社会規範＝道徳律を作る[353]。少女のタイモナモが「極めて平然」としていたのは、原住民社会の仕組みが馘首、首狩り、首祭りを必要としたからである。そのような仕組みや社会規範に無理解だった田澤が、自分の馘首の行為に対して、「悔恨の痛み」を消せないのは無理のないことであるが、彼はタイモナモらの「野蛮性」に「厳粛な脈動」を感じ、原住民の生活に感動する。「蕃地」に生まれ、体内に「樹液」が流れるタイモナモに比べ、自身は「移植されたばかりの貧弱な若木にすぎない」という気がした。この認識は田澤を「文明」の教養による抑制から解放し、「野蛮人」の精神に近づくことへ追い立てる。

その後、タイモリカルとの性交・結婚を経て、田澤は「野蛮人」になると決意する。彼は警備員服から「蕃服」に着替え、「蕃人」たちの讃嘆と頭目の認可を得て、「被征服者の情熱」を受けた。結局、原住民社会に受け入れられていく彼は「人垣のなかにキツと立ちあが」って、「それから檻に入れられた野獣のように右往左往しだした」。

以上の検証を通して、「蕃婦」の身を通して表現される「野蛮」は、原住民の外見への肯定であり、そして原住民の社会の仕組みを支える内面的精神性であることがわかる。田澤の視線を通して、「蕃婦」たちの「野蛮の美」を肯定し、原住民全体に対する近代日本の差別的視線を逆転させようとする大鹿の意図が

ぐるに我等の住む此の蕃社の甚だ良い所であることを以てし、多勢の同胞をよび来って同棲しその楽を倶にせよ」。鈴木質『蕃人風俗誌』（台北：理蕃の友発行所、1932）、174 頁。

[350]中村勝『台湾高地先住民の歴史人類学―清朝・日帝初期統治政策の研究』緑蔭書房、2003 年、509 頁。

[351] 同上、84 頁。

[352] 同上、85 頁。

[353] 同上、83~84 頁。

読み取れる。一方、原住民に対する近代日本の最大の恐怖心は、馘首という「文明人」にとって動機不明の行為から生まれたものと言っても過言ではない。したがって、作中で田澤に馘首を体験させ、困惑させ、そして「蕃婦」の口から解答を得らせるという過程は、恐らく読者に一つの解答を提供する大鹿の意欲が含まれるのではないかと考えられる。「蕃婦」は「野蛮性」を表現する同時に、まさに田澤の「案内者」でもある。作中では、「野蛮」という言葉が台湾原住民という人間の集団自体、馘首という行為、そして「首狩り」を必要とする原住民社会の仕組みから生まれた精神性、という三つの意味として表現された[354]。

「タツタカ動物園」から「野蛮人」にかけて大鹿の創作は円熟していく。「山猫」に象徴される「孤独なバーバリズム」は一種の狂暴と自由への渇望であるのに対して、「蕃婦」の身に表現される「野蛮性」は原住民の外見から内面まで重層的に論じられたのである。一方、両作の主人公の深井と田澤はいずれも「何か失った」人間とも言えよう。淋病を罹った深井が性的欠陥者であるのに対して、田澤は母国の社会運動・左翼事業に投身し、失敗して父親に追放され、まるで今までの人生を否定されたような者である。深井は山猫に性的な満足を与えることを通して、一種の自己満足を得たが、彼と山猫（およびそれに象徴する原住民）は立場が異なる。それにひきかえ、田澤は「文明の世界」（＝父と左翼事業の仲間）に捨てられた者であり、彼が「蕃婦」に「野蛮性」を求めるのは自分の虚しさを補填するのではないかと考えられる[355]。そこから生まれたのは、文学上の「蕃婦」の特異性である[356]。

「タツタカ動物園」から「野蛮人」まで、「野蛮性」に対する描写の深さは着実に進められたと思われ、前述した原住民女性と日本人警察官という図式は大鹿の創作において活用された[357]。大鹿はこの図式を以て、植民地支配の実質的問題にもふれている。それが次の「和蕃結婚」である。

354　詳細は拙論「大鹿卓の『野蛮人』―植民地時代における二元対立論への挑戦―」（『日本研究』第 47 集、国際日本文化研究センター、2013 年）を参照。

355　「文明人」と設定された主人公が馘首の過程もしくは原住民女性の身を借りて「野性」を体験し、「野蛮人」になる描写は、「蕃婦」や「奥地の人々」などの大鹿のほかの作品にも現われる。

356　要するに、台湾の植民地文学における「資本家―植民者―父権」という三重支配の体制を生きる漢民族女性の形象と比べると、大鹿は「蕃婦」たちを近代化の基準と抑圧と無縁の存在にしている。詳細は拙論「大鹿卓の『野蛮人』―植民地時代における二元対立論への挑戦―」（『日本研究』第 47 集、2013 年）120~121 頁を参照。

357　人間ではないが、キャラクターの役割から考えると、「タツタカ動物園」の山猫は「蕃婦」の代用として登場すると考えられる。

四、「理蕃」政策の破綻：「和蕃結婚」

原住民女性と日本人警察官の二項対立的図式は、植民地支配の破綻を表現するのに使われる。前述の両作品のほかに、大鹿には「蕃婦」(『海豹』7 月号、1933 年)、「奥地の人々」(『新潮』第 34 年第 3 号、1937 年)、「森林の中」(初出不明、1949 年の白鳳書院『野蛮人』所収）などの諸作品がある。それらの作品は、いわゆる「和蕃結婚」政策による「蕃婦問題」をテーマにしたものである。

「和蕃結婚」政策とは、部落の情報を収集して頭目の権勢をたよりに統治を進めるために、山地の「理蕃」警察官に原住民部落の頭目や勢力者の娘を妻とするよう奨励したものである。最も有名なのは、近藤勝三郎と儀三郎がそれぞれ 1902 年と 1909 年に、パーラン社とマヘポ社の勢力者の娘を妻にした例である。しかし、日本人警察官の家出・妻捨てによって、「和蕃結婚」が失敗した例も多く、原住民の不満を買うことになり、「蕃婦問題」と呼ばれた[358]。

大鹿がこの問題を見逃すわけがない。大鹿は前述の三作品で原住民女性と日本人警察官の恋愛をテーマに、「和蕃結婚」政策の破綻を密かに批判する。三作品の中で、1915 年におきた「高山蕃事件[359]」を元にした「奥地の人々」は、「和蕃結婚」問題のほかに「以蕃制蕃[360]」(蕃を以て蕃を制する）という政策にも触れており、大鹿の原住民関連作品のうちで「最も史実に沿って詳しい」ものと評された[361]。事実、「以蕃制蕃」は霧社事件における日本側の一大戦略でもあったが、ここではひとまず三作品の人物像を通して、「和蕃結婚」という共通の主題を考察する。まずは、日本人警察官への描写を見てみよう。

> その日、所長のイタクラは彼を窃かに呼び寄せると、本官に任命されるように申告して置いた。今後君はおれの片腕になってくれるのだといった。(中

358　詳細は鄧相揚の史実シリーズ『抗日霧社事件の歴史　日本人の大量殺害はなぜ、おこったか』(日本機関紙出版センター、2000 年、34～35 頁と 164～165 頁)『植民地台湾の原住民と日本人警察官の家族たち』(同センター、2000 年、137～138 頁)『抗日霧社事件をめぐる人々　翻弄された台湾原住民の戦前・戦後』(同センター、2001 年、68～72 頁）参照。

359　1915 年 5 月玉里支庁管内の原住民蜂起を端に、台東・花蓮港両庁管内の「高山蕃」が呼応した事件。詳細は前掲論文「大鹿卓『野蛮人』の告発」58 頁を参照。

360　脅威、勧誘で一部の原住民の協力を得て、協力側を日本軍の先頭に立たせ、反抗側の原住民と殺し合わせる戦略である。

361　前掲論文「大鹿卓『野蛮人』の告発」、58 頁。

略）蕃婦を女房にすれば昇級する。それは警備員の誰でもが知っているポリシイだ[362]。

作品「蕃婦」において、駐在所の警備員トミナガは所長と頭目の計略で、頭目の娘・ヤゴタッパスを妻にさせられた。トミナガに好意を持つもう一人の蕃婦サビモーナは嫉妬心から頭目の甥・ウィランユノに嘘をつき、一人の警備員を殺させる。これによって駐在所は部落を討伐すること、部落は抵抗することを各々決意することになる。

本作は政略結婚の本質をむき出しにしている。主人公トミナガは自分に「和蕃結婚」を勧めた上司に、「私はまだ貴方のように生涯を蕃地開拓にささげるだけの覚悟がついていない。いつ内地へ帰ることになるかもしれないのに女房を持つのは……その時はその時のことで捨てていけばいいなどと考えるのもいやだから」と本心を言ったが無視され、「蕃婦」との結婚を強要される。結婚相手の唄声を聴き、幸福そうな様子を見たトミナガは「ますます憂鬱になった」。

もちろん、大鹿の作中では「和蕃結婚」政策に協力する者もいる。作品「奥地の人々」は、勢力者の娘・ヤボンを妻にする駐在所の警備員沢村という「蕃通」の話である。その大筋は以下のようである。

ある日、沢村が電線の復旧工事を行っていると、カシバナ駐在所の旧友林田がやってきた。林田の話によると、カシバナ駐在所は襲撃を受け、彼がカシナバ社の頭目の娘・アナンに救われて死を免れたという。林田は療養のために一時下山することになり、アナンを沢村に託する。その後、アナンは沢村に情を移し、沢村の妻のヤボンと仲が悪かったため、沢村は二人の関係を和らげようとする。一方、沢村は上司から反抗の「蕃人」を懐柔する命令を受け、マシサン社の頭目・オマスの力を借りようと試みる。しかし、アナンは父と兄が遭難した消息を聞き、行方不明になり、懐柔策もオマスの憤死で失敗し、ついに駐在所による「蕃社」大討伐になる。療養から戻った林田は、再び姿が現れたアナンを殺し、その死体を携え、山奥に逃げた「蕃人」が作った新しい「蕃社」の人となった。

主人公の沢村は、「蕃地開拓・蕃人教化」を大義とする強い信念の持ち主である。「蕃人」来襲のため憤懣した駐在所所長に、彼は「沢村三郎、ここの蕃通で、チウ社の勢力者の娘を一昨年家内にもらった男です」と泰然に言い放つ、「蕃地」の平和のため最後まで奮闘する人物である。沢村の旧友であるほかの日本人警察官たちもすべて同じ「大義的信念」を持つ人物として造型されている。こうした人物の造型は、霧社事件後、新たに警務局長となった井上英の「理蕃政策大綱」によるのと考えられる。大綱の重点の一つは、日本人警察官の素質向上にある。

---

[362] 大鹿卓「蕃婦」、前掲書『野蛮人』、66~67 頁。

それは、現地の警察官の任用に「沈重厚重なる人物」を選んで厚遇し、「人物中心主義を以て、理蕃の効果を永遠に確保する」ように努めるべきというものである[363]。後述するように、作品「森林の中」の主人公今村のように、政策を利用して原住民女性と性的関係を持った者もいる。しかし、政策に対する警察官の態度にかかわらず、いずれも良い結果を生み出さなかった。

では、ここで、原住民女性に対する描写に視点を移して見てみよう。

> アナンの心も今は底の方から自分へむかって動きだしたのかもしれない。彼は闇のなかに、目に見えぬ二つの炎が摩擦し合うのが感じられた。(中略)そんな情勢のなかへヤボンを憤激させてかえすのは危険だった。アナンはまたいわば林田から預りものだし、折角小康を得ているらしいカシバナ方面を刺戟することも避けねばならなかった[364]。

作品「野蛮人」における原住民女性が「野蛮」の象徴として造形されるのに対し、三作品における「蕃婦」は強い嫉妬心を持っている人物として描かれている。作品「奥地の人々」の「蕃婦」アナンが何の理由もなく日本人警察官の林田から沢村へ「むかって動き出し」、林田の妻のヤボンと恋のライバルとなる。「日本人であれば誰でもいい」のような「蕃婦」像を通して、大鹿が「蕃地」における恋愛トラブルを描き出した、如何にも興味深い描写箇所である。沢村にとって自分と妻との関係は、駐在所とカシバナ社の関係と同然であり、私情を避けて仕事をするのは不可能である。

> 「ね、ウイランユノ」彼女はうしろから呼びかけた。「あたしこまっている」彼はこれから嘘をつくのだという意識で、軽い暈をおぼえながら、あわてて口走った。(中略) ウイランユノは腰あたりに手をやって蕃刀の握を撫でていた。唇が強くゆがめられ眼には火が揺れだしていた。その様に気づくと、彼女はこれは稍亢奮させすぎたと怖しくなった[365]。

原住民女性の嫉妬心の高揚とともに、政策そのものは問題点になる。作品「蕃婦」では、サビモーナという一人の原住民女性が嫉妬心で、同族の原住民男性に殺人を教唆し大惨事を招く、劇的結末と描かれた。本来山地統治問題を解決するため実行された政策自体が問題になるのは、いうまでもなく近代日本の植民地

---

363 鈴木質太郎『台湾の蕃族研究』台湾史籍刊行会、1932 年、495~505 頁。

364 大鹿卓「奥地の人々」『野蛮人』白鳳書院、1939 年、138~139 頁。

365 大鹿卓「蕃婦」、前掲書『野蛮人』、74 頁。

支配に対する痛烈な皮肉である。事実、前述の「蕃通」近藤儀三郎は 1916 年の勤務中で行方不明になり、この件は妻のテワス・ルーダオ（モーナ・ルーダオの妹）を捨てるための「陰謀」だと原住民側から見られ、霧社事件の一因とも思われる[366]。政策による原住民の反日的情感を恋愛トラブルとして表現するのは、やや問題を矮小化する傾向があったが、原住民男性ウイランユノの怒りを通して、その「不満」を具現化した点は、大鹿の新たな方法だったと言える。霧社事件の直後に、それに関する作品への検閲が厳しいことは想像に難くない。霧社事件をそれと分からぬ形で作品化し、日本の読者大衆に露呈させた大鹿の努力は、賛美に値する。

しかし、政策を逆方向に引っ張っても良い結果が出られない。作品「森林の中」において、N 警戒所の警備員今村は、「蕃婦の接近を戒める」という規則に違反し、T 社の蕃婦サバと私通する。サバが今村と私通していたのは、自分の弟の刺青に対して処罰がなされないという恩恵を受けるためであった。やがて T 社のほかの刺青の違反者は処罰が不満で警戒所を襲撃し、警戒所は翌日に反撃した。警戒所内で休養を取っていた今村は、同僚が持ち帰った首の中でサバの首を見た。

> 紙はすすけて古ぼけているが、それでも墨でかかれた文字は黒く厳しそうに箇条書の行を揃えている――規律ヲ振粛シ殊ニ蕃婦ニ接近スルガ如キ、最モ戒メザルベカラズ。然ヲザレバ之ガ蕃情ヲ動揺セシメ終ニ騒乱ヲ惹起スルコトアリ――理蕃警務課長からの通達の写しなのである[367]。

「森林の中」において、大鹿は角度を変え、政策に対する疑問を描き出している。「古ぼけて」「黒く厳しそうに」書かれた箇条書は、政策の厳格なイメージを読者に与える。本作は「理蕃」警察官が政策を無視して「蕃婦」と私通し、悲惨な結果を招く物語である。結末に、主人公の今村は死んだ恋人の首を掌で挟み、「それはまるで自分の心臓まで凍ってしまうような冷たさ」を感じる。

当たり前のことだが、「理蕃」政策の下に生きる一人一人は民族の別を問わない、自身の愛欲を持つ人間である。その愛欲に支配される部分こそ、民族の差を問わず、人間としての共通する、生き生きとした自由・真実なる感情である。「奨励」にせよ、「禁止」にせよ、その感情を利用・操縦しようとする「和蕃結婚」という考え方自体に、問題の根源がある。霧社事件の原因は、植民地政策の根底

366　鄧相揚『抗日霧社事件をめぐる人々―翻弄された台湾原住民の戦前・戦後』日本機関紙出版センター、2001 年、76 頁。

367　大鹿卓「森林の中」『野蛮人』白鳳書院、1939 年、109 頁。

にある非人間的本質だということを、大鹿は三作品を通して告発したかったのではないかと思われる。

五、おわりに

大鹿卓は「原住民女性―日本人警察官」という図式を軸に、一群の作品を書き、原住民の「野蛮性」と植民地政策の破綻を描き出す。作中では直接的に霧社事件を取り扱わなかったが、事件と「理蕃」政策を、それと分からぬように取り込もうとする意欲が読み取れる。

それでは、冒頭で引用した大鹿の「私なりの意図」とは何だったのか。それはやはり、彼の思想的背景まで探らないと究明できない問題と思われる。

霧社事件に関して、河上・河野両報告が求めたいのは「凶暴性」と「それ以外の原因」への究明である。別稿でもふれたように、当時、原住民の「凶暴性」を最も表現できたのは、「馘首」という慣習にほかならない。大鹿が読者に理解させたかったのは、「馘首」とは「単なるバーバリズム」ではなく、台湾原住民という人々の「本来の姿」である。「バーバリズム」と目される馘首という行為の背後に隠された、原住民社会の仕組およびそこから生まれた精神性を、大鹿は作中で表現した。「蕃婦」の形象や馘首という行為における内面的精神性への描写を通して、大鹿は台湾原住民の「人」として――たとえそれが近代人の目で見た「野蛮人」としても――その人間の本来の真実なる、生き生きとした姿を真正面から肯定している。

ただし、大鹿の作品全体から見ると、彼の意図はそれだけではないと思われる。大鹿は「和蕃結婚」政策とそれに関連する「蕃婦問題」への描写を通して、「理蕃」政策をそれと分からぬよう工夫し、作中で告発した。そこに浮上するのは、「和蕃結婚」という特定的政策のみならず、その政策の根底に存在する非人間的本質である。大鹿の第一作目としての「タツタカ動物園」は、ある意味でそれ以降の一系列の作品を貫く概念を示すものだと考えられる。原住民を象徴する「山猫」と日本人の看守は、いずれも「蕃地」と「理蕃」政策という名のもと、牢獄に監禁されている者である。ならば、両者を牢獄から釈放できるのは、まさに「植民地を即時に解放する」という第 59 回帝国議会で総理大臣に対する全国大衆党の浅原の建言であろう。そこから、大鹿の「意図」および彼と河野の思想的連続性が浮上すると考えられる。この思想的連続性は大鹿の小説家生涯を貫くと考えられる。

近代文学研究者の川村湊によれば、原住民の関連創作に一区切りをつけた大鹿がその後描いた作品は、「鉱山もの」「足尾鉱毒事件もの」「千島・北方もの」の三つに分けられる。内容的に言えば、「千島・北方もの」と「足尾鉱毒事件も

の」はいずれも「鉱山もの」の延長線にあると言えるため、「大鹿の文学的（文学史的）特徴」は「鉱山」という世界を描く点である[368]。大鹿は近代日本の文学者に珍しく鉱山学・治金学を専攻した者であり、彼は鉱夫という職業および鉱山という場所に独自の感性を持つ。大鹿が近代日本の文明・文化の中心から遠く離れた辺境地域を作品の舞台としているのは、こうした感性によると言われる。「友子制度[369]」のような民族や国家を超える共同体の絆を持つ鉱夫、もしくは「野生の美」や「野生の精神」を身につけた台湾原住民、こうした人間たちへの憧憬、渇望を書き続けるのは、大鹿の日本近代文学史の「位置」である[370]。

とはいえ、大鹿の文学を貫くのは「鉱夫・鉱山への感性」もしくは「野性憧憬」のみならず、「弱者への同情」志向でもある。例えば、「足尾鉱毒事件もの」はこの志向を表現する作品である。足尾鉱毒事件とは、明治初期から足尾鉱山の開発によって有害物質が周辺環境に拡散した、近代日本で最初の大規模な公害事件であり、衆議院議員の田中正造は反対運動のため、一生を尽くして奮闘した。大鹿は鉱毒事件と田中の奮闘を描く『渡良瀬川』（中央公論社、1941 年）を書き、翌年に新潮社文芸賞を受けた。大鹿は作品「野蛮人」で文壇に登場し、『渡良瀬川』で一躍注目の作家となったと言える。しかし、その姉妹編の『谷中村事件』（講談社、1957 年）出版の 2 年後、大鹿は逝去してしまう。こうした意味で、鉱毒事件への控訴は、小説家としての大鹿の「最後の仕事」と言え、『渡良瀬川』で大鹿が訴えたのは「資本家の横暴と、それを庇護する政府に対する、田中正造や被害民のいのちをかけた抵抗のありようだった[371]」と指摘されている。そこから、「台湾原住民もの」と「足尾鉱毒事件もの」に共通する「弱者への同情」という大鹿の志向が読み取れるのである。即ち、近代日本における植民地体制や資本主義社会の底層にある、「圧迫された人間」への関与は大鹿の生涯を貫く、もう一つの文学的特徴であろう。

最後に、大鹿の限界に関しても一考したい。前述のように、創作素材は限られうているため、大鹿の作品は「一定の類型化された枠の中」にある。大鹿は河野密から提供された情報を駆使・加味して創作を行っているため、描かれた「理蕃」政策は、必ずしも実情と一致するわけでもない。たとえば「奥地の人々」に書か

368　川村湊「『大鹿卓作品集』解説」『大鹿卓作品集』ゆまに書房、2001 年、1 頁。

369　江戸時代から近代まで続いた鉱山労働者の組合制度。鉱夫は見習い修業を経て、自助的な共済組織である友子同盟の成員として認められ、傷害、不具、廃疾などの場合、扶助、救済を受けることができた。

370　川村湊「『大鹿卓作品集』解説」、2～3 頁。

371　小松裕「解説」『渡良瀬川』河出書房新社、2013 年、469 頁。

れた「移住政策」は実際の政策と異なる[372]。一方、「和蕃結婚」の三作品に描かれた、日本人警察官と原住民の男女関係も「嫉妬心による恋愛トラブル」というパターンに陥りやすいので、単純化すぎる描写であろう[373]。

最も大きな問題は、大鹿は作中に「馘首」という慣習を理解し、表現したが、その慣習以外の一切にふれていない点である。近代文学研究者の川村湊が指摘しているように、「大鹿卓のような『野蛮』の発見は、自らの野性を掘り起こしてゆくことによって、西洋近代の＜文明＞を批判、超克しようという道筋をたどるのではなく、あくまでも文明の枠内のバアバリズムの主張として終わらざるをえなかった[374]」。創作素材の情報源が限られているため、「バアバリズム」（＝台湾原住民）に対する大鹿の認識には限界が存在する。その大鹿に「野蛮性」というものを到底定義できるわけもなく、「野蛮人」の正体も把握できなかった。この点こそ、読者が作品「野蛮人」を「単なるバーバリズムと看做す」原因であり、大鹿の限界でもあった。

372　詳細は拙論『大鹿卓の蕃地文学』（台湾・輔仁大学日本語研究所、2010 年）参照。

373　「理蕃」政策の非人間的本質を非難する着眼点としては、後ほどの坂口樗子に継承された。

374　川村湊「大衆オリエンタリズムとアジア認識」『岩波講座　近代日本と植民地 7　文化のなかの植民地』岩波書店、1993 年、120 頁。

第二節　「克服」された「野蛮人」――中村地平

一、はじめに

中村地平は青春時代の台湾生活と、その後の取材旅行の経験を以て数多くの台湾関連作品（以下、「台湾もの」）を書いた作家である。とくに、取材旅行の後に台湾原住民に関する「原住民もの」を多く産出した。後述するように、中村は「台湾もの」を発表する同時期に、「南方文学」の樹立を主張した。そのため、中村の「台湾もの」に対する従来の研究[375]は、主に「南方文学」との関係から進められており、作中の「原住民像」への論考も、南方文学に「原住民が果たす役割」という前提から出発している。

中村が書いた原住民像は台湾表象の一つとして、「南方文学」と密接的な関係があるが、中村の「原住民もの」は、1930 年の霧社事件の影響を受けたことも忘れてはならない。事件以降、「文明と野蛮」の二項対立は、文学上の潜在的課題となり、中村もこの課題に回避することができなかった。そのため、本論文では先行研究をふまえつつ、中村の「原住民もの」における原住民像および「文明と野蛮」の関係を考えていきたい。

二、「南方文学」における台湾原住民の役割

まずは中村の台湾経験と「南方文学」の主張を確認しておきたい[376]。中村は佐藤春夫の影響を受けて渡台し、台北高等学校で青春時代の四年間（1926～1930 年）を過ごしている。1932 年、東大在学中の中村は、高校時代の生活体験をもとに書いた作品「熱帯柳の種子」を発表し、佐藤春夫に認められて文壇

375　今まで、中村の「台湾もの」に対する研究は、三種類に分けられる。第一は『中村地平全集』（皆美社、1971 年）『中村地平小説集』（鉱脈社、1997 年）『台湾小説集』（ゆまに書房、2000 年）など、作品集につく概論的な解説である。第二は、河原功「中村地平の台湾体験―その作品と周辺―」（同氏著書『台湾新文学運動の展開―日本文学との接点―』に所収、研文出版、1997 年）や蜂矢宣朗『南方憧憬―佐藤春夫と中村地平―』（新版・鴻儒堂出版社、2010 年）など、中村の台湾経験と作品の関係を中心に考察するものである。第三は、岡林稔『《南方文学》その光と影―中村地平試論―』（鉱脈社、2002 年）や阮文雅『中村地平研究：「南方文学」の理想と現実』（広島大学博士論文、2005 年）など、第一と第二をふまえて、「南方文学」を視座として中村文学に対する全般的研究である。本論文は、主に第三の先行論に基づいて考察する。

376　以下は「中村地平年譜」（前掲書『中村地平全集　第三巻』、393～401 頁）参照。

に登場する。東大卒業後、都新聞社（現東京新聞）に勤めている。1935 年、『日本浪漫派』同人に参加し、翌年に創作専念のため新聞社から退社する。1939 年、取材のため当時交際中の真杉静枝と再び渡台し、現地で約一か月間滞在し、帰国後、一連の「台湾もの」を発表する。ほぼ同時期に、散文「新しさの方向」で、「南方に発生した文学」の「明るさ」「楽天性」「行動的描写の卓越さ」「感覚的な詩情」「神話的空想力」「熱情的な飛躍性」といった多くの特徴を、日本文学に「新しい要素」として生かすと提唱する[377]。1941 年 9 月、『台湾小説集』が出版され、「南方文学」の一大成果と看做された。そして同年 12 月に陸軍報道班員として南方戦線のマレーに派遣され、戦後は故郷の宮崎県向日市に戻り、地方文化・文学の建設に力を尽くすことになる。

ところで、先に述べたように、中村は「南方文学」を提唱したわけだが、それと同時に、台湾を題材として創作することに限界を感じてもいた。散文「旅びとの眼――作家の観た台湾」において、自分の「台湾もの」の大半が「異国趣味の範囲」のうちにあると記したうえで、「真に時代的な、生活的な台湾小説の生誕」は「その土地の作家に期待する」と述べている[378]。更に、『台湾小説集』の「後記」で、南方への愛着は一生変わらないが、一連の南方的作品を『小説集』にまとめることで、「大きな文学的な転期」が来る気がすると、中村は表明している[379]。中村は取材旅行によって多くの「台湾もの」を発表し、その過程において「南方文学」を提唱する一方、その限界も悟り、「新たな『文学的な転期』への模索を始めた」と、河原功は評している[380]。

注意が必要なのは「南方文学」の射程とその性質である。近代文学研究者の阮文雅によれば、中村の「南方」とは、故郷の宮崎を起点として台湾へ遡るものであり、「南方文学」という主張は、「中央に対する周縁の地方作家として特殊性を獲得していく作家的戦略」であり、「近代文明や中央集権の一元化への批判を内包しつつ」、「植民地台湾に対する意識をも形成した」ものである。そのため、中村の「南方」は「中央」と相対する概念であり、政策上の「南方」と「異なった枠組みを持っていた」ことになる[381]。

では、中村の「南方文学」と「台湾もの」は、一体どのような関係を持ってい

377　中村地平「新しさの方向」前掲書『中村地平全集　第三巻』、48 頁。

378　中村地平「旅びとの眼――作家の觀た台灣」『台灣時報』1939 年 5 月号、台湾総督府台湾時報発行所、60～69 頁。

379　中村地平『台湾小説集』ゆまに書房、2000 年、273 頁。

380　河原功「中村地平の台湾体験」『台湾新文学運動の展開―日本文学との接点―』研文出版、1997 年、46～47 頁。

381　阮文雅「重層化された『南方』」『社会文学（31）』日本社会文学会、2010 年、29 頁。

るのか。日本統治期の台湾文学研究者の蜂矢宣朗によれば、青春時代の学生生活と比べると、取材旅行は南方への憧憬というより、小説家として「南方」に活路を求め、「新しい文学的な境地の開拓を目指した」、明確的な目的意識を持つものであった。そのため、取材旅行後の作品は、「単に台湾の風物を描くという境地から脱出し」、「南方の風土を背景に据えて、いろいろな人物像を活写し得ている」と言われる[382]。すると、取材旅行後の作品における台湾原住民も、「活写」された人物像の一部となるはずだ。

従来の研究では、中村地平の「南方文学」研究を集大成した岡林稔の言説を例として以下に説明していくが、「原住民もの」は「南方文学」という文脈の下に置かれて論じられてきた。

岡林稔によれば、「南方文学」の成立は「日本浪漫派」との分岐から始まった。「日本浪漫派」は昭和 10 年代に、「故郷回帰」や「農本主義」の発想を主軸に「日本回帰」を提唱する文学集団であり、その代表的人物は保田與重郎である[383]。文学理念において、中村と保田は「神話」と「郷土への回帰」という二つの共通項を持つが、保田が望む「郷里」は日本の古典や伝統が中心であり、そこから天皇に直結する「『雅び』の古代」であるのに対し、中村が憧憬する「郷土」への回帰は古典的な自然風景を強調する「『鄙び』の向日」である[384]。しかしながら中村は単なる「郷土の風土論」と主張したのではなく、「神話的世界」への渇望・憧憬から目線を台湾に移し、原住民神話関連作品を書くことによって、「南方性と神話性を合体させ」、「独自の浪漫主義的な文学の実践を試みた」[385]。郷土主義から神話へ発展していく「南方文学」は、「蕃界の女」「霧の蕃社」「長耳国漂流記」などの作品で、「野蛮性」の表象を通して達成されていく[386]。つまり、「原住民もの」および作中の「野蛮性」は「南方文学」を成立させる鍵とも言える。逆に言うと、作中の原住民表象は「南方文学」を前提に考えなければならない。

そのため、「南方文学」を前提に原住民像を論じるのはほぼ通説であり、ここでは反論するつもりがない。本論文においては、中村の「原住民もの」を霧社事件以降の文学の文脈に置かれて論じる。中村の「原住民もの」を概観すると、そのテーマは「原住民神話」「原住民女性」「歴史事件」に大別され、一定の類型化ができる。ここでは上記の類型に対応する作品「太陽征伐」「蕃界の女」「霧の蕃社」「長耳国漂流記」を通して、中村の原住民表象を考察してみる。

---

382 蜂矢宣朗『南方憧憬――佐藤春夫と中村地平――』鴻儒堂出版社、2010 年、138 頁。

383 岡林稔『《南方文学》その光と影―中村地平試論―』鉱脈社、2002 年、111～112 頁。

384 同上、115～118 頁。

385 同上、120 頁。

386 同上、詳細は 121～162 頁参照。

三、「野蛮人」の世界観：「太陽征伐」

中村は「白い雲がなぜ窪地のうへに靉いてゐるか」(1932 年)、「人類創世」(1934 年)、「太陽の眼」（1939 年)、「太陽征伐」（1940 年）など、原住民の伝説・神話に関連する一連の「神話もの」を書き、戦後に至り、再び同テーマに基づいた『太陽の眼』(1948 年）を出版した。岡林稔の指摘するように、「比較的長いこのテーマの持続性は、このジャンルへの作者の強い意欲を感じさせるもの」である[387]。

中村は「人類創世」と「太陽征伐」の序文に、「神話もの」の創作動機を述べている。それは、もし「小説の最高理念」が「人間の真の姿と心を描く」ものであると仮定すれば、「素朴、真率なる古代の伝説、神話」から多くの教示を得るはずであり[388]、「蕃人の口碑伝説」を保存しておかなければならないという考えを示したものである[389]。これらは、彼の文学理念から発せられたものであるが、ここでは「太陽征伐」を例に、「神話もの」における原住民表象にふれていきたい。

先行研究として、「太陽征伐」における 14 話の神話を原典の『蕃族調査報告書』と対照し、話ごとに詳細な差異を記した阮文雅の「比較表」があり、中村の意図が次の 3 点に帰納される。

まず、生命力溢れる「男女の肉体」に関わる話を多く用い、作品を「一つの身体化された世界」として表現すること。次に、人間と異種の交合や排泄の話を多く用い、作中に「近代文明のもとで秩序化された内地の世界と対置される」「穢れの世界」を成立させること。最後に、ほかの「神話もの」と比べ、「ほぼ原典を忠実的に再現しようとする」本作が、「原住民の価値体系を肯定しよう」とすること[390]である。

阮はすでに原典と作品の内容を詳しく比較・分析したが、ここでは中村の創作意図を考えて、「太陽征伐」を試論したい。そのため、佐山融吉・大西吉寿編『蕃族調査報告書』の目的や性質に注目し、まずは『報告書』の出版機関・臨時台湾旧慣調査会を簡単に紹介する。

台湾総督府は植民地の統治体系を樹立するため、1901 年に台湾臨時旧慣調査会を成立し、その下に「法制」と「農工商経済」の旧慣調査を、それぞれ担当す

---

387 岡林稔「中村地平『台湾小説集』解説」『台湾小説集』ゆまに書房、2000 年、4 頁。

388 中村地平「人類創世」、前掲書『台湾小説集』、79 頁。

389 中村地平「太陽征伐」、前掲書『台湾小説集』、160 頁。

390 阮文雅「中村地平：『太陽征伐』論：『蕃族調査報告書』との関係をめぐって」『アジア社会文化研究』(6)、アジア社会文化研究会、2005 年、110～118 頁。

る第一部と第二部を設けた。1909 年、第一部の法制科の調査が終了すると同時に、原住民の旧慣調査を担当する「蕃族科」を成立。1919 年、旧慣調査会の解散とともに、「蕃族科」の調査作業を引き続くため、総督府は府内に「蕃族調査会」を成立。「蕃族科」から「蕃族調査会」までの作業成果としては、『蕃族調査報告書』（1913～1921 年出版、全 8 冊）、『蕃族慣習調査報告書』（1915～1920 年出版、全 8 冊）と『台湾蕃族慣習研究』（1918～1921 年、全 8 冊）がある[391]。

これらの報告書の中で、『蕃族慣習調査報告書』はどのような位置づけとなるのだろうか。思想史学者の関口浩によれば、1908 年以降の原住民調査を実際に指揮していた者は大津麟平である。第一部部長・岡松参太郎宛の大津書簡（1909 年 4 月 22 日）によれば、今後の「蕃人旧慣調査」について法的関係、人類学、社会的方面、言語学の四つの調査の方向性が提出されていることがわかる。その内の人類学調査を伊能嘉矩に依頼したが事情によって拒否され、そのかわりに呼んできたのが佐山融吉である。佐山自身が記した履歴書によれば、1910 年から 12 年 4 月まで、東京帝国大学理科大学人類学教室で日本考古学の研究を進め、5 月に旧慣調査会に採用されたことになっている。『蕃族慣習調査報告書』は小島由道が中心となって編纂した「法的関係を主に解明するもの」であるのに対し、佐山が編纂した『蕃族調査報告書』は人類学研究を主として、「小島らの調査に参考資料を提供すべきもの」とされている[392]。

つまり、『蕃族慣習調査報告書』は当時の人類学研究の一部であり、法律関係の調査を支えるため作られたものである。このような専門分野の知識を作品化にするのは、「南方」を日本文学に取り込む文学的作業のみならず、人類学から文学への「知識転換」とも言える。専門知識を中央文壇や日本の読者大衆に紹介する中村の手法は、当時において斬新で、注目に値すると思われる。

しかし、「太陽征伐」に現われるのは原住民の「人間像」というよりも、一民族の「世界観」と言うに相応しい。この「世界観」が日本神話と大きく異なるという点に、中村は惹かれたのではなかろうか。たとえば、「太陽」は中村の「神話もの」の最も大きな主題の一つと言えるが、日本神話における「アマテラス」と原住民神話における「太陽」とは全く異なる存在である。『古事記』と『日本書紀』におけるアマテラスは「天神の中心」、「生まれながらの統治者」であり、更に「皇室の祖先神」として崇拝される[393]。しかし、原住民神話における「太陽」

391　台湾総督府臨時台湾旧慣調査会『台湾蕃族調査報告書』中央研究院民族学研究所、2007 年、iii。

392　関口浩「『蕃族調査報告書の成立』――松岡参太郎文書を参照して」『成蹊大学一般研究報告　第 46 巻第 3 分冊』成蹊大学、2012 年、18～20 頁。

393　平藤喜久子『神話学と日本の神々』弘文堂、2004 年、118 頁。

はこうした崇高な地位を持っていない。

> この世の創め。天には日月ともなく、地は暗かった。（中略）その暗い表を、ある日二人の男が各各炬火を片手にあるいていた。間もなくであった。（中略）はげしい風の渦ままに巻きこまれて、男たち二人は天に吹きあげられてしまった。『ええ、ままよ』二人は腹をきめた。天にとどまって、太陽となり、下界を照すことになったのである。闇にとっぷりとつつまれ暗暗黒黒としていたこの世に、今はいちどきに二つの太陽が現れた。泉も川も水も次第に枯れてき、乾からびた土の上には魚の白い腹が無数にひっくり返った。草木はみるみるしぼみ、空をとぶ鳥獣の影も見えなくなってしまった。暑さのために人びとはあえぎ苦しみ、ひ弱な子供は育つことができない。大人も戸外に出るときは、薄板を背負って、陽の光りをさけなければならなかった。（中略）「かくては、人類も絶えてしまうであろう」人人は憂慮した[394]。（下線筆者）

「二つの太陽」は、人々の生活を苦境に陥らせる。そのためこの太陽を「討伐」することが代々相伝の「使命」となる。中村の「太陽征伐」はこういう冒頭部から展開していく。日本神話のアマテラスが人格化された神であるのに対し、原住民神話の「太陽」は人間が転化した自然物である。「高天原復帰」の期待を受けたアマテラスと違い、「太陽」は人々の生活を苦しませるため、歓迎されない存在である。中村は「神話もの」を通して、原住民の「世界観」を紹介しようとしたのではなかろうか。

こうした「世界観」の相異に気づいたのは中村一人ではない。中島悦次は『大東亜神話』（統正社、1942 年）において、「台湾の太陽神は殆ど人格化されていない」「どこまでももとの太陽そのものの姿を露出している」と述べており、その原因は「台湾のように太陽の暑さにたえず刺激されて苦しむ地方」で、太陽が「呪詛の対象」となり、その人格化も遅いと説明している。更に、「内地のように穏やかな、太陽の暖かさにあこがれる地方」において太陽の人格化が速やかに行われ、「人格化の濃度が高いのは実に我が神話の特徴である」と結論を下している[395]。しかし、『大東亜神話』は「太陽征伐」と異なり、「世界観」の相異を「風土性」の差異によるものと解釈しており、それによって日本神話の「先進性」を

394　中村地平「太陽征伐」前掲書『台湾小説集』、161～162 頁。

395　中島悦次『大東亜神話』ゆまに書房、2003 年、200～202 頁。戦時下の 1942 年に、中島は如何に日本神話をもとに帝国周辺の諸地域・国家の神話を統合し、「大東亜神話」を創出する前提で、日本と台湾原住民の神話における太陽を論じた。

訴えようとしたものである。

原住民神話や伝説を作品に取り込むという点で、中村の「神話もの」は佐藤春夫の「魔鳥」と類似しているが、佐藤が原住民の信仰を借りて日本本土の世相を批判するのに対し[396]、中村は原住民の神話を用いることにより、一つの文学上の原始的世界を作ろうとしたのである。しかし、そこに現われるのは原住民の「人間像」というよりも一民族の「世界観」であり、こうした「世界観」は、植民地台湾の現実と無縁である。

四、「蕃婦の野蛮性」:「蕃界の女」

中村は原住民女性を描く作品「蕃人の娘」(初出不明)や「蕃界の女」(1939 年)で、「現実世界」の原住民と「野蛮性」に触れ始めた。ここでは「蕃界の女」を例に考察する。その内容は、東京から来た主人公・画家三吉と小説家山名の目を通して、原住民女性像を描くものである。

「蕃界の女」に関する先行論には大きく分ければ二系列があり、そのうちの一系列が「野蛮性」の問題に着目するもので、中心となっている論者は蜂矢宣朗と岡林稔である[397]。両氏に論旨をまとめると、次の二点が共通している。

一点目が、主人公の三吉と山名はいずれも作者の「分身」であり、都会から来た二人は「蕃婦の野蛮性」に「憧れ」を持ち、その「野蛮性」から「癒し」を得るということ[398]。二点目が、「蕃婦の野蛮性」が次作「霧の蕃社」に現われる「文明と野蛮の葛藤」というテーマを引き出す役割を果たしているということである[399]。

もう一系列は、「蕃界の女」に直接には触れないが、中村の「原住民もの」における「蕃婦像」をジェンダーの視点から考察するもので、中心となっている論

396　佐藤春夫は作品「魔鳥」に、原住民の「魔鳥ホフネ」という信仰を借りて、1923 年の関東大震災における朝鮮人殺傷事件を批判する。詳細は本論文の第二章第四節参照。

397　詳細は前掲書『南方憧憬――佐藤春夫と中村地平――』第二章第三節、『《南方文学》その光と影―中村地平試論―』第三章参照。

398　前掲書『南方憧憬――佐藤春夫と中村地平――』(103 頁)、『《南方文学》その光と影―中村地平試論―』(122 頁) 参照。

399　蜂矢は「文明と野蛮の葛藤」は「蕃界の女」に限らず、地平の「原住民もの」に共通するテーマだと指摘する (前掲書『南方憧憬――佐藤春夫と中村地平――』、104 頁)。岡林は「蕃界の女」では「癒し」というテーマを少々後退させて、「文明と野蛮の葛藤」の相克を浮上させたため、「次作『霧の蕃社』の導入部ともなっている印象を与えている」と論じる (前掲書『《南方文学》その光と影―中村地平試論―』125～126 頁)。

者は李文茹である。李の指摘によれば、中村は乳房、体温、匂いなどの「蕃婦」のセクシュアリティに着眼し、官能的な感動のみを強調するため、それは「『蕃女』に対して行使する植民地主義的な暴力のみならず」、「女性を性愛的な対象とみなす男性的な暴力も同時に内在している」[400]。この「性差別的な要素」を「帝国男性的なオリエンタリズム」と李は呼ぶ[401]。

先行論は「南方文学」と「ジェンダーの視点」で作中の「蕃婦像」を考えたものであるが、繰り返し述べているように、霧社事件以降、原住民の「野蛮性」を解釈することは、文学上の一課題となっている。そのため、ここでは中村の「蕃界の女」を 1930 年代前期の大鹿卓[402]の作品「野蛮人」と比較することによって、事件以降の「蕃婦像」、特に「野蛮性」の特徴を考えてみたい。

まず、「野蛮人」の主人公田沢が、原住民少女のタイモナタによる馘首の儀式を見て、胸を衝かれた場面を見てみよう。

> ただ荒しい風習が彼女の胸を支配しているのだとは思えなかった。血から血へ送り流される野蛮性の、咽ぶような臭気をかいだような気がした。いや、それはただ単に野蛮性とだけいってはいけないのだ。その野蛮性は、例えば大自然の無慈悲に虐げられながら、またその鹹い慈悲に息づきながら胸を拡げている大樹の、その<u>不逞な精神</u>に通じている<u>厳粛な脈動</u>だ。（中略）それにくらべて、自分は何んといっても移植されたばかり貧弱の木にすぎない[403]。（下線筆者）

次は、「蕃界の女」の主人公三吉が「蕃婦」のイワルの試着を手伝う場面である。

> 汗の匂いと、土の匂いがまざったような女の体臭が、ぷんと鼻をつく。体をイワルがくるりとまわした瞬間、柔かい、暖かい乳房がふっと三吉の指さきに触れた。イワルは帯のホックをかけることに四苦八苦していて、そのまま、体を動かそうともしない。三吉の胸はなにか熱いものがあふれ、体が震えるような気もちだった。<u>衰えきっている体に、自然の生命力が吹きこまれるよ</u>

400　李文茹「南方憧憬と帝国男性的なオリエンタリズム―台湾原住民の表象をめぐって」『日本学』27、東国大学校、2008 年、48 頁。

401　同上、60～61 頁。

402　詩人金子光晴の弟。1930 年代前期に台湾原住民関連作品を多数に発表する作家。詳細は第三章第一節参照。

403　大鹿卓「野蛮人」『野蛮人』ゆまに書房、2000 年、30 頁。

うな気がしたのである[404]。（下線筆者）

大鹿と中村はそれぞれの「蕃婦像」を作っているが、特に女性の身体描写に力を注ぐ。しかし、この身体描写は、「帝国男性的なオリエンタリズム」だけではない。二人は女性の身体を描写することによって、自分なりの「野蛮性」を表現しており、その「野蛮性」は身体的特徴だけでなく、精神レベルに達している。両作における「野蛮性」は、いずれも「自然の力」に繋がるが、その「自然の力」への解釈が異なる。大鹿は「文明人」を気恥ずかしくさせる「不逞な精神」、中村は「文明人」を回復させる「癒しの力」と、それぞれが描き出す。それは霧社事件以降、原住民とその「野蛮性」への異なる解釈となっているわけだ。

五、近代日本と台湾原住民の「事件史」:「霧の蕃社」と「長耳国漂流記」

しかし、「太陽征伐」と「蕃界の女」のような原住民の神話と女性像を描く作品は、原住民の「野蛮性」への解釈が不十分であり、霧社事件以来の「文明と野蛮」の二項対立も解決できない。そのため、中村は「霧の蕃社」（1939 年）と「長耳国漂流記」（1940 年）で、近代日本と台湾原住民の歴史事件に力を注ぎ、「文明と野蛮」の二項対立に直面することになる。

「霧の蕃社」は、霧社事件を正面から取り扱った最初の作品として、その価値を大いに認められた。しかし、同時に、「事件の核心に触れること」に限界があり、「総督府の『理蕃』政策への掘り下げに甘さ」もあると言われる[405]。作中に、霧社事件の原因への中村の解釈と看做され、最も多く注目されるところは以下のようである。

日本の理蕃政策は著々成功して、彼らの素朴な野性は漸く文化と称するものの前に、屈服と衰弱とを余儀なくされている。民族的な兇暴性や原始性やは、謂わば生理的に女性としての機能をようやく喪わんとする初老の婦人の活力と同じに、既に絶点から下降し始めている。美しい山々につつまれた、霧の多いこの部落も、体の内部にはどんづまりな、末期的な疾患の徴候が諸処に現れていたのである。

そして、老境を目前に見る婦人が、青春への思慕と執着とのために、生理的な焦慮と煩悶とをかさね、時に意外な、規に外れた行動へ走るのと同じい事情

404　前掲書『中村地平全集　第 1 巻』、278 頁。

405　前掲論文「中村地平の台湾体験」『台湾新文学運動の展開―日本文学との接点―』、43～44 頁。

のもとに、蕃人たちは燃え残りの、残蝋のような野性や、兇暴性やを駆りたて、無謀にも自分たちの性にあわない生活の形式――つまりは文明への格闘を試みよう、としたのであった[406]。

岡林が指摘するように、中村は霧社事件を「野性と文明」が共存できない「歴史の必然の結果」とし、事件そのものを原住民の「野性の反撃」と解釈した[407]。中村は青春時代から台湾を「癒しの場」として叙情を託したため、「蕃界」民族の滅亡を描く「霧の蕃社」は「台湾原住民族への挽歌」であり、「地平自身の青春の挽歌」でもある[408]。

阮文雅は作中の人間像を考察することによって、原住民と「理蕃」警察の苦痛・苦衷を説き、とくに花岡一郎・二郎兄弟[409]と中村自身の心境を重ね、それと「南方文学」の関係を論じた。阮によれば、作中の花岡兄弟は「同族との愛情」と「日本人への義理」の狭間に生きるという、「板挟み」の人間像を表現したことになる。それに対し、中村は「異民族を支配する植民地主義国家」へ反発しながらも、「事実を粉飾すること」によって共犯関係に陥り、その「鬱屈、無力さや孤独」は花岡兄弟の苦境との共通点があり、「霧の蕃社」は中村の心理の葛藤を表現しているが、植民地主義を補完する側面もあるために「一層のジレンマ」に陥り、このジレンマが「南方文学」を放棄するに至った中村の「潜在的理由」であると言われる[410]。

先行研究は、主に「南方文学」との関係および植民地批判という二つの視点から論じられてきた。ここで興味深いのは阮が指摘した「事実への粉飾」である。中村はどのような形で「粉飾」作業を行ったのか。

作中では「恐るべき惨事」の原因として、近藤儀三郎とテワスルダオ（マヘポ社の頭目モーナルダオの妹）の結婚にあるように描かれている。近藤が結婚を申し込むのは、テワスに「魅力を感じ」、また「理蕃政策上」「蕃婦と結婚すること」

406　中村地平『中村地平全集　第 2 巻』皆美社、1971 年、321 頁。

407　前掲書『《南方文学》その光と影―中村地平試論―』、133 頁。

408　同上、139 頁。

409　花岡一郎は本名ダッキスノービン、二郎は本名ダッキスナウイ。二人とも成績優秀だったため、本来は血縁関係がないが、総督府の意によって兄弟関係を結成し、「理蕃」の模範人物とされる。霧社事件の際に、花岡兄弟は家族を連れて自殺した。二人は蜂起側に協力するかどうか、事件史研究の一大疑問となる。

410　阮文雅「中村地平『霧の蕃社』--重層的なジレンマ」『現代台湾研究（24）』台湾史研究会、2003 年、50～51 頁。

が「上司の方でも大に奨励していた」ためである[411]。近藤儀三郎とテワスルーダオの結婚は1909年当時、「理蕃」政策の一環として行われた「政略結婚[412]」である。1916年、近藤は妻を連れて花蓮港庁に転勤するが、後に行方不明になり、テワスルーダオはマヘポ社に帰り、部族の人と再婚することになった。

> 「この気の毒で、善良な妻をすてることはできない」（中略）「自動車に轢かれるか、急病にかかって妻が死んでくれれば……」（中略）「いや、いや、妻をしなすわけにはゆかない。あいつにはなんの罪もないのだ」悔恨に溢れることばかりの自分たちの結婚が、近藤が今更らのように思い返されてき、眼頭はひとりでに濡れてくる[413]。

中村はこの政略結婚を「愛し合う二人の幸せな生活」と描く。しかし、山地を下った近藤は、「蕃婦」の妻を平地の日本人移民の目にさらすことが如何にも恥ずかしく、苦悶の末に姿を消えてしまう。中村はこのようにして、近藤の心理的葛藤を鮮明に描いた。「蕃婦」と離婚するのが「理蕃上に非常に悪い影響を残す[414]」ことを、近藤は誰よりもわかっている。「理蕃」警察は山地の行政・教育・衛生など植民地支配の全般に及ぶ、名実相応の「統治者」とも言えるが、作中の近藤はただの悔恨する無力的な人間でしかない。いわゆる「粉飾」は、こうした「人間像の創出」を通して行う作業で行われている。もちろん、このケースは近藤だけではない。

霧社事件がおこる直接のきっかけは、いわゆる「吉村巡査殴打事件」である。この事件は作品において以下のように描かれている。モーナルダオは社内の披露宴に参加した際、通りかかった吉村巡査を誘い、豚の生肉を無理やり食べさせようとする。しかし、吉村巡査はそれに対して強く拒否・反発し、ついには殴り合いの喧嘩となり、負傷してしまう。中村の描写は史実と少し異なるが[415]、この事件が霧社事件の近因となるのは確実である。

411　前掲書『中村地平全集　第2巻』、301頁。

412　台湾の山地統治政策を遂行するため、山地の「理蕃」警察を部落の頭目・有力者の娘と結婚させるという、霧社事件前の一時期に実行された政策である。詳細は鄧相揚『植民地台湾の原住民と日本人警察官の家族たち』（日本機関紙出版センター、2000～2001年）参照。

413　前掲書『中村地平全集　第2巻』、307頁。

414　同上。

415　実際に吉村を誘ったのはモーナ・ルダオの息子のタダオ・モーナであり、生肉食いを強要させることもなかった。

この官吏侮辱の罪は理蕃上由由しい問題である。直ちに上司に報告して適当の処置をとらなければならない筈のものである。しかし、吉村巡査はずきずき痛む脚腰をひきずるようにして家へ帰ると、その日は病気と称して公務の方は休んでしまった。自分が暴行を受けたことは胸ひとつにたたみ、蕃人たちをかばってやろう、と思ったのである。しかしこの曖昧な温情が却って悪い結果を産むことになった[416]。（下線筆者）

吉村巡査は、吉村克己という実在した人物である。霧社事件史の地元研究者の鄧相揚によると、台中州能高郡警察課霧社分室主任（＝霧社地区の最高行政長官）・佐塚愛祐を含み、当時の各駐在所の所長はほぼ原住民を「横暴な態度で接していた者」であるが[417]、本作に現われる「理蕃」警察は大体において「温情的な人々」として描かれており、それが一つの特徴であると指摘されている[418]。

この「吉村巡査殴打事件」は、吉村巡査の「曖昧な温情」により、当局には知らされなかったことから、モーナルダオは処分されていない。しかし、それを知らないモーナルダオは、当局の無反応に対して疑心暗鬼になり、「自分がやられないうちに」手を出すことにしてしまう。このことから、吉村の「温情」が、霧社事件の原因となったという解釈が作られた。一方、「悪人」として描かれた「理蕃」警察は、ただ「新しく更迭し」、「蕃人の感情を挑発した」、霧社分室主任佐塚愛祐のただ一人となっている。とはいえ、中村は事件を佐塚の「些些たる政治的技術によって」「どうすることもできない最悪の事態」と弁解する。

以上のように、中村は「理蕃」警察を温情的な人間と描かれることを通して、事件そのものを粉飾する。それにひきかえ、次の作品「長耳国漂流記」では、中村が「事実」を強調しようとする。

「長耳国漂流記」（1940 年）は琉球漂流民殺害事件[419]およびそれに関連する台湾出兵をもとに、序章「南方漂到」、第二章「蕃界探検」と第三章「戦の記録」の三部から成された作品である。「長耳」とは台湾原住民のパイワン族が耳飾りをしているため、耳が長くように見えることを指す。中村が語り手として、現地調査の記録の形をとりながら、事件の発生、出兵前の調査、戦争の過程および戦

416　前掲書『中村地平全集　第 2 巻』、315 頁。

417　鄧相揚著、 魚住悦子訳『抗日霧社事件をめぐる人々―翻弄された台湾原住民の戦前、戦後』日本機関紙出版センター、2000 年、90 頁。

418　前掲論文「中村地平『霧の蕃社』--重層的なジレンマ」、46～47 頁。

419　1871 年、琉球王国の首里王府への宮古・八重山貢納船は帰り道で台湾に遭い、台湾南部に漂着し、69 名の生存者のうち 54 名が台湾原住民に殺害された事件。明治政府はこの件を口実に、1874 年に台湾に出兵した。

後の処理などを述べている。

岡林稔の指摘によれば、「長耳国漂流記」は「南方文学」の頂点をなすべき作品であるが、この作品の執筆は「文明による野蛮の啓蒙が日本の領土拡大を正当化する論拠とされていく時代の中」であった[420]。作中の叙述の合間に隠れている「野性や原始への憧憬」と「文明の前に圧殺されて行く台湾原住民の民族としての『荒廃』の実態」を描く中村の内面には彼自身の屈折した感情があるが、中村「南進政策」が展開されていく時代背景において、『長耳国漂流記』を通して「南方文学」の樹立を達成しなければならないと、岡林は指摘している[421]。

阮文雅の指摘によれば、未開の「生蕃」と知的な「日本人」という二項対立的図式は繰り返し作中に現われるが、「文明か野蛮かが曖昧にされたまま」の「支那人」と「熟蕃」は、この二項対立的図式に「雑音を生じさせている」[422]。中村は「南方文学」を以て、東京の中央政府およびその軍国主義的イデオロギーに対抗しようとしたが、彼自身も「重層的な共犯関係」に陥るため、結局、作品そのものは「原住民のステレオタイプ」や「理蕃政策の力」を「宣揚する機能を果した」のみと、結論を下している[423]。

要するに、先行論の共通する要旨は、中村は「霧の蕃社」の延長線にある本作で、「野蛮と文明の葛藤」を表現し、それによって「南方文学」の頂点に到達したが、帝国日本の共犯的関係でその終点を同時に迎えた、ということである。

先行研究をふまえて、ここで考えたいのは「霧の蕃社」と「長耳国漂流記」の連続性である。中村は序章で自分の創作動機を以下のように述べている。

> 蕃界で得た材料を、僕はその土地の篤学な、一二の史学研究の諸家につたえた。（中略）その材料は史実的にとくに貴重なものであると言うことができないにもせよ、すくなくとも裏側に、即ち長耳人の側からしたしく事情を探察したのは、僕がはじめてであるらしかった。このことは、僕の小さな自尊心を満足させてくれた。しかし、同時に小説家としての僕の気もちは大きく変化した。作者の空想をまじえることなしに、言わば小説的粉飾をほどこすことなしに、記録と見聞とによった事実を、正確におうことの方が、かえって材料を生かしうるのではないか、そういう疑いを胸底の片隅に萌しはじめたのである。ひるがえっておもうと、事実の歪曲、虚構ということなしに、

420　前掲書『《南方文学》その光と影―中村地平試論―』、153 頁。

421　同上、156～157 頁。

422　阮文雅「中村地平『長耳国漂流記』における台湾観」『天理台湾学会年報（12）』天理台湾学会、2003 年、91 頁。

423　同上、92～93 頁。

小説作品をかんがえることはできないであろう。したがって、この気もちの変化にあまりにも柔順な、言わば記録と見聞とに忠実でありすぎる物語を、あるいは人は純正な意味で小説とよぶことを拒否するかもしれない。にもかかわらず、作品に対する作者の気もちは絶対である。これから書きつづいてゆこうとするこの紀行的歴史的な物語を、人が文学的のどういうジャンルに分類しようと、作者自身はいまはしばらく意に介さないことにしよう[424]。

長文の引用であるが、そこには、中村が持つ「史官」のようなある種の使命感を読み取ることができる。同じく歴史事件を主題にする作品であるが、「霧の蕃社」は霧社事件の作品化に止まったが、「長耳国漂流記」には「記録と見聞」に「忠実」し、「事実」の再現を強調するという、中村の創作意欲が含まれている。すると、「長耳国漂流記」と中村の参考文献を対照する必要がある。

一方、注意が必要なのは、琉球漂流民殺害事件と台湾出兵は本質的に、日本人、琉球人、漢民族と原住民による「多民族の出会い」である。その「葛藤」は「文明が野蛮を啓蒙する」過程であるが、「野蛮が文明に克服されてくる」過程とも言える。特に、原住民は漢民族の同化、清政府の統治を受けているかいないか、ということによって「熟蕃」と「生蕃」に分かれている。そのため、作中の「野蛮人」への描写は重層的である。ここでは中村の参考文献を念頭に置きながら、作中の重層的描写に注目し、中村が描く「野蛮が克服される過程」を考察していくことにする。

序章「南方漂到」は「車城の墓」と「クスクス蕃社」の二節に分かれる。前者は作品の題名や参考文献、台湾現地の「大日本琉球藩民墓」に関する作者の説明であり、後者は漂流民事件の経緯を皮切りに、物語を展開していく導入部である。後者における琉球漂流民の逃亡を描く一節を見ていくことにする。

島袋以下の三人は径を双渓口（ソウケイコウ）の河岸にとり、下流にむけていた走りにはしった。背後からは蕃人が刀をふりかざしておいかけてくる。（中略）ようよう彼らは交易業者楊天保なる者の門にたどりついた。（中略）支那ふうの家にすみ、支那服をきこんでいる、島袋たちの眼には支那人とばかり映っていたが、家の主楊は熟蕃なのである。（中略）九名の生存者をひきつれ、楊はそこから一里ばかりはなれている統埔（トンポ）にいそいだ。そして、土地の勢力家であるとともに、通事（支那人と生蕃の通訳）である林阿九をたずね、双渓口の惨事をつげた。（中略）林は土地の熟蕃頭目なのであるが、その服装から、

[424] 前掲書『中村地平全集　第1巻』、305～306頁、

琉球人には彼もおなじい支那人にしか見えないのであった。楊につれられた九名は、そのままの足で、ほどちかい保力庄の支那人楊友旺の家へとおもむいた。楊友旺は通事であるとともに、保力庄の総理（村長）をつとめる有力者でもある[425]。（下線筆者）

漂流民の島袋次良らの三人はパイワン族に追いかけられ、「熟蕃」の楊天保と林阿九および「支那人」の楊友旺によって救助される。楊らの三人はパイワン族に報酬を提供し、生存者を捜索・収容し、鳳山県知事まで送っていく[426]。「熟蕃」とは、ある程度まで漢民族に同化され、清政府の統治を受けた原住民を指す言葉であり、「生蕃」と「支那人」の間に介している存在である。

換言すれば、漂流民の三人は、楊天保（熟蕃・交易業者）→林阿九（熟蕃・通事と通訳）→楊友旺（漢民族・通事と村長）という「ルート」を通して助けられる。中村は漂流民の救助者を描く時に、一種の「漸層法」を使うことが見られ、そこには三つの民族における「文明序列」が表現されたと考えられる。漂流民が「支那ふうの家」、「支那服」を見ると安心する描写から見ると、ここでは漢民族を「文明」の尺度とすることが明白である。それと同時に、「生蕃」はその対極の「野蛮」とされる。

最初の救助者である「熟蕃」楊天保という人物から、中村が参考文献に従って書いていないことが実証できる。楊天保は実在人物であるが、「熟蕃」ではなく、その名字も楊ではない。中村の参考文献のなかで、例えば、大路会『大路水野遵先生』（1930 年、大路会事務所）や藤崎済之助『台湾史と樺山大将』（1926 年、国史刊行会）には、「楊天保」あるいはそれに似た名前も記されていない[427]。当時のほかの文献を参照すると、たとえば、落合泰蔵『明治七年　生蕃討伐回顧録』（国光印刷株式会社、1920 年）では「奠天保　広東人にして生蕃と物品交換を業とせるものなり」、大澤貞吉『西郷都督と樺山総督』（台湾日日新報社、1936 年）では「蕃物産交換業者鄧天保」と記されている[428]。また、『台湾車城　楊氏家譜』

425　前掲書『中村地平全集　第一巻』、341～342 頁。

426　その後、生存者たちは当時の台湾府城・台南に着き、府の官船に便乗して中国の福州・琉球館（当時の琉球王国の対中外交を担当する在外官署）まで送れられた。1872 年 6 月 7 日、生存者たちは琉球行きの中国船を便乗して琉球の那覇に戻った。

427　ここで参照するのは復刻版の植民地帝国人物研究叢書第 4 巻『大路水野遵先生』（ゆまに書房、2008 年）と台湾史研究叢書第 1 巻『台湾史と樺山大将』（クレス出版、2011 年）である。

428　ここでは復刻版の台湾史研究叢書第 2 巻『西郷都督と樺山総督；明治七年　生蕃討伐回顧録』（クレス出版、2011 年）を参照。前者は 1935 年の領台四〇周年を背景に、台湾出兵

にも「鄧天保」と記されている[429]。筆者の知る限り、台湾において「奠」という名字がなく、「鄧」の誤記である可能性が高い。つまり、漂流民を救助した物産交換業者は、「熟蕃」ではなく漢民族の広東人であり、その名字は「楊」でなく「鄧」である。中村はこのことを最初から知っていたと思われる。

中村は「車城の墓」の節で「大日本琉球藩民墓」の碑文を記録しており、その中に「広東流氓劉天保ナル者」という文字がある[430]。流氓とは「流民」と同じく、当時は「居所を失って他郷をさすらう民」を指す中国語である。「劉」「鄧」の名字の問題はさておき、「天保」という人が原住民ではなく、広東から流浪してきた者であることを、中村は最初から知ったのではないか。「広東流氓劉天保」を「熟蕃楊天保」に変えることで、中村は一種の「漸層法」を作り、救助者の漢民族の「文明人像」を創出しようとするのではないか。

第二章「蕃界探検」は「楠の樹の蔭」と「神話ふうの部落」の二節に分かれ、水野遵と樺山資紀の台湾実地調査をそれぞれ述べたものである。樺山と水野は初代台湾総督と民政局長であり、植民地台湾を統治する最初のコンビと言える。樺山は漂流民事件当時、熊本鎮台鹿児島分営長に勤めていた。台湾出兵は彼の建言である。樺山は事件談判や現地視察のため、中国と台湾の間に往来し、実地調査で台湾各地を踏破した。それに対して水野は、事件当時に官費留学生で香港滞在中、台湾視察に命じられた。職務上の関係で水野は樺山と知り合い、後に台湾出兵軍の通訳官も勤めた。台湾出兵前、日本側は数回の調査を行っており、その中で水野と樺山の合同調査もあるが、第二章ではこの二人の最初の独立調査が記されている。中村は二人の「台湾初体験」を書くことによって、作品の構造を単純化にしたように思われる。

ここでは作中の水野調査を例に、中村の「文明と野蛮」への描写を考察してみ

の指揮官・西郷従道と出兵関係者および初代台湾総督・樺山資紀の記念事業の一環として、翌年に刊行されたものである。大澤貞吉は記念事業出版委員会の代表者である。後者は 1919 年に出版された、台湾出兵の従軍軍医落合泰蔵の回顧録である。

[429]『楊氏家譜』とは、当時に琉球漂流民を救助した楊友旺一族の家譜であり、楊の義挙および家系図を記載しているものである。2014 年 7 月 18 日～23 日、筆者は植民地文化研究会の紹介を通して、近代台湾と琉球の関係史研究の大家・又吉盛清先生（沖縄大学客座教授）の主催による台湾現地でのフィールドワークを参加、霧社事件と牡丹社事件の現場を訪問、現地の事件研究者・関係者の後裔と交流し、大変貴重な経験を得た。『楊氏家譜』はその時、楊家の家長から手渡されたものである。ここでは紙面を借りて、又吉盛清先生および研究会の大久保明男先生、柳書琴先生、谷本澄子様および台湾当地の交流した方々に謝辞を述べさせていただきたいと思う。

[430] 前掲書『中村地平全集　第一巻』、310 頁。

よう。1973 年 4 月、水野は漂流民事件の談判全権大使・副島種臣より台湾実地調査の命を受け、香港から淡水へ赴き、台湾北部の「蕃情」を視察しようとした。第二章の水野調査はこうした背景に基づいている。この経緯は中村の参考文献『大路水野遵先生』（大路会事務所、1930 年）および藤崎済之助『台湾史と樺山大将』（文史館書店、1928 年）にも記されている。

水野の目に映った漢民族と原住民の形象は、第一章と全く異なる。水野は「支那商人」の黄の案内を通して、台湾北部の「サンコウタ」（＝現・新北市三峡区）を視察し、原住民の頭目と酒を飲みながら歓談し、情報調査の目的を達成した。彼の目に映ったのは、「支那人」に蚕食されていた「蕃地」、「生蕃」と「支那人」の敵対状態、そして「支那人」の様々な悪行――たとえば、鴉片に毒害された「無気味な蕃婆の姿」、土地交換の脅迫のため監禁された「蕃人」の人質などである。

> 老婆はこんどは水野の膝にすがりついてきた。「息子はどうしてもたすからないのでしょうか。息子がたすからないのなら、あたしはこの土地にいても、なんの楽しみもありません。親切、心のやさしい大人（だいじん）、あたしをどうか、あなたのお国につれて行ってください！」（中略）それまでひとことも口をきかなかった家の主が、だしぬけに、かたわらから口をはさんできた。嘲りをふくんだ、とげのある調子であった。「きょう、お前たちがこの旦那と会見したという山な。あの山全部、自分たちにゆずってくれれば、わけなくお前の息子さんたちの命はたすかるというものさ」だまって老婆は支那人の顔をみつめた。涙のかわききった、ふかい恨みのこもった眼ざしであった[431]。（下線筆者）

一人の「生蕃」の老婆が現われ、愛子を救出するように、水野を必死に哀願する。ここは実に興味深いところで、第一章において「救助者の文明人」として描かれた漢民族は、ここでは「拉致犯」のような存在として描かれ、「野蛮な人殺し」の原住民は圧迫された「弱者」に転換されている。つまり、第一章における「救助者の文明人」の漢民族と「人殺しの野蛮人」の原住民は、第二章で「圧迫」と「圧迫される」関係に転換される。そして、水野は「蕃人」が待望する英雄的人物であるように描かれている。

参考文献と対照すると、中村は伝記『大路水野遵先生』を参考したと考えられる。伝記の中では水野の遺稿も収録され、上記の引用箇所は、水野遺稿の内容とほぼ同じであるが、一箇所の極端に不自然な描写がある。それは、息子の救出ができなければ、自分を日本につれていくという、老婆の「哀願」である。息子を

431　同上、373～374 頁。

失って如何に悲痛したとしても、自分の全く知らない土地に行くことを願うのは不思議であるが、水野遺稿には確かに同じ内容が記されている。おそらく、そこから日本の「文明性」に対する「生蕃」の渇望を暗示し、日本の台湾出兵ないし統治の正当性を導出するのではないかと考えられる。

第三章「戦の記録」は数節に分かれ、台湾出兵の経緯を述べたものである。1874年5月6日、日本軍は台湾南部の射寮（現・屏東縣車城郷射寮海岸）に上陸した。6月3日、日本軍は牡丹社を占領し、原住民少女の一人を俘虜とし、「オタイ」と名をつけた。オタイは6月末に東京に送られ、裁縫や習字など日本風の近代的女子教育を受け、同年末に台湾に戻ってくる。第三章にも「蕃女オタイ」という節がある。

> 山ではじめて会ったとき野猿そのままであった彼女は、いま髪をふっくりとたばね、体にはきっと帝都でも最新流行にちがいない、ハイカラなうすものをまとっています。おまけに片手を日傘をさげ、沓まではいて私の前にたたずんでいるのです。そして私をみると、「旦那さん、しばらく」と、頭をさげるのです。（中略）巨きな、たくましい体をもったトーキトクのうしろから、オタイはいそいそと華やかな模様のついた日傘をかざし、風呂敷づつみを両手にさげ、砂原のキラキラする陽炎のなかを、次第にとおさがってゆく。それはまるで子守奉公の少女が父親に連れられて里帰りでもする風景に似ていて、たいへん印象的でした。（中略）そういうふかい故里の山の家にかえったのち、彼女の運命がどうひろがって行ったか、不幸にしてそのことを私はしりません[432]。

上記の引用は水野の目を通して、日本から戻ったオタイの姿を描く場面である。オタイをめぐる描写も水野遺稿と合致する。水野遺稿によれば、オタイが東京から台湾へ帰った時、征台軍総指揮の西郷従道都督は諭告を発した。諭告には「所獲孩女年方幼少、天良性質、教則可導、訓則可化」という言葉があり[433]、即ち「少女オタイは天性が素朴で教化できる人間だ」という意味である。西郷の諭告はもう一つの暗示をかけ、つまり「野蛮人」の台湾原住民は教化を得れば教化できる人間であり、「子守奉公の少女」は正にその教化の成果である。少女オタイは「野蛮と文明の相克」の最終結果を象徴する。「野蛮人」はついに「文明国」に「克服」された。

ただし、オタイは故郷に帰ったらどうなるのか、という疑問を水野は持つ。こ

---

[432] 前掲書『中村地平全集　第一巻』、437～438頁。

[433] 前掲書『大路水野遵先生』、299～300頁。

の疑問は水野遺稿に記されていない。それは恐らく、中村が水野の口を借りて自分の憂心を表したのであろう。その疑問は杞憂で終わらなかった。事実、オタイは精神的問題で、20 歳にも満たないうちに孤独死してしまう。孤独に陥ってしまったのは、「皆の模範として立派にやっていく」という西郷の別れの言葉を受けたオタイが、日本人を見習うと主張したために、部落の人々に孤立させられたらである。また、「集落外の男と交わった」という、パイワン族の伝統的な倫理に違反したためかもしれない。結局、オタイは日本が台湾を領有する前に死んでしまったわけである[434]。

「霧の蕃社」と比較すると、中村は「長耳国漂流記」において「史実」の部分を強調し、参考文献を忠実に参照したうえで、三つの民族の「出会い」を描いた。作中の三つの民族の対比を通して、中村は近代日本を「文明国」と描く一方、漢民族と原住民の「野蛮性」を析出し、原住民が「文明国に克服される野蛮人」となった。そこから見れば、「長耳国漂流記」は「霧の蕃社」の基調を継承し、二項対立の「解決」を成し遂げたものである。

六、おわりに

中村の「原住民もの」を概観すると、三つの類型の作品はただの凶悪、残酷な「野蛮人像」を表現するのではなく、豊富・多彩な原住民形象を呈している。中村は原住民神話を作品に取り込むことによって、当時の人類学知識を中央文壇ないし読者大衆に紹介し、原住民の世界観を表現することもできた。その世界観への探索は、原住民の「野性の根源」を求めることとも言えよう。一方、原住民女性の身体に対する中村の描写は、「野蛮性」を「癒しの力」として表現した。それは 1930 年代前半の作品と比べ、明らかに異なった。

しかし、それだけでは霧社事件以降の「文明と野蛮」の二項対立という、文学上の潜在的課題は解決できなかった。中村は霧社事件と琉球漂流民殺害事件を作品化することによって、この課題に向き合おうとしたが、30 年代後半、日本の南進政策と軍事占領地の拡大とともに、日本は支配地域の住民に対して自国の「文明性」を主張する必要性がますます増えた。「霧の蕃社」と「長耳国漂流記」はこうした歴史的背景に置かれたものである。中村は前者で日本警察官への「粉飾」を行ったのに対し、後者では事件の「史実」を強調しようとする。両事件を描く過程において、中村は「文明と野蛮」の課題への思考を歴史的・民族的レベルまで高めようとした。そのため、中村の「原住民もの」は、彼の提唱した「南方文学」に重要な役割を果たすのみならず、霧社事件以降の台湾原住民関連

---

[434] 台湾女性史入門編纂委員会編『台湾女性史入門』人文書院、2008 年、223～234 頁。

作品にも特別な位置をつけている。

第三節　二項対立的図式の脱構築化――　真杉静枝

一、はじめに

真杉静枝は植民地台湾で青春時代を過し、台湾関連作品（以下は「台湾もの」と略す）を多く書いた作家の一人である。少女時代の台湾生活に関する初期作品のほか、真杉は 1940 年代前期に再び「台湾もの」を発表し、その中で台湾原住民を描く作品（以下は「原住民もの」と略す）も現われた。

真杉の伝記やモデル小説は、彼女を「悪女」として描かれたものが多数である。そのため、従来の研究は真杉の私生活に重点を置き、その文業を閑却した。近年、女性作家研究の隆盛とともに、真杉の文学をめぐる研究が現われてきたが、真杉の「台湾もの」は大部が植民地女性を描いたものであるため、それに関する主な研究はジェンダーの視点から論じたものとなっている。

本論文においては視点を変えて試みたい。1930 年の霧社事件以降、台湾原住民関連作品はほとんど「文明と野蛮」の二項対立の課題に直面しなければならない。一方、40 年代前期は戦争が白熱化した時期であるため、真杉の「原住民もの」は「国策文学」の一部ともなっている。以上の歴史背景を念頭に置きながら、真杉の「原住民もの」を再考したい。

二、真杉静枝と「故郷」の植民地台湾

まずは真杉静枝の略歴を見ていく[435]。1900 年、真杉静枝は福井県に生まれるが、後に家族と共に台湾に渡る[436]。17 歳の時、両親の意思で 13 歳も年上の台中駅の助役と結婚したが、1921 年に大阪の祖父母のもとに出奔する。その後、大阪毎日新聞の記者に勤め、採訪のため武者小路実篤と知り合う。1927 年、処女作「駅長の若い妻」で文壇に登場し、文学活動を始める。1934 年、作品「南方の墓」の発表を契機に、植民地台湾に生きる日本人女性の生活を描き始めた。同年、中村地平と東京で出会う。1939 年、当時交際中の中村と台湾を訪問し、十六年ぶりに母を見舞う。1940 年、陸軍「南支派遣軍慰問団」に参加して広東へ

435　以下は呉佩珍「真杉静枝年譜」（『真杉静枝與殖民地台湾』聯経出版、2013 年、211～212 頁）と河原功「真杉静枝『ことづけ』解説」（『ことづけ』ゆまに書房、2000 年、1～6 頁）参照。

436　呉の指摘によると、父の真杉千里は当時に内縁の妻を持つため、母の黒川密伊との縁組は家族に大反対される。そのため、二人の入籍手続も静枝の戸籍登録も相当に遅くなり、一家の渡台も新生活の展開を求めるわけである（前掲書『真杉静枝與殖民地台湾』、1 頁）。

赴き、翌年 1 月に台湾に滞在し、6 月に『南方紀行』、11 月に『ことづけ』を出版。戦後は創作活動を休止し、被爆少女の救護に尽力した。1953 年、ロンドン開催の国際ペン会の参加を機に、欧米を遊歴。

真杉の略歴から見ると、彼女は「湾生」に近い人であることがわかる。湾生とは、日本統治期の台湾に生まれた「内地人」のことである[437]。台湾に生まれたわけではないが、成年まで台湾で過ごしており、その意味で植民地台湾こそ、真杉の「故郷」と言えよう。特に、39 年と 41 年の台湾旅行の体験によって出版された『南方紀行』と『ことづけ』には、台湾に取材したものが多かった。その大半は私小説風で、真杉自身を投影させた女性を中心に描かれたものと言われている[438]。戦後も真杉は「祖国」日本に戻った台湾引揚者を描き続けていることから[439]、植民地台湾は真杉文学の一つの大きな主題であったと言えよう。

真杉への注目は、伝記とモデル小説から始まった。自伝小説「ある女の生い立ち」[440]のほかには、火野葦平（ひのあしへい）「淋しきヨーロッパの女王[441]」、石川達三（いしかわたつぞう）『花の浮

437　当時には軽蔑的意味を含む用語として使われた。蜂矢宣朗の定義によると、「辞書類ニ此ノ語ヲ見ズ。蓋し、領台後台湾ニ於テ出生シタル内地人ノ二世三世ナド言フナラン。他ヲ指シテ斯ク言フ時ハ多少侮リ又ハ揶揄ヲ籠メテ用ヰ、自ラヲ指シテ言フ時ハ些カノ気恥シサヲ伴フ常トス。但シ、誇リヲ持チテ使ヒタルモ強チニ誤用トハ言ヒ難シ」（『湾生の記』出版地不明、1980 年）。蜂矢氏自身は「湾生」であり、植民地台湾に関する自分の体験・回想・考察の文章を多数に発表し、それらの文章を収録する形で、『湾生の記』（1980 年）、『続　湾生の記』（1990 年）、『続続　湾生の記』（2000 年）、『続続続　湾生の記： 卒寿記念誌』（2010 年）を出版した。

なお、台湾では近年に「湾生」のブームが起こっている。湾生の後裔である田中実代（台湾名：陳宣儒）は 2002 年より 200 人余りの湾生を訪問し、その成果として『湾生回家』（遠流、2014 年）を出版し、同名のドキュメンタリーも 2015 年 10 月に上映した。今後は学界でも「湾生研究」のブームが巻き起されると思われる。また、類似的用語はほかに「湾吏」（在台日本人の官吏）、「湾弁」（在台日本人の弁護士）などがある（前掲書『湾生回家』、8 頁）。

438　前掲「真杉静枝『ことづけ』解説」、2〜3 頁。

439　真杉の戦後作品について、呉は詳しく考察した。詳細は前掲書『真杉静枝與殖民地台湾』第六章参照。

440　『新潮　50（5）』（新潮社、1953 年）に初出、『戦後の出発と女性文学　第 8 巻』（ゆまに書房、2003 年）に所収。

441　『新潮　52（1）』新潮社、1955 年。

草[442]』、吉屋信子「小魚の心　真杉静枝と私[443]」、林真理子『女文士[444]』などがある。それらの自伝やモデル小説の共通点は、真杉の「作家」としての一面を見過し、「女」としての一面しか論じられなかった、というところである。特に『花の浮草』は真杉の「悪女像」の造形に力点が置かれており、そのため、自伝やモデル小説によって造形されてきた「悪女像」は、従来の真杉研究に大きな影響を与えたと言われている[445]。その中での唯一の例外は、十津川光子『悪評の女―ある女流作家の愛と悲しみの生涯』（虎見書房、1968 年）である。真杉の妹・勝代という遺族の視点から、新たに真杉像を構築したと評されている[446]。

「悪女像」の造形に対する最初の批判は、蜂矢宣朗と尾方明子の論に現われた[447]。それに続いて、真杉の文学に対する本格的な研究は 2000 年代に現われ、代表的な研究者は李文茹や呉佩珍である[448]。

李文茹は真杉の植民地経験を通して、テクスト分析を行う。その論考によれば、真杉が少女時代や婚姻生活の不愉快な経験をもとに書いた初期作品に現われた植民地台湾は、「女性に不幸をもたらす」記号として描かれるが、中村との旅行後に書かれた戦時下の台湾を描く作品では、真杉が旅人の視線を以て植民地女性を「他者」として観察するようになり、その漢民族や原住民女性への観察、そして日本人女性への内面的描写を通して、真杉は植民地経験を持つ自身の「日本

442　文芸春秋、1974 年

443　『自伝的女流文壇史』（中央公論新社、1977 年）に所収。

444　新潮社、1998 年。

445　前掲書『真杉静枝與殖民地台湾』、4 頁。

446　同上、7 頁。

447　詳細は蜂矢宣朗「真杉静枝と台湾―『むすび』と『ながれ』から」（『天理台湾研究年報 4』天理台湾研究学会、1995 年、113 頁）と尾方明子「作家・真杉静枝―復権のための序章―」（『小説集　その後の幸福』ゆまに書房、2001 年、6 頁）参照。

448　2000 年代の真杉研究者は、詩人の高良留美子もいる。主な論文は「真杉静枝が書いた台湾―陰影のあるエッセイ」（『植民地文化研究　第 4 号』植民地文化研究会、2005 年、76～79 頁）、「真杉静枝『南方の言葉』を読む―本島人と台湾語への愛」（『植民地文化研究　第 5 号』植民地文化研究会、2006 年、162～170 頁）や「真杉静枝と台湾経験―昭和文学の失われた輪―」（『社会文学　29』日本社会文学会、2009 年、49～56 頁）などがある。ただし、高良は主に真杉静枝とその台湾経験を紹介し、真杉の復権を提唱するが、作品を深く論じなかった。

人」としてのアイデンティティを確立した[449]。

呉佩珍は真杉生涯の「台湾もの」を全面的に考察し、集大成したとも言える。その論考は三つの方向に分けられる。第一は、真杉の自伝小説と私小説的作品との対照、そして武者小路実篤や中村地平との文学交渉を考察することによって、作中の「植民地台湾」という記号を論究すること。第二は、真杉の戦時下の国策文学作品を考察し、その特徴を論じること。第三は、真杉の戦後の「台湾引揚者」を描く作品を考察すること[450]。

先行論から見ると、真杉は植民地台湾の日本人女性を主体に創作していくうちに、国策文学の風潮に合わせ、漢民族や原住民の女性を視野に入れていた、という過程が理解できる。ここでは先行論をふまえて、以下の三つの方面から再考してみたい。

まず、真杉の「原住民もの」における植民地女性像に、原住民女性は、特に作中の漢民族女性に対し、どのような位置づけがなされているのか。特に、霧社事件の「蕃婦問題 」とは如何なる形で結びついているのか。これが第一である。

次に、霧社事件以降の作家たちは、常に「日本人男性―原住民女性」という二項対立の図式を用い、近代日本と台湾原住民の関係を考えており、作中にこの図式を用いるのが一つの「伝統」とも言える。ならば、真杉が如何にこの図式を取り扱ったのか、というのが第二である。

最後は、従来はジェンダー研究の視点で、真杉の描く「蕃婦像」に注目しがちだったが、ここでは作中の「蕃男像」を一考するというのが第三である。

本稿においては、1941 年 6 月と 11 月にそれぞれ出版された真杉の作品集『南方紀行』と『ことづけ』を対象に、その中に収録される「原住民もの」を考察し、上記の問題を解決してみたい。

三、『南方紀行』における「蕃婦」観察

『南方紀行』は、「広東春日記」と「台湾の土地」の二部から成る作品集である。それぞれ真杉の広東訪問と台湾旅行を記録したものであり、中には 3 編の小説も収められているが、大半が随筆である。本節では、随筆「征台戦と蕃女オタイ」と「台湾女性瞥見」、そして小説「蕃女リオン」を取り上げて考察する。ここでは、二編の随筆を見てみたい。

前述のとおり、真杉は 40 年前後、2 回の台湾旅行に出ている。1 回目は中村

449　李文茹「植民地を語る苦痛と快楽―台湾と日本のはざまにおける真杉静枝のアイデンティティ形成―」『日本台湾学会報　5』日本台湾学会、2003 年、42～64 頁。

450　呉佩珍『真杉静枝與殖民地台湾』聯経出版、2013 年、207～209 頁。

とのプライベート旅行で、帰国後の二人の作品には、一つの重なる描写対象があり、それは「蕃女オタイ」である。ここではタイトルに含まれる「オタイ」の由来を説明しつつ、二人の作品を対照してみたい。

1871 年、琉球王国の宮古・八重山群島の貢納船が、台風に遭って台湾南部に漂着した。しかし、上陸した生存者 66 名のうち、54 名が台湾原住民のパイワン族に殺害されてしまう。これが「琉球漂流民殺害事件」である。1874 年、明治政府はこの事件を口実に、現地の原住民部落・牡丹社を討伐し、いわゆる「台湾出兵」となる。そして日本軍は牡丹社を占領中、一人の原住民少女を俘虜として「オタイ」と名付け、東京に送って近代的女子教育を受けさせた。そして半年後、同化されたオタイは故郷に戻されることになる。

このオタイが、二人の共通の創作素材となった。中村が小説「長耳国漂流記」を、真杉も随筆「征台戦と蕃女オタイ」を書いた。二人ともに、故郷に戻ったオタイの生活に焦点を合わせている。

以下で、二人の作品を比較してみる。まずは中村地平「長耳国漂流記」の一節を見てみよう。

> そういうふかい故里の山の家にかえったのち、彼女の運命がどうひろがって行ったか、不幸にしてそのことを私はしりません[451]。

次は、真杉静枝「征台戦と蕃女オタイ」の一節である。

> 私は、この前台湾へいった時、生蕃人に幾度か会ったが、私のみた範囲では彼らの文化がおくれていることは依然として原始人をそのままの感があった。そういう彼等の中へ、一度東京の生活を知った少女が、どんな風にして戻りどんな風に彼等と馴染んで暮した――かそんなことが知りたいと思った[452]。

オタイは、真杉と中村の共通の文学素材となった。中村が長編小説「長耳国漂流記」の一節でオタイを紹介し、真杉は随筆「征台戦と蕃女オタイ」を書いた。二人とも故郷に戻ったオタイの生活に興味を示したが、その着眼点は異なっている。中村はその際に「南方文学」樹立という目的から、「南国」台湾を象徴するような原住民の「野性」に憧憬している。それに対し「文明化」されたオタイが「原始人」のままの同族に影響を与えるかどうか――というのが、真杉の関心

451　中村地平『中村地平全集　第一巻』皆美社、1971 年、437～438 頁。

452　真杉静枝「征台戦と蕃女オタイ」『南方紀行』ゆまに書房、2000 年、237 頁。

である。

真杉は自身の植民地観察で、この疑問を自答する。随筆「臺灣女性瞥見」は、真杉が台湾旅行で見た植民地の女性たちを描いたものである。「私」は台北で「印刷した活字みたい」に正しく日本語が発音できる少女給仕と、「びっくりするほど」正確な日本語を喋る女性運転手に出会う。1940 年前後は皇民化政策が推進されている最中であったため、「私」の見た「本島人」女性は、日本語常用運動が成功した象徴と言えよう[453]。しかし、「私」の印象に最も深く残ったのは「本島人女性」ではなく、一人の「蕃婦」である。

> 駅の前に背が高い、髪を内地の若い婦人がするように、無造作に後ろに束ねた婦人がはてなゆかたを着て、背に赤児を負って立っている。その婦人がふとこちらをみた時、私は思わず声をあげそうだった。鼻の高い面長顔に、くっきりときつい眉と、美しく幾分けはしい大きな眼をもった、大変典雅とも云いたいほどな美人なのである。（中略）列車の窓々から、いっせいに自分に向けて眼が集まっている、ということを意識していても、その蕃婦はそれを、大変素直な受け方で、まるで生れ落ちた時から馴らされてでもいるほどな無関心さで受けている[454]。

嘉義から阿里山への登山列車の中で、「私」は車内で見かけた「蕃婦」の美貌に驚く。この美女は、山中の駐在所の「内地人」巡査の妻であった。「私」は正しい日本語を喋る「本島人女性」より、一言も語らない「蕃婦」に対して深い印象を抱く。その後、「私」は阿里山に登り、山上の小学校の S 先生と話し合う。そして S 先生から「蕃人」の女学生に関して、「何をさせても一番」「実によく出来る子供」「美しい娘」など、多くの好評を聞く。

ここでの女学生と前述の「蕃婦」は、互いに呼応する作中人物だと考えられる。つまり、美貌かつ優秀な女学生は教育を受け続けたら、ついに「大変典雅な」「蕃婦」となれる、ということを真杉は暗示しているのではないか。「私」にとって、流暢な日本語を操る漢民族女性より、むしろ「女学生―蕃婦」という「野蛮人」を「文明化」にするプロセスに印象が深い。数十年前のオタイと異なり、真杉が見た原住民女性は、すでに「文明化」された者となる。

タイトルは「臺灣女性瞥見」とはいえ、真杉の原住民観察は、女性だけとは限らない。小学校を訪れた後、「私」は山上の人々の頬に「内地の人みたいなバラ色の血色」を見て、それが平地の「元気な子供の顔」にも見えなかったと語る。

---

[453] 真杉は植民地における「国語常用」や「内台結婚」政策に格別な関心を持ち、それらの政策をテーマにする作品「南方の言葉」がある。

[454] 真杉静枝「臺灣女性瞥見」『南方紀行』ゆまに書房、2000 年、173 頁。

こうした表現には、山地に住む人（＝「蕃人」）が平地の人々（＝「本島人」）と異なり、「内地」の人と血が相通する、という印象を受け、原住民に対する「私」の親近感は「蕃婦」から民族の全体へ拡大していくことが読み取れる。一見、「臺灣女性瞥見」は漢民族と原住民の女性を等分に描いているように見えるが、実際は原住民女性に重点が置かれていたと思われる。原住民の女性ないし全民族への「瞥見」を通して、この作品は国策文学としての機能を見事に発揮した感がある。

だが、霧社事件の背景を考えると、真杉は「蕃婦問題」に直面しなければならない。霧社事件前、台湾総督府は山地統治を円滑に進めるため、日本人警察官と原住民女性の政略結婚を奨励した。しかし、幾つの失敗例も現われ、それが事件の一因と看做され、「蕃婦問題」と呼ばれた。真杉は「臺灣女性瞥見」で政略結婚の「成功例」を描いたが、小説「蕃女リオン」で「理蕃」政策に疑問を示す。

「蕃女リオン」は、台湾山中で自殺を図った「内地人」青年の梶原と、彼を助けた「蕃女」リオンの物語で、最終的に、梶原が「死ぬ」と言って姿を消してしまい、残されたリオンが混血児「愛子」を産むという悲劇に終わる。

この作品は霧社事件の「遺留問題」を提示している。要するに、事件以降の作家たちは、常に作中で植民者と被植民者の関係、特に「日本人男性—原住民女性」の関係を描写することによって、事件の「出口」を探そうとする。真杉も例外ではない。「臺灣女性瞥見」では大和撫子のような「蕃婦」が描かれるのに対し、「蕃女リオン」は日本人との恋愛で私生児を出産した原住民女性を描き出す。前者が実在人物をもとに「蕃婦の理想像」を語るのに対し、後者は虚構人物を通して植民地の現実に存在する「蕃婦問題」を提示している。

> 事実、それから幾日も捜査が続けられたが、青年の姿はついにみつからなかった。勿論、生きて現われるのぞみはないものと思わねばならなかった。それっきりである。——リオンは、間もなく子供を生んだ。駐在所の夫婦はこの混血児に「愛子」と国語読みの名をつけてやった。今、愛子は六つくらいになるはずだ[455]。

李文茹によれば、「蕃女リオン」は「唐突な終り方で物語が閉じられ」、「日本人男性と『蕃女』の問題を取り上げる」が、「私生児の問題が表現されないように」「深刻な現実問題や帝国男性の責任などが不問に付される」[456]。李の指摘

455　真杉静枝「蕃女リオン」『南方紀行』ゆまに書房、2000 年、260 頁。

456　李文茹「『蕃人』・ジェンダー・セクシュアリティ—真杉静枝と中村地平による植民地台

は正しいと思われるが、「蕃女リオン」は混血児の問題を提起することで、従来の文脈を継承し、新しい一歩を踏み出したのではないかと考えられる。

佐藤春夫は1925年の作品「霧社」で、日本人警察官に捨てられた「蕃婦」を描き、またその娘らしき売春疑惑の少女を登場させ、植民地問題の「連鎖的生産」を暗示した。これは山地統治の破綻に注目する先駆的作品だと思われる[457]。「蕃女リオン」は「霧社」の暗示した方向性を、「六つくらいになるはず」の混血児「愛子」を創造することで提起している。終戦を挟んで、混血児をテーマに「時計草」「蕃地」を書く坂口樗子は、真杉からこの問題意識を継承するとも言えよう。そういう意味で、「蕃女リオン」は植民地問題への思考を受け続ける作品ではないか。

四、『ことづけ』における二項対立的図式の脱構築化

『ことづけ』は、当時の南進政策に従う形で「南方」を多く扱った作品集であり、11篇のうちに、6篇が「台湾もの」である。その中で、「サヨンの鐘」に関連させた作品（以下は「サヨンもの」と略す）が、原住民女性をテーマにしている。「サヨンの鐘」とは、台湾総督府が制作した「神話」である。

1938年9月、応召のために下山中の警手・田北正記の荷物を搬送する際、タイヤル族の少女サヨン・ハヨンが悪天候の中で足を滑らせ、増水した川に落ちて命を落とす。サヨンは国語講習所で田北の授業を受けており二人はいわば、師弟関係となっていた。総督府はこの事故を利用し、「国」や「恩師」のために犠牲・献身する「少女像」を作った。まず、台北州知事藤田治郎による記念碑建立（1939年）や台湾総督長谷川清による記念鐘の授与式（1941 年）などの儀式を行い、歌謡・劇本・映画脚本・小説ないし教科書に反映させていった[458]。こうして「サヨンの鐘」神話が作り上げられたのである。

湾表象からの一考察―」、134頁。

[457] 簡単に言うと、日本人警察官に捨てられた「蕃婦」が生んだ「娘」は、「父の不在」で生計が困難するため、娼婦となる可能性があり、世帯を渡る植民地問題となること。詳細は第二章第四節参照。

[458] 「サヨンの鐘」という物語の生成・流布過程及び各種の派生物を、下村作次郎は詳細に考察した。主な論文は「『サヨンの鐘』物語の生成と流布過程に関する実証的研究（1）」（『天理台湾学会年報』第10号、同学会、2001年）、「日本から逆輸出された『サヨンの鐘』の物語――中央劇団の台湾上演と呉漫沙の『サヨンの鐘』」（藤井省三・垂水千恵・黄英哲編『台湾の「大東亜」戦争―文学・メディア・文化』東京大学出版会、2002年）、「各種『サヨンの鐘』の検討―劇本・小説二冊・シナリオ・教科書―」（『中国文化研究』第19号、天理大学国際文化学部中国学科研究室、2002年）などがある。ほかには、洪雅文「戦時下の台湾映画と『サヨンの鐘』」（岩本憲児編『映画と「大東亜共栄圏」』森話社、2004年）がある。

繰り返し言うように、政略結婚による「蕃婦問題」は、従来、霧社事件の一因と看做されてきた。そのため、「サヨンの鐘」という神話は、それまでの日本人男性と原住民女性の「男女関係」を「師弟」あるいは「主従関係」に切り替えるために構築されたものと言われている[459]。真杉は当時の「神話」ブームに合わせ、「サヨンもの」となる「リオン・ハヨンの谿」や「こどつけ」を書いた。

両作に共通する特徴は、日本人女性「私」の視点を通し、日本人の「恩師」と原住民の「少女」を描くが、「少女」への描写が非常に少ない点である。

以下で両作の大筋を述べ、作中の「少女像」と「恩師像」の意義を再考してみたい。

「リオン・ハヨンの谿」の大筋は、以下のようである。女学生の「私」は台湾へ旅行し、昔の知人である村西武美と再会した。芸術的才能をもつ青年村西は、母を扶養するため阿里山で教師を勤め、「蕃人の教化事業」の投入を決意したが、再会の翌日、村西は「蕃人」庇護の理由で役人を殴り、山奥に転勤させられた。生徒のリオン・ハヨンは、部落を去る村西の荷物を背負った。「私」は二人を見送り、絵具を用意するため台北に戻り、再び阿里山へ赴こうとした時、村西から葉書が届いた。「私」は、葉書で転勤した村西が応召され、ハヨンがその荷物を背負って、誤って足を滑らせて深い谷に落ちたことを知る。また、新聞記事を読んでハヨンの死によって村西が一層奮発することを知った。数日後、「私」はハヨンの落ちた所を訪れ、画を描き始める。

「私」の見たハヨンは、以下のようである。

> リオン・ハヨンといわれる少女は、誰か内地人にもらったものらしい絣の着物を着ていたが、この山の蕃人達の風貌がみんなそうであるように、大へん典雅な美しい顔をしていた。鼻がとても高くて、睫毛の濃い大きな眼は、さすがに蕃界人の性格をみせて、いくらか嶮しく鋭いのであったが、口元は、きつくしまっていて、それに、背がすらりと高かった[460]。

「大へん典雅な美しい顔」「高い鼻」「大きな眼」「背が高い」などの身体的描写から見ると、如何にも「臺灣女性瞥見」に現われる「蕃婦」と連想せずにいられない。恐らく真杉は台湾旅行で見た原住民女性をハヨンに代入したのであろう。作中では、ハヨンは付近の駐在所での「人気ものの娘」、「立派な国語」を操って常に「山案内をする者」として描かれる。このような描写は、サヨンが

459　呉佩珍「『サヨンの鐘』神話の解体―真杉静枝「リオン・サヨンの谿」と「ことづけ」を中心に―」『社会文学』第 27 号、日本社会文学会、2008 年、163 頁。

460　真杉静枝「リオン・サヨンの鐘」『ことづけ』ゆまに書房、2000 年、210 頁。

村西の教育を受けた山地の「優等生」だということを、読者に補完的に想像させようとしたのではなかろうか。しかし、「私」の目を通して、真杉はこの「師弟関係」に疑問を示す。

> 私は、見送っているうちに、なんとなく、その二人の後ろ姿を、まるで夫婦みたいだ、と意地悪く弾きながら、しかし、何にしても、とうとうと、悲しさが音をたてて、胸の中へ、体の芯へ流れ込むように思えて弱った[461]。

呉佩珍が指摘するように、一見に「私」が村西とハヨンの関係を嫉妬するように見えるが、むしろ真杉は「私」の目を通して、村西とハヨンの「純粋無垢な師弟関係」に「疑問を投げかける」[462]。この疑問は戦時下の宣伝、そして「サヨンの鐘」という神話に対する、一つの「雑音」とも言えよう。しかし、この「雑音」は「ことづけ」で、ややトーンダウンしている。

「ことづけ」の大筋は、以下のようである。日本人女性の「私」が台湾を経由して「南支」の慰問講演へ赴く時に、友人からその兄・露原友二郎へのことづけを頼まれる。露原は台湾山地で「蕃人」教育に従事したが、応召で広東に駐在する。「私」は露原から「サランの鐘」という新聞記事を読まされるが、その記事の内容は、阿里山のトフヤ蕃の少女サラン・ヨハンが露原友二郎を見送った途中、足を滑らせて山谷に陥落し、その際に「露原先生万歳」と叫んだ、ということである。露原は自分のかわりに、ヨハンのため作られた記念鐘をつくように「私」に頼む。「私」は一度台湾に戻り、約束を果して帰国する。その後、前線で奮戦している露原兵隊の新聞記事を読んだ「私」は、露原に手紙を書き、安否の返事を待つ。

この作品において、「少女」のヨハンは全く登場しない。ただ、新聞記事と作中人物の語りを通して、ヨハンの形象を表現している。作中の新聞記事は、ヨハンを以下のように描く。

> 阿里山トフヤ蕃の中の一少女、サラン・ヨハンが、かつて、勇躍応召、戦地に向った露原友二郎の壮途を送るべく、同氏の荷物を可憐な肩にかついだまま、千丈の谿谷の上の細道にさしかかったのであったが、そこから、足をすらべし、その千丈の谿の底に身をのまれてしまった陥落の際、少女は、立派

461　同上、213 頁。

462　前掲論文「『サヨンの鐘』神話の解体―真杉静枝「リオン・サヨンの谿」と「ことづけ」を中心に―」、163 頁。

な国語で、露原先生万歳！　といった[463]。

李文茹の指摘とおり、両作品における「少女」は、「死という通過儀礼によって」「日本人男性の愛国心を煽る愛国乙女の意味が与えられ」、「物語展開上の記号」にすぎない[464]。作中ではもう一つのヨンハに関する叙述があり、それは「少女」が「恩師」を送別する場面である。「私」は、記事に感動する露原と記念鐘のつくことを承諾し、台湾へ赴いて現地の日本人警察官から送別の場面を聞かれた。

みんな、獰猛な風貌の蕃人達が、しんと黙ってしまって、眼に涙をうかべて、声援しましてね。ヨハンはことに、露原さんに、哀切な別れを感じていたようでした。どういうことがあるわけでは、決してないのですが[465]。

「どういうこと」がおそらく「男女の情事」を指すのであろう。敢えて「決してない」と強調することは、逆にその可能性を意味しているのではないか。そこから、ほんの少し弱めになった「雑音」が「聞こえる」。とはいえ、「ことづけ」に現われる「少女像」は、一層強化された「愛国乙女」の形象である[466]。注意が

463　真杉静枝「ことづけ」前掲書『ことづけ』、266～267 頁。

464　李文茹「『蕃人』・ジェンダー・セクシュアリティ―真杉静枝と中村地平による植民地台湾表象からの一考察―」『日本台湾学会報』第 7 号、日本台湾学会、2005 年、138 頁。

465　真杉静枝「ことづけ」前掲書『ことづけ』、271 頁。

466　実在人物のサヨン・ハヨンは台湾北部のタイヤル族である。しかし、真杉のサヨン関連作品ではヒロインの出身地と部族の設定を変えた。呉佩珍の指摘によると、「呉鳳伝説」と「サヨンの鐘」はそれぞれ霧社事件の以前と以後の「蕃人教化」の美談を代表し、真杉は事件前後をめぐって「理蕃」政策言説の変化を意識するため、ヒロインの設定を書き換えた。

「呉鳳伝説」とは、漢人通事の呉鳳が死を以て原住民を教化しようとするという言説である。総督府編纂の修身教科書は、怨念と憤怒の感情に満ちた本来の呉鳳伝説を改編し、自己犠牲の美談を強調し、自ら命を捨てた「英霊」の物語に変形させる。これと同時に、能久親王の功績を導入している。台湾は汽車も水道もなく「只色々のわるい病気がはやるばかり」だったが、能久親王が「わるい者」たちを鎮めた後、「今のやうに便利」になった。この記述は能久親王を現代文明の代表とし、呉鳳伝説は原住民を感化する漢民族の格を上げ、文明と野蛮という二項対立の価値観を浸透させる。総督府は「日本人／文明―漢民族／半開―原住民／野蛮」の図式を作りあげ、これを前提に「文明教化」を行った。詳細は駒込武『植民地帝国日本の文化統合』（東京：岩波書店、1996 年、166～185 頁）参照。

その伝説において、呉鳳が「教化」したのは台湾原住民のツォ族であるの対し、実人物

必要なのは、「愛国乙女」は真杉による「銃後小説」を成立させる要素である。李文茹の指摘によると、植民地で犠牲になった「愛国乙女」と最前線に奮戦する兵士に対する感動を、「銃後社会の女性である『私』の心情」を通して表現する点において、「真杉による『サヨンの鐘』物語は銃後小説の性格に富んでいる」[467]ということになる。

一方、前述したとおり、作中では描写の重点が「恩師」に置かれている。ここでは「リオン・ハヨンの谿」の一節を例に、真杉の「サヨンもの」における「恩師像」を考察する。

> 村西さんは、蕃人の教化事業に、一生を捧げる覚悟が出来たといっていた。それほど、この未開人の清純な性格を導く仕事は、感激に充ちたものらしかった。「ほんとに、この蕃人って、きれいな心を持っているようですね。しつけるとおりに、吸いこんで育ってゆきますね」「まるで、天使みたいなもんですよ。ナイ―ヴでね。僕は、けしからん役人の一人を、殴ったりしましたので、その為めに、この山の奥へ追い込まれてしまいましたが、こんな所へ来たのは、よかったと思っていますよ」村西さんは、焚火の火にはえた、赧らんだ頬から、濃い眉をあげ、ふと、空の大きな星が流れるのを、すいと眼で追っていた。何も彼もが、私には、胸の中に射し込んで来るほど鮮かに、そして感動的であった[468]。

呉佩珍の指摘によると、「リオン・ハヨンの谿」の主人公村西は、実在人物の西村伊作をモデルに作った人物である。西村は 1921 年に文化学院を創立したが、その校風は「大正期の自由思潮主義の影響」を受けて「リベラル」である。両作品の「恩師」は「内地の家父長制」によって圧迫され、植民地台湾に「男性性」もしくは「精神的な健康」の回復を求める、西村をモデルに造形された「インテリ青年」である。こうした「20 世紀初頭における男性知識人のあいだに共有さ

のサヨンはタイヤル族であるが、真杉は作中のヒロインをツォ族出身に書き換えた。呉は、その書き換えで、「恩師」を呉鳳と同じように「蕃人教化」に献身する人物だと読み取れると指摘した。詳細は前掲論文「『サヨンの鐘』神話の解体―真杉静枝「リオン・サヨンの谿」と「ことづけ」を中心に―」、164～165 頁参照。

467　李の指摘によると、「サヨンの鐘」を題材にするのは、真杉自身の戦争協力体験および戦時下社会のジェンダー的構造にも関連する。詳細は前掲論文「『蕃人』・ジェンダー・セクシュアリティ―真杉静枝と中村地平による植民地台湾表象からの一考察―」、139 頁参照。

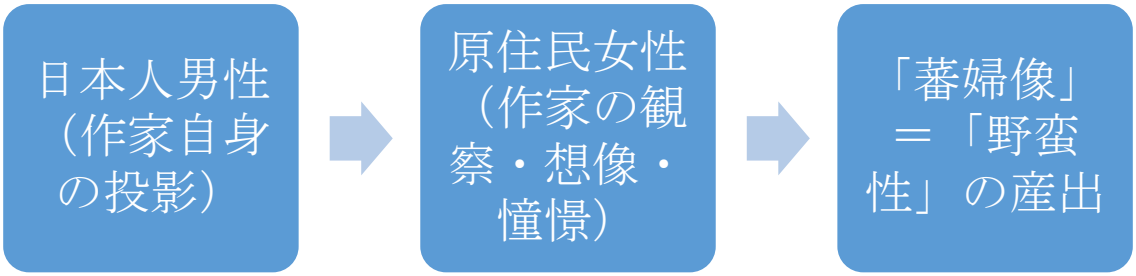
468　「リオン・ハヨンの谿」前掲書『ことづけ』、211 頁。

れる」要素が、大鹿卓や中村地平の作品における男性主人公とも共通している[469]。

以上の考察を通して、「愛国乙女」（＝「少女」）と「前線の兵士」（＝「恩師」）は、何れも「私」の心情を支えるための存在であることがわかる。そこに、一つの重大な変化が起きたと考えられる。

従来、霧社事件は理論上、「文明と野蛮の葛藤」「植民者と被植民者の矛盾」という二項対立の問題として解読される傾向がある。政略結婚政策とその結果の「蕃婦問題」はある程度、「日本人男性―原住民女性」の関係という軸線で、上記の二項対立的図式を「理論」から「現実」に反映されるため、作家たちは常に注意を惹かれ、文学的素材として取り扱っている。「日本人男性―原住民女性」の関係を描写するうちに、作家たちはそれぞれの「蕃婦像」を創出した。

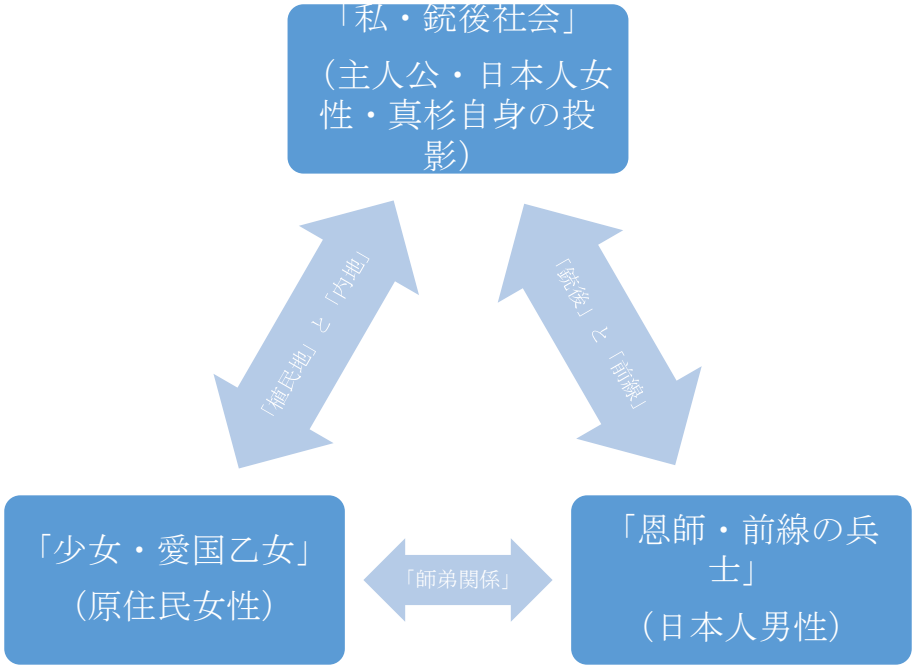
霧社事件前の佐藤春夫あるいは事件後の大鹿卓や中村地平など、従来の男性作家は異なる創作動機や目的で「蕃婦像」を描き出したが、その共通点として、前述の二項対立的図式を使い、自分を作中の男性主人公に投影させる傾向があった。彼らの原住民関連随筆、小説における主人公はほぼ男性で、彼ら自身の面影がある。例えば、「私」という一人称の佐藤春夫作品「霧社」は言うまでもなく、「田沢」という三人称の大鹿卓作品「野蛮人」（1934 年）にも大鹿自身の面影がある。作中の田沢が鉱業家の子であり、炭鉱の労働争議に参加するのに対し、作家の大鹿の家は代々作り酒屋と廻船問屋を営み、大鹿自身も左翼政党の全国大衆党の河野密の親友である。あるいは、周知のように、中村地平作品「蕃界の女」の主人公三吉と山名は、いずれも中村の分身と言われる。従来の男性作家による二項対立的図式は、以下のようである。



しかし、真杉のサヨン関連作品では、二項対立的図式を使うのではなく、「日本人女性（主人公）―日本人男性―原住民少女」という三角的図式である。戦時

[469] 前掲論文「『サヨンの鐘』神話の解体―真杉静枝「リオン・サヨンの谿」と「ことづけ」を中心に―」、159～160 頁と 163～164 頁。

下の言説において、「銃後社会」は「前線」を支援する「後方」とされるため、「銃後小説」の立場から言うと、「少女」は「恩師」を補完する客体である。ただし、真杉の「サヨンもの」から見ると、「前線」と「後方」は主客転倒である——主体は「私」であり、「少女」も「恩師」も、銃後社会に置かれる「私」の心情を補完する客体である。すると、従来の男性作家による「日本人男性—原住民女性」という二項対立的図式は、真杉の「サヨンもの」において脱構築され、下記のような三角的図式となったことになる。



真杉は従来の男性作家と異なり、自身を代入するために主人公の「私」を女性と設定し、西村伊作をモデルに作られた「恩師」は、ただ物語中の二項対立的図式を表面的に維持するための「擬似」でしかない。「恩師」と「少女」の形象はあくまでも「私」の目を通して表現されたため、「愛国乙女」の「少女」のみならず、「恩師」に表象される「インテリ青年」あるいは「前線の兵士」というのも、一種のステレオタイプでしかないと考えられる。

一方、作中の「少女像」は、「師弟関係」によって表象されるのみならず、「私」の心情とも深く繋がっている。この点に関しては、作中の「鐘」というシンボルから検証できる。「リオン・ハヨン」においては、「少女」が「腰に小さな鐘を下げ」、その鐘が「リンリンと」「山のしじまを縫って鳴っている」と描かれる。それに対し、「ことづけ」においては、「少女」が「陥落の際に腰につけていた、小さな鐘の音が、谿谷の底から、幽かに幽かにきこえる」というのが、「近在の

蕃人の間で伝説的な評判になっている」と述べられる。実際、総督府はサヨンの「神話」を虚構するため記念鐘を作っているのだが、作中では、一つの「小さな鐘」を「少女」の精神的象徴として描かれている。

ますは「リオン・ハヨンの谿」の一節を引用する。

> 村西さんについて、大きなフトンの荷を背負っていたリオン・ハヨンの腰の、あの小さな鐘の音が、リンリンと、谿底の、ゴウゴウという川鳴りとも風の音ともわからぬ響きの間にをぬって、わすかにわすかに、きこえるような気がする。勿論、リオンがもうそこに生きている筈はなかった。私は、しっかりと、「そうだ、死を真近に持って仕事をしよう」――と心に叩き込むような意気込み方をしながら、さて、あらためて、画架の前に、刷毛をとりなほして立つのであった[470]。

次に、「ことづけ」の一節を引用する。

> 私は耳をすまし、サランの小さな鐘の音が、谿底から今にもきこえやしないかと思うのであった。「お打ちなさいませんか」警察官にそう言われて、私はやがて、鐘を力いっぱい打ち叩いた。露原さんの面影を描きながら、サランの心に届くまで、心の芯をこめて打ち叩いた[471]。

両作ともに、「鐘の音」が「私」の心情と繋がっているという結末である。前述のとおり、「少女」は「私」を補完する客体である。その補完の方法としては、両作の結末に、「私」が「鐘の音」を通して「少女」の遺志を継承している。そのため、真杉の「サヨンもの」におけるヒロインは、「少女」ではなく「私」である。「私」の存在を支えるため、「少女像」は消えてしまい、「鐘の音」しか残らない。

五、補助線としての「蕃男像」

前述したとおり、従来の男性作家は「日本人男性―原住民女性」の二項対立的図式から展開し、そこから「蕃婦像」を創出した。注意が必要なのは、原住民男性が、常にこの図式の「補助線」として現われたという点である。ならば、植民地女性に注目する真杉は、原住民男性を如何に描き出したのか。彼女

470 「リオン・ハヨンの谿」前掲書『ことづけ』、218 頁。

471 「ことづけ」前掲書『ことづけ』、272 頁。

による「蕃男像」は従来の男性作家と比較すると、どのような特徴があるのか。以下、霧社事件後の男性作家の作品と対照し、この問題を考えてみたい。

まずは大鹿卓「蕃婦」の一節を引用する。

> この男は狂暴で種牛のように扱いにくい。うまくやらなくては。「ね、ウイランユノ」彼女はうしろから呼びかけた。「あたしこまっている」彼はこれから嘘をつくのだという意識で、軽い暈をおぼえながら、あわてて口走った。（中略）ウイランユノは腰のあたりの蕃刀の握を撫でていた。唇が強くゆがめられ眼には火が揺れだしていた。その様に気づくと、彼女はこれは稍亢奮させすぎたと怖しくなった[472]。

「女」のヤゴタッパスは「男」のウイランユノを挑発して殺人をさせる――この描写は恐らく霧社事件に対する「想像の原型」とも言えよう。つまり、「種牛のように」狂暴な男は、嫉妬心や女の教唆で人を殺した。ウイランユノの「凄い形相」を見た隘勇は、「敵意に満ちた暴力」や「傍若無人な威圧」を感じ、「自然児らしい不敵な自己によって、圧迫に対する限りない憎悪を感じとった」。要するに、大鹿の作中の「蕃男」は敵意、暴力、威圧を象徴する「自然児」である[473]。

次に、中村地平「蕃界の女」の一節を引用する。

> カーキ色の青年団服に身をかため、それと同じ色の戦闘帽子をかぶり、ちょっと、内地人か蕃人か区別がつかない。三吉のすぐあとから表にといだしてきたイワルが、青年の傍によりそうようにして、耳もとでなにを囁いた。青年は帽子をとって、丁寧に頭をさげた。「今日は」（中略）愛想のいい、その健康そうな青年が、三吉が好きになった[474]。

主人公三吉は「蕃人」のイヤン・ピタイと出会い、二人は互いに好感を持つ。中村の作中の「蕃男」はすでに「野蛮性」を失い、「内地人」と区別できない「好青年」に転じる。周知のように、中村による「蕃婦」は「インテリ青年」の主人公にとって「癒し」のような存在である。そのため、「好青年」は

472　大鹿卓「蕃婦」『野蛮人』ゆまに書房、2000 年、74 頁。

473　原住民男性と女性の「野蛮性」に対する大鹿の想像はそれぞれ異なり、一つの好対照だと考えられる。「蕃婦の野蛮性」に対する大鹿の解釈については、本章の第一節参照。

474　前掲書『中村地平全集　第 1 巻』、280 頁

その「補佐役」のような存在であろう。

では、真杉の場合はどうだろうか。真杉の「サヨンもの」では作中に原住民男性は出てこない。その理由は二つがあると考えられる。一つ目に、「サヨンの鐘」という官製神話の視点から見ると、「恩師」と「少女」という「師弟関係」の図式に「蕃男」という補助線の必要が特になかった。二つ目に、銃後小説の性格から見ると、「私」を支えるのは「恩師」と「少女」の図式で充分であり、「蕃男」の「居場所」はなかった。

では、ここで、「臺灣女性瞥見」の一節を借りて、真杉の描き方を考えてみたい。

> 男の蕃人達も何か自分達の血のちがいを、ちゃんと頭において居ながら、それを特に誇りも卑下もしていない、非常な素直さで、自分の位置の特殊さを、ちゃんと守っている[475]。

真杉の見た「蕃男達」は、「蕃婦」を支えるような存在とも言える。原住民男性の戦争協力に関しては、一般的に「高砂義勇隊[476]」を思い浮かべるが、ここでの「蕃男」はただ自分の「位置の特殊さ」を慎重に守り、「蕃婦」を補完する客体であろう。特に、男性作家の作品と対照すると、真杉による「蕃男」はすでに「馴化」された者とも言えよう。換言すれば、戦時下に至り、霧社事件を象徴する二項対立的図式のみならず、その「補助線」も国のために消えてしまう。事件以降、文学における二項対立はここに至って、完全に消滅されるのではないかと考えられる。

六、おわりに

真杉静枝は成年に至るまで植民地台湾で生活しており、植民地台湾を描く作家の中でも、かなり特殊な一人だったと言える。彼女は自身を投影させた女性主人公「私」の目を通して植民地女性に着目し、自分なりの「台湾もの」を創作した。

作中の原住民女性は、漢民族女性よりもっと親しい存在であり、その親近感は更に一民族としての原住民全体に拡大される。しかし、「文明と野蛮の葛藤」「植民者と被植民者の矛盾」など、霧社事件以降の遺留された潜在的課題

475　前掲書『南方紀行』、174 頁。

476　太平洋戦争末期、台湾原住民により編成された日本軍の部隊。フィリピン、ニューギニアなど密林地帯の戦場に投入するために創設された。

に直面しなければならなかった真杉は、佐藤春夫の問題意識を継承し、政略結婚による「蕃婦問題」に疑問を示す。しかしながら、「サヨンの鐘」という国策文学の改編の風潮に合わせて「サヨンもの」を創作していくうちに、植民地支配に対するそうした疑問は消えていく。

真杉は「サヨンの鐘」という神話の基調に従って創作したが、作中に「文明と野蛮」の関係を表現するのが「日本人男性—原住民女性」という従来の二項対立的図式ではなく、日本人女性の「私」を頂点とする三角的図式であり、作中の「恩師」も「少女」も、銃後社会の「私」を支える存在でしかない。一方、「蕃男」は従来の二項対立的図式の補助線としたが、真杉の作品において、「蕃男」は「馴化」され、「蕃婦」を支える存在となっている。

戦時下における真杉の「原住民もの」は国策文学であるが、彼女の独特な目線や思考を表現し、時代的な意義を有するのではないか。

第四節　「還元」された人間像――坂口襦子

一、はじめに

坂口襦子は植民地台湾で六年間の生活を送り、その経験を生かして数多くの作品を書いた。今までの坂口研究は、日本人農業移民を描く「黒土」「春秋」「曙光」の三部作、もしくは皇民化運動下の台湾人家庭の様相を描く「鄭一家」に注目するものが多かった。

しかし、平地だけではなく、坂口は終戦直前に山地へ疎開し、引揚まで一年余りの「蕃地」生活を過した。坂口はその体験を以て台湾原住民関連作品（以下は「原住民もの」と略す）を多く創作し、戦前の作品「時計草」のほかに、戦後にも数多くの霧社事件関連作品を発表するため、一時期に「蕃地[477]」作家とも呼ばれる。

本論文においては、坂口の植民地経験を考察したうえで、終戦を挟む「原住民もの」の連続性、とくに戦後の作品における「霧社事件」への解釈を究明したい。

二、坂口襦子の台湾経験：「平地」から「蕃地」へ

まずは坂口襦子の略歴を紹介する[478]。

1914 年、熊本県八代に生まれた。熊本女子師範本科卒業後は、小学校教員を務めた。読書会で中学教師の板橋源に出会い、好感を持つようになったが、1935 年、板橋の転勤が原因で、台湾へ傷心旅行に出る。その後、1938 年に、再び渡台して台中州の北斗小学校に勤める。同年、研修旅行で霧社に行き、旅館のお内儀から日本人警察官とタイヤル女性の間に生まれた混血児である公学校教師下山一の結婚話を聞いた。その話が最初の「原住民もの」である「時計草」のモチーフとなる。また、台湾滞在中、歌誌『龍燈』の同人であり、後に夫となる坂口貴敏（さかくちたかとし）の家を訪問し、貴敏の妻キヨ子に「もし死んだら子供をたのむ」と頼まれる。1939 年、病気で帰郷するが、後にキヨ子が病死したため、1940 年、貴敏と結婚することとなり再び渡台した。その後、貴敏の勧めで創作

477　蕃人（＝野蛮人）即ち原住民の居住地に対する蔑称。当時の歴史用語として、本稿ではそのまま用いる。

478　以下は主に中島利郎編「坂口襦子　著作年譜（戦前）」（中島利郎・河原功編『日本統治期台湾文学　日本人作家作品集　第五巻』緑蔭書房、1998 年）567～579 頁参照。

を始める。同年、「台湾放送局 10 周年の文芸の部放送物語」に応募し、作品「黒土」が特選となり文壇デビュー。以後、楊逵を介して『台湾文学』を中心に数多くの作品を発表した。1945 年、台湾山地の原住民部落「中原」に疎開し、そこにおいて終戦を迎えた。戦後は故郷の八代に戻り、精力的に創作活動を続けた。

上記の略歴から、彼女には三度の台湾経験があることがわかる。まず 1935 年の傷心旅行、次に 1938 年から 39 年の北斗生活（霧社研修旅行を含む）、そして 1940 年から 46 年の台中生活（中原での疎開生活を含む）である。

坂口は自分の植民地体験に対し、次のように語っている。

> フオルモサ。美麗島。（中略）台湾は魅力のある島だ。それは殊更かぞえあげてみるようなことではなく、そこに住むことで、はじめて心にしてみてくるものようだ。日々の暮しのなかで、その魅力を味わってゆき、その慈味にぬくもるというしかない。敗戦で引き揚げることがなければ、今も尚、台湾のおそらくは台中市内に、おだやかな平凡な老婆として、生きのこっていたと思う[479]。

最初の傷心旅行については詳細が不明であるが、当時の北斗に関しては少し紹介する。北斗は古い歴史を持つ町である。台湾中部の水陸交通の要衝にあるため、清代の北斗は大きな商業都市として「一府二鹿三艋舺四宝斗」とも言われたが[480]、日本統治期に入り、北斗郡の行政・教育中心地に転じている[481]。

こうした古い歴史をもつ北斗とは異なり、台中は日本統治期に拡張された近代化の新興都市である。清政府は 1889 年に台湾府首府を台中に置いたが、台北・台南両府の設置によってその管轄範囲が縮小し、日本統治初期の台中は約 4 千 5 百人を持つ小さい町となる[482]。しかしながら、日本統治期の台中は中部における政治の中心地とされたため、総督府は 1911 年と 1935 年に「台中市区拡張計画」を二度に渡って推進した。その結果、1938 年末において台中は八万

479　坂口樗子「”蕃地”との関わり」『坂口樗子作品集②　霧社』コルベ出版社、1978 年、258～259 頁。

480　謝瑞隆『北斗郷土誌』北斗鎮公所、2009 年、1-13～24 頁。清代の台湾四大都市の順位は「第一が台南（＝清代・台湾府城の所在地、現・台南市）、第二が鹿港（＝現・彰化県鹿港鎮）、第三が艋舺（＝現・台北市万華区）、第四が宝斗（＝現・彰化県北斗鎮）」という民間に流布される説である。

481　張素玢『北斗発展史』北斗鎮公所、1999 年、89 頁、96 頁、119 頁。

482　台中市役所『台中市管内概況（七）』成文出版社、1985 年、1 頁。

に近い人口数を持つ大都市となった[483]。日本統治期の台中は「小京都」と言われていたが、それは縦横の街路が井然で、落ち着いた街並みの雰囲気が京都を思わせるためである[484]。

しかし、美麗島の中で、坂口が最も心惹かれたのは北斗でも台中でもなく、「蕃地」だった。川中島社（現・清流社区）に夫とともに初めて踏み入った時、坂口は次のような感情を抱いた。

> 私達は旅人だった。はじめて踏み入る蕃社に私の心はふるえていた。言いようもない哀愁とセンチメンタルに、私は肌寒くさえなっていた。しかも、心はぬくめられるのだった。家々のかまどに火が燃されていて、そのオレンジ色の炎が、郷里の田舎の夕ぐれを思いださせる。私は、台湾へ移り住んで、はじめて郷愁を心底から感じていた[485]。

平地に住む時間が長かったが、坂口に郷愁を感じさせるのは平地ではなく「蕃地」だった。それを生活と創作、双方の「場」として繋げて考えれば、台湾の平地（台中）から山地（部落・中原）、そして日本の故郷（熊本・八代）という流れを経た後、「蕃社」体験を故郷に持ち帰って「原住民もの」を創作したことになる。

さて、坂口にとっての「蕃地」とは、どういうものなのだろうか。

> 私が、敢てはばかりもなく「蕃地」とよんできたのは、私にとって格別な意味がある。まず私にとってそれは東京の練馬、とか、大阪の新地というような、固有名詞である。しかも私は、「蕃地」という時、「ふるさと」といっているような、なつかしさを心にぬくくたたえている。私にとっての「蕃地」は、終戦をはさんだ十カ月間の、生活の場だったし、心をあたためてくれた人々が、現在住んでいる土地であり。その山河は、私のなかに生きている[486]。

坂口の話をまとめると、彼女にとっての「蕃地」は二つの意味を持つ。一つは「固有名詞」であり、もう一つは「心の故郷」である。

「蕃地」は「蕃人」（＝原住民）の住む地を指す言葉であり、台湾総督府の山地統治の推進とともに、特定の行政地域を指す用語として使われるようにな

---

483 同上、7 頁。1938 年末、台中市管内の人口数は 78568 人である。

484 篠原正巳『台中・日本統治時代の記録』致良出版社、1996 年、238 頁。

485 坂口樗子「”蕃地”との関わり」前掲書『坂口樗子作品集②　霧社』、264 頁。

486 同上、238 頁。

った。総督府は行政的に台湾を「平地」の「普通行政地域」と「蕃地」の「特別行政地域」に分け、平地の法律や社会制度は「蕃地」に適用せず、「蕃地」の行政・治安・衛生全般はすべて「理蕃」警察に一任した[487]。日本統治期の台湾地方行政制度は幾度か変更されたが、「蕃地」行政は終始一貫していた。1901 年、総督府は地方行政制度を改め、全島に 20 庁を設けた。それと同時に、中央山脈を中心とする広い山地は「蕃地」とした[488]。1915 年、第五代台湾総督の佐久間左馬太の「五箇年理蕃計画」の終了によって、「蕃地」はようやく総督府の掌握下に入った。1920 年、総督府は再び地方行政制度を改め、全島に五州二庁制を設け、「蕃地」は各州庁の下に分割された[489]。1920～1945 年に、台湾全島には 20 余りの「蕃地」が存在していた[490]。

坂口が疎開した部落中原は、台中州能高郡「蕃地」（現・南投県仁愛郷）に属する。この「蕃地」は実際、1200 平方キロメートルの広い土地である。もちろん、彼女はこの「蕃地」のすべてを知ることができない。坂口自身の話によれば、「蕃地」に入ることはかなりの勇気を必要とした。しかしその時、『台湾文学』の同人である楊逵が「蕃人の生活」を「日本へ持ち帰る唯一の財産」なのだからと、坂口に「中原」への疎開をすすめた。しかし、「小説のネタ」もしくは「無形の財産」のためではなく、「山地の人々の生活は悲惨な『霧社事件』の記憶とともに、私の好奇心をひくのだった」と坂口は後に語っている[491]。坂口にとっての「蕃地」とは、山地の人々の生活と霧社事件をめぐる記憶への追求なのだ。

「中原」とは原住民の伝統的な居住地ではなく、総督府の移住政策によって設立された「蕃社」である。1939 年、万大ダムの建設のため、当局はパーラン、タカナン、カッツク、ルサオ、ブレノフの五社を移住させた。その移住地を「川中島」と「眉原」両社の間に設けたため、「中原」と名づけられた。中心となったパーラン社は霧社地区のタッグダヤ群の中で、最も大きな部落であり、歴史と知識の中心でもある。重要な農事・祭典はすべてパーラン社の主導で行われ、有力者の大多数もパーラン社の出身である[492]。中原の六社は霧社事

487　詳細は近藤正己「台湾総督府の『理蕃』体制と霧社事件」（『岩波講座　近代日本と植民地２　帝国統治の構造』岩波書店、1992 年、35～60 頁）参照。

488　台湾・中央研究院データベース「台湾歴史文化地図」（http://thcts.ascc.net/）参照。検索キーワード：「明治三十四年(1901)十一月堡(里)界」（2015 年 3 月 27 日 13 時 33 分 45 秒検索結果）。

489　同上、検索キーワード：「大正九年(1920)七月州(廳)界」（2015 年 3 月 27 日 13 時 40 分 13 秒検索結果）。

490　詳細は台湾総督府『台湾総督府行政地域便覧』1944 年版（成文出版社、1999 年）参照。

491　坂口樗子「”蕃地”との関わり」前掲書『坂口樗子作品集②　霧社』、262～263 頁。

492　Walis・Pering（漢名：瓦歴斯・貝林）「歴史斷裂與族群延續」簡鴻模、依婉・貝林『中原部落生命史』 中華民國台灣原住民同舟協會、2003 年、1～2 頁。

件に参加しなかったが、反抗の六社と同じくタッグダヤ群に属する。

坂口が「蕃地」へ疎開したのは、夫の貴敏が「蕃童教育所」の教員として中原へ赴いたからである。坂口は夫とともに中原駐在所の傍の改良住宅に住んでいた。当時社内の日本人家庭は四戸のみで、坂口家以外はすべて駐在所の警察官とその家族である[493]。貴敏は間もなく召集を受けたため、坂口はその代りに代用教員となった[494]。中原滞在の間に、坂口は中山清とその妻・初子と知り合った[495]。そして原住民女性の大石フミとその妹・佐田フミ、川中島の中西と付き合い、生活全般にわたって世話になる。ただし、霧社事件について、彼女達は何も語らないと坂口は言った[496]。中原の主軸・バーラン社は、事件時には日本側に協力する「味方蕃」であったため、事件に対する立場とその記憶は「反抗蕃」と異なる。こういう状況の中で、坂口がどの程度まで取材できたのは知り得ないが、彼女が中原に出会った人々をモデルにして、作品を書いたのは確実である[497]。

「平地」から「蕃地」へ。長い歴史を持つ古い町、近代化の新興都市、そして――謎めいた「異界」のような「蕃地」――坂口は植民地台湾を遍歴したと言っていいだろう。坂口の植民地経験の中で、十カ月の「蕃地」生活は彼女に特別な体験を与えた。事実、戦前の坂口は植民地台湾に生きる「内地人」と「本島人」を描写する作品によって文壇で活躍しているが、戦後は台湾原住民つまり「蕃人」に注目し、霧社事件を描くことに専念している。「平地」から「蕃地」への生活の転折、特に「蕃地」の世界は彼女の心を魅了したのではないか。そのため、「蕃地」はついに坂口の「心の故郷」となったのであろう。

493　前掲資料「“蕃地”との関わり」(『坂口樗子作品集②　霧社』、270 頁）と坂口樗子「一九四五年の彼ら―霧社の思い出―」　(『中国　69　特集 台湾高山族の反乱＜霧社事件＞』東京・中国の会、 1969 年、44 頁）参照。

494　前掲「坂口樗子　著作年譜(戦前)」『日本統治期台湾文学　日本人作家作品集　第五巻』576～577 頁。

495　中山清（＝ピホ・ワリス）は、「模範蕃童」として育てられ、戦後に高永清という漢名を付けた原住民のエリートである。その妻・初子は元来、花岡二郎の妻であった。霧社事件と二郎の自決を経た数年後に、二人は理蕃課の意志で結婚した。

496　前掲資料「一九四五年の彼ら―霧社の思い出―」(『中国　69　特集 台湾高山族の反乱＜霧社事件＞』 、42 頁）と「“蕃地”との関わり」(『坂口樗子作品集②　霧社』、275 頁）参照。

497　たとえば、中西をモデルに「蕃婦ロポウ」を書くことや中原警備隊長・前野と大石フミをモデルに「ビッキの話」を書くこと。詳細は「“蕃地”との関わり」(『坂口樗子作品集②霧社』、275～277 頁）参照。

植民地台湾を描く他の日本人作家と比べ、この点が坂口の特色と言えよう。

三、坂口襦子の「蕃地」作品群

戦前の「時計草」を皮切りとし、坂口は多くの「蕃地」作品を戦後に至るまで書き続けた。その作品の発表と出版を整理すると、以下のようになる[498]。

1、「時計草」（『台湾文学』、1942 年 2 月。検閲のためほぼ全文削除。1943 年 9 月出版の小説集『鄭一家』に再録されたが、内容は少々異なると言われる）
2、「ビッキの話」（『文学者』、1953 年 7 月）
3、「蕃地」（『新潮』、1953 年 10 月）
4、小説集『蕃地』（新潮社、1954 年。「ビッキの話」「蕃地」「霧社」「あとがき」を収録）
5、「蕃界の女　ルピの話」（『小説新潮』、1956 年 7 月）
6、「蕃婦ロポウの話」（『詩と真実』、1960 年 11 月）
7、小説集『蕃婦ロポウの話』（大和出版株式会社、1961 年。「蕃婦ロポウの話」「蕃地のイヴ」「タダオ・モーナの死」を収録）

坂口の「原住民もの」は、主に 50 年代から 60 年代に集中して発表されている。特に「蕃地」は同年に新潮社文学賞を受賞し、「蕃婦ロポウの話」は芥川賞候補にも挙げられ、両作品の同名小説集もそれぞれ翌年に出版された。その後、坂口は自伝小説『母の像[499]』の創作に集中した。70 年代の末、坂口は作品集『蕃社の譜』と『霧社』（コルベ出版社、1978 年）を出版したが、その内容は 4 と 7 の再録に、エッセイ「“蕃地”との関わり」を加えるという形である。

次に作品を主題で分類してみる。

① 混血児：「時計草」「蕃地」
② 霧社事件：「霧社」「タダオ・モーナの死」
③ 霧社事件以後、第二次霧社事件：「ビッキの話」「蕃婦ロポウの話」
④ その他：「蕃界の女　ルピの話」「蕃地のイヴ」

498　中島利郎ら編「坂口襦子著作目録」『日本統治期台湾文学研究文献目録』（緑蔭書房、2000 年、312～322 頁）参照。

499　1967 年～1975 年の間に、雑誌『花泉』に連載している。

上記四種類は、坂口ならではの「蕃地」風景を構成している。①は戦前と戦後初期の作品であり、後述するように、その主題の「混血児」は「理蕃」政策の政略結婚によって、日本人警察官と原住民女性から生まれた者である。②と③は霧社事件を主体にする戦後の作品であり、全作品数の半分以上を占めている。換言すれば、坂口の描写の重心は戦前から戦後に渡り、「理蕃」政策から霧社事件の全体像へ拡大するという傾向が見られる。

先行研究では主に①と③「蕃婦ロポウの話」を中心に論究されてきたので、本論文においてはそれらをふまえ、①と②における創作上の連続性、そして②と③に現われる「霧社事件像」を考察していくことにする。

四、「理蕃」政策から霧社事件へ:「時計草」と「蕃地」

まずは、主題別で①に区分した二作品、「時計草」と「蕃地」から考えてみよう。いずれも混血児の主人公を中心に、異民族の混血や通婚を主軸に物語を展開していくものであり、この主題から言えば、両作品は真杉静枝の問題意識を継承したものとも言える[500]。

「時計草」は1942年、楊逵(ようき)、張文環(ちょうぶんかん)らの主宰した『台湾文学』に発表された小説である。前述のとおり、この小説は坂口が1938年の霧社旅行で聞いた話をモチーフにして書いたものである。しかし総督府の検閲によって、原稿用紙百枚分が削除され、最初と最後の二頁しか残らないという、かつてないことが起こった。張文環によると、それは「理蕃」政策を批判したためである[501]。現存する「時計草」は、単行本『鄭一家』(清水書店、1943年)に収録された版本である。大筋を以下に記しておく。

日本人警察官と原住民女性から生まれた混血児・山川純は、日本人女性との縁談で、何度となく失敗を重ねていた。純は自分の存在が、父が単に「政略結婚」政策に従った結果だと悟り、同族の女性との結婚で「前進したい」と決意する。しかし、婚約者の日本人女性・錦子が、「高砂族の文化」を「日本の伝

---

500 真杉は日本人青年と原住民女性の私生児の誕生を作品「蕃女リオン」のエンディングにする。この結末は佐藤春夫の作品「霧社」に描かれる「日本人警察官(=父)に捨てられた蕃婦(=母)—売春疑惑の少女(=娘)」という問題意識を継承し、世代に渡る植民地問題の「連鎖的生産」を暗示したと考えられる。そのため、混血児をテーマにする坂口は「佐藤—真杉」以来の問題意識を継承する創作者と言えるのであろう。

501 前掲資料「“蕃地”との関わり」、292頁。

統」に少しでも「近寄らせ高める」のも「前進ではないか」と純を説得することから、二人は「帝の命のままに」「人々の美しい魂につながる道」を進めていくことになる。

この「時計草」に関する研究には二つの方向があり、一つは「削除される版本」と「単行本の版本」の異同を考察し、そのモチーフを検証したものである[502]。もう一つが主流となっているもので、当時の日本で流行した優生学の思想を背景に、作中に現われた異民族の通婚、混血などの問題を考察したものである[503]。ここで興味深いのは、「混血児の悩み」を表現するところである。

> 「わかって頂けると思うのです。僕は、今迄の僕の位置を、遠くから眺める事が出来なかったのです。徒らに、心の中に、自分の映像を画いて、雑婚の結果である自分の血の哀しさに溺れてしまっていました。この血を、どう生かしてゆかねばならぬと言うことに、思い至らなかったのです。僕お恥ずかしいことです。僕は、自分の身勝手の為に、立派な女の方を一人、僕の為に犠牲にするところでした[504]」。

純は錦子を雑婚の「犠牲」にしたくないため、その結婚を取り消そうとし、同族との通婚で「前進したい」と語り、そして錦子との結婚は「後退すること」だと考える。それに対して、錦子はこう語った。

> 「違います。それは頭の中のお考えです。貴方の前進なさる事は、高砂族と血縁を深めるだけが道ではございません。高砂族の文化を、日本の伝統に少しでも近寄らせ高めるのも前進ではないでしょうか。私は、きっとお

502　詳細は垂水千恵「台湾文壇の中の日本人―坂口樗子と台湾人作家」（同氏著書『台湾の日本語文学―日本統治時代の作家たち』五柳書院、1995 年）や奥出健「戦時下台湾の『愛』―坂口樗子『時計草』を中心に―」（『湘南短期大学紀要 20』湘南短期大学、2009 年）参照。

503　詳細は星名弘修「『血液』の政治学：台湾『皇民化期文学』を読む」（『日本東洋文化論集（7）』琉球大学、2001 年）、王暁芸「坂口れい子の「時計草」を中心に--異民族統治への協力」（『天理台湾学報年報（10）』天理台湾学会、2001 年）、林慧君「坂口樗子小説人物的身分認同―以＜鄭一家＞、＜時計草＞為中心」（『台湾文学学報 第 8 期』政治大学台湾文学系、2006 年）、呉佩珍「血液的『曖昧線』―台湾皇民化文学中『血』的表象与日本近代文学優生学論述」（『台湾文学研究学報　第 13 期』国立台湾文学館、2011 年）参照。

504　坂口樗子「時計草」中島利郎・河原功編『日本統治期台湾文学　日本人作家作品集第五巻』緑蔭書房、1998 年、216 頁。

役に立ちます。御一緒にお伴さしてくださいませ[505]」。

純と錦子の対話から、当時の優生学認識を読み取れる。1937 年以降の植民地台湾においては、皇民化運動が急速に推進されていった。そのため、日本統治末期では、アイデンティティの問題が台湾文学に現われた。つまり、被植民者は如何に「本当の日本人」になるという問題である。しかし、1930 年代後期から 40 年代にかけて、日本の優生学では日本人の「血」を優等視する純血論が主流であり、「混血」や「雑婚」が差別視されている。そのため、本土の優生学的言説と植民地の同化政策の間には矛盾が生じ、皇民化時期の文学作品は正にその両者が相克する「戦場」であった[506]。純と錦子が二人の結婚を「後退」とする共同認識を持つのは、坂口が優生学思想の影響を受けたためであろう。錦子は原住民の文化を日本の伝統に「近寄らせ高めること」も「前進」であり、一種の教養論的主張を提出する。呉佩珍が指摘したように、ここでは「通婚」「混血」の生物学の概念を「教化」の文化的な概念に転じ、その教化の責任を錦子に背負わせたのである[507]。

錦子の主張は当時の台湾人作家・陳火泉の作品「道」と共通するところがある。「道」の主人公青楠は陳自身の投影であり、青楠は日本の古典、特に松尾芭蕉の俳句に熱中し、日本の伝統を認識することによって、「日本回帰」を達成できると思う。「文化」で「血統」を超えようとしている点で、錦子と青楠の主張は共通している。理論上、純血論は元来、被植民者の共通的課題であるべきだ。しかし、当時の原住民の中に文学作品を書く人がいなかった。そのため、「混血児の悩み」を描く坂口は、こうした意味において原住民の代弁者となり、従来の原住民関連作品と異なる一つの新しい転換点を示したのではないかと考えられる。

戦後に書かれた「蕃地」に至り、坂口の創作動機は一層に明らかになる。「蕃地」は『新潮』第 50 巻 10 号（1953 年 10 月 1 日）に発表されたものであり、同年の第三回新潮社「文学賞」を受賞した。坂口は翌年に同名の創作集『蕃地』を出版した。そのモチーフは「時計草」と共通しており、こちらも大筋を以下に記しておく。

日本人警察官と原住民女性から生まれた混血児・林田純は、結婚を二度失敗しているが、日本から新しく迎え入れた花嫁の真子に黙っていた。ある夜、悩

505　同上、218 頁。

506　前掲論文「血液的『曖昧線』—台湾皇民化文学中『血』的表象与日本近代文学優生学論述」、229 頁。

507　同上、239 頁。

み極まった純は、ついに眞子に実情を告白し、妻の諒解を得ることができた。しかし、純は母の死や終戦の消息とともに、父の戸籍に入っていないことや自分に対する「理蕃」課の不信など、屈辱な真相を次々と発見したが、「君は立派な人間ですわ」と妻の言葉に励まされる。その後、日本人宿舎を原住民が襲撃するという情報を得て、上司に通告したいと考えた純は、自分が「日本」と「蕃社」につながる「第三の種族」だと思うようになる。

「蕃地」の研究について、主な論者は彭研蓁と楠井清文である[508]。彭は作品の同時代評を参照したうえで、作中の主人公・山川純とそのモデルとしての実在人物・下山一との異同を考察し、作品の主旨を論じた。楠井は坂口が戦後に発表したエッセイを考察し、その創作意識を捉えようとした。

「時計草」と同じく混血児をテーマとしているが、前述したように、「蕃地」は新潮社文学賞の受賞作であり、坂口の受賞の感想文には以下の一節がある。

> この作で、私は、批判がましいことや、難しい理論を盛ろうと試みたのではなく、唯、溢れてくる人間への愛情にかられて書きました。そして、それが、私の文学のすべてでもあります[509]。

坂口の創作の発想に近代的優生学思想が底流していることは否めない。しかし、坂口が自ら語ったように、「蕃地」は「難しい理論」を駆使したものではなく、「人間への愛情」から生まれた作品である。「批判がましい」とはいえ、戦後作品の「蕃地」は混血の問題のみならず、「理蕃」政策と霧社事件にも触れ始めた。混血児とは本来、「政略結婚」政策の所産である。政略結婚とは、「蕃語」通訳の養成と政策推行のため、警察官吏に若干の公費補助を与えて、「蕃社」の頭目もしくは勢力者の娘と結婚させる方法である。学歴や出身階級の差で日本本土の高級官吏になれない日本人の若者は、それによって植民地官吏の末席につけるようになるが[510]、そうした実例はいくつもある[511]。最も

508　詳細は彭研蓁「坂口樗子『蕃地』論」(『千里山文学論集 83』関西大学、2010 年)、楠井清文「坂口樗子・＜蕃地＞小説の世界―熊本時代の執筆活動を中心に―」(『論究日本文學 100』立命館大学、2014 年）参照。

509　坂口樗子「受賞感想」『新潮』10 月号、新潮社、1953 年、136 頁。

510　許介麟『証言　霧社事件』草風館、1985 年、177 頁。

511　詳細はピホ・ワリス（高永清）『霧社緋桜の狂い咲き―虐殺事件生き残りの証言―』(教文館、1988 年、127 頁～130 頁)、柳本通彦『台湾・霧社に生きる』(現代書館、1996 年、39 頁）と鄧相揚『抗日霧社事件の歴史　日本人の大量殺害はなぜ、おこったか』(日本機関紙

有名なのは1909年の、近藤儀三郎とテワス・ルダオ（マヘボ社頭目のモーナ・ルダオの妹）の結婚である。周知のように、近藤が後に行方不明となったため、テワスは部族に帰って再婚した。これが霧社事件勃発の一因でもある。

1912年に行われた下山平治（マレッパ駐在所巡査）とピッコ・タウレ（マレッパ総頭目の娘）の結婚は、官の命令による政略結婚の第一号と言われる[512]。「時計草」と「蕃地」の主人公のモデル・下山一は、その下山平治の長男である。下山一によると、父は上官と「三年の約」を結んでいる。つまり、「蕃社」頭目の娘と結婚し、「理蕃」事業に投入して三年を経れば、いつでも妻を捨ててよいと承諾された「契約」であった。ただし、その「契約」では、捨てられてしまう妻と子供に対する善後策は一切講じられていないが[513]、「蕃妻」を捨ててもいいというのが、警察内部では暗黙の了解だった[514]。「蕃地」は「時計草」より一歩に進んで、このような政策の背景に生まれた混血児を、「理蕃」政策および霧社事件と結びつけて描いている。

> 何もかもが、一つの用意されたレールを走っている。それは決して脱線することがない。確かな軌道である。純には、その黒いレールが見えるような気がする。それは、彼の将来へ向って真直ぐのびて、否応なしに彼はそこを走らなければならない。レールを否定することは、彼自身を否定することなのだ。純は自分と似た一人のモデルを思い出す。それは昭和五年、霧社事件に参加し、指導した花岡一郎である。蕃名、タッキスノービル[515]。

「時計草」と比べて「蕃地」は、終戦直後の山地における政権交代の様子も描いている。政権交代の中での自分に対する「理蕃課」の不信、父の戸籍に入っていない私生児という立場などの悲惨な事実を、純は次々と発見する。植民地支配という歴史的事象は敗戦とともに消えたが、植民地問題――「黒いレール」のような「理蕃」政策の影響はまだ根強いと、坂口は語ろうとしたのであろう。一方、「蕃地」では主人公の林田純と花岡一郎をオーバーラップさせ、霧社事件を深く追及するといった、坂口の意欲が現われている。事実、坂口は

出版センター、2000年、34～35頁）参照。

512　前掲書『台湾・霧社に生きる』現代書館、1996年、39頁。

513　下山一（林光明）自述・下山操子（林香蘭）譯寫『流轉家族：泰雅公主媽媽日本警察爸爸和我的故事。』遠流出版、2011年、231頁。

514　前掲書『台湾・霧社に生きる』現代書館、1996年、43頁。

515　坂口樗子「蕃地」『蕃地』新潮社、1954年、8頁。

「蕃地」以降、霧社事件の関連作品を多数創作するが、「蕃地」はその導入と考えられる。

五、霧社事件における「父子関係」:「霧社」と「タダオ・モーナの死」

「蕃地」の受賞感想文には、次の一節がある。

> この作は、単に、事実と虚構によって組み立てられた真実、私の意図する、ルポルタルジュ文学の一つの試作にすぎません[516]。

坂口は「蕃地」を「事実と虚構によって組み立てられた真実」、一つのルポルタルジュ文学だと解釈し、自分は「文才がある」のではなく、「唯、この道を踏みこんでから、夢中で、然し、懸命に歩きつづけて参っただけ[517]」と語った。この受賞の言葉の一節は、坂口が霧社事件を描く心情と共通するであろう。坂口の疎開先・中原とその隣の川中島は、それぞれ霧社事件の「反抗蕃」（＝日本に反抗する側）と「味方蕃」（＝日本に協力する側）の移住地であるため、言語不通や意思疎通の困難があっただけでなく、両方が語る「真実」も決して同様ではない。また、両方が事件に関して何も語ろうとしないことを、坂口は戦後の随筆において幾度も言及した。坂口本人は最初から「真実」の解明が不可能だとわかっていた。彼女が自ら語っているように、「おそらく、誰にも真実を語ることはできないだろう」。坂口は自らも「わずかな資料」で「事件を描く」のが「全くの冒険」と認めるが、「書かずにいられない」[518]とその決意を表明した。小説集『蕃地』と『蕃婦ロプウの話』の中で、霧社事件を真正面から描いた作品は「霧社」と「タダオ・モーナの死」である。

「霧社」と「タダオ・モーナの死」は、強制出役と移住、銃器押収、生業改造など事件の原因に関する諸説を、巧妙かつ詳細的に物語に織り込む作品である。李文茹が指摘したように、両作の共通点は、「政治的な権力関係にもたらされる当事者たちの心理的葛藤、もしくは日常的な一面を描写することによって事件の全体像を描出する点にある[519]」。後述するように、両作品とも、日本

516　坂口樗子「受賞感想」『新潮』10 月号、新潮社、1953 年、136 頁。

517　同上。

518　坂口樗子「タダオ・モーナの死」『蕃婦ロポウの話』大和出版、1961 年、189 頁。

519　李文茹「植民地の『和解』のゆくえ―戦後から七〇年代までの日本社会における霧社事件をめぐる一考察―」『異文化としての日本―内外の視点―』法政大学国際日本学研究所、2010 年、390～391 頁。

人警察官と原住民青年の「父子関係」や事件の主要人物の心境を通して、事件の全体像を描く。ここでは先行論をふまえつつ、両作品における「父子関係」を分析することによって、坂口の描く霧社事件の「真実」とその創作の連続性を究明する。

まずは「霧社」を見てみよう。「霧社」は実在人物の日本人警察官の佐塚愛祐と花岡一郎・二郎兄弟を主人公と設定し、その「親子関係」を通して事件を描く。まずは「父」の佐塚から見ていく。

実在人物の佐塚愛祐は長野県南佐久郡海瀬村出身で、志願で台湾に渡り、台中州埔里社支庁に派遣された「理蕃」警察官である[520]。1912 年 11 月、佐塚はマレッパ群総頭目タイモ・ピホの次女、ヤワイ・タイモと結婚した。義父の地位と妻の内助を得て、佐塚は教育、衛生、産業などのあらゆる面で、山地を「内地化」にして「理蕃」政策を強く推進した。白狗駐在所所長、マレッパ監視区監督などの職を経た佐塚は、1930 年 3 月末に台中州能高郡警察課霧社分室主任に就任、霧社監視区監督を兼任し、霧社地区の最高責任者となった。

> 佐塚の誠実は信頼されても、近藤は別だ。モーナが、自分の勢力範囲外に去る近藤に、流れていく浮木のようなたよりなさを抱くということは、当然あるべきことだった。（中略）下山警部補が、職を辞して東京へ去る時、蕃婦の妻と、混血の子供達三人を置いていった、ということが、霧社地方の、内地人警察官への、微妙な感情となってしまっている。佐塚の性格としては、あるまじきことだったが、下山は平然として去っていった[521]。

作中の佐塚は、日本人警察官を代表する主役である。作中にはその対比として、近藤と下山という二人の名前が出るが、二人とも実在の人物であり、それぞれ近藤儀三郎と下山平治を指すと考えられる。史実上において、近藤はモーナ・ルダオの妹と結婚し、後に行方不明になった。当時、霧社地区では近藤が「蕃妻」を捨てたという噂が流されている。それに対し、下山はマレッパ総頭目の娘・ピッコ・タウレと結婚したが、日本人の妻をマレッパ社に連れたという件で免官され、一家を山地に残したまま帰国した[522]。しかし、作中の佐塚はこの二人と異なり、その誠実や性格が信頼できる「良心的な警察官」と造形されている。

---

[520] 鄧相揚『植民地台湾の原住民と日本人警察官の家族たち』日本機関紙出版センター、2000 年、39～40 頁。

[521] 坂口樗子「霧社」前掲書『蕃地』、124～125 頁。

[522] 下山一自述(林光明)自述・下山操子(譯寫)『流轉家族 泰雅公主媽媽日本警察爸爸和我的故事』遠流、2011 年、164～176 頁。

「二郎、私は、花岡兄弟の父親だったね。忘れないだろうな。私の気持には、今も変ったことはない。お前達二人を、立派な日本人に仕立てるのが、私の務めたと思い、喜んでやってきた。立派な日本人ということは、立派なタイヤルということだね。お前は、これまでよくやってくれた。お礼を言いたい位だ。何にも隠すこともなく、従順で、率直で、実に良い子供だった。（中略）お前の身に背負いきれぬ荷をかついでいるように見える。（中略）その荷を少し、私にわけて貰おうか。半分とはいわない。私は老人だからね。然し、ほんの少し、私にわけてほしいのだ。どうだ、二郎[523]」。

注意すべきは、「良心的な警察官」の佐塚は花岡兄弟の「慈愛なる父親」でもあった、という点である。

実在人物の佐塚は山地で計 21 年にわたって勤務し、霧社事件の際に 45 歳で死亡した[524]。しかし、作中の佐塚は三十年の「蕃地」生活を送り、事件中に 53 歳で死んだ者と描かれる[525]。坂口は佐塚を「父親」として造形するために、実際よりも年齢を高くしたのではなかろうか。花岡兄弟を「立派な日本人」に育て上げようとする「父」の佐塚と、「従順で率直」な「子供」の花岡兄弟――「理蕃」政策の狭間には、原住民青年と日本人警察官の「父子関係」が成立する。作中の霧社事件は、この関係を背景に展開されていく。

作中のもう一つの重点は、花岡兄弟の「板挟み」という心理的葛藤に置かれる。花岡兄弟とは「理蕃」政策の宣伝と撫育政策の徹底を図るために模範人物として育てられてきた、ダッキス・ノービン（一郎）とダッキス・ナウイ（二郎）という、血縁関係のない二人のことである。二人は就学・結婚・就職など人生全般において、当局の意によってアレンジされ、日本人のような生活を送らされた。二人は事件当時に自殺した。霧社事件史研究者の鄧相揚は「『生』と『死』の選択に直面して、生命の極限的な葛藤と苦痛にみまわれた人間としては、今に至っても『忠』と『奸』論争の紛糾におかれたままの花岡一郎と花岡二郎以上のものはない[526]」と指摘している。

「文明教化」という論理をもって台湾山地と原住民に君臨する近代日本にと

523　坂口樗子「霧社」前掲書『蕃地』、171～172 頁。

524　前掲書『植民地台湾の原住民と日本人警察官の家族たち』、40 頁。

525　坂口樗子「霧社」前掲書『蕃地』、118 頁。

526　鄧相揚著、 魚住悦子訳『抗日霧社事件をめぐる人々　翻弄された台湾原住民の戦前、戦後』日本機関紙出版センター、2001 年、255 頁。

って、霧社事件は植民地台湾の統治に対する最大の諷刺とも言える。事件そのものは、精密な計算や長期間の計画を経てないと実現できないものである。植民側の論理から言えば、「文明人」の力を借らない限り、「野蛮人」が自力でこのような複雑な「悪事」を謀ったのは不可能である。そのため、近代教育（＝「文明教化」）を受けた「模範人物」の花岡兄弟は事件を協力するか否かとの問題が、当時の疑問点となっている。

では坂口は、花岡兄弟の「板挟み」を如何に解釈したのだろうか。

> 馘首する、ということに、同族の持っている神秘的な憧憬が、二郎には、いたたまらない恥ずかしさとなった。（中略）同族への哀憐が、噴きあげてきて、涙がこぼれた。多くの原始的な過誤を、自覚することも出来ず、大事な習慣として抱きつづけようとする（中略）若々しい体中に、華やかな血のめぐるのが感じられ、汚れていない自分を、ほこらしく思う気持になった。こんなことでは参らないぞ、俺のめざすものは、もっと大きなことなんだ、と彼の血が沸返る[527]。

原住民独自の習慣である「馘首」は、「野蛮性」のシンボルとなっている。この象徴的な行為に「神秘的な憧憬」を持つ同族は、「多くの原始的な過誤」を「大事な習慣」としている。作中の二郎はこのような同族に、「哀憐」と「使命感」を持つ。換言すれば、二郎は「父」の「教化」を受け、ほかの「子供達」を教えたい「長男」として描かれている。作中の「板挟み」は、この二郎の人間関係から導き出される。

作中の二郎はマホンが好きであり、マホンとは、モーナ・ルダオの娘のマホン・モーナという実在人物である。作中の二郎はマホンを愛しているが、当局の意向によって、幼馴染のハツエと結婚させられる。二郎は先に結婚させられた一郎に共感し、自分が意思を持たぬ棒のような扱いを受けていると思わずにいられなかった。二郎は「父」の佐塚に哀願したが、佐塚も当局の命令を変えることができなかった。そのため、二郎はマホンとハツエとの関係を同時に維持し、「蕃社の群衆」の「罵声」を浴びる。この「愛と憎の倒錯した世界」がわからなくなった二郎は、初めて「父」に不信をもつようになったが、その不信はついに「すべての日本人への不信」となった。。

> 「俺は、分室の職員だ」「二郎は、タイヤルだで。なア。そうでねか。二郎は、ホーゴ―で生まれた男ださ」「佐塚さんには、恩がある」（中略）

527　坂口樗子「霧社」前掲書『蕃地』、119～120 頁。

「何を、何を、どうすればいいのだ。俺は」「武器庫の鍵をはずすだけ」日本人へ向ける銃器を提供せよ、と言う。佐塚の顔が――温かい顔が浮んだ。不信を持ったとはいえ、あの人に銃口を向けることはできぬ。（中略）マホンはが、下から見上げるように、二郎の眼に見入った。その眼を、避けることはできない[528]。

蜂起への協力を求めるマホンに対し、二郎は自分の仕事よりも「父」への恩に重きを置くが、佐塚の命の保全を条件に協力を承諾する。作中では、「二郎の体をしっかと縛っている」のが「男と男の約束」と「女への愛情」という呪縛として描かれている。結局、佐塚から「たいへん恩を受けた」二郎は宿舎の壁に遺書を残し、一郎や家族とともに自決し、それを佐塚への「恩返し」と解釈する。李の指摘したように、その両者の間における「政治的人種的な差異をもたらす力関係」は、「儒教的な人情義理によって希薄化されてしまう」[529]。

「父子関係」にせよ、「恋愛関係」にせよ、要するに坂口は二郎の人間関係を通して、その「板挟み」を解釈する。もちろん、いずれも植民地統治の問題を矮小化する傾向を伴うが、次作「タダオ・モーナの死」は、このようなパターンを継承し、ある課題を導き出すことになる。

「タダオ・モーナの死」（以下「タダオの死」）は、「理蕃」警察官の樺沢重次郎の事件後の回想という形で、タダオ・モーナの死を中心に、別の角度から事件を解読する作品である。ここではまず二人に関する史実を紹介する。

樺沢重次郎は当時のトロック駐在所の巡査部長であり、霧社事件当日に家族をつれて山を降りていたため、事件にあわずにすんだ。事件後、事件処理に功績があったとして、樺沢は警部補に昇任する[530]。

一方、タダオ・モーナは、霧社事件の首領モーナ・ルダオの息子である。彼が関係する「吉村巡査殴打事件」は、霧社事件の一つの近因と考えられている。吉村克己巡査は霧社小学校の建築工事のため、マヘボ付近の木材伐採を監督している。霧社事件発生前の二十日、吉村は霧社から造材地へ行く途中、披露宴で泥酔したタダオと出会う。タダオは強引に吉村に酒を飲ませようとしたが、吉村はその手に牛の血が付いていたため断った。タダオは自分の厚意を無にされたと思い、激怒して吉村をひどく殴った。モーナ・ルダオとタダオ・モーナ（以下、モーナ父子）はこのあと、何度も謝罪し、なんとか無事に収めよ

528　同上、230～231 頁。

529　前掲論文「植民地の『和解』のゆくえ―戦後から七〇年代までの日本社会における霧社事件をめぐる一考察―」、392 頁。

530　前掲書『オビンの証言　タイヤルの森をゆるがせた台湾・霧社事件』、70 頁。

うとする。「霧社」と「タダオの死」は同じくこの殴打事件を描いている、両作品における「タダオ像」は全く異なる。

まずは「霧社」の一節を引用する。

> 佐塚は、近藤の送別会で、マヘボへ着いた時、差出したタダオの手が汚れていたのを思い出した。手を握ろうとすると、素早くひいて、「あっ、失礼しました。汚れています」タダオのワナだ。彼がいつも日本人へかけるワナなのだ。吉村が、その盃を受けようとしたら、タダオはあわててひいて、手を洗ってきて、事は、何もなくすぎているかもしてない。吉村の若さと、吉村の傲慢が、タダオのワナにかかって、彼は打擲された。そう考えてきて、佐塚は、タダオの心に、常に持ちつづけている、日本人への抵抗を、感じた[531]。

実際の霧社事件のリーダーはモーナ・ルダオであるが、「霧社」において、常に指揮者として現われるのはタダオ・モーナである。作中では、タダオが「まるで催眠術でもかかったよう」な「魅力のある男」と描かれている。彼は近藤勝三郎の「妻捨て」の件を佐塚に質問したり、マホンを「餌」にして「二郎を掌中に収め」たり、味方の名簿や戦闘用の地形図を作ったりする、蜂起側の「軍師」のような存在と言える。「霧社」で殴打事件がタダオの「ワナ」と描かれるのは、そのためでもあろう。しかしながら「タダオの死」は殴打事件を全く異なる形で語っている。

> 「報告しろ。タダオ・モーナが、吉村巡査をなぐった、と言え。足で蹴ったといえ。あいつは豚じゃ。マヘボのモーナ・ルダオの長男、タダオ・モーナが差出した盃を、豚奴が、汚いもののごと、よけおったとじゃ。いいか。汚いもののごとじゃぞ。オレが、もう一度すすると、ステッキで、オレの腕を叩きおったとじゃ。一郎、タダオ・モーナの腕をだぞ。汚いもののごとじゃぞ。……汚いもののごとじゃ」一郎は、眼を伏せてきていたが、語尾のふるえるタダオの声に、眼をあげた。傲慢のタダオの眼に、涙があった。彼は、幼い子供のように、その泣面をそむけもせず、一郎の前

[531] 坂口樗子「霧社」前掲書『蕃地』、219～220 頁。

に両腕をさしのべていた[532]。

ここでは、吉村の拒否はタダオのプライドを傷つけ、タダオはその「軽視」に耐えられず、ついに事件となったと解釈されている。一郎に「告げ口」するタダオは、まるで「幼い子供」のようである。ならば、タダオの「父」は誰であろう。

> 凶蕃タダオ・モーナ。樺沢は首をふった。凶蕃？彼は、決して凶蕃ではなかった。日本側にとって、最もおそられた、果敢勇猛な青年リーダーだったが、樺沢巡査部長にとって、吾子のように慈しんだ、唯一の、愛すべき若者だった[533]。

作中の樺沢が「慈愛なる父親」の役を演じている。「霧社」における「佐塚—花岡兄弟」の「父子関係」は、「タダオの死」では「樺沢—タダオ」という形で再現される。もし佐塚と花岡兄弟が「文明」の父と「教化」の長男を象徴するなら、タダオ・モーナは「反逆」の次男とも言えよう。

作中のタダオはある日、師範学校の制服姿の一郎と路上で出会い、「高砂か日本人か」と一郎を皮肉った。一郎は「振り返らず」に「樹林のなかへかけ」こみ、タダオは遠くから聞こえてきた一郎の唄う「荒城の月」を聞いた。その哀愁を帯びたメロディーに心惹かれたタダオは、「そういう歌を沢山しっている一郎」に「またもや憤懣を感じ」、樺沢にそのメロディーを歌ってみせ、「レコードを買ってくれ」と言う。その後、タダオは姿を隠して「荒城の月」を歌い、一郎に悪戯した。「霧社」の父子関係に引き続いて、「タダオの死」は樺山とタダオの間に「慈愛なる父親」「悪戯な次男」という関係を作った。

ならば、「悪戯な次男」のタダオは如何に「反逆」の道を歩くのか。作中では、タダオは結婚後に「変貌」し、「蕃服以外を身につけなく」なり、「水浴びもしなくなったらしく」「特有の獣の匂いがした」と述べられている。この「変貌」のなかで、最も重要なのは、自分の息子に対するタダオの気持ちである。

> ハバオを抱いているとき、タダオは、彼の体の血が、ハバオへむかって奔流するような、強烈な愛をかんじる。（中略）しかし、終ると、彼はそらぞらしい思いにうちのめされる。吾子を切実に欲しいとも思わなかった。

---

532 坂口樗子「タダオ・モーナの死」『蕃婦ポロウの話』大和出版、1961 年、239 頁。

533 同上、197 頁。

むしろ、彼の血の一滴が、蕃社でかたちを成すことに、空おそろしいものがあった。（中略）タダオは吾子をいつくしんだ。唯もう、そのいとけなさの故だけだ。成人した吾子を愛しむかどうか、タダオには自信がない。彼自身をながめるような恐怖があるかもしれない。嫌悪するかもしれない。タダオは、彼の父モーナ・ルダオが、少年期から青年期にうつるタダオを、急に避けはじめた時、父親から突放されたような当惑とかなしみをもったが、彼も亦、吾子にそうするだろう[534]。

愛妻のハバオを抱いても、タダオは子孫を残すことが虚しいと思う。彼の父のモーナ・ルダオもそう考える。この描写は実に興味深い。「霧社」と「タダオの死」の両作品は、日本人警察官と原住民青年の「父子関係」を主軸として成り立っている物語であるが、「本当の親子」のモーナ父子は、同じく「吾子」の成長に、「自身をながめるような」恐怖と嫌悪を感じる。

モーナ父子の心情は、原住民の「主体性」に関わる問題と考えられる。モーナ・ルダオの世代から、台湾原住民は総督府の「理蕃」政策によって武力・経済・文化などのあらゆる方面から「侵略」を受けてきたため、伝統的な文化、慣習に従って次世代を養育することができなくなった。換言すれば、一民族としての「主体性」を失ったも同然である。

坂口は「父」をその「主体性」のメタファーとしていると考えられる。タダオは結婚後に外見が「蕃人」の姿に戻っても、父としての自信を失っているため、息子に恐怖と嫌悪を感じる。息子が幼かった時期のタダオの「自己認識」はあまり変わらなかったが、息子が成人した時、タダオは自身に似た息子を見て、自分が「父」であると実感させられる。同じプロセスを、モーナ・ルダオも経験したのであろう。モーナ父子が同じく「吾子」を突き放すのは、二人とも「父としての資格・能力」（＝原住民の主体性）を失ったためではないか。一方、「父」をメタファーとするのは、もう一つの目的がある。モーナ・ルダオは霧社事件の首領であるが、坂口が「父親」のモーナ・ルダオの死ではなく、「息子」のタダオ・モーナの死を主題に創作した点が実に興味深い。更に、「霧社」と「タダオの死」においても、モーナ・ルダオに関する描写が少ない。それは、「文明」を象徴する「慈愛なる父親」の日本人警察官を登場させるため、「本当の父」や「野性の父」を象徴できるようなモーナ・ルダオを「欠席」させなければならなかったのではないだろうか。

坂口はこの「欠席」を通して、霧社事件の「真実」を語りたいのではないか。一見、「タダオの死」においては、霧社事件を「叛逆的・野性的次男」が

534　同上、262～263 頁。

「慈愛的・文明の父」に反抗する行動と解釈するが、もちろんそのような単純なものではない。近代日本は植民地支配を通して、原住民の主体性（＝「父」とする資格・「野性の父」）を剥奪し、その「空白」に自国の文明・文化（＝日本人警察官が象徴する「文明の父」）を補填しようとする。むしろ、それは「理蕃」政策の本質と言えよう。霧社事件は、原住民が自身の主体性を奪還する行動だったと言えよう。

一方、霧社事件は失敗に終わったが、「タダオの死」の結末は、近代日本の「文明教化」も失敗したと暗示している。

> それから十日ばかりすると、字を毎日一つずつおぼえていて、幾日たつとおぼえるか、とたずねてきた。樺沢は、イロハの仮名文字がおえたら、ひらがなをおぼえ、漢字があり、やはり、六年間にたたねば、一人前にならない。その上、算術・歴史・地理・理科がある、というと、げんなりして、オレやめるだで、そげなもののおぼえておる間に、蕃社でははや孫がでけるだ、と言った[535]。

事件終結の直前、モーナ父子のところから、一人の男が降伏に来た。その男はモーナ父子の窮状を樺沢に伝え、事件中の自分の「悪行」も白状し、「馘首」が「悪いことだ」と認める。その後、男は学齢を過ぎていたが、樺沢の口利きで教育所に入学できた。しかし、男はすぐに勉強をやめてしまう。原住民の反抗は失敗したが、近代日本の「教化」も成功できなかった。

「霧社」と「タダオの死」においては、近代日本と台湾原住民の関係が「教育する父親」と「教育される息子」の関係として描かれる。このような描き方の背後には、台湾山地統治をめぐる歴史的背景が潜在している。

明治期の植民地官吏の間にはすでに、台湾原住民を「子供」として表象し、その発展の段階を人間の歴史の「幼児期」に譬える視点があるが、昭和期になると「可愛い」という新しい意味が加わり、「可愛い子供」という修辞法が登場する[536]。それは、五箇年理蕃計画事業の討伐期において、原住民は訓化すべき対象に過ぎなかったが、台湾総督府による山地支配が展開されるとともに、「理蕃」警察が原住民と深く接触すればするほど、彼らに対する愛着が生まれてくるためである[537]。文化人類学者の山路勝彦によれば、「可愛い子供」はた

535　同上、284～285 頁。

536　山路勝彦『台湾の植民地支配―＜無主の野蛮人＞という言説の展開―』日本図書センター、2004 年、128～129 頁。

537　同上、129 頁。

だの一つの言辞のみならず、支配者の日本と被支配者の台湾原住民の関係を「親」と「子供」という比喩に置き換え、それを通して「理蕃」政策を実施するという統治の手法であるが、「その他者像には、彼我の差異を『文明』と『野蛮』という二元対立の図式に当てはめ、その差異をオブラートで包み込んでしまうという巧妙な思考回路が埋め込まれ」、「その回路に組み込まれた修辞法は、植民地官吏の眼差しに潜む支配の暴力性を隠蔽する仕掛けとして、戦略上の意義を持っていた」と山路も指摘している[538]。

坂口が霧社事件を「父子の戦争」と描くのは、植民者の言説戦略の内在的論理と山地でのリアルな人間関係で、事件への再解釈を試みようとしたのではないか。両作品における日本人警察官と原住民青年の「父子関係」および「父」のメタファーを通して、坂口は台湾山地への支配が展開されて以来の「文明」と「野蛮」の根本的な矛盾に密かに触れている。

六、事件の「生き残った者」：「ビッキの話」

霧社事件を正面から描く作品に対し、「ビッキの話」や「蕃婦ロポウの話」は霧社事件と第二次霧社事件の「生き残った者」への描写に力注がれる作品である。特に、従来はあまり触られていない第二次霧社事件（以下、二次事件）に言及している。霧社事件と二次事件をめぐる坂口の創作理念は、「タダオの死」の一節に見られる。

> 男達の世界と、女達の世界が、明暗のあきらかな境界で区別されていることを感じた。一つは、陽あたりのよい、ぬくぬくとした、青空のひろがる、広い寛達な世界で、微風があり、花や樹脂の匂いがあった。一つは、暗く、じめじめしていて、血の匂いがこもり、うめき声がそこここにしていて、人間の力だけが支配し、そこにはあたたかさはみじんもなかった[539]。

作中のタダオの妻・ハバオはモーナ父子の密談を聞き、男達と女達の世界には「昼と夜のように」歴然した区別があると感得する。作中では、蜂起の準備を始める翌日から、「男達は」「男だけの世界に閉じこもり」、「女という女がはじきだされた」と描かれる。そこから霧社事件をめぐる坂口の考え方が読み取れる。坂口は霧社事件を「男の戦争」とするのに対し、事件以後の「生き

---

538 同上。

539 同上、274 頁。

残った者」を描く時は女性を主体に描く傾向が強くなる。これが坂口の特徴である。坂口自身によれば、「蕃婦ポロウの話」は、夫の急死にショックを受けた自分が「たどたどしく起上り」、「自分を叩くような思いで」書いた作品である[540]。おそらく坂口はそうした自分のマイナスの気持ちを、事件によって「夫」を失った原住民女性に重ね合わせたのではなかろうか。

換言すれば、「男の世界」と「女の世界」をそれぞれ事件の「以前」と「以後」に当て嵌めることが坂口の創作手法と言える。事実、「ビッキの話」「蕃婦ロポウの話」には、女性の身体と情欲／性欲を描写する箇所が多数ある。李文茹は後者を中心に、ジェンダーの視点で一系列の論文を発表し、坂口が原住民女性を「歴史の主体」にした可能性を指摘する。

李によれば、霧社事件をめぐる歴史記述は常に男性を中心に、一種の「英雄物語」を作り、男性を主体とする前提での男女関係が事件の要因と看做される。しかし、坂口は「蕃婦ロポウの話」で、事件後の原住民女性の未亡人の性欲を描き、そこには女性を主体として「事件像」を再構築する潜在的な可能性が生まれると、李は指摘している[541]。本論文においては、李論文と互いに補完する目的で、「ビッキの話」を中心に、霧社事件以降の「男性像」を考察しようとする。

まずは、前述の二次事件の概要を述べる。

二次事件とは、霧社事件後に「味方蕃[542]」のタウツァ群が「反抗蕃[543]」の生き残った者を収容する「保護蕃[544]」収容所を襲撃し、多くの同族を殺害した大惨事である。霧社事件終結後の翌年の 1931 年 4 月 25 日未明、タウツァ群の各部落によって編成された奇襲隊は、コードフとシーパウの「保護蕃収容所」を

540　坂口樗子「あとがき」、前掲書『蕃婦ロポウの話』。

541　李文茹「ジェンダーから見た台湾原住民の記憶と表象――霧社事件を中心に」『社会文学　23』日本社会文学会、2006 年、107 頁。

また、同氏による関連論文は、前掲「植民地的『和解』のゆくえ―戦後から七０年代までの日本社会における霧社事件文学をめぐる一考察―」のほかに、「台湾原住民族女性の『声』として語ること」（『社会文学　27』2008 年、54～66 頁）、「坂口樗子の台湾『蕃地作品』における女性像と植民地的ノスタルジアの政治性」（『社会文学　41』2015 年、88～100 頁）などがある。

542　事件中に日本当局の鎮圧を協力する原住民＝タウツァ群、トロック群、万大群、白狗群。

543　いわゆる「抗日六部落」＝マヘボ社、タロワン社、ボアルン社、ホーゴ―社、ロードフ社。

544　事件後に日本当局の監視・管理を受けて収容所に住んでいた「反抗蕃」の生き残った者である。

襲撃し、195 人を殺した。収容所付近の桜駐在所と三角峰駐在所に勤務する警察官が機関銃で応戦したため、奇襲隊は一人の死者と七人の傷者を出したが、襲撃は見事に成功した。奇襲隊はタウツァ駐在所に戻り、駐在所は直ちに銃器を回収した。その後、タウツァ群は表面的に五日間の労役と戦闘用の長刀の没収という処分を受けただけである。一方、生き残った「保護蕃」の 278 人は、同年の 5 月 6 日に川中島に移住させた。

この事件が日本当局の陰謀によって引き起こされたということは、既に明らかにされている。江川博通は自著『霧社の血桜[545]』で、当時のタウツァ駐在所の巡査部長・小島源治の告白を記している。江川は事件当時の能高郡警察課課長であり、自分への問い合わせに対する小島の返事を記録するという形で真相を暴いた。要するに、霧社事件の鎮圧終了とともに、日本当局は事件平定へ協力した「味方蕃」から貸与銃器を回収しようとしたが、回収前に「保護蕃」をひそかに襲撃させるという密約を「味方蕃」のタウツァ群と立てたわけである。その陰謀を立てた理由は、霧社事件で殺害された日本人と「味方蕃」のタウツァ群の総頭目タイモ・ワリスの討伐中の被害の報復のためだったと言われる。

「ビッキの話」とは、原住民青年のビッキの生い立ちを述べながら、二次事件と生き残った人々を描いた作品である。あらすじは以下の通りである。

ビッキは霧社事件の直後に小児麻痺で足が萎え、四つん這いで歩くことしかできない。父が事件に加わって死んだため、ビッキは母のオビンと二人きりで生きている。オビンはビッキを自活させるために竹細工と鋳造の技術を教えたが、ビッキが十五歳の時に死んでしまう。その後、「蕃社」の戸籍調査に来た日本人警察官が、ビッキを「中原」部落に移住させる。ビッキは、上半身は立派に成長しているが、下半身が障碍を持ったため、常に同族の男に嘲笑われる。性欲に苦しむビッキは寡婦のブネと密通したが、実はその娘のスミが好きだったのだ。しかし、スミは中原警備隊員の野村が好きだった。ビッキはこの「愛執の世界」から逃がれるために、一旦川中島へ行く。しかし川中島から帰った後、ビッキはスミの頼みを受けて、野村を彼女のところへ案内する。

霧社事件を描く作品と異なり、この作に現われた「親」は「父」ではなく「母」である。「美しく妖艶な顔」を持つオビンは、息子に鋳造の仕事を習わせるため、「薄暗い部屋」の「木製の固いベッド」で、にんにく臭い息をした鋳掛屋に「さんざんサービスさせられた」。ビッキの父・バッサポーランは、霧社事件の参加で死去したため、オビンは生き残った「未亡人」を象徴するような存在とも言える。オビンは息子の面倒のため過労しており、その死の直前

545　私家書、1970 年。

に刀で息子を殺そうとするが、「おびただしい吐血」とともに死んでしまう。命拾いしたビッキは「その吐血に感謝した」と、作中では「母」の死が非常に諷刺的に描かれている。

献身的な母親の象徴であるオビンは、ビッキの父・バッサは弓術が上手い狩人で、モーナ・ルダオが自ら酒を持って霧社事件の参加を求めた英雄人物であると、ビッキに教える。そのため、ビッキは幼い時から、父が「精悍な一人の男」だと想像してきた。一方、オビンは夫が殺した「日本人の恨み」が息子の身に降りかかったためだと、ビッキの不具を因果応報的に解釈していたが、ビッキは自分が「医療設備のない孤立した家に住んでいたこと」こそ決定的な原因だと思う。なぜなら、集居は「蕃社の生活の原則」であるが、ビッキの家は唯一の例外であるためだ。

> 彼が、父親を思う時、神秘と謎の彼方に縹渺とかすむ父親の面影の代りに、不思議と霧社地方の山を紫に埋めつくす梅檀の、匂やかで杳かな花を思い浮かべる。あの紫の花房にこそ、秘められたものがあるのだと思う。何時から、父親が、梅檀の花の蔭に隠れて了ったのか、ビッキは思い出すことが出来ない。バッサが、梅檀の蔭に隠れなかったならば、ビッキの不運も、こんな形で現れなかったのではないか[546]。

ビッキが想像した「父」は、「梅檀の花影」に隠れる「虚像」であるが、バッサの「実像」は中原社の頭目の話で解明された。バッサは綺麗な女性と心中したが、女ばかり死んだ。そのため、バッサは「蕃社」に居場所がなく、離れたところに住んでいて、モーナ・ルダオに招かれて死地を赴き、オビンとビッキは「孤立した家」に住んでいることになった。父が英雄だ、自分の不運は父のいないためだと信じてきたビッキは、父の「実像」がこんなに「醜悪だった」と想像に難かった。それと同時に、ビッキは自分にすべての苦しさを隠して、何も知らせない母のオビンの姿に感動した。二次事件を描くこの作品は、「霧社」と「タダオの死」と同じく「父の不在」という基調を維持している。その代わり、「献身的な母親」は現われる。

ビッキは障礙を持ったという形で霧社事件と関係がある。坂口は作品の冒頭に、「ビッキとは四つん這いでとび歩く意味のタイヤル語である」と説明する。作中ではビッキの本名がマライバッサで、それは「蕃地の習慣に従って」命名された「バッサの子のマライ」という意味だと説明される[547]。しかし、母

546　坂口樗子「ビッキの話」前掲書『蕃地』、91 頁。

547　台湾原住民の習慣としては、父の名を子の姓にする。たとえばモーナ（名）・ルダオ（姓）

と死別して新生活を送るビッキを待つのは、「ビッキ」「ビキッチャ」と低く囁く「人々の群」であった。その日以来、ビッキは自分の本名を忘れ、「田川一郎」という日本名があったが、誰も「呼びはしなかった」。そういう意味で、ビッキは「名前を失った者」とも言えよう。

> その夜から、ブネは、夜毎に忍んで来た。抱かれていれば、不具者と思えぬたくましい胸と広い肩、強い二つの腕、整った美しい顔、何一つとして好ましくないものはなく、女は我を忘れた。然し、終って起上る時、手よりない男の両足にふれると、女は興ざめる思いだった[548]。

ビッキは容貌も体格も人並み以上であるが、障礙を持ったゆえに、自分より顔も体も貧弱な男の嘲笑を辛抱し、寡婦のブネと密通を始める。しかし、ブネはビッキの障礙に興冷めする。一方、ビッキは本当はブネの娘・スミが好きだったが、スミは日本人警察の野村を愛している。なぜなら、ビッキは竹細工と鋳かけものの修繕で生計を立てているが、タイヤル族は狩猟以外の仕事を極度に軽蔑しているからだ。そのため、ブネとスミはビッキを「夫」とする考えがなかった。前作のタダオが「父の失格」の喩えならば、ビッキは「夫の失格」の喩えではなかろうか。

> 番犬のように黙々と地を這い乍ら、ビッキは、法悦を感じていた。心の中にあふれてくる訳のわからぬ歓喜を感じた。ビッキは、遠い昔に、彼が生をうける前に、こんな風なことがあった、と思った。確かに。最愛の人の許に、誰かに手をひかれ案内されていく。そうした場面があったと思った。そして、それは、彼の体験のなかにあったと思った。彼は、時々、ビッキ、お前、まだ眠っているのか、もう目をさましなさいよ、と誰かが、自分をゆり起してくれるような思いに陥っていることがあったが、今も、それと似たような思いを持った。ビッキ、何をしてるだア、起きねえかア、と言われて目をさますと、自分は五体揃った何者かであって、真に完全で幸福な周囲の中にいるのだ、と言う奇妙な思いにとらわれるのだった。案内しているのは自分でなく、案内されている野村の本体が、実は自分なのだと言う倒錯した思いがした。甘いしびれる陶酔があった[549]。

の息子はタダオ（名）・モーナ（姓）である。

548　坂口樗子「ビッキの話」前掲書『蕃地』、80 頁。

549　同上、109 頁。

結末は、ビッキが野村をスミのところまで導くという場面である。ビッキは、「遠い昔」に「こんな風なこと」が自分の「体験のなかに」あったと思う。ビッキの心情を通して、事件前の原住民の、「不具のない」「健康な状態」を暗示するのではないか。その「不具」とは霧社事件の影響のみならず、第二霧社事件とそれ以降の長期間にわたって、「生き残った者」が受けた非人道的な待遇である。事実、第二霧社事件を経て生き残った「保護蕃」は川中島に移住させられた後、数回の逮捕を経て、虐殺された。霧社事件の民間研究者・鄧相揚「第二霧社事件日誌[550]」によれば、以下のようである。

① 1931 年 10 月 15 日、当局は能高郡役所で帰順式の名を借りて 23 名の抗日参加者を逮捕。
② 10 月 16 日、霧社警察分室で「家長会」の開催という名目で 15 人の抗日参加者を逮捕。
③ 10 月 17 日～12 月 26 日の間に、ホーゴ―社のピホ・ワリスを含む 39 人の抗日参加者を拘留・拷問し、後に全員が死亡。

障礙を持ったビッキが象徴しているのは、霧社事件以降の一連の悲惨なできごとを経て、戦慄の日々を送った「生き残った者」の男性主体だと考えられる。「法悦」「歓喜」「幸福の周囲」を感じたビッキがかつては「五体揃った者」であるように、「生き残った者」もかつて「セデック・バレ[551]」である。

前述したように、「蕃婦ロポウ」には原住民女性を事件の主体とする可能性が潜んでいる。特に、作中のロポウは年齢も出身も不詳で、「台湾の山地における歴史的に『声』を持たぬ多くの無名の『蕃女』を代表する人物としても捉えられる」と李は指摘している[552]。相対的に、ビッキは、霧社事件後の「生き残った男性」を隠喩するのであろう。

「ビッキの話」と「蕃婦ロポウの話」の描写によって、坂口は「生き残った

---

550 鄧相揚著、下村作次郎，魚住悦子共訳『抗日霧社事件の歴史――日本人の大量殺害はなぜ、おこったか』日本機関紙出版センター、2000 年、128～134 頁。

551 Seediq Bale、セデック語の「真の人」の意である。霧社事件の蜂起者は日本統治期にタイヤル族の傍系とされたが、2008 年に台湾政府より「セデック族」という独自の民族としての認可を受け、台湾における 14 番目の原住民とされた。2011 年、台湾人監督・魏徳聖は霧社事件をテーマに「セデック・バレ」という映画三部曲を製作し、大ヒットとなった。そのブームとともに、「セデック・バレ」はその年の流行語ともなった。

552 前掲論文「ジェンダーから見た台湾原住民の記憶と表象――霧社事件を中心に」、107 頁。

者」の表象を構成し、自分の原住民関連作品に、霧社事件の「真実」を自らの方式によって「再現」し、一つの「蕃地」の世界を作ったと考えられる。

七、おわりに

「平地」も「蕃地」も体験した坂口は、植民地台湾を遍歴した作家とも言える。終戦直前の疎開生活で「蕃地」に心を惹かれた彼女は、戦後にその体験を生かし、創作の視野を「理蕃」政策から霧社事件まで拡大し、数多くの作品を書いた。霧社事件と第二霧社事件をめぐる作品は、それぞれ「父子関係」および「原住民の主体性」を軸に描かれている。この事件人物の人間性を深く浮き彫りにするのが坂口の一大特徴とも言えるが、この特徴は植民地統治の問題を矮小化・曖昧化しているという批判も受けた。最後に、この点について論じてみたい。

河原功の指摘によると、坂口の描写は「台湾体験者ならでは描くことのできない強み」があるが、自分の原体験に固執すぎて、日本の植民地主義と「理蕃」政策への批判意識は希薄である[553]。李文茹は「タダオの死」に対して、「反日運動参加者への理解自体に植民地批判が含まれているものの、原住民をプリミティブに造形し、そのうえで無償の親子の愛を表す父子のレトリックで語ることは、支配と被支配の政治的な構造を批判するどころか、曖昧化してしまう」と指摘する[554]。

坂口の創作動機を遡ってみる。彼女は小説集『蕃地』の「あとがき」で、「最も条件のわるい生活のなかで」「怒りと悲しみをぶつける思いで」作品「蕃地」を完成し、また、作品「霧社」を「なるべく事実に近く書こう」としたが、「まだ生存している方」もいるため、「やはり虚構の世界」として扱ったと語っている[555]。また、坂口は「タダオの死」の序文で、日本が原住民にとってきた「数々の政策」を「すべて肯定できないし、野蛮人として彼らを取扱い、彼らの伝統や習慣を無視し、徹底的に飼育しようとした」「末端のやり方にも賛成できない」ため、「タイヤルを描くことによって、彼らへの私の謝罪としたい[556]」という意思を表明している。1970 年代の末までも、台湾の山地、

553　河原功「日本文学に現われた霧社蜂起事件」『台湾新文学運動の展開―日本文学との接点―』研文出版、1997 年、97 頁。

554　前掲論文「植民地的『和解』のゆくえ―戦後から七０年代までの日本社会における霧社事件文学をめぐる一考察―」、393 頁。

555　前掲書『蕃地』、269 頁。

556　前掲書『蕃婦ロポウの話』、189 頁。

そして原住民を愛着する坂口の気持ちが変わらないことは「蕃地との関わり」という文にも読み取れる[557]。つまり、作品「蕃地」の受賞の言葉で述べたように、坂口の創作の原点は「人間への愛情」である。ただし、坂口の愛情は原住民に向けられているだけではない。

前述とおり、小説集『蕃地』と『蕃婦ポロウの話』の出版後に、坂口は自伝小説『母の像』の創作に専念している。坂口は自伝小説に中原での疎開生活を言及するが、霧社事件については深くふれない意思を表明する[558]。とはいえ、この自伝小説は側面から彼女の「蕃地」生活を理解する助けとなる。作中には、引揚直前の心情について、以下のような描写がある。

> 地主と小作人のような対立で、事毎に物品を集めることだけ心を向けていた警察官はいなかったとはいえない。そういう悪徳警官もいたに違いない。いわゆる一旗組と称する、一攫千金の夢をもって渡台してきた人々が、夢破れて、蕃地の警官となり、無智な蕃地の人々から、搾取したことは、逃れようもない現実だった。しかし、大半は、高砂族との接触に、人間的親密をもち、慾得ぬきに勤めてきている[559]。

強い贖罪意識を持つ坂口は、「理蕃」政策もしくは警察官の「罪」を否認しようとは思っていない。ただし、警察官の「大半」は、原住民と親密な関係を持つ勤勉な人間であることを、坂口は同時に感じている。坂口の「愛情」は原住民のみならず、山地の勤務者にも向けられているのであろう。作品における日本人警察官の「慈愛なる父親像」の創出も、この感情によるものと思われる。この「愛情」が植民地統治の問題を矮小化する傾向をもたらすのも事実であるが、坂口ならではの特徴ともなっていると思われる。即ち、この愛情によって描かれた作中人物は、繊細かつ真実なる感情を持つ人間である。従来、「野蛮人」と見なされた原住民は戦後に至り、ある程度「脱野性化」され、「文明人」と違わぬ一人の人間として「還元」された。この点に、坂口の作品の時代的な意義があるのではないか。

557　坂口樗子「”蕃地”との関わり」前掲書『坂口樗子作品集②　霧社』、238～301 頁。

558　坂口樗子「母の像　第二部　第二章（一）」『花泉　10 月号』華道専正池坊、1970 年、35 頁。坂口は「自著『蕃地』『蕃婦ロポウの話』をご参照ください」と語る。

559　坂口樗子「母の像　第二部　第三章（六）」『花泉　10 月号』華道専正池坊、1971 年、54 頁。

終章

第一節　作家たちが見た「野蛮人」

I am as free as nature first made man,
Ere the base laws of servitude began
When wild in woods the noble savage ran[560].

——John Dryden, “The Conquest of Granada”, 1672

手前は、造化が始めて人間を作った時と同様、自由なのです。
臣下の隷属という下劣な法が制定される前、
高貴な未開人が自由奔放に森の中を駆け廻っていた時の人間同様にね[561]*。*

——ジョン・ドライデン、「グラナダの征服」、1672 年

上記の引用は、イギリス詩人のジョン・ドライデンの作品「グラナダの征服」の一節である。グラナダとは、現在のスペイン南部の都市である。1492 年 1 月、西欧のイベリア半島南部におけるイスラム教のグラナダ王国は、半島北部の天主教のアラゴン王国とカスティーリャ王国が組んだ聯合王国へ降伏した。この降伏で、イスラム文明の勢力はイベリア半島から完全に消失した。「グラナダの征服」は、この西欧史上の一大事を描くものである。「グラナダの征服」のなかで、スペインの国王はイスラム教徒を偽装する時、noble savage（＝「高貴な未開人・野蛮人」「善き野蛮人」）という言葉を使った。英語圏において、「グラナダの征服」はこの言葉を使う最初の文学作品と言われる。

周知のように、コロンブスは 1492 年 10 月に新世界のアメリカ大陸を発見した。西欧文明史の観点から見れば、天主教・キリスト教の文化圏から「異教徒の野蛮人」を駆除し、アメリカ大陸に「未開の野蛮人」を発見したその年は、重大な意義を有するのであろう。西欧文明圏における「野蛮人」認識と相対して、本論文は近代日本における「野蛮人」の台湾原住民への認識の一部を解明

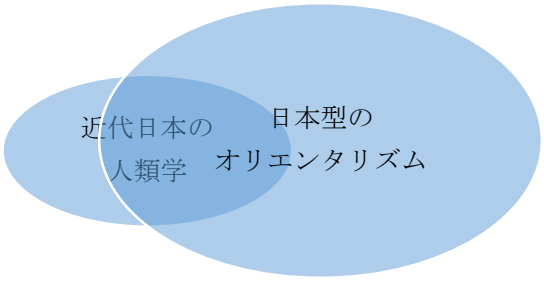
---

560 John Dryden, *The Works of John Dryden VOLUME XI,* University of California Press、1978 年、30 頁。

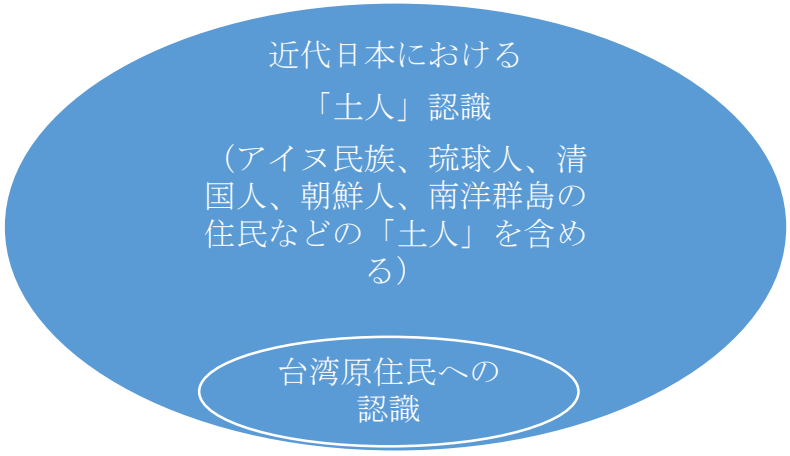
561 ジョン・ドライデン著、千葉孝夫訳「グラナダの征服」『ジョン・ドライデン悲劇集』中央書院、1992 年、15 頁。

しようとするものである。終章として、まずは「近代日本の台湾原住民への認識」というものを論理的に要約してみる。

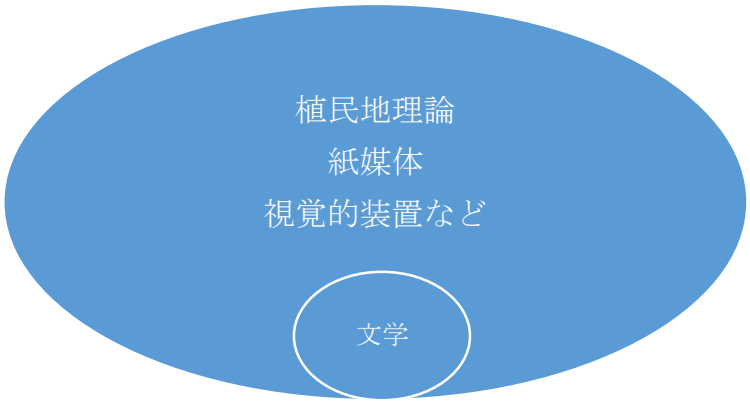
近代日本における「野蛮人」は、帝国日本が形成されていく過程に、自国の「文明」を基準としてその周辺・植民地支配地域で次々と析出してきた「土人」である。それらの「野蛮人」／「土人」に対する認識は、二種類の言説システムによって構成されたものである。一つは、日本型のオリエンタリズムであり、もう一つは、近代日本の人類学である。もちろん、両者は切っても切れない密接な関係を持つが、その性質は異なる。前者はその原型のオリエンタリズムと同じく、ある特定の方向に指向する思想と、それを表現する言説である。後者は、前者の影響を受けた近代の学問の一つであるが、そのなかで例えば身長、体重など、ただの「科学の測量結果」という客観的な事実を表現するという部分もある。そのため、両者の関係を図で示すなら以下のようなものとなろう。



重なる部分は、近代日本における「土人」認識の中核であろう。しかし、「土人」とは、近代日本の「他者」としての複数の異民族への総称であり、「台湾原住民への認識」は「土人」認識の一つにすぎない。それを図で示すなら以下のようなものとなろう。



さらに、「台湾原住民への認識」というものを表出する媒体は、「理蕃」政策に関する法律・行政の公文書、人類学などの「植民地理論」や、新聞・雑誌記事、また現地写真や絵葉書、博覧会等の「視覚的装置」などであり、文学はあくまでそのなかでの一つでしかない。それを図で示すなら以下のとおりとなろう。



本論文では、上述の背景を念頭に置きながら、植民地台湾における歴史事象と作家個人の体験を考えたうえで、日本人作家による台湾原住民表象を考察してきた。

第一章では、西洋における「文明と野蛮」の系譜をふまえて、近代日本における「土人」概念と統治を概観し、そのなかの台湾原住民の特徴を考えた。近代日本は支配領域の拡張過程において、自国の周辺部と植民地支配地域に「野蛮」の「土人」を、自国の「文明」の対照物として次々と「発見」した。「土人」という語彙は、近世まで「土着の民・地方の人」の意味であったが、近代に入って漸次に「蝦夷」と入れ替え、アイヌ民族を指す「未開人・野蛮人」を意味しているようになった。近代日本の「土人」概念はアイヌ民族を起点として、その包摂範囲が帝国の支配領域の拡張とともに広がっていくが、「土人」への近代教育の推進につれて、植民地支配地域の住民は「土人」という枠から脱出することも可能であった。

公文書、新聞・雑誌記事、文芸作品、絵葉書、写真……など、近代日本の「土人」認識を表象する媒体は多種多様であったが、その中で最もインパクト的なのは博覧会における「土人展示」である。逆に言うと、「土人展示」は「土人」という概念が存在している確証となったのである。「土人」たちのなかで、「清国人」「琉球人」のように、自身が「土人」とされたことに気がついた者もいる。1903 年の内国勧業博覧会の「人類館事件」はその最も良い例であ

る。

注意が必要なのは、帝国日本の周辺と版図内の「土人」とを比較すると、台湾原住民が「土人」概念の最下位に位置づけられている点である。近代日本の植民地支配の論理は、一般的に「文明の和人」（＝本土の日本人）と「野蛮の土人」（＝植民地支配地域の住民）という二項対立的図式で進められたが、植民地台湾の場合はこれと異なり、「日本人（＝「内地人」）―台湾漢民族（＝「本島人・台湾土人」）―台湾原住民（＝「高砂族・蕃人」）」という三重的構造でを取っていた。「蕃人」の原住民と「土人」の漢民族はいずれも広義的な「土人」概念に包摂されているが、近代の日本人にとって、前者の「首狩り」の慣習が最も「野蛮」な行動と視されているため、原住民は植民地台湾における「野蛮性」の化身となり、それとともに漢民族の「未開性」を遠景的に後退させた。

一方、「内国植民地」の北海道と沖縄は、近代日本の海外植民地支配地域への支配論理の原型であるため、アイヌ民族と琉球人への初期の統治政策を考察すると、近代日本の「土人」統治の連続性も読み取れる。事実、「土人」概念の起点とされるアイヌ民族への政策は、台湾原住民への「理蕃」政策の原型であり、琉球人への旧慣調査・温存政策も、それ以降の植民地支配地域の住民への統治政策の「見本」である。台湾原住民への「理蕃」政策は、アイヌ民族と琉球人への「土人」政策という文脈を継承してきたものである。

しかし、ほかの「土人」と比較すると、「人殺し」や「人食い」など「凶悪な野蛮人」の印象は台湾原住民でしか強調されなかった。そのイメージは単に「馘首」という原住民の固有習慣への既成印象から生まれたのみならず、「土人」統治の最初段階の相異にも関わる。北海道と沖縄は明治政府が近代の国際法に基づく交渉を通して得た領土であり、その住民が自国の「国民」であることは明治政府が領土権を対外に主張する根拠の一つでもある。そのため、アイヌ民族と琉球人への統治は「国民」への「世話」でもあり、近代国家としての体面に関わる。しかし、日清戦争の勝利を以て得た植民地台湾とその住民に対して、明治政府はそういう配慮がなかった。一方、「土人」への政策は、新領地への開発＝未開地の資源獲取にも関連する。そのため、台湾原住民への実質的な統治＝「理蕃」政策は台湾山地の開発に関わる。台湾総督府は山地開発の「障礙」を一掃するため、「五箇年理蕃計画事業」という戦争を行った。事業の終了とともに、「理蕃」政策を実質的に展開することができるようになった。「理蕃」事業という近代日本と台湾原住民の戦争が行われているうちに、原住民の「凶悪的な野蛮人」の表象はより強められた。

第二章では、中島竹窩、宇野浩二、中村古峡、佐藤春夫を中心に、日本統治初期から霧社事件までの台湾原住民の文学表象を考察した。1895 年から 1910

年代中期まで、台湾山地に進入し、原住民と接触できたのは、主に「理蕃」警察や人類学者などの植民地支配の関係者である。そのため、1910 年代中期までは台湾原住民の文学表象の「空白期」と言える。1910 年代中期には、植民地台湾の政権や治安の安定化および日台間と台湾島内の交通制度・機関の整備などの条件が揃え、いわゆる「植民地旅行」が成立できるようになり、民間人の作家たちは台湾山地に入り、近距離で原住民を観察する機会を得た。霧社事件までの台湾原住民の文学表象は、上述の歴史を背景に展開されていったものである。

中島竹窩は台湾領有の直後、植民地の警察官として山地に入った。彼は台湾総督府への行政報告書をもとに、紀行文「生蕃探検記」を書いた。「生蕃探検記」は明治期の総合雑誌『太陽』に連載し、博文館の「少年叢書」として出版され、植民地の行政文書、植民地主義的な言説、少年文学の性格などの多面性を具えている。作中では警察官の観察を通して、一種の「帝国の視線」を表現し、その視線における漢民族も原住民も近代日本に親善・友好的人物として造形され、特に「高尚な道徳」「野蛮な慣習」「驚異な身体能力」「愚蒙未開な文化」を同時に備えることが原住民の特徴として描かれた。そこには、近代の日本人を「人間の基準」とする「非人間化」の原住民像が作られた。つまり、中島は近代の日本人と対照することを前提に「生蕃」を描くのであった。「生蕃探検記」とその底本の行政報告書の内容を比較すると、「生蕃探検記」は近代の日本人の「拡張している帝国」の想像に合わせて、原住民の「降伏」を創出したことがわかる。帝国日本の新領土を宣伝するため、植民地の警察官は想像力を有する作家に転身した。また、本論文は「生蕃探検記」への考察を通して、前述の「空白期」を補填した。

宇野浩二は「文明」と「野蛮」の二項対立の思考を文学において初めて提起した作家である。彼は北米のインディアン伝説と類似する主題を用い、原住民にさらわれた日本人少女を中心に、台湾版の「人さらい」童話を作った。作中では「文明」と「野蛮」をそれぞれ「大人」と「子供」にあてはめるほかに、更に「文明」を「理性」と「感性」と二分し、「父」と「母」にあてはめた。「父」に反抗する「生蕃人」の「娘」に表象された「野蛮」は曖昧であるが、後の作家たちが描く「蕃婦像」（＝原住民女性像）の原点とも言える。また、当時の民法と社会通念から考えると、「子供」の少女は「大人」の父の戸主権と親権の二重支配の下、一家族の最も低い地位に置かれていた。そしてこの設定を通して、「野蛮」は「文明」による被支配者として対象化された。また、これにより、宇野は「文明側」の「大人」と「野蛮側」の「子供」という図式で、近代日本と台湾原住民をめぐる二項対立の思考を提起した。注意が必要なのは、本作における「文明と野蛮」の二項対立はジェンダーを通して表現され

たのではなく、「親子関係」を通して成立しているという点である。そのため、宇野は物語の結末に「母の揺籃唄」が象徴する「愛」を通して、「文明」と「野蛮」の二項対立を脱構築化することができた。

中村古峡は台湾山地を実際に旅行し、その経験をもとに紀行文と小説を書いた最初の作家とも言える。作中では台湾の土地を紹介しながら、琉球漂流民殺害事件および台湾出兵という近代日本と台湾原住民の関係を回顧し、「生蕃」の「野蛮性」とそれに対する日本人の恐怖心を再発見する。ただし、中村はその「野蛮性」が近代日本の「文明」教育を通して「改造」できると暗示した。一方、作中では日英博覧会に「出品」された原住民像の描写を通して、「生蕃」の「文明化」の可能性も論及される。中村の作品はルポルタージュとして、当時の原住民認識を反映することができ、新聞・雑誌記事と相互補完する効果もある。紀行文から小説までの原住民表象の変遷からも、中村の思考が深化することを読み取れる。

佐藤春夫は台湾総督府の山地統治と「理蕃」政策を近距離で観察・描写した第一人者とも言える。彼は谷崎潤一郎の夫人との恋愛事件で「植民地の旅」に出たため、終始外部に立つ立場で「旅人意識」を持ちながら、植民地台湾を観察する。それによって生まれたものは中期作品と呼ばれ、彼の創作人生の転換点と言われる。佐藤は知識人の善意の感情や冷静な目線で、総督府の山地統治と原住民を観察したが、その善意は逆に彼の観察に「限界」を設けた。佐藤の「蕃人」描写は原住民の信仰を借りて近代日本の文明を批判する、もしくは原住民の身体描写を通して植民地問題を表現するという形を取ったため、原住民自身の形象はかえって曖昧となった。作中の原住民は植民地支配の問題を映し出す「他者」として、植民地台湾における「異郷」風景の一つでしかないが、佐藤は山地統治に協力する原住民女性像を描くことによって、後の作家の「蕃婦像」を描くという伝統を作った。

日本統治初期から霧社事件までの原住民の文学表象は、植民地の「旅人」たちと彼らの紀行文的な作品によって表現された。四人の作品における原住民表象は一見無関係のようであるが、実際は通底する一種の連続性を持つ。中島竹窩と中村古峡の作品はそれぞれ「官」と「民」の角度から、近代日本の「野蛮人」に対する認識と位置づけを確認した。宇野浩二は議論をさらに一歩進め、「文明」と「野蛮」の二項対立という関係の本質を提起し、それに対する独自の思考を始めた。佐藤春夫は台湾山地の統治現場を観察し、その原住民を表象することによって、近代日本の文明と植民地支配の現実を批判した。佐藤の作品は一種の限界があるが、一つの転換点としての意味を持っている。以上の四人の共通点としては、一定の距離を保ちつつ原住民を観察し、その内面（＝「野蛮」の本質）には深入りしないところである。

近代日本を基準に創出された「非人間化」の原住民、「文明」と「野蛮」の二項対立の思考の提起、近代日本と台湾原住民の関係および現状への論究、台湾山地統治への描写や批判などを通して、「旅人」たちは漸次原住民との「距離」を縮めた。しかし、「旅人」の目で見られた、このような「蕃人像」は近代日本文明の「先進性」／「問題点」を照らし出した一方、それはあくまで遥かな「外地」に存在する「他者」の形象にすぎなかった。原住民の「野蛮性」についても、表面的描写に止まり、精神面において論じられることがなかった。

第三章では、大鹿卓、中村地平、真杉静枝、坂口樗子を中心に、霧社事件から戦後にかけての台湾原住民の文学表象を検討した。霧社事件は日本統治期における台湾原住民の最大の武力反抗事件であり、その波紋が政界から民間まで広げられた。そのため、「理蕃」政策は大きく変化し、特に日本人警察官と原住民女性の政策結婚によって引き起こされた「蕃婦問題」は、常に霧社事件の要因と看做され、文学の素材ともなった。霧社事件は従来の「「文明」と「野蛮」の二項対立を本格的に浮上させたが、その矛盾を解決するのは、事件以降の台湾原住民関連作品の潜在的課題となり、四人の作家もそれぞれの立場でこの課題に挑戦した。。

大鹿卓は左翼政党の親友・河野密から示唆を得て、台湾原住民を描くことによって植民地問題に関与した。彼は「日本人警察官—原住民女性」という図式を活用し、「馘首」と「蕃婦」への描写を通して、原住民の「野蛮性」を表象する。「野蛮化」された主人公の日本人警察官の目を通して、大鹿は「馘首」を原住民の固有文化・宗教体系の一環として肯定し、「蕃婦」の身に一種の「生き」の力を読み取れる。また、大鹿は「理蕃」警察官と「蕃婦」の恋愛関係を描写することによって、「蕃婦問題」と「理蕃」政策の本質を間接的に触れた。全体的に言えば、大鹿は台湾山地を体験していないため、台湾原住民の「野性」描写にかなり重きを置いたが、その「野蛮人像」はやや単調に終った。しかし、「野蛮人」への描写を通して、大鹿は原住民の「本来の姿」を肯定し、植民地政策の根底における非人間性を批判した。そこに底流しているのは、「弱者への同情」という大鹿の文学を貫く一つの志向性だった。

中村地平は自身の台湾体験と南方憧憬をもとに台湾原住民を描き、異なる類型の作品を以て、多彩な「野蛮人像」を創出した。原住民神話の関連作品においては、中村が『蕃族調査報告書』をもとに、人類学の専門知識から文学作品に転換し、日本神話と異なる原住民の世界観を表現している。また、原住民女性の関連作品においては、中村が 1930 年代前半の作家と異なり、「蕃婦」の「野蛮性」を「癒しの力」と解釈している。一方、近代日本と台湾原住民の歴史事件を作品に取り込むことによって、中村は「文明」と「野蛮」の二項対立

の課題に直面し、霧社事件中の「理蕃」警察像を粉飾し、植民地問題を矮小化させるのに対し、琉球漂流民殺害事件中の日本人・漢民族・原住民の間における多重的表象を通して、近代日本の「文明性」および漢民族と原住民の「野蛮性」を析出し、それによって近代日本の植民地支配が正当化された。中村は自分の台湾体験と南方憧憬をもとに、多彩な原住民像を描出したが、戦時下という背景もあり、彼は「野蛮人」の原住民を「文明」に「克服」されるべき対象としか描くことができなかった。

真杉静枝は従来の男性作家と異なり、植民地台湾の日本人女性を描くうちに、国策文学の風潮に合わせ、原住民女性を描き始めた。真杉は原住民女性を漢民族女性より親しい存在だと描くが、日本人青年と原住民少女の恋愛を描写することによって、「理蕃」政策にも疑問を示している。一方、真杉は「サヨンの鐘」関連作品において、従来の「日本人男性—原住民女性」という二項対立的図式を脱構築化し、日本人女性の主人公を頂点とする三角的図式を成立させた。真杉の「サヨンもの」における原住民少女と「前線」の日本人男性は、「銃後」の日本人女性を支えるための存在となった。また、従来の男性作家の作品には、原住民男性が「日本人男性—原住民女性」という図式の「補助線」として描かれるが、真杉が描く「蕃男」は補助線としての機能が失い、「馴化された男」となった。

坂口樗子は終戦直前の台湾山地で疎開生活を送り、その生活体験をもとに原住民を描く者である。彼女は終戦を挟んで「理蕃」警察官と原住民女性の混血児をモチーフに創作し、その作品が戦後の関連作品の導入部とも言える。戦後、坂口は「謝罪」意識で多数の霧社事件関連作品を書き、一時「蕃地」作家とも呼ばれたが、その事件を描く作品において、坂口は事件人物の「理蕃」警察官と原住民青年の間に「親子関係」を創出し、「父」をメタファーとして、事件の本質を原住民の主体性をめぐる衝突と解釈する。一方、第二次霧社事件を描く作品において、坂口は事件後の「生き残った者」の苦境を露呈する。坂口の作品には、霧社事件を山地の人間関係の葛藤に矮小化する一面があるが、事件中の人物像を活写することによって、原住民は「野蛮人」ではなく、愛情や義理を持つ「普通」の人間に「還元」させた。

霧社事件から終戦までの 15 年間、台湾原住民関連の作品数が急増し、そのほとんどが霧社事件を意識したうえで書かれた。それに伴う「野蛮人」への思考が大きく変化した。作家たちは「野蛮人」を描くことによって、「文明と野蛮」の二項対立を解釈ないし解決しようとする。だが、それだけではない。

人生の中で挫折感を味わった作家たちの多くは、植民地台湾へ「慰安」を求めた。特に、事件以降の作家たちが描く原住民は、二項対立のメカニズムにおける「野蛮人像」だけではなく、彼らの人生と文学に関連する心象風景でもあ

る。大鹿卓は「野蛮」の価値を肯定し、そこに底流しているのが「弱者への同情」という彼の意志である。中村地平は青春時代の台湾体験や「南方憧憬」をもとに、多彩な原住民像を創出したが、彼が描く「文明に克服された野蛮人」は自分が憧憬した「南方」の終結を意味している。真杉静枝は不愉快な婚姻生活から脱出するため、台湾から日本へ脱走したが、再び台湾に戻った彼女は、「蕃婦像」の創出によって自身のアイデンティティを確立した。戦後、坂口樗子は終戦前の山地疎開生活をもとに、一連の原住民関連作品を書くことによって、霧社事件に対して「謝罪」しようとする。作家たちが描く「野蛮人像」は二項対立という課題への「解答」のみならず、そこから作家自身の植民地体験と文学志向をも読み取れる。

日本統治期から戦後にかけて、作家たちが描く台湾原住民関連作品を巨視的に見れば、次の三つの要素を見出すことができる。

一つ目は、人類学的視点である。原住民の容貌・身体的特徴、食事、衣装、住居、伝統行事・習慣など、原住民の生活や文化全般に関する叙述は、作品によく現われている。特に、霧社事件以前、植民地台湾へ旅行した作家たちは、「野蛮人」の「実像」を本土に伝える責任感を自覚的に意識していたとも言えよう。一方、人類学の研究成果がある程度累積されていくとともに、事件以降の作家たちは当時の人類学の研究書を参考したうえで、作品を書くのが常であった。こうした観察のなかで、「馘首」が「野蛮／野蛮性」の象徴として、常に注目、強調されている。

二つ目は、「文明と野蛮」の二項対立を前提にする、近代日本と台湾原住民の自他関係への思考である。明治維新以降、近代日本は欧米列強を模倣し、近代の「文明国」へ転身することに努めている。17 世紀以来の西欧世界における「文明と野蛮」という思考様式は、近代日本の植民地支配の論理で「和人と土人」の形で表現されている。理論的には、「土人」が日本の「文明教化」（＝近代教育）を受ける過程において、その「野蛮性」が抹消されつつ、ついには「文明人」へ転化していくが、霧社事件の発生によって、「文明と野蛮」の二項対立が再び強調されることになる。

作家たちはこのような二項対立の関係を描く時、常に二つの方面から考える。一つは、過去の歴史事象、たとえば琉球漂流民殺害事件とそれに関連する台湾出兵という、近代日本と台湾原住民の関係の「原点」である。もう一つは、植民地支配の現状とその問題、たとえば霧社事件である。作家たちは常に、この二方面から「野蛮」の本質、二項対立の解釈ないし解決の可能性を探究する。そのなかで、「親子関係」と「男女関係」は近代日本と台湾原住民の関係を表現する常套句となっている。近代日本の台湾山地・原住民に対する支配論理では、「蕃地」が「未開の土地」で、「蕃人」が「野蛮人」とされてい

るため、近代の「文明国」の日本人は「親」として、「野蛮人」の「子供」を「教化」すべきである。だが、この論理は霧社事件によって破壊されたのである。なぜなら、近代日本と台湾原住民における「植民／被植民」「支配／被支配」の関係は、霧社事件における「蕃婦問題」によって、「男女関係」という形で露呈するからである。そのため、事件以降の作家たちが「日本人男性—原住民女性」という図式を常用することになった。一方、台湾総督府は、事件以降の「野蛮人」言説のトレンドにおける「男女関係」を「親子関係」に近い「師弟関係」に変えようとするため、「サヨンの鐘」神話を製作したのである。

こうした図式に現われてきた「蕃婦像」は通常、二つの役割がある。一つは、「野蛮性」の象徴である。もう一つは、植民地支配の破綻である「蕃婦問題」を表現する装置である。言うまでもなく、いずれも男性の視点を中心とする思考様式であるが、それも台湾原住民を描く作家は男性が多数である事実に基づいている。したがって、真杉静枝や坂口樗子の作品には、日本人女性や原住民女性を主体とする視点があり、男性の視点を中心とする従来の文脈と異なる点が特筆に値する。

三つ目は、作家自身の植民地体験や文学志向である。先にあげた二つは、ほぼ作家たちの作品に共通している主題と言える。しかし、作家たちは各自の台湾経験や文学手法でこれらの主題を書き、それぞれ異なる「野蛮人像」を創出し、それによって「野蛮人」の世界が構成されている。

角度を変えて、日本統治期から戦後にかけての台湾原住民関連作品の全体の文脈から考えてみると、近代日本は自国を台湾原住民と対照させ、「文明国」としての自身の位置づけ、「野蛮」の本質および両者の関係を探究しようとした。そのため、近代日本と台湾原住民の間における「文明」と「野蛮」の二項対立的図式は、文学上の首尾一貫のテーマとなり、一種の「連続性」を表現している。だが、霧社事件はその分水嶺となった。繰り返し述べてきたように、「文明教化」を受ければ「野蛮人」が「文明人」に転身できるというのは近代日本の植民地支配の論理である。「野蛮人」の台湾原住民はすでに十数年の「教化」を受けたが、台湾山地統治の模範・「蕃界の都会」と呼ばれる霧社で蜂起し、その綿密な計画は、「野蛮人」が「教化」によって得た「知恵」を以て達成されたと看做される。そのため、事件そのものは「文明（和人）—野蛮（土人）」という植民地支配の原理への最大の諷刺となった。一方、植民地支配の情勢から見ると、1930 年はすでに台湾統治の円熟期に入り、漢民族も武力反抗から政治運動へと転向した時期であった。この時点で発生した霧社事件は、台湾原住民に関する議論を引き起した。事件以前と以後の作品の間には一種の「差異性」が生まれることとなった。

日本統治初期から霧社事件までを「前期」とし、霧社事件後から戦後にかけてを「後期」とすれば、「前期」の作品は植民地台湾の旅行記の一種もしくは一部として、近世以来の台湾原住民への「野蛮人」認識を継承し、現状の観察を加えるものである。作家たちは同じ距離を保ちながら、原住民を様々な角度から観察する。「後期」の作品は事件のため急展開し、二項対立と「野蛮」の本質という問題に着目・集中し、作家たちは戦時下の時局・国策の制約を受けながらも、異なる方式でその解釈ないし解決を求めた。

しかし、さすがに時代の制約があり、戦後に至っても二項対立の「本当の解決」ができていないのが現状である。ここで言う時代の制約とは、次の三つである。一つ目は、作家たちが原住民に関する認識・知識上においてその時代の限界を超えていないこと。二つ目は、植民地警察官の中島竹窩を例外とし、「前期」も「後期」も共に 15 年の歳月であり、「文明と野蛮」の課題を克服するには如何にも時間が短いということ。三つ目は、近代日本の支配領域において、台湾原住民がどの面から見てもマイノリティであり、そのマイノリティを描く作家自身も「マイノリティ」であること。植民地台湾は終始帝国日本の「周辺部」でしかなく、台湾原住民もその「周辺部」の山地に住む「野蛮人」に過ぎなかった。台湾原住民を描く日本人作家のなかで、植民地体験の無い者もいるし、体験者の作家にとっても、「野蛮人」は彼らの文学生涯を貫く永遠のテーマのではなく、あくまで一時期の関心に過ぎなかったのである。

そのため、「文明と野蛮」の課題は未解決のまま、ほかの数多くの植民地時代の遺留問題と共に、今日まで続くポストコロニアル的状況の一部となっている。2008 年、津島祐子は小説『あまりに野蛮な』を出版し、この「未解決の課題」への挑戦する意欲を示している。近代の日本人作家たちは、「文明と野蛮」の課題に直面し、「野蛮人」の正体を捉えようとするため、それぞれの「野蛮人像」を創出した。読み手は彼らの努力で、近代日本における「野蛮人」への思考を促される。これこそがこの作家たちの文学の最大の貢献であり特徴ともなっていると言えよう。

第二節　今後の課題

最後に課題として残されている点にふれておく。

本論文は近代の日本人作家による台湾原住民の文学表象を中心に考察したが、それは近代日本における台湾原住民への認識の一端に過ぎない。台湾原住民の表象をもっと広く、深く考察するため、以下の問題点を考えなければならない。

まず、本論は独自の原則で選んだ 8 人の作家を対象とするが、実際に台湾原住民を直接・間接的にふれた作品は数えられないほど存在する。本論文の対象外の作品を考察し、補足することで研究に厚みが増すと思われる。

次に、日本統治期の台湾本島に発表された作品を考察すること。本論文は日本本土で発表される作品を主な対象とするが、台湾側の日本人が書いた作品を検討し、本土の作家たちと対照してみるならば、視野が拡大するであろう。また、日本統治期の漢民族の文学者・作家による原住民表象も一考する。

最後は、日本統治期の「以前」と「以後」つまり清朝末期と戦後の原住民認識、表象を考察し、その連続性を考察することである。特に、1980 年代以降、高等教育を受けた原住民作家が続出し、彼らは中国語で自身に関する創作を行うため、戦後の台湾文学における「原住民文学」と言われるジャンルが形成された。そのなかでも、植民地表象に関連する作品が存在している。一方、1990 年代以降の台湾では霧社事件を「再認識」する風潮が起き、その関連作品は小説、漫画、ドラマ、音楽、ドキュメンタリにも及んでいる。植民地時代とポストコロニアルにおける台湾原住民表象を対照・比較することは、価値があるのではないか。

【参考文献】

＊本論文は 8 人の作家とその作品を検討するため、まずはテキストを、次に節ごとに参考文献（五十音順）に記した。

テキスト

中島竹窩「生蕃探検記」『太陽』第 2 巻、博文館、1896 年
宇野浩二「揺籃の唄の思ひ出」『宇野浩二全集　第九巻』中央公論社、1968 年
中村古峡「鵞鑾鼻まで」朝日新聞のオンライン記事データベース「聞蔵 II ビジュアル」(https://database.asahi.com/library2/)
中村古峡「蕃地から」『変態心理の人々』大阪屋号書店、1926 年
佐藤春夫「魔鳥」『定本　佐藤春夫全集』第 4 巻、臨川書店、1998 年
佐藤春夫「霧社」『定本　佐藤春夫全集』第 5 巻、臨川書店、1998 年
佐藤春夫『霧社』ゆまに書房、2000 年
大鹿卓『野蛮人』白鳳書院、1949 年
大鹿卓『野蛮人』ゆまに書房、2000 年
大鹿卓『大鹿卓作品集』ゆまに書房、2001 年
大鹿卓『渡良瀬川』河出書房新社、2013 年
中村地平『中村地平全集』皆美社、1971 年
中村地平『中村地平小説集』鉱脈社、1997 年
中村地平『台湾小説集』ゆまに書房、2000 年
真杉静枝『南方紀行』昭和書房、1941 年
真杉静枝『ことづけ』新潮社、1941 年
真杉静枝『帰休三日間』秩父書房、1943 年
真杉静枝『小説集　その後の幸福』ゆまに書房、2001 年
中島利郎・河原功編『日本統治期台湾文学　日本人作家作品集　第五巻』緑蔭書房、1998 年
坂口樗子『蕃地』新潮社、1953 年
坂口樗子『蕃婦ロポウの話』大和出版、1961 年
坂口樗子『霧社』コルベ出版社、1978 年
坂口樗子『蕃社の譜』コルベ出版社、1978 年
坂口樗子『鄭一家／曙光』ゆまに書房、2001 年

序章

尾崎秀樹『旧植民地文学の研究』勁草書房、1971 年
河原功『台湾新文学運動の展開―日本文学との接点―』研文出版、1997 年
川村湊『南洋・樺太の日本文学』筑摩書房、1994 年
邱雅芳『南方作為帝國慾望：日治時期日人作家的台灣書寫』（政治大學中國文學系博士論文、2009 年）
荊子馨『成為日本人――殖民地台灣與認同政治』麥田出版、2006 年
黄美娥編『臺灣原住民族関係文学作品目録』と『臺灣原住民族関係文学作品選集』台湾行政院原住民族委員会、2013 年
小森陽一『ポストコロニアル』岩波書店、2001 年
戴国煇編『台湾霧社蜂起事件―研究と資料―』世界思想社、1981 年
陳萱『明治日本における台湾像の形成―新聞メディアによる台湾事件の表象―』（台湾大学出版中心、2013 年）
中島利郎・河原功・下村作次郎編『台湾近現代文学史』研文出版、2014 年
日本順益台湾原住民研究会編『台湾原住民研究への招待』風響社、1998 年
日本順益台湾原住民研究会編『台湾原住民研究概覧　日本からの視点』風響社、2005 年、
フェイ・阮・クリーマン『大日本帝国のクレオール―植民地期台湾の日本語文学』慶應義塾大学出版会、2007 年
山口守編『講座台湾文学』国書刊行会、2003 年
楊智景『日本領有期の台湾表象考察―近代日本における植民地表象』（御茶水女子大學人間文化研究科博士論文、2008 年）、

第一章

はじめに

小熊英二『＜日本人＞の境界　沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮　植民地支配から復帰運動まで』新曜社、2003 年
小森陽一『ポストコロニアル』岩波書店、2001 年
二宮宏之編『民族の世界史　9　深層のヨーロッパ』山川出版社、1990 年
福沢諭吉『福沢諭吉著作集　第 4 巻　文明論之概略』慶応義塾大学出版会株式会社、2002 年

第一節

大江志乃夫・ほか編『岩波講座　近代日本と植民地 1　植民地帝国日本』岩波

書店、1992 年
大江志乃夫・ほか編『岩波講座　近代日本と植民地 7　文化のなかの植民地』岩波書店、1993 年
篠原徹編『近代日本の他者像と自画像』柏書房、2001 年
松田京子『帝国の思考　「日本」帝国と台湾原住民』有志舎、2014 年

第二節

石田正治「沖縄における近代化の希求―太田朝敷の論説を中心に―」『法政研究 64-1』（九州大学法政学会、1997 年）
大江志乃夫・ほか編『岩波講座　近代日本と植民地 1　植民地帝国日本』岩波書店、1992 年
大江志乃夫・ほか編『岩波講座　近代日本と植民地 2　帝国統治の構造』岩波書店、1992 年
大江志乃夫・ほか編『岩波講座　近代日本と植民地 7　文化のなかの植民地』岩波書店、1993 年
大里知子「沖縄近代史―『旧慣温存』『初期県政』研究についての一考察」『沖縄文化研究　29』法政大学、2003 年
桑原真人、我部政男編『蝦夷地と琉球』吉川弘文館、2001 年
篠原徹編『近代日本の他者像と自画像』柏書房、2001 年
白山友正「幕末のアイヌへの人口政策と人口」『社會經濟史學』36(6)、社会経済史学会、1971 年
平良保勝『近代日本の最初の「植民地」沖縄と旧慣調査　1872－1908』藤原書店、2011 年
台湾総督府警察本署『理蕃誌稿　第一巻』青史社、1989 年
台湾総督府警務局編『蕃社戸口　大正九年十二月現在』、1921 年
波平恒男「『琉球処分』再考――琉球藩王冊封と台湾出兵問題」『政策科学・国際関係論集』第 11 号、琉球大学、2009 年
波平恒男「琉球処分の歴史過程・再考――『琉球藩処分』の本格化から『廃藩置県』へ」『政策科学・国際関係論集』第 12 号、琉球大学、2010 年
西里喜行『沖縄近代史研究――旧慣温存期の諸問題』沖縄時事出版、1981 年
松田京子『帝国の思考　「日本」帝国と台湾原住民』有志舎、2014 年
松田京子『帝国の視線　博覧会と異文化表象』吉田宏文館、2003 年
山路勝彦『近代日本の植民地博覧会』風響社、2008 年
山路勝彦『台湾の植民地支配―“無主の野蛮人”という言説の展開』日本図書センター、2004 年

横山学『琉球所属問題関係資料』本邦書籍、1980 年
葭田光三「アイヌ人口史」『日本大学人文科学研究所研究紀要』(37)、日本大学人文科学研究所、1989 年
琉球新報社編『沖縄コンパクト事典』琉球新報社、2003 年

第二章

はじめに

曽山毅『植民地台湾と近代ツーリズム』青弓社、2004 年
高橋泰隆「植民地の鉄道と海運」『岩波講座　近代日本と植民地 3　植民地化と産業化』岩波書店、1993 年
武井守正「台湾我観」『台湾日日新報』1913 年 1 月 7 日
檜山幸夫『台湾史研究叢書　第三巻　台湾植民発達史』クレス出版、2011 年

第一節

石原道博『国姓爺』吉川弘文館、1959 年
王嵩山『阿里山鄒族的社會與宗教生活』稲郷出版社、1995 年
大橋新太郎「太陽の発刊」『太陽』創刊号博文館、1895 年
大豆生田稔『お米と食の近代史』吉川弘文館、2007 年
小熊英二『<日本人>の境界：沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮植民地支配から復帰運動まで』新曜社、1998 年
片岡巖『台湾風俗誌』眾文圖書公司、1990 年
賀田直治『台湾中央山脈横断記』東京拓殖新報社、1914 年
金成妍『越境する文学―朝鮮児童文学の生成と日本児童文学者による口演童話活動』花書院、2010 年
木村小舟『明治少年文学史　第一巻』井達豊、1949 年
『時事新報』、1887 年 6 月 13 日
鈴木貞美編『雑誌『太陽』と国民文化の形成』
全国憲友会連合会『日本憲兵正史』研文書院、1976
曽山毅『植民地台湾と近代ツーリズム』青弓社、2004 年
こ台湾国史館台湾文献館「台湾総督府公文類纂数位化檔案資料庫
(http://ds2.th.gov.tw/)
台湾省文献委員会『台湾省通志 45　巻八同胄志中』衆文図書、1980 年
台湾総督府警察本署『理蕃誌稿　第一巻』青史社、1989 年

台湾総督府警務局『台湾総督府警察沿革誌（一)』南天書局、1995 年
台湾総督府警務局『台湾総督府警察沿革誌（二)』南天書局、1995 年
田崎治久『日本之憲兵　正・続』三一書房、1971 年
筑波大学文化批評研究会編『植民地主義とアジアの表象』佐藤印刷株式会社つくば営業所、1999 年
巴蘇亞·博伊哲努『台湾鄒族的風土神話』台原出版社、1993 年
檜山幸夫『台湾史研究叢書　第三巻　台湾植民発達史』クレス出版、2011 年
山路勝彦『台湾の植民地支配―＜無主の野蛮人＞という言説の展開―』日本図書センター、2004 年
依田學海『英武蒙求』博文館、1897 年

第二節

天沼香『日本史小百科―近代―〈家族〉』東京堂、1997 年
宇野浩二『宇野浩二全集　第九巻』中央公論社、1968 年
宇野浩二『作家の自伝３０　宇野浩二』日本図書センター、1995 年
大江志乃夫・ほか編『岩波講座　近代日本と植民地 2　帝国統治の構造』岩波書店、1992 年
岡田みゆき「明治期における小学校教科書および民法の父権思想 ： 日本の父親の権威についての研究の一環として」『日本家庭科教育学会誌 41(2)』(日本家庭科教育学会、1998 年
小川直美「人さらいの系譜--宇野浩二『揺籃の唄の思ひ出』」『大阪経大論集 62(3)』大阪経済大学、2011 年
小熊英二『<日本人>の境界――沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮：植民地支配から復帰運動まで』新曜社、1998 年
河原功『台湾新文学運動の展開―日本文学との接点―』研文出版、1997 年
曽山毅『植民地台湾と近代ツーリズム』青弓社、2004 年
中山際子「宇野浩二の童話―再話の方法―」『東京工業大学人文論叢（15)』東京工業大学、1989 年
永井均・ほか編『事典　哲学の木』講談社、2002 年
野口存彌「編集サイドよりみた大正児童文学（9)　宇野浩二の童話」『日本古書通信（58）7』日本古書通信社、1993 年
檜山幸夫『台湾史研究叢書　第三巻　台湾植民発達史』クレス出版、2011 年
福尾猛市郎『日本家族制度史概説』吉川弘文館、1991 年
フェイ・阮・クリーマン『大日本帝国のクレオール　植民地期台湾の日本語文学』慶応義塾大学、2007 年

益田太郎冠者『喜劇　生蕃襲来』趣味社、1912 年
三浦佳世『知覚と感性』北大路書房、2010 年
見田宗介ら編『社会学事典』弘文堂、1988 年
森本穫『作家の肖像 ： 宇野浩二・川端康成・阿部知二』林道舎、2005 年

第三節

阿部純一郎『〈移動〉と〈比較〉の日本帝国史 ： 統治技術としての観光・博覧会・フィールドワーク』新曜社、2014 年
河原功『翻弄された台湾文学―検閲と抵抗の系譜』研文出版、2009 年
邱雅芳「中村古峡在大正初期的殖民地行旅：＜到鵝鑾鼻＞、＜來自蕃地＞的南方風情與蕃地體驗」『台灣文學學報』第十五期、政治大学台湾文学研究所、2009 年
楠元町子「日英博覧会における日本の展示」『愛知淑徳大学論集. 文学部・文学研究科篇（39)』愛知淑徳大学文学部、2014 年
栗原純・鐘淑敏『近代台湾都市案内集成　第 7 巻　台湾案内／台湾南支事情』ゆまに書房、2014 年
黄美娥編『臺灣原住民族関係文学作品集（1895―1945)』台湾行政院原住民族委員会、2013 年
駒込武『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店、1996 年
曽根博義「『殻』から『変態心理』へ」『文学 2(4)』岩波書店、2001 年
曽根博義『変態心理』と中村古峡―大正文化への新視角』不二出版、2001 年
曽根博義「異端の弟子--夏目漱石と中村古峡(上)」『語文 113』日本大学国文学会、2002 年
曽根博義「異端の弟子--夏目漱石と中村古峡(下)」『語文 114』日本大学国文学会、2002 年
曽根博義「異端の弟子--夏目漱石と中村古峡(補遺)」『語文 116』日本大学国文学会、2003 年
曽山毅『植民地台湾と近代ツーリズム』青弓社、2004 年
台南州共栄会『近代台湾都市案内集成　第 12 巻　南部台湾誌』ゆまに書房、2014 年
台湾国史文献館のオンラインデータベース「臺灣總督府公文類纂查詢系統」（http://sotokufu.sinica.edu.tw/query.php)
台湾総督府蕃務本署認可、成田写真製版所『台湾生蕃種族写真帖 ： 附・理蕃実況』大空社、2008 年
『臺灣日日新報』臺灣日日新報社、1914 年 10 月 14 日夕刊第三版
『臺灣日日新報』臺灣日日新報社、1914 年 10 月 15 日

『臺灣日日新報』臺灣日日新報社、1914 年 10 月 23 日
『臺灣日日新報』臺灣日日新報社、1910 年 9 月 29 日
『臺灣日日新報』臺灣日日新報社、1914 年 10 月 30 日
田原生「日英博の生蕃館（上)」『台湾日日新報』1910 年 9 月 30 日
鄭政誠『認識他者的天空 ： 日治時期臺灣原住民的觀光行旅』博揚文化事業、2005 年
南部物産共進会協賛会『中国方志叢書　台湾省南部台湾』成文出版社、1985 年
南部物産共進会協賛会『中国方志叢書　台湾省南台湾』成文出版社、1985 年
松田京子『帝国の視線 ： 博覧会と異文化表象』吉川弘文館、2003 年
南暁生「台湾の牛」『台湾日日新報』1910 年 1 月 25 日
山路勝彦『近代日本の植民地博覧会』風響社、2008 年
山路勝彦「日英博覧会と『人間動物園』」『関西学院大学社会学部紀要（108)』関西学院大学社会学部紀要、2009 年
龍渓書舎編『明治後期産業発達史資料　第 592 巻、第 11 期：外国事情篇（VII）（含旧植民地資料)』龍渓書舎、2001 年

第四節

河原功『翻弄された台湾文学―検閲と抵抗の系譜』研文出版、2009 年
邱若山「佐藤春夫台湾旅行行程考」『日本学と台湾学』創刊号、静宜大学日本語文学系、2000 年
邱若山「佐藤春夫『旅びと』の世界―その抒情の原点と創作事情―」(『日本学と台湾学』創刊号、静宜大学日本語文学系、2000 年
邱若山「佐藤春夫の台湾旅行もの―作品群の世界をめぐって―」『日本学と台湾学』創刊号、静宜大学日本語文学系、2000 年
朱衛紅「佐藤春夫における文明批評の方法―『魔鳥』論―」『日本語と日本文学』(36)、筑波大学国語国文学会、2003 年
鄧相揚著、魚住悦子訳『抗日霧社事件をめぐる人々 ： 翻弄された台湾原住民の戦前・戦後』日本機関紙出版センター、2001 年
十返肇「谷崎潤一郎・佐藤春夫夫人譲渡事件」『文藝』13(2)、河出書房、1956 年
姚巧梅「佐藤春夫文学における台湾の位置――植民地小説をめぐって」『解釈』47 巻、1・2 号、解釈学会、2001 年

第三章

はじめに

近藤正己『総力戦と台湾　日本植民地崩壊の研究』刀水書房、1996 年
呉密察「霧社事件研究の課題」『日本台湾学会報　第 12 号』日本台湾学会、2010 年
鈴木質太郎『台湾の蕃族研究』青史社、1977 年
戴國煇編著『台湾霧社蜂起事件 ： 研究と資料』社会思想社、1981 年
鄧相揚『抗日霧社事件の歴史―日本人の大量殺害はなぜ、おこったか』日本機関紙出版センター、2000 年
林えいだい編『写真記録　台湾植民地支配史　山地原住民と霧社事件・高砂義勇隊』梓書院、1995 年
春山明哲編・解説『台湾霧社事件軍事関係資料』不二出版、1992 年
春山明哲編『近代日本と台湾　霧社事件・植民地支配政策の研究』藤原書店、2008 年

第一節

河上丈太郎・河野密「霧社事件の真相を語る」『改造』改造社、1931 年 3 月号
河野密「霧社事件の真相を発く」『中央公論』1931 年 3 月号
河原功『台湾新文学運動の展開――日本文学との接点―』研文出版、1997 年
簡中昊『大鹿卓の蕃地文学』台湾輔仁大学日本語研究所、2010 年
簡中昊「大鹿卓の『野蛮人』―植民地時代における二元対立論への挑戦―」（『日本研究』第 47 集、国際日本文化研究センター、2013 年
鈴木作太郎『台湾の蕃族研究』台湾史籍刊行会、1932 年
鈴木質『蕃人風俗誌』理蕃の友発行所、1932 年
鄧相揚著、下村作次郎，魚住悦子共訳『抗日霧社事件の歴史―日本人の大量殺害はなぜ、おこったか』日本機関紙出版センター、2000 年
鄧相揚著、下村作次郎監修、魚住悦子訳『植民地台湾の原住民と日本人警察官の家族たち』日本機関紙出版センター、2000 年
鄧相揚著、魚住悦子訳『抗日霧社事件をめぐる人々―翻弄された台湾原住民の戦前・戦後』日本機関紙出版センター、2001 年
中村勝『台湾高地先住民の歴史人類学―清朝・日帝初期統治政策の研究』緑蔭書房、2003 年
春山明哲編『近代日本と台湾　霧社事件・植民地支配政策の研究』藤原書店、2008 年
「第 59 回帝国議会衆議院議事速記録第 5 号」1931 年 1 月 25 日「帝国議会会議

録　検索システム」
（http://teikokugikaii.ndl.go.jp/cgibin/TEIKOKU/swt_logout.cgi?SESSION=848）

第二節

岡林稔『《南方文学》その光と影―中村地平試論―』鉱脈社、2002 年
河原功『台湾新文学運動の展開―日本文学との接点―』研文出版、1998 年
阮文雅「中村地平『霧の蕃社』--重層的なジレンマ」『現代台湾研究（24)』台湾史研究会、2003 年
阮文雅「中村地平『長耳国漂流記』における台湾観」『天理台湾学会年報(12)』天理台湾学会、2003 年
阮文雅「中村地平：『太陽征伐』論：『蕃族調査報告書』との関係をめぐって」『アジア社会文化研究』(6)、アジア社会文化研究会、2005 年
阮文雅「重層化された『南方』」『社会文学』(31)、日本社会文学会、2010 年
興梠英樹「中村地平と南方文学」『社会文学』(31)、日本社会文学会、2010 年
鈴木作太郎『台湾の蕃族研究』台湾史籍刊行会、1932 年
成蹊大学『成蹊大学一般研究報告　第 46 巻第 3 分冊』成蹊大学、2012 年
関口浩「『蕃族調査報告書の成立』――松岡参太郎文書を参照して」
台湾女性史入門編纂委員会編『台湾女性史入門』人文書院、2008 年
台湾総督府臨時台湾旧慣調査会『台湾蕃族調査報告書』中央研究院民族学研究所、2007 年
鄧相揚『抗日霧社 事件の歴史 ： 日本人の大量殺害はなぜ、おこったか』、『植民地台湾の原住民と日本人警察官の家族たち』『抗日霧社　事件をめぐる人々 ： 翻弄された台湾原住民の戦前・戦後』日本機関紙出版センター、2000～2001 年
中島悦次『大東亜神話』ゆまに書房、2003 年
中村地平「旅びとの眼――作家の觀た台灣」『台灣時報』1939 年 5 月号、台湾総督府台湾時報発行所、60～69 頁。
蜂矢宣朗『南方憧憬――佐藤春夫と中村地平――』鴻儒堂出版社、2010 年
檜山幸夫編・解説『台湾史と樺山大将』クレス出版、2011 年
檜山幸夫編・解説『西郷都督と樺山総督；明治七年　生蕃討伐回顧録』クレス出版、2011 年
平藤喜久子『神話学と日本の神々』弘文堂、2004 年
谷ヶ城秀吉編『大路水野遵先生』ゆまに書房、2008 年
『楊氏家譜』私家書、出版年不明

李文茹「南方憧憬と帝国男性的なオリエンタリズム―台湾原住民の表象をめぐって」『日本学』27、東国大学校、2008 年

第三節

岩本憲児『映画と「大東亜共栄圏」』森話社、2004 年
岡林稔『《南方文学》その光と影―中村地平試論―』鉱脈社、2002 年
河原功『台湾新文学運動の展開―日本文学との接点―』研文出版、1997 年
高良留美子「真杉静枝が書いた台湾―陰影のあるエッセイ」『植民地文化研究 第 4 号』植民地文化研究会、2005 年
高良留美子「真杉静枝『南方の言葉』を読む―本島人と台湾語への愛」(『植民地文化研究　第 5 号』植民地文化研究会、2006
高良留美子「真杉静枝と台湾経験―昭和文学の失われた輪―」『社会文学 29』日本社会文学会、2009 年
呉佩珍「『サヨンの鐘』神話の解体―真杉静枝「リオン・サヨンの谿」と「ことづけ」を中心に―」『社会文学』第 27 号、日本社会文学会、2008 年
呉佩珍「台灣皇民化時期官方宣傳的建構與虚實：論真衫静枝『莎韻之鐘』翻案作品」『台湾文学学報』第 17 期、政治大学台湾文学研究所、2010 年
呉佩珍『真杉静枝與殖民地台湾』聯経出版、2013 年
駒込武『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店、1996 年
坂元さおり「日本近代文学における＜ネイティブの表象＞―大鹿卓『野蛮人』を中心に―」『プロプレマティークーⅣ　文学／教育 4』同人プロプレマティークー、2003 年
下村作次郎「『サヨンの鐘』物語の生成と流布過程に関する実証的研究（１）」『天理台湾学会年報』10 号、天理台湾学会、2001 年
下村作次郎「各種『サヨンの鐘』の検討―劇本・小説二冊・シナリオ・教科書―」『中国文化研究』19 号、天理大学国際文化学部中国学科研究室、2002 年
田中実代『湾生回家』遠流、2014 年
蜂矢宣朗「真杉静枝と台湾―『むすび』と『ながれ』から」『天理台湾研究年報』4、天理台湾学会、1995 年
蜂矢宣朗『湾生の記』(1980 年)『続　湾生の記』(1990 年)『続続　湾生の記』(2000 年)、『続続続　湾生の記：　卒寿記念誌』(2010 年)、私家書
蜂矢宣朗『南方憧憬――佐藤春夫と中村地平――』鴻儒堂出版社、2010 年
藤井省三・ほか編『台湾の「大東亜」戦争』東京大学出版会、2002 年
李文茹「植民地を語る苦痛と快楽―台湾と日本のはざまにおける真杉静枝のアイデンティティ形成―」『日本台湾学会報』5、日本台湾学会、2003 年

李文茹「『蕃人』・ジェンダー・セクシュアリティ―真杉静枝と中村地平による植民地台湾表象からの一考察―」『日本台湾学会報』7、日本台湾学会、2005 年

第四節

江川博通『霧社の血桜』私家書、1970 年
王暁芸「坂口れい子の「時計草」を中心に--異民族統治への協力」『天理台湾学報年報（10)』天理台湾学会、2001 年
大江志乃夫・ほか編『岩波講座　近代日本と植民地２　帝国統治の構造』岩波書店、1992 年
奥出健「戦時下台湾の『愛』―坂口樗子『時計草』を中心に―」『湘南短期大学紀要 20』湘南短期大学、2009 年
簡鴻模、依婉・貝林『中原部落生命史』 中華民國台灣原住民同舟協會、2003 年
北村嘉恵「『台湾原住民族にとっての霧社事件』を問う」『日本台湾学会報　第 12 号』日本台湾学会、2010 年
許介麟『証言　霧社事件』草風館、1985 年
楠井清文「坂口樗子・＜蕃地＞小説の世界―熊本時代の執筆活動を中心に―」『論究日本文學 100』立命館大学
呉佩珍「血液的『曖昧線』―台湾皇民化文学中『血』的表象与日本近代文学優生学論述」『台湾文学研究学報　第 13 期』国立台湾文学館、2011 年
坂口樗子「受賞感想」『新潮』10 月号、新潮社、1953 年
坂口樗子「蕃地随想」『詩と真実 ：文芸雑誌　59』詩と眞實社、1954 年
坂口樗子「一九四五年の彼ら―霧社の思い出―」 （『中国　69　特集 台湾高山族の反乱＜霧社事件＞』 東京・中国の会、1969 年
坂口樗子「母の像　第二部　第二章（一)」『花泉　10 月号』華道専正池坊、1970 年
篠原正巳『台中・日本統治時代の記録』致良出版社、1996 年
下山一(林光明)自述・下山操子(林香蘭)譯寫『流轉家族:泰雅公主媽媽日本警察爸爸和我的故事。』遠流出版、2011 年
謝瑞隆『北斗郷土誌』北斗鎮公所、2009 年
彰化県政府『日拠時期住所番地与現行行政区域対照』彰化県政府、2000 年
鈴木作太郎『台湾の蕃族研究』(南天書局、1988 年
台中市役所『台中市管内概況（七)』成文出版社、1985 年
台湾総督府『台湾総督府　学事第三十六年報』台湾総督府文教局、1940 年
台湾総督府『台湾総督府第四十三統計書』台湾総督府企画部、1941 年

台湾総督府『台湾総督府行政地域便覧』1944 年版（成文出版社、1999 年）
台湾・中央研究院データベース「台湾歴史文化地図」
（http://thcts.ascc.net/）
垂水千恵「坂口樗子・その人と作品―日本統治期の台湾に於ける日本語文学事情―」『日中言語文化比較研究　第二号』台中・日中言語文化比較研究会、1993 年
垂水千恵『台湾の日本語文学―日本統治時代の作家たち』五柳書院、1995 年
張瑞和『永靖郷土資料研究集』永靖郷公所、1995 年
張素玢『北斗発展史』北斗鎮公所、1999 年
張哲郎編『北斗鎮志』北斗鎮公所、1997 年
鄧相揚著、下村作次郎監修、魚住悦子訳『植民地台湾の原住民と日本人警察官の家族たち』日本機関紙出版センター、2000 年
中島利郎・河原功編『日本統治期台湾文学研究文献目録』（緑蔭書房、2000 年
ピホ・ワリス（高永清）『霧社緋桜の狂い咲き―虐殺事件生き残りの証言―』（教文館、1988 年
北斗郡役所『台湾省　北斗郡概況（二）』成文出版社、1985 年
星名弘修「『血液』の政治学：台湾『皇民化期文学』を読む」『日本東洋文化論集（7）』琉球大学、2001 年
法政大学国際日本研究所編『異文化としての日本―内外の視点―』法政大学国際日本学研究所、2010 年
山路勝彦『台湾の植民地支配―＜無主の野蛮人＞という言説の展開―』日本図書センター、2004 年
李文茹「ジェンダーから見た台湾原住民の記憶と表象――霧社事件を中心に」『社会文学 23』日本社会文学会、2006 年
李文茹「植民地的『和解』のゆくえ―戦後から七０年代までの日本社会における霧社事件文学をめぐる一考察―」のほかに、「台湾原住民族女性の『声』として語ること」『社会文学　27』日本社会文学会、2008 年
李文茹「坂口樗子の台湾『蕃地作品』における女性像と植民地的ノスタルジアの政治性」（『社会文学　41』日本社会文学会、2015 年
林慧君「坂口樗子小説人物的身分認同―以＜鄭一家＞、＜時計草＞為中心」『台湾文学学報 第 8 期』政治大学台湾文学系、2006 年

終章

John Dryden,The Works of John Dryden VOLUME XI,University of California Press、1978 年

ジョン・ドライデン「グラナダの征服」『ジョン・ドライデン悲劇集』中央書院、1992 年

【付録資料】

本論文は、以下の 3 点の関連資料を付録する。

① 近代の台湾原住民関連事象と日本人作家・作品関係略年表

＊本表は、「台湾原住民関係略年表」（日本順益原住民研究会編『台湾原住民研究概覧―日本からの視点―』風響社、2002 年）、黄美娥編『臺灣原住民族関係文学作品目録　下』（台湾行政院原住民族委員会、2013 年）、河原功「日本文学に現われた霧社蜂起事件」（同氏『台湾新文学運動の展開―日本文学との接点―』研文出版、1997 年）をもとに、各作家の年譜・著作年譜を参照したうえで作成したものである。

② 「台湾蕃人分布概見表」：霧社事件前後の台湾原住民族を種族ごとに分布地域、人口数を記する表。

③ 「生蕃種族別分布図」：霧社事件前後の台湾原住民族分布図。

②と③は台湾軍司令部編『昭和五年台湾蕃地　霧社事件史』に収録、本論文は春山明哲編『台湾霧社事件軍事関係資料』より転載する。

付録資料①：近代台湾原住民関連事象と日本人作家・作品関係略年表

近代の台湾原住民関連事象と日本人作家・作品関係略年表		
西暦	台湾原住民関連事件・政策関係	日本人作家・作品関係
1871	琉球漂流民が台湾南部の原住民（パイワン族）に殺害される。	
1874	琉球漂流民遭難事件に対し、日本は台湾に出兵し、パイワン族の高士仏・牡丹社などを武力攻撃する。	
1895	下関条約で台湾割譲。台湾総督府が設立され、台湾南部の恒春上十八社・下十八社のパイワン族は日本に帰順する。	
1896	最初の原住民管轄機関・墾撫署が設立される。総督府は清代以来の隘勇制度を認可する。	中島竹窩が紀行文「生蕃探検記」を『太陽』第 2 巻 21 号～25 号に連載する。
1897	第一回の原住民「内地観光」を実行する。	中島竹窩が『臺灣生蕃探検記』を出版する。
1898	「蕃情研究会」発足（～1900 年）。墾撫署が廃止され、原住民の管轄業務は弁務署第三課に移行される。	
1900	「蕃地占有ニ関スル律令」で蕃地の国有化。「台湾慣習研究会」発足（～1907 年）。	
1901	弁務署が廃止され、原住民管轄業務は殖産局拓殖課と警察署警務課・保安課が担当する。	
1902	南庄事件。	
1903	原住民管轄業務は警察本署が一括に担当することになる。	真杉静枝が両親と渡台する。
1905	蕃人公学校が設置される。	大鹿卓が家業の都合で台湾に移住。しかし間もなく帰国する。
1906	警察本署内に蕃務課が設置される。	

1907	北埔事件。	
1908	「蕃童」教育に関する学則が制定され、蕃地の駐在所に「蕃童教育所」が設置される。台湾鉄道の縦貫線全線（基隆・高雄間）が開通される。	
1909	蕃務本署が設置され、各地方庁に蕃務課が置かれる。	
1910	五箇年理蕃計画事業の実行（～1915 年）	
1912	日台間航路の神戸・基隆線と横浜・高雄線が開かれ、漸次に大型船化・高速化される。	
1913		中村古峡が台湾南部に旅行し、紀行文「鵞鑾鼻まで」を『東京朝日新聞』（6 月下旬～7 月初め）に連載する。
1915	蕃務本署が廃止され、警察本署に理蕃課が設置される。林野整理事業（～1925 年）が行われ、原住民が使用する土地が区分される。	宇野浩二が「揺籃の唄の思ひ出」を『少女の友』第 8 巻第 8 号に発表する。
1916		中村古峡が小説「蕃地から」を『中央公論』8 月号に発表する。
1920		佐藤春夫が 3 か月の「植民地の旅」に出る。
1921		真杉静枝が台湾から大阪へ出奔する。
1923		佐藤春夫が小説「魔鳥」を『中央公論』第 38 巻 11 号に発表する。
1925	「集団移住」政策がはじまる。	佐藤春夫が小説「霧社」を『改造』第 7 巻第 3 号に発表する。
1926		中村地平が渡台し、台湾総督府立台北高等学校に入学する。
1930	「蕃地開発調査」が行われる（～1937 年）。霧社事件勃発。	中村地平が台湾総督府立台北高等学校から卒業し、帰国する。

1931	第二霧社事件が起こる。「理蕃政策大綱」が定められ、同化政策が本格化する。第 17 回中等学校野球大学で嘉義農林学校（うち 4 人の原住民選手）が準優勝する。	大鹿卓が小説「タツタカ動物園」を『作品』第 20 号に発表する。
1933	最後の「未帰順蕃」・高雄州のブヌン民族タマホ社が「帰順」する。	大鹿卓が小説「蕃婦」を『海豹』（7 月）に発表する。
1934		大鹿卓が小説「野蛮人」を『中央公論』に投稿する。 中村地平が原住民神話関連作品「人類創世」を『作品』第 55 号に発表する。
1935	「生蕃」を「高砂族」に改名。	坂口樗子が台湾へ旅行する。 大鹿卓が小説「野蛮人」で『中央公論』の懸賞小説に入選。同作を第 50 巻第 2 号に発表する。また、小説「荘の欲望」を『作品』第 64 号に発表する。
1937		大鹿卓が小説「奥地の人々」を『新潮』第 34 年第 3 号に発表する。
1938		坂口樗子が再び渡台し、台中州の北斗小学校に勤務。研修旅行で霧社に行き、混血児の公学校教師である下山氏の結婚の話を聞く。
1939		坂口樗子が病気のため退職・帰郷する。 交際中の中村地平と真杉静枝がそれぞれ小説取材と母の見舞いというように、目的で共に台湾へ旅行する。 中村地平が原住民神話関連作品「太陽の眼」を『文学者』第 1 巻第 2 号に、小説「蕃界の女」を『文芸』第 7 巻第 9 号に、小説「霧の蕃社」を『文学界』第 6 巻 12 号に発表する。

		真杉静枝は随筆「征台戦と蕃女オタイ」を『文学者』第 1 巻 9 号に発表する。
1940		真杉静枝が陸軍の「南支派遣軍慰問団」に参加する。 坂口樗子が結婚のため渡台し、夫の勧めで創作を始める。 中村地平が『蕃界の女』を出版し、原住民神話関連作品「太陽征伐」を『知性』第 3 巻第 8 号に発表し、小説「長耳国漂流記」を『知性』第 3 巻 10 号～第 4 巻 5 号に連載する。
1941	高砂挺身報国隊（第一回高砂義勇隊）がフィリピンへ出征する。以後、高砂義勇隊としてニューギニアなど出征する。1938 年のタイヤル族少女サヨンの遭難事件に対して、長谷川清総督がリヨヘン社へ記念鐘を送る。	真杉静枝が台湾に滞在。後に『南方紀行』、『ことづけ』を出版する。 中村地平が『長耳国漂流記』、『台湾小説集』を出版する。
1942	陸軍特別志願兵制度実施。	坂口樗子が小説「時計草」を『台湾文学』に発表。検閲によって原稿用紙百枚分が削除され、最初と最後の二頁しか残らなかった。
1943	海軍特別志願兵制度実施。映画「サヨンの鐘」ができる。	
1944	台湾に徴兵制が実施される。原住民の薫空挺隊がフィリピンで戦う。	
1945	日本敗戦。台湾は中華民国政府に接収される。	坂口樗子が夫とともに「蕃地」中原へ疎開。翌年の引揚まで中原に滞在した。
1953		坂口樗子が小説「ビッキの話」を『文学者』第 37 号に、小説「蕃地」を『新潮』第 50 巻 10 号に発表、第三回新潮社文学賞を受ける。

1954		坂口襧子が『蕃地』を出版する。
1956		坂口襧子が小説「蕃地の女　ルピの話」を別冊『小説新潮』第 10 巻第 10 号に発表する。
1960		坂口襧子が小説「蕃婦ロポウの話」を『四詩と真実』第 139 号に発表。第 44 回芥川賞候補になり、三浦哲郎の「忍川」と最後まで選考を二分した。
1961		坂口襧子が『蕃婦ロポウの話』を出版する。
1978 年		坂口襧子が『蕃社の譜』、『霧社』を出版する。（内容は既成作品の再録と随筆「蕃地との関わり」）。

付録資料②：「台湾蕃人分布概見表」

臺灣蕃人分布概見表									
種族	北蕃		南蕃					計	備考
	「タイヤル」	「サイセット」	「ブヌン」	「ツオウ」	「パイワン」	「アミ」	「ヤミ」		
人口	三三、〇〇〇	一、三〇〇	一八、五〇〇	二、〇〇〇	四一、〇〇〇	四二、〇〇〇	一六、〇〇〇	一三九、四〇〇	内行政地域ニ編入セルモノ三七%、五二、〇〇〇ナリ
分布	台北州、新竹州、台中州、花蓮港庁	新竹州	台中州、台南州、高雄州、台東庁、花蓮港庁	台中州、台南州、高雄州	高雄州、台東庁	台東庁、花蓮港庁	台東庁（紅頭嶼）		

付録資料③：「生蕃種族別分布図」

初出一覧

本論文の一部は既公表の論文を加筆改稿したものであり、その一覧は下記の通りである。

序章
【書き下ろし】

第一章 近代日本における「土人」たち――台湾原住民への認識の原点
【初出】「近代日本における『土人』意識―アイヌ民族と台湾原住民の統治事例を見る」台湾・第四届日本研究年会「国際日本研究の可能性を探る―人文・社会・国際関係―」（台北市・台湾大学日本語文学科、2013 年 11 月 9 日、発表原稿）

第二章 「旅人」たちの見た台湾原住民：日本統治初期から霧社事件まで

はじめに 「植民地旅行」の成立
【書き下ろし】

第一節 「帝国の視線」――中島竹窩
【初出】「日治初期警察官眼中的台灣原住民形象 ――以〈生蕃探險記〉為例」『台湾文学研究』第 6 期（台湾・国立成功大学台湾文学系、2014 年 6 月）

第二節 二項対立に関する思考の提起――宇野浩二
【初出】「近代日本の台湾原住民に関する二元的思考の提起―宇野浩二『揺籃の唄のおもひで』を例にして―」『総研大 文化科学研究』第 11 号（総合研究大学院大学文化科学研究科、2015 年 3 月）

第三節 「野蛮性」の再発見と「文明化」の可能性――中村古峡
【初出】「日本人作家の台湾原住民認識――中村古峡の『蕃地から』を例にして」
日本比較文学会 第 50 回関西大会（広島大学教育学研究科、2014 年 11 月 22 日）

第四節 「異郷」の風景――佐藤春夫
【初出】「佐藤春夫――『魔鳥』と『霧社』における台湾原住民像」

『＜異郷＞としての大連・上海・台北』（勉誠出版、2015 年）所収

第三章　「文明」と「野蛮」の葛藤：霧社事件から戦後へ

はじめに　霧社事件とその影響
【書き下ろし】

第一節　「弱者」への関心――大鹿卓
【初出】「大鹿卓の『野蛮人』――植民地時代における二元対立論への挑戦―」　『日本研究』第 47 集（国際日本文化研究センター、2013 年 3 月）

第二節　「克服」された「野蛮人」――中村地平
【書き下ろし】

第三節 二項対立的図式の脱構築化――真杉静枝
【書き下ろし】

第四節　「還元」された人間像――坂口樗子
【初出】「坂口樗子の台湾経験とその蕃地作品への試論―『時計草』と『蕃地』を中心に」「天理台湾学会　第 25 回記念研究大会」（天理大学、2015 年 6 月 28 日、発表原稿）

終章
【書き下ろし】